天空のエトランゼ～レクイエム編～

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天空のエトランゼ～レクイエム編～

【Ｎコード】
Ｎ４４８０Ｏ

【作者名】
ｄｉｇ

【あらすじ】
世界は新しい時代を迎えた。変革していくブルーワールドの影響は、実世界にも影響を及ぼした。複雑に絡み付く世界に、歌姫のメッセージがこだまする！天空のエトランゼ　レクイエム編始動！

登場人物紹介！

レダ。

ブルーワールドで、突如現れた歌手。

赤星麗菜。

大月学園に通う生徒。

高坂真。

学園情報倶楽部の部長。月の女神からガーディアンの力を得ている。

犬上輝。

犬神をその身に宿している。学園情報倶楽部部員。

中小路緑。

魔物退治を生業とした一族の末裔にして、妖刀空切り丸を使う。情報倶楽部副部長。

如月さやか。

新聞部部長。

速水香里奈。

伝説の歌姫。

飯田直樹。

伝説の勇者　赤星浩一の先輩になる。

藤木和也。

モデルにして俳優。

藤木里緒菜。

沢村明菜の先輩だった。彼女を未だに探している。

開八神茉莉（あやがみまや）。

学園の転校生。実世界に於ける実力者。その中身は…。

綾瀬太陽。

なぜか…ある日中身が入れ替わってしまった少年。

真田信久。

開八神家に使える執事。

猫沢巫女。

開八神家のメイドにして、学園の先生をしている。

九鬼真弓。

乙女シルバー。

結城里奈。

乙女レッド。

五月雨夏希（乙女ブルー）。花町蒔絵（乙女グリーン。竜田桃子（乙女ピンク）。平城山加奈子（乙女パープル）。黒谷蘭花（乙女ブラック）。

相原理香子。

乙女プラチナ。

ジェース。

右手にオウパーツを持つ戦士。

幾多流。

選択者。

序幕　始まりの歌

「ここは！？」

ある歌声に導かれて、僕はある空間にやって来た。

そこは、かつて…砂の世界と言われた場所。

しかし、魔王ライにより破壊されたと…噂で聞いていた。

なのに、僕の足下には大量の砂が積もっており、目の前に昔と変わらない風景が広がっていた。

「人の願いは、止まらない。だけど…叶えることができる人は、ほんの一握り。だから…ここから、砂がなくなることはないわ」

突然、後ろから声がしたので、僕は振り返った。

その声に聞き覚えがあったし、その姿にも見覚えがあった。

「和美さん！？どうして、まだこの世界に…」

僕が驚いたのは、彼女がここにいたことである。

河野和美。

真紅の歌姫。

「別に～成仏できなかった訳じゃないのよ」

和美は、驚いている僕に肩をすくめて、

「ただ…ここに来る迷い人達の案内人として、残ってるだけよ」

微笑んで見せた。

それから、ゆっくりと空を見上げた。

その動きに釣られて、僕も空を見上げた。

無数の糸が、蜘蛛の巣のように走る宇宙。

その糸の一本一本が、世界である。

「ブルーワールドに危機が迫っているわ」

無数の糸を凝視する僕の耳許で、和美の声がした。

「え」

振り向くと、和美は少し離れた場所にいた。

「厳密に言えば…ブルーワールドではなく、あたし達が生まれた実世界よ」

「!?」

「実世界が、ブルーワールドと重なろうとしている。そうなれば、実世界は崩壊する」

和美は、空に手をかざした。

すると、手のひらに砂が集まる。

その砂をぎゅっと握り締めると、顔を伏せた。

「クッ」

僕は、空を見上げながら、和美に訊いた。

「誰が、そんなことをしょうとしてるんですか！今すぐ実世界に行って…」

「それはやめて！」

和美は、僕の言葉をぴしゃりと止めた。

驚く僕を軽く睨むと、

「原因はわからない。だけど、あなたが実世界に行けば、バランスが崩れるわ」

再び空を見上げた。

「バランス？」

その意味がわからなかった。

和美は敢えて、その意味に答えずに、言葉を続けた。

「あなたには、実世界とブルーワールドが重ならないように、注意してほしいの…。そんなことを頼めるのは、この世界を知るあなたくらいよ」

和美は深呼吸をすると、僕に笑顔を向けた。

「赤星浩一くん」

「！」

あまりの美しい笑顔に、僕は息を飲んだ。

そんな僕の表情に気付き、和美は笑った。

「オホン！」

白々しい咳払いをする僕。

和美は微笑みながら、背を向け…僕をここに呼んだ理由を口にし始めた。

「…実世界には、あなたではなく…彼女達に行って貰うわ」

「彼女達？」

首を傾げようとした僕は、砂を踏む音に気付き、後ろを振り返った。

「な！」

後ろに立つ三人を見て、僕は言葉を失った。

「彼女達は、この世界以外では肉体を保てない。だから、あなたの力で！彼女達に、仮初めの肉体を与えてほしいの…」

和美は、あまりのショックでフリーズしている僕の耳許で囁くように言った。

「お願い」

そんなことを言われなくても、僕がこの三人に逆らえるはすがなかった。

「は、はい…」

僕は、コクリと頷いた。

「よかったわ」

和美は満面の笑みをつくると、再び耳許で囁いた。

「天空の女神を呼ばなくてよかったでしょ？」

「あはは…」

もう僕には、笑うしかなかった。

和美は、そんな僕からゆっくりと離れると、三人に顔を向けた。

「実世界…いえ、あたしの生まれた世界をお願い」

和美の願いに、三人はこくりと頷いた。

和美も頷くと、僕の方に顔を向け、

「もう1人…実世界に、向かった子がいるんだけど…彼女は、体が不安定なの」

「不安定？」

「そうよ。早く行ってあげないと」

和美はまた、空を見上げた。

「実世界が崩壊する前に」

そして、そのまま…和美は歌い出した。

鎮魂歌…レクイエムを。

天空のエトランゼ　第二弾。

天空のレクイエム　　始動。

第1話　乙女戦隊　月影

「月よ！我は帰って来たぞ！」

大月学園の正門を守るカードマンを足蹴にして、黒いピチピチのタイツを着た男が、拡声器を校舎に向けて叫びながら、歩き出した。

「うん？」

その声に気付いた花町蒔絵は、授業中でありながらも携帯電話の上を忙しく動き回る指を止めずに、眉だけを寄せた。

「な、なんだ？」

拡声器の声にざわめく生徒達。しかし、その混乱はすぐに鎮まった。

「変態…もとい怪人注意報です。生徒達は、速やかに避難して下さい」

生徒会からの校内アナウンスを受け、生徒達は頭をかき、うんざりした顔になった。

「またかよ」

「もう出ないんじゃなかったの」

口々に愚痴を言いながら、教室を出る生徒達。

「特に、乙女レッドこと結城里奈！貴様は許さん！」

そんな生徒達に紛れて逃げようとしていた結城里奈は、拡声器の声にびくっと体を震わせた。

周囲の目が、里奈に向けられた。

「他の乙女ソルジャーも」

「コラ！正体をばらすな！」

里奈は生徒達の目から逃れるように、教室内に戻ると、窓から身を乗り出して、叫んだ。

「あそこか！」

里奈の姿を目にした黒タイツの男は、にやりと笑い、

「今こそ！復讐の時！行け！再生魔神軍団！そして、仮出所怪人軍団よ！」

里奈を指差した。

「きいい！」

奇声を発して、廊下をダラダラと歩く生徒達の前と後ろに、黒タイツを被った戦闘員が姿を見せる。

「きゃ！痴漢よ」

真後ろにいた女子生徒が、悲鳴を上げた。

「フハハハ！」

その悲鳴に歓声をあげる1人の男。

「男は、誰も痴漢願望を持っている！」

男はくねる指を突きだし、

「闇のゴールドフィンガー怪人痴漢男！再び参上！」

女子生徒限定で襲いかかる。

「きいい！」

勿論、戦闘員も女子生徒だけを狙う。

「やめろ！」

最初に、触られた女子生徒の前に、男子生徒が庇うように立った。

「あああ！」

その姿を見て、廊下で崩れ落ちる1人の女子生徒。

「夏希！」

廊下に現れた怪人の気配を感じて、里奈が教室から飛び出した。

「大丈夫？」

里奈は、敵にやられたと思って、崩れ落ちている夏希に駆け寄った。

「ああ～」

嗚咽しながらも、夏希は女子生徒を守る男子生徒を指差し、

「やっぱり！あの2人付き合っていたんだ！」

「知るか！」

いつもの妄想で付き合って、フラレた夏希を心配したことに、里奈は少し腹が立った。

「乙女レッド結城里奈！」

痴漢男は、他の生徒と間をぬって里奈と夏希の前まで来て、くねる指を突きだし、

「お前にやられて、捕まった恨みは忘れていない！しかしな！」

目をかっと見開き、

「お前のような！いつもパンツを見せて喜んでいる痴女は、我が指で触る価値もないわ！」

「誰が、痴女じゃ！」

里奈の怒りの蹴りが、痴漢男の股間に叩き込まれた。

「む、無念…」

その場で、白目をむいて倒れる痴漢男。

「行くわよ！夏希」

さっさとその場から去ろうとしたが、さらに夏希は泣き崩れていた。

「みんな…付き合っているんだ～！」

戦闘員から、女子生徒を守る為に戦う男子生徒達。良いところを見せたいのだ。

「そんな訳な」

と言いかけた里奈を、上目遣いでじいっと見つめた夏希は、里奈の手を取り握り締めると、力強く頷いた。

「モオ！」

その手を振り払うと、里奈は1人で歩き出した。

「あたしだって、その気になれば！男の1人や2人！」

「あはは！」

「きゃーっ！」

里奈が角を曲がると、笑い声と悲鳴が廊下にこだましていた。

逃げる女子生徒を、追いかけるのは…怪人モロダシである。

Tシャツを捲し上げ、顔を隠し、下を隠さないという出で立ちの怪人モロダシ。

その姿を見て、里奈は指でこめかみを押さえた。

「まったく…どうして、こんなやつばかりなんだ」

「あははは」

「きゃーっ！」

里奈は女子生徒達が、通り過ぎた後…モロダシの下半身に蹴りを叩き込んだ。

「弱点ががらあきなんだよ」

かっこよく言ってみたが…虚しさが残った。

「帰ろうかな…」

里奈はそう決めかけた瞬間、廊下の先に誰かが姿を見せた。

「フフフ…」

身長１５０センチくらいのおっさん。

「お前は！」

「ハゲにチビ…二重苦を背負い…我は、闇に落ちた！」

「確か…」

里奈は思い出した。

「ハゲたおっさん」

「見たままか！」

突っ込みを入れると、男は頭に手をやった。

「我が名は、怪人バーコード！しかし！」

男は、着けていたカツラを取った。

「お前達に敗れてから…その名を捨てたわ！」

バーコードのカツラを取ると、つるつるの頭が現れた。

「喰らえ！」

光輝く頭から、怪光線が発射された。

「く！」

里奈は、光線を避けた。

「相変わらず、ハゲ散らかしたカツラを被りやがって！」

「それが、私のポリシーだ」

「そんなポリシー！知るか！」

「喰らえ！パワーアップしたカツラアタックを！」

カツラを裏返し、腕に巻き付けると、頭を光らせながら、突進してくる。

「里奈！」

その時、ショックから立ち直った夏希が角を曲がってきた。

「汗と蒸せた香りの加齢臭パンチ！マックスエディション！」

「ごめんね」

里奈は躊躇うことなく、夏希の首を掴むと、加齢臭パンチの盾にした。

「！」

声をあげることもなく、気を失った夏希。

「貴様！友達を盾に！」

「うるさい！」

夏希の体で、テカリの直撃を防ぐと、里奈は怪人バーコードの股間

を蹴り上げた。
泡を吹いて倒れるバーコードと夏希。
「絶対…帰ろう」
里奈は決意をかためた。

「状況はどうなっている！」
黒タイツの男のもとに、戦闘員が駆け寄る。耳元で報告を聞いた後、黒タイツの男は顔をしかめた。
「やはり…単なる変態ではやつらを倒せないか…。魔神軍団はどうした！」
「きぃ！」
後ろに控えていた戦闘員が、奇声を発した後、報告した。
「魔神ヘビイチゴは、プールに潜んでいます」
巨大な苺から、大量の蛇が生えているとう姿の魔神ヘビイチゴ。
しかし、今…プールは使われていない。
「魔神自動販売機は、中庭に！」

買いに来た人々がお金をいれて、ジュースを取ろうとしても、絶対に取ることはできない…恐怖の自動販売機。

しかし、ろくな飲み物は置いていない。

「…」

しばらく考え込んだ後、黒タイツの男は、頭を抱えた。

「まともな…魔神はいないのか」

そんな騒ぎの中、一台のリムジンが校門そばに横つきに止まった。

「何やら…騒がしいな」

助手席に座る男は、少しだけ窓を開け、学校の方を見た。

「うん？」

すると、もう一台…校門を挟んで車が止まった。

「蘭花ちゃん…。今度の映画の話考えといてね」

助手席から降りたサングラスをかけた女に、運転席の男が懇願するように言った。

「はぁ～い」

一応可愛く返事した後、女は歩き出した。

ちらっと前に止まったリムジンを見た後、女は校門を潜った。

歩きながら、サングラスを外すと、女は鼻を鳴らした。

「フン！ああ～だるいわ」

女の名は、黒谷蘭花。人気アイドルにして、この学園の理事長の孫である。

「うん？」

人目がない為に、大きく欠伸した蘭花の耳に、拡声器の声が飛び込んできた。

「まさか！」

気を引き締めた蘭花の前に、戦闘員達が現れた。

「今日は、我等の貸し切りなりな！」

巨大な鼬が、鎖鎌を振り回す…再生魔神カマイタチが、蘭花の後ろに現れた。

「死ね！」

いきなり、鎌を蘭花の背中に向けて投げつけた。

「帰ろう！」

自宅に帰ることを決めた里奈の前に、新たなる変態…もとい、怪人が現れた。

「お前は！？」

「久しぶりだな！」

「誰？」

首を傾げる里奈に、現れた背広姿の男は軽く転けて見せた。

「お、おのれ！乙女レッド結城里奈！」

「本名を叫ぶな！」

さっきから、正体をばらされているからか…逃げる生徒達の目が、里奈には冷たい。

「まあ～いい！お前と最初に戦った！私の名を…名前は言ってなかったか！」

男ははっとして、一度咳払いをすると、鞄を突きだした。

「私の名は、怪人セールスマン！貴様に一度、敗れはしたが！今の私に死角はない！」

中から教材を取り出した。

「ははは！もう小学生のドリルはない！くらえ！大学入試アタック！」

怪人セールスマンの能力は、目から脳に訴えかけて、相手の動きを奪う。自由になる為には、問題を解くしかないのだ。

「いやあ！」

悲鳴を上げ、顔を背ける里奈。

「無駄だ！受験や試験は必ず、やってくる！我等が支配した世界でも、試験は残してやるわ！ははは！」

高笑いをする怪人セールスマン。

「あ、あたし就職する！でも～大学で遊びたい！」

「おのれ！学業を何だと思ってるんだ！」

セールスマンは、英語の教材を取り出し、

「これもくらえ！」

さらに攻撃力を増した。

「ぎゃああ！ここは日本よ！ジャパンなんて国はないわ！」

さらに苦しみだすが、何とか堪えている里奈を見て、セールスマンは焦り出した。

「何故だ！？何故堪えれる！」

「もうすぐ～し、少子化で…よ、選り好みをしなければ…だ、誰でも大学に入れるもん！」

「な！」

里奈の言葉に、セールスマンははっとした。

「つ、つまり…勉強しなくても大学に入れると！お、おのれ～え！少子化め！」

セールスマンは鞄の中から、新たなる教材を取り出した。

「世の中の厳しさを教えてやる！」

それは、高校二年の教科書だ。

「落第したら、進学はできまいて！」

「ら、落第！？」

未来の大学入試と違い、現実の壁が襲いかかる。

予想以上に怯える里奈を見て、セールスマンは勝利を確信した。

「さらばだ！乙女レッド！」

その時、セールスマンと里奈の間に、1人の女子生徒が割って入った。

「何者だ！私の邪魔をするな！」

セールスマンは、女子生徒にも教材を向けた。

しかし、すべての攻撃は効かなかった。

「な！」

唖然とするセールスマンの顔面に、すらっと細く長い足が突き刺さったからだ。

「ば、馬鹿…」

その場で崩れ落ちるセールスマン。

彼の能力の弱点は、頭が良い生徒には効かないのだ。

「理香子！」

自由になった里奈は冷や汗を拭いながら、前に立つ女子生徒の名を呼んだ。

「大丈夫？」

足を下ろすと、スカートの乱れを直してから、理香子は振り返った。

「あ、あたし…。美人は、頭が悪いと決めつけてた」

里奈は、理香子を見つめながら深呼吸をした。

「どんな偏見よ」

理香子は、顔をしかめ、

「それに、さっきの基本問題でしょ」

「聞きたくたい！」

里奈は耳をふさいだ。

「まったく…」

理香子が呆れていると、廊下の向こうから、男子生徒が駆け寄って来た。

「相原！」

「中島！あんたは、避難してって言ったでしょ！」

学園一の美人ありながら、彼女が好きな男は、冴えないオタクぽく男。

（まあ～彼氏があんなんだから、少しはバランスがとれてるかな）

と失礼なことを考えた里奈を、いつのまにか理香子が睨んだ。

（ひぇ～忘れてたよ。この子は、月の女神の生まれ変わりだったんだ）

ガクガクと震え出す里奈に首を傾げた後、中島は言葉を続けた。

「グラウンドで叫んでいるやつは、月の使者と言ってるけど…何かあったの？」

「うん？」

理香子は里奈から目を離すと、廊下の窓からグラウンドの方を見て、

「あんなやつ知らないわ。月の使者だなんて、勝手に！？」

そこまで言ってから、理香子は眉を寄せた。

「空気がおかしい？」

「そりゃあ～そうでしょ。変態達が暴れているんだから」

呪縛から自由になった里奈は、肩をすくめて見せた。

「違う！ここだけじゃない！」

理香子は慌てて、窓ガラスを開けると、空気を吸った。

「何かが起こっている！？」

「…で、どうします？」

「…」

「ここ実世界ですよね？魔法が使えないのは、わかりますけど…あんな変なのがいるんですか？」

プールから移動したヘビイチゴが、中庭を徘徊していた。

「どうします？部長」

「そうだな」

しばらく考え込んでいたのは、情報倶楽部部長高坂真であった。

その右にいるのが、中小路緑。左にいるのが、犬上輝である。

「やはり…」

逃げ惑う女子生徒の悲鳴が、高坂に決意させた。

「世界が違っても、学園情報倶楽部は、生徒の為に戦うのだ！」

学生服の内ポケットから、ダイヤモンドの乙女ケースを取り出した。

「さすが！部長です」

緑は、木刀を手にした。

「え！」

少し驚いて見せる輝。

「俺が突破口を開く」

3人で使われていない教室に集まり、今後の対策を練っていた時に、今回の騒動が起こったのだ。

「行くぞ！」

高坂が教室を飛び出し、廊下の窓を飛び越えて中庭に着地したのと同じタイミングで、中庭に飛び込んで来た人物がいた。

「待て！怪物め！」
「待て！怪物め！」
「これ以上、学園を汚すことは許さない！」
「これ以上、学園を汚すことは許さない！」
「この学園情報倶楽部部長！」
「この学園情報倶楽部部長！」
「香坂真琴が！」
「高坂真が！」

「許さない！」
「許さん！」

最後だけ若干違ったが、まったく同じ台詞を口にした1人。

「え！」

２人は顔を見合わせた。

「学園情報倶楽部部長？」

続いて飛びだそうとした緑の動きが、止まる。

「び、美人だ！」

廊下の窓から首を出して、輝は歓喜の声を上げた。

魔神ヘビイチゴを前にして、固まる高坂と香坂。

それは、ある種…運命の出会いであった。

第2話　開八神

香坂と高坂が、互いに首を傾げている時、正門から東校舎に伸びる道で、蘭花とカマイタチの戦いは続いていた。

振り返りながら、蘭花は乙女ケースを取り出した。

「装着！」

黒い光が蘭花を包むと、カマイタチが投げた鎌の側面を蹴り返した。

「何！？」

驚くカマイタチが返って来た鎌を受け止めた時には、蘭花は後ろにいた。

「お、乙女ブラックだと！？」

振り向こうとしたカマイタチの足を、乙女ブラックが払う。

「馬鹿な！」

背中からコンクリートの地面に倒れたカマイタチの目に、空中へ飛翔する乙女ブラックの姿が映る。

「乙女ブラックは、九鬼真弓のはずだ！」

「ブラックキック！」

倒れているカマイタチの首に、乙女ブラックの蹴りが突き刺さった。

「う！」

気を失ったカマイタチを見下ろしながら、乙女ブラックはさらに足を押し込んだ。

「乙女ブラックは、あたしだ！」

「何かが…起こっている」

世界の変化に、気付いた理香子の深刻な横顔を黙って見つめていた里奈は、はっとした。

「あたしは帰る！世界に何があっても帰る！」

つかつかと廊下を歩き出した里奈の背中を、見送る中島。

理香子はため息をついた。

「いいの？」

中島は理香子に訊いた。

「心配いらないと思う。あの子は巻き込まれ安い運命だから」

理香子も、里奈の遠ざかっていく後ろ姿を見送った。

「あたしは、帰る！やっと闇との戦いが終わったと思ったのに！」

苛つく里奈の耳に、拡声器の声が飛び込んで来た。

「結城里奈！結城里奈！乙女レッドの結城里奈！早く出てこいや！」

「う、うるさあああい！」

里奈は窓を開けると、グラウンドに向かって叫んだ。

「そこか！」

黒タイツの男はにやりと笑い、拡声器を里奈の方に向けた。

「結城里奈！貴様を倒した後！他の乙女ソルジャーも根絶やしにしてくれるわ！」

「！」

黒タイツの男を睨んでいた里奈の視界の角に、グラウンドの端を小走りで走る女子生徒の姿が飛び込んで来た。

「あ！」

里奈は、その女子生徒を指差し、

「乙女ピンクが逃げる！」

叫んだ。

こうなったら、巻き添えがほしい。

鞄を抱き締めていた竜田桃子は、足を止め…びくっと体を震わせた。

「あ、あたしは…」

そして、目を瞑ると、再び走り出した。

「乙女ピンクじゃありませ～ん！」

しかし、その前を戦闘員が塞いだ。

「貴様が、乙女ピンクか！」

黒タイツの男は、拡声器を桃子に向け、

「お初にお目にかかる」

嫌らしく口角をつり上げた。

「だから！あたしは！」

桃子が反論しょうとした時、道を塞ぐ戦闘員の後ろから巨大な何か飛んで来て、ぶつかった。

前のめりに倒れる戦闘員達。

「魔神カマイタチ！？」

戦闘員にぶつかったのは、気絶したカマイタチだった。驚く黒タイツの男の目に、桃子達の上を飛び越える黒い影が映る。

「乙女ブラック！九鬼真弓か！」

目の前に着地した乙女ブラックを苦々しく、黒タイツの男が睨み付けた。

「どいつも、こいつも…九鬼、九鬼と…」

乙女ブラックのサングラスが、光る。

「九鬼真弓！お、お前のせいで、私は目立たなくなったのだ！」

黒タイツの男の指差す指が、小刻みに震えている。

「月の女神を守るヒーロー！半月ソルジャーが、貴様のせいで！」

「フン」

乙女ブラックは鼻を鳴らすと、髪をかきあげ、

「ヒーロー？知らんな。そんな下腹が出たヒーローなど…」

じりじりと間合いを詰めていく。

「九鬼真弓！今日がお前の命日だ！結城里奈の前に、殺してやる！」

半月ソルジャーは、タイツの中に手を突っ込み、ナイフを取り出した。

乙女ブラックは目を細め、

「死ぬのは、お前の方だ。あたしを愚弄した報いは、死ぬことでしか償えない！」

両手を広げた。

すると、足元に風と光が集まって来る。

「ムーンエナジーか！」

その光に、半月ソルジャーは後退った。

「死ね！」

そのままジャンプすることなく、空中に浮かぶと、体を捻った。

「ブラックキック！」

「ひえええ！」

半月ソルジャーは頭を抱え、蹲った。

「は！」

気合いとともに、風を纏った足が、半月ソルジャーを狙い、落下する。

「嫌だ！」

情けなくも、絶叫する半月ソルジャーの前に、誰かが割って入った。

「何！？」

絶句する乙女ブラックの蹴りを、日本刀で受け止めるミニスカートで金髪の女。

「やはりな…」

軽く日本刀を押し出すと、乙女ブラックの蹴りを跳ね返した。

「お、お前は！」

着地と同時に、金髪の女を睨む乙女ブラック。

「フン！威勢だけはいいが、蹴りが軽い。やはり…偽者か」

刀をしまおうとする金髪の女子生徒に、守られた形になった半月ソルジャーはまだ震えながらも、強がって見せた。

「お前は、魔神イハンダー！よ、よくやったぞ！」

「フン」

イハンダーと言われた女子生徒は半月ソルジャーに見向きもしない

で、ゆっくりと歩き出した。

「ど、どこに行く！」

「はあ～？」

ここで初めて、半月ソルジャーの方を向いた。

鋭い眼光に睨まれ、半月ソルジャーの身が萎縮した。

「おれは、貴様らの仲間ではない。おれはただ…九鬼真弓の敵なだけだ。やつ以外の下らん相手をかまう暇はない」

と言い放つ金髪の女子生徒の死角に飛び込んだ乙女ブラックは、蹴りを放った。

「お、おい…」

その蹴りを刀の柄で受け止めた金髪の女子生徒は、サングラスの越しの乙女ブラックの目を睨んだ。

「無粋だな。今はただの女子高生だぜ？」

魔神イハンダーは、普段…十六夜小百合として、学生生活を送っていた。

「く！」

乙女ブラックが力を入れても、十六夜はびくともしない。

「まあ…いい。今日は特別だぞ」

フッと笑うと、一瞬で刀の力を抜き、乙女ブラックのバランスを崩させると同時に、蹴りを乙女ブラックの腹に叩き込んだ。

「う！」

離れる乙女ブラックに背を向けると、十六夜は刀を縦にして、

「イ、ハンダー！」

と叫びながら、横にした。

十六夜の姿が、女子高生から…メタリックボディのサイボーグへと変わった。

「相手をしてやる！」

「くそ！」

乙女ブラックの姿が消えた。

しかし、イハンダーの刃は消えたブラックをとらえる。

音速の戦いが始まった。

「フゥ〜。何やら騒がしいわね」

保健室の中で、ただ1人紅茶を楽しみながら、くつろいでいる女の名は、半田響子。

かつて、教育者でありながら闇に落ちた彼女は、今…まったりとした幸せに包まれていた。

「愛する人がいるって…こんなに、心が温かく幸せになるものなのね」

半田はクスッと笑うと、ディスクを頬杖をつきながら、置いたカップの側面を指で弾いた。

「幸せだわ…。あの頃のあたしは、どうかしてたわ」

自然と笑顔になった。

「ウフフフ…」

その時、運命の携帯が鳴った。

「誰かしら?そんな時間に」

携帯を手に取り、メールが届いていることを確認した。

「もお~ダーリンだわ。仕事中はメールしないでって言ってるのに~い。いけない人ね」

と言いながらも、嬉しそうな顔をしながら、メールを開いた。

「！？」

しばらくの沈黙の後、半田は携帯の画面を見ながら、叫んだ。

「何じゃこりゃあ！」

携帯を握り締めながら、半田の顔が、一瞬で鬼に変わる。

「別れるだとお！？す、好きな女ができただと！！」

半田は、腰かけていた椅子から立ち上がった。

「お、男なんてええ！」

着ていた白衣を脱ぎ捨てると、半田の姿は変わった。

「野郎ども」

「キイイ！」

保健室の扉が開き、戦闘員達が半田に敬礼した。

「男なんて！幸せなんて！ぶっ壊してやる！」

黒い鉄の下着に、黒の白衣を翻し、半田は再び闇へと戻った。

保健室を出ると、廊下の喧騒に笑い、スイカのような２つの胸を揺らしながら歩き出した。

そして、握り締めていた携帯を廊下に投げた。

「あのクズがくれた携帯など！」

半田の手から離れると、携帯は巨大化した。

「行け！魔神愛ホーンよ！幸せな未来が待っている生徒達を襲え！」

「ヘイ！女の逆恨みは恐いでえ～」

愛ホーンの待ち受け画面には、幸せな2人のツーショット写真が映っているが、真ん中に亀裂が入っていた。

「誰が逆恨みだ！それと画面を変えろ！」

「ヘイ、ヘイ」

愛ホーンは邪魔くさそうに答えると、生徒達に襲いかかった。

「ははははは！」

携帯片手に、大笑いする全身黒ずくめの男。

「我が名は、怪人縁切り！」

「キイイ！」

戦闘員達は襲った生徒達から、携帯を奪い、それを怪人縁切り屋に

渡していた。

「たった一回のメールで、崩れる愛情や信頼～！」

怪人縁切りは楽しそうに笑いながら、両手でメールを打ち、

「男と女。脆いものよのう！ははははは」

天を仰いだ。

「乙女ブラック？蘭花か！」

半月ソルジャーの前に現れた乙女ブラックの姿を見て、身を乗り出した里奈の横に、元気になった夏希が駆け寄って来た。

「里奈！あたしにも行くわよ」

「どうしたの？あんた」

妙ににこにこして、嬉しそうな夏希に、里奈は首を傾げた。

「ち、ちょっとね」

はにかむ夏希の向こうでは、携帯を突き付けながら、恋人達の修羅場と化した廊下があったが…里奈の頭には、情報として飛び込んで来なかった。

男女のいざこざなど…里奈には、無縁の世界だからだ。

「お先に行くね！」

「え！」

夏希は、真意を悟られない為にか…廊下の窓から飛び降りた。

ちなみに、ここは三階である。

「装着！」

青い光が、夏希を包み…乙女ブルーへと変身させた。

着地と同時に、眼鏡を人差し指で上げると、

「うりゃあああ！」

叫びながら、半月ソルジャーの方に走って行った。

「大胆」

里奈は妙に、感心してしまった。

その頃、校門横に止まっていたリムジンの中で、眼鏡をかけた男がため息をついた。

「仕方があるまい。雑魚を片付けて来てくれ。お嬢様様が学園に入れない」

「かしこまりました」

男の言葉に、助手席にいた女が頷いた。

「ま、待て！俺は、お嬢様ではない！」

眼鏡の男と黒服の男に挟まれた形で、座っていた女子生徒が叫んだ。

「黙れ」

眼鏡の男は一喝し、

「中身が貴様であっても、この肉体は紛れもなく、お嬢様のお体。そうでなければ、やつらを誤魔化せない」

フロトガラスを見つめながら、虚空を睨んだ。

「そ、そうだ！そのやつらって何だよ！」

女子高生は、眼鏡の男に詰め寄った。

「フッ…」

眼鏡は、男は口許を緩めた。

助手席にいた女はドアを開けると、外に出た。

メイド姿に猫耳は、校門前では異様とあった。しかし、前につけていたエプロンを取ると、何故か…薄茶のスーツに変わった。

そのまま、女は学園内に入った。

「おい！やつらって誰だよ！危険が及ぶのは、俺だぜ？知る権利くらいあるだろ！」

女子高生の言い分も、もっともである。

「成る程…お前の言い分は、わかった」

眼鏡の男は、フロトガラスから視線を外すと、天井を見上げ、

「敵は恐らく…人間ではない。我が開八神家は、月の子孫だ。この世界の根幹を支えてきたな」

「月の子孫？」

何言ってんだ、こいつというような冷ややかな目を向ける女子高生を気にせず、男は言葉を続けた。

「その意味を貴様は…この学園で知るだろう」

そこまで言って、学園の方に目を向けた。

「はあ？」

女子高生には、理解できなかった。

校門を潜った女は、胸の谷間からあるものを取り出した。

それは、傷だらけの乙女ケース。

「装着！」

乙女ケースが開くと、そこから七色の光が飛び出し、女の体を包んだ。

乙女レインボーに変身した女は、頭に猫耳をつけると、一気に加速した。

「行け！愛ホーンよ」

半田の言葉に、

「アイよ！」

軽くこたえた愛ホーンは、イヤホンのような触手を飛ばすと、逃げる女子生徒の足に絡め、そのまま引き寄せる。

「いやああ！」

そして、スカートをめくると、写真を取る。

「あんさんの恥ずかしい写真を、今すぐネットに流すでえ」

愛ホーンは、パンツを見つめながら、要求した。

「それがいやなら、その中身を拝ませえなあ～」

単なる変態である。

「いやあ！」

首を横に振る女子生徒。

「いやよ、いやよも～好きのうち！」

愛ホーンの触手が、無理矢理パンツをめくろうとした。

その時、どこからか無数の包丁が飛んできた。

「ぎゃあ！」

愛ホーンの画面に、突き刺さる数本の包丁。

足に絡みついていた触手が緩んだ為、女子生徒は急いで逃げた。

包丁は、愛ホーンのそばで拝もうとしていた戦闘員にも刺さっていた。

「お前は！」

指の間で、包丁を掴んだ半田は、廊下先からゆっくりと歩いてくる

生徒を睨んだ。

「平城山加奈子！」

半田の声に、加奈子はにやりと笑った。

「闇の裏切り者！今は再び、正義を気取る偽善者め！」

半田は、加奈子を指差した。

加奈子は、愛ホーンを踏みつけると、半田を見つめ、

「男に左右されて、行ったり来たりする年増よりはましだと思うけどな」

馬鹿にしたように笑った。

「何！」

「あたしにとって、男はただの欲望の捌け口！それにな、正義を気取っている訳ではない！例え、人が闇と言おうが！今を生きているあたし自身が、正しい！」

加奈子は新しい包丁を作り出すと身を屈め、愛ホーンのボディに何度も、突き刺さした。

「例え！他人が狂っていると言おうが、あたしの人生だ！あたしが間違っていると思わなければ…あたしが常に正しい」

何度も突き刺さしているうちに、愛ホーンはもとの大きさに戻った。

加奈子は包丁が刺さっている携帯を見て、にやりと笑った。

「う！」

その姿にひく半田。

「つまり…あたしこそが、正義だ」

加奈子は、携帯が突き刺さっている包丁を半田の足元に投げた。

「く！」

半田は顔をしかめると、

「愛の深さも知らない！小娘が生意気な！」

苦々しく加奈子を睨み付けた。

「婚期が遅れ、やっと掴んだ妥協に溺れ…それもなくなり、とち狂っているだけの女が吠えるな！」

加奈子は乙女ケースを突きだした。

「装着！」

乙女パープルに変身した加奈子は、いきなり仕掛けた。

「乙女包丁！乱れ桜！」

無数の包丁が、半田1人を狙う。

「なめるな」

半田は逃げることはない。

「なめるか！女を！」

2人の女の戦いが、始まった。

第3話　歌声

「世界の崩壊の序章にしては…下らないな」

校舎の騒動を眺めている無数の影。

「まあ～本当に、世界が崩壊するなら、何でもいいがな」

屈強な肉体を隠す為に、ぶかぶかのスーツを着た白人の男はシュガレットケースを取り出すと、煙草を喰わえた。

すると、隣に来た別の男が煙草に火を付けた。

指先に点った火で。

「サンキュー」

白人の男は礼を口にすると、煙草を吹かし、

「しかし…死んでもなお、煙草を楽しめるとは思っていなかったな」

フッと笑った。

「そうですね」

指先に点った火を消すと、男はクスッと笑った。

「フゥ～」

白人の男は、煙草の煙を吐き出した。

そして、大月学園で起こっている騒動を見つめながら、言葉を吐き出した。

「死んだから、わかったことがある。人間の欲望は、死んでも消えることはない。神に罪があるとすれば…人間に欲望を与えたこと。ただ飯を食い、子供をつくるだけだったら…世界は、ここまで汚れなかっただろうよ」

それまで言ってから、男は煙草を吸い込むと、

「まあ～本当は、そんな理由はどうでもいい。俺は、世界が…人間が壊れるところが見たいんだ。単にな。だってさ…。一番、滑稽だろ？」

隣の男ににやりと笑った。

その言葉と白人の男の笑みに、男は苦笑し、

「悪趣味ですね。だけど…人間らしい」

大月学園の校庭で叫ぶ半月仮面に目を細めた。

「とてもね」

「フッ」

白人の男も苦笑した。

「今週の注目の歌手のレダさんです」

どこからか、ラジオの声が聞こえてきた。

他愛ない会話の後、レダの歌が始まった。

「…」

その歌声に、宅配便の仕事をしていた浅田仁志は思わず手を止めた。

「どうした？」

上司と思われる配達員が、注意した。

「忙しいんだから、さっさとしろよ」

「はい」

浅田ははっとして、すぐに返事すると、目の前にあった荷物の山を1人で軽々と持ち上げた。

「い！」

その人間離れした浅田の力に、上司は目を丸くした。

「…」

浅田は黙々と仕事を続けながら、頭の中ではラジオから聞こえてくる歌声に、耳を傾けていた。

（あり得ない…。世界が崩壊するなんて）

浅田の顔は、いつのまにか強張っていた。

「キイキイ！」

戦闘員が暴れ回る学園内で、ただ1人逃げることもなく携帯を弄っていた花町蒔絵は、メールを打つ手を止めた。

少し携帯が震え、着信を伝えた。

着信音は、レダの曲だった。

「はい」

蒔絵は携帯に出ると、

「今は学校。別に変わったことはないけど」

普通に会話を始めた。

「キイ！キイ！」

戦闘員が、周りで暴れているのにだ。

「そう」

蒔絵に電話をかけてきたのは、女だった。

「それは、つまらないわね」

女は、残念そうにこたえると、携帯を切った。

その眼下には、大月学園があった。

学園の遥か上空に浮かぶ女には、そこにいるすべてのものの存在を理解していた。

「本当…残念だわ」

女は携帯をしまうと、マッチの火のように一瞬で空から消えた。

「人はね」

白人の男は、新しい煙草に火を点けた。

「火を使い、この世界に頂点に立ったその時から繁栄が始まったが…崩壊も始まっていたのさ」

白人の男は、煙を吐き出し、

「考えてもみろよ。人間ごときに、火を扱えるはずがない。いずれ…己も灰になるのさ」

火の点いた煙草を投げ捨てた。

「それは困りますね」

隣にいる男は笑うと、

「燃え尽きるだけなんて…今までの人の罪を精算するには軽る過ぎますよ。もっと絶望してからでないと」

周りの町並みを目だけで見回した。

「せめて…この世界が崩れて更地にならないと」

その笑いは、いつのまにか冷笑に変わっていた。

第４話　闇こそが、真実

「とにかく、あたしも行くね」

理香子は中島に頷くと、窓から飛び降りた。

「気を付けて！」

夏希のように変身することなく、着地した理香子は地面を蹴り、一気に走り出した。

（タイツの男から妖しい匂いがする！）

理香子は、唇を噛み締めた。

（この匂いは！）

数秒で、半月ソルジャーの前に到達するはずだったが、黒い影が道を塞いだ。

（！？）

足を止めた理香子は、後方にジャンプすると、身構えた。

「御姉様！？」

理香子の口から思わず出た言葉に、黒い影は笑った。

「光栄だな。闇の女神と間違ってくれるなんて」

黒いコートを身に纏い、赤いマフラーを首にかけ、丸い眼鏡の奥の眼光が淀んでいた。

「男！？」

理香子は、細身の男から異様に強い妖気を感じていた。

きりっと男を睨むと、

「お前は、何者だ」

問いただした。

男の妖気は、世界に漂う不穏な空気に似ていた。

「ただの人間ですよ」

男は、理香子の質問に笑いながら、こたえた。

「あり得るか！人間が妖気を漂わすなど」

「あり得るのですよ！但し、人間個人がではないですけどね」

即座に言葉に被せて来た男から、理香子は違和感を見切った。

（妖気が、絡みついている！？）

男から漂う妖気は、自身から発しているものではなかった。

驚く理香子の表情に気付き、男は眼鏡を人差し指で上げると、言葉

を続けた。

「この世界を創った月の女神よ。貴女には感謝しますよ。幾多の世界の中で、人間が支配する世界は、ここだけです！しかし…」

男は突然、悲しげな顔をし、

「人間は、人間の中で、支配する側と支配される側をつくってしまった。僅かな支配者の糧になり、多くの人間は下らない人生を送らされている」

「何が言いたい？」

「大したことではありませんよ。ただ…それを自由を呼ぶ者もいますが、違う！誰も搾取される側には立ちたくはない。なのに、支配者は自らを勝利者と語り、誰でも自分になれたと嘘を語る！そんな可能性なんてなかったのにだ！」

少し興奮…いや、悔しさに震えるような怒りを表す男に、理香子は何も言えなくなった。

「月の女神よ。あなたは、この世界の母。母はすべての子供に、平等でなければいけない」

男は突然、頭を下げ、

「今から始まることは、子供達が紡ぐ物語。どう転んでも手出しせぬように…。子供の喧嘩に手出しせぬように…宜しくお願い致します」

さらに、頭を下げる男に、理香子は絶句していた。
それ故に、男の先で起こっていた出来事にすぐには気付かなかった。

「な！」
「チッ！」

音速の戦いを繰り広げていた乙女ブラックとイハンダーの間に、乙女レインボーが飛び込んできた。

「邪魔だ」

乙女レインボーは音速で動く2人を、同時にパンチでふっ飛ばした。

「な、何!?虹色の乙女ソルジャーだと!」

驚愕する乙女ブラックとは違い、イハンダーは乙女レインボーに襲いかかった。

「邪魔は、貴様の方だ!」

片手で日本刀を振り上げると、乙女レインボーの脳天を狙う。

さらに、もう片方にもいつのまにか日本刀を握っていた。

上段は誘いで、横凪の斬撃が本命だった。

（決まった！）

内心ほくそ笑んだイハンダーは、次の瞬間…絶句した。

（な！）

斬り裂いたのに、感触がないのだ。

「残像！」

気付いた時には、乙女レインボーは後ろにいた。

「フン！」

乙女レインボーのバック&ブローが、イハンダーの後頭部を狙う。

「は！」

そんな乙女レインボーの動きをよんでいたかのように、さらに後方から、乙女ブラックが襲いかかる。

「なめるな！」

イハンダーは身を捩り、腕を鞭のようにしならせた。

後ろにいる乙女レインボーの攻撃を受けても、刀で斬り裂くはずだった。

しかし、2人の攻撃は…乙女レインボーにあたることはなかった。

乙女ブラックのパンチは、イハンダーの横っ面に突き刺さり…イハンダーの刀は、乙女ブラックの脇腹に刺さっていた。

「ば、馬鹿な…」

「あり得ない」

重なるように倒れた2人を背にして、乙女レインボーは悠然とグランドに向けて歩き出していた。

遠ざかっていく乙女ブルーの背中を見つめながら、

「しゃ～ないか」

里奈は頭をかくと、窓に背を向けて、まだ戦闘員達でごった返している廊下を歩きだそうとした。

「うん?」

すぐに、違和感に気付いた。

「誰もいない」

逃げ惑う生徒と戦闘員のいざこざで、騒がしいはずの廊下に人がいないのだ。

ここしばらくの戦いの日々が、無意識に里奈の手に乙女ケースを握

らせていた。

「だ、誰？」

誰もいない廊下に、誰かがいた。

最初は陽炎のように、揺らめきながら…すぐに姿を表した。

「お、乙女…レッド！？」

目の前に立つのは、紛れもなく…乙女レッドであった。

乙女レッドは、にやりと笑った。

「あ、あたし…じゃない！」

里奈は、乙女ケースを突きだした。

「装着！」

赤い光が、里奈を包む。

「…××××××」

その姿を見て、目の前に立つ乙女レッドの唇が震え、何かを口にしたが…里奈には聞こえなかった。

「兵装！」

乙女ケースの形が、剣に変わった。

「うりゃああ！」

乙女レッドに向かってジャンプすると、一気に剣を振り下ろした。

次の瞬間、

「うぎぃ！」

奇声を発して倒れたのは、戦闘員の1人だった。

「え？」

驚く里奈は、剣を振り下ろした体勢で固まってしまう。

「乙女レッドだ！」

周りの生徒達の声で、我に返ったが…まだ、頭の整理がつかない。

「キイイ！」

仲間を倒された戦闘員達が、里奈を囲んだ。

「え？え？え？え～っ！？」

混乱しながら、戦いは始まった。

「あくまでも、中立でお願いします」

男の言葉に、何も言えなくなった理香子。

男は頭を下げ、口元に笑みを浮かべた。

「よしなに…」

「騙されるな！月の女神よ」

「！？」

突然、頭上から声がした為に、理香子は上を見た。

「チッ！」

男は舌打ちすると、後方にジャンプした。

男がいた場所に突き刺さるドラゴンキラー。

「砂の使者か！」

男は、理香子の前に着地した女を睨んだ。

腰まであるエメラルドグリーンの髪を靡かせて、女は男に襲いかかる。

「くそ！」

ドラゴンキラーの突きが届く前に、男の体は闇に包まれて消えた。

「チッ！」

虚しく空を斬るドラゴンキラー。

「あなたは？」

「…」

無言で振り返った女の向こうで繰り広げられている戦いを、理香子の目がとらえた。

「！？」

ドラゴンキラーをつけた女よりも、理香子の意識はグラウンドにいる者に絶句した。

「あたしの…知らない乙女ソルジャー」

半月ソルジャーの前にいるのは、乙女レインボーであった。

「月の女神よ」

目を見張っている理香子に、女は話しかけてきた。

「この世界が崩壊しだしている。我々は、この世界を救いに来た」

「え？」

理香子の視線上に、体を移動させた女は、まっすぐに目を見据えた。

理香子の意識が、乙女レインボーから女に戻った。

「世界が崩壊する？」

「はい」

女は頷き、

「あたしの名は、サーシャ・ハイツ。砂の世界から、この世界を守る為に来ました」

ゆっくりと歩き出した。

「赤星浩一が我々の世界を守ってくれたように…あたしは、彼の生まれた世界を守ってあげたい」

「あなたは…」

理香子は、サーシャが歩く度に足下に砂が落ちていることに気付いた。

「あたしの故郷は、ブルーワールド」

サーシャは、理香子の前に跪いた。

「この世界の崩壊を救う為に、力を貸して頂きたい」

真摯なサーシャの言葉に、理香子は膝を落とすと、

「誰が、この世界を崩壊させようとしている？」

サーシャに訊いた。

「それは…わかりません。しかし、この世界をつくったあなたならば…」

「今のあたしに、世界をつくる力はないわ」

理香子は、首を横に振った。

「だが、この世界は成立している。あなた自身にはなくても、あなたに関係した何かが…この世界を安定させているはずです」

「それは…」

理香子は考えだしたが、思い浮かばなかった。

「テラ…」

女神テラのことを思いだした。

しかし、テラはいない。

だからこそ、月の女神である自分が、力不足であるが、その世界の支柱になり、安定させているはずだった。

「女神テラ？」

サーシャも考え始めたが、フッと笑った。

「可能性の一つですが…今は、一番気になることを解決しましょう」

サーシャは立ち上がると、後方に向けてジャンプした。

「月の女神が知らない！月の戦士！」

そして、身をよじると、乙女レインボーに襲いかかった。

「その正体を探りましょう！」

空中から飛びかかるサーシャに、気付いた乙女レインボーは、蹴りを頭上に放った。

「は！」

サーシャの飛び蹴りと、乙女レインボーの蹴りが交差した。

「な、何だ！？」

乙女レインボーと対峙していた半月ソルジャーは、目を丸くした。

「貴様は、何者だ？」

互いの蹴りは、相殺された。地面に着地したサーシャと乙女レインボーの戦いが、始まった。

「い、今の内に！」

逃げようとした半月ソルジャーの目の前で、いきなり炎が燃え上が

ると、人の形になり、立ち塞がった。

「な、何奴！」

思わず足を止めた半月ソルジャーは、顔を真っ赤にさせた。

なぜならば、目の前に現れた炎は、女になったからだ。それも、全裸の。

「フレア！気をつけろ！そいつからも変な感覚を受ける」

乙女レインボーと戦いながら、サーシャは叫んだ。

「…」

フレアと言われた女は、無言で頷いた。

そして、ゆっくりと近付こうとした。

「待て！」

しかし、それを半月ソルジャーは手のひらを突きだして止めた。

「わ、私に近付くな！」

と言いながら、いきなり下のタイツを脱いだ。

「あ、あれは！？」

理香子は、驚きの声を上げた。

タイツを下ろした半月ソルジャーの腰に巻かれているものは…。

「オウパーツ！」

そう…。

紛れもなく、オウパーツの一部だった。

第5話　エトランゼの足跡

「乙女ダイナミック斬り！」

「うきぃぃ！」

乙女レッドのやけくその猛攻により、殆どの戦闘員を倒すことができた。

「乙女キック！」

なぜか乙女レッドだけ異様に短いスカートは、攻撃の度にパンツを見せることになる。

恥じらえば恥じらう程に、パワーを増す乙女レッドの特質を出す為の理由らしいが…。

それ故に、痴女とも陰口を叩かれているのだ。

「もういないの！」

戦闘員を踏みつけながら、乙女レッドは周りを睨んだ。

今の彼女は、パンツが見えることなんて気にしていない。

「ああ～だりぃ～」

そんな乙女レッドと対象的に、欠伸をしながら携帯片手に廊下を歩いてくるのは、花町蒔絵だった。

興奮気味の乙女レッドの横を通り過ぎた。

「は！」

「小娘が！」

中央館と西館を繋ぐ渡り廊下で戦っていた乙女パープルと半田は、次の攻撃に移る途中で動きを止めた。

「闇の波動！？いえ…消えた」

グランドの方を向く半田。

「新しい波動も感じる。何だ？この不快な波動は？」

乙女パープルも、変化に気づいていた。

「どうやら…」

「戦っている暇はないようね」

2人は互いに見つめ合った後、散開した。

「!?」
「!?」

魔神ヘビイチゴの前で、互いの顔を見て、首を傾げる高坂と香坂。

「部長!」

そんな2人に、ヘビイチゴの攻撃が迫る。

「うん?」
「うん?」

緑の声に、同時に顔を向ける高坂と香坂。

その背後から、触手である蛇が口を広げて襲いかかってくる。

「高坂部長!」

「うん?」
「うん?」

2人は、緑に首を傾げた。

2人ともこうさかである。

「や、やってられるか!」

緑は走り出すと、2人の横を通り過ぎ、木刀で蛇の頭を斬り裂いた。

「輝！」

「わかってますよ」

いつのまにか、ヘビイチゴの後ろに回った輝は、

「がるがる！」

爪を突き刺した。

「！」

そんな後輩達の猛攻に気付いた高坂は、慌てて乙女ケースを突きだした。

「装着！」

「何！？」

隣にいた香坂が驚く中、目映い光が高坂を包んだ。

「高坂ダイヤモンド！見参！」

ダイヤモンドの乙女スーツに包まれた高坂が、走り出す。

「高坂ダイヤモンドアタック」

光の塊になった高坂のぶつかりが、ヘビイチゴに炸裂した。

「！？」

ヘビイチゴの巨体に穴を開けて、通り過ぎた高坂。
次の瞬間、ヘビイチゴは爆発した。

「フッ」

高坂は笑うと、眼鏡を外した。

「高坂部長！」

緑と輝が、変身を解いた高坂に駆け寄った。

「そ、そうか…」

その様子を見ていた香坂は、小刻みに体を震わせた。

「やつらがあの…」

そして、無理矢理笑みを浮かべると、３人を指差し、叫んだ。

「お前達が、乙女戦隊月影か！乙女だと名乗っていながら、男とはな…。まったく盲点だったわ」

香坂は腕を組みながら、３人に近付き、

「学園でいつも騒動を起こすお前達を！私は、許しはしない！おとなしく、捕まりなさい」

びしっと高坂達を指差した。

「はっ！」
「フン！」

自分の攻撃をすべて防ぐサーシャに、乙女レインボーは軽く驚愕していた。

しかし、それは…サーシャも同じだった。

（ドラゴンキラーだけでは、傷付けられないか…）

エルフの血を引くサーシャは、微量ではあるが、魔力を発動させることができた。

（しかし…）

それを躊躇わせる何かが、乙女レインボーにはあった。

サーシャは改めて、距離を取ると、ドラゴンキラーの切っ先を乙女レインボーに向けて構え直した。

（だとしたら…この技しかない）

距離を取ったのは、サーシャの誘いだった。

その誘いに、乙女レインボーは乗ることにした。

腰をかがめて、蹴りの体勢に入る乙女レインボー。

「月影キック」

助走をつけてジャンプすると、サーシャに向かって足を突きだす。

サーシャは、刃を縦にした。

（いくぞ）

乙女レインボーの足を刀身に見立てて、刃を滑らす。

「！？」

驚く乙女レインボーと、一歩前に出たサーシャの体が交差する。

そして、地面に着地した乙女レインボーは絶句した。眼鏡の左側のレンズにヒビが入っていたからだ。

「チッ」

乙女レインボーは舌打ちすると、後方にジャンプし、そのまま…姿を消した。

「…フレア！」

戦いの余韻に浸る暇もなく、サーシャは振り返った。

「く、来るな！」

半月ソルジャーの腰につけているオウパーツから、振動波が放たれていた。

すべての攻撃を跳ね返す…王の鎧の一部である王パーツには、普通の生物は近付くことすらできない。振動波によって、分子レベルで分解されるからだ。

しかし、そのオウパーツをつけた半月ソルジャーに、フレアは悠然と近付いていた。

振動波で塵になろうと、再び不死鳥のように元に戻るのだ。

「うわぁああ！」

そして、ついに半月ソルジャーのはげかけた頭の天辺に、微笑みを浮かべたフレアの手が伸びた。

一瞬で、丸焦げになる半月ソルジャー。

「あいつ～！目立ち過ぎだ！」

サーシャは、フレアの隣までダッシュした。

「能力は、できるかぎり使うなと…！？」

フレアが手を離すと、半月ソルジャーはその場で崩れ落ちた。

しかし、その半月ソルジャーの腰にオウパーツがない。

そのことに気付いたサーシャは、周囲を見回したが、怪しいやつはいない。

「…」

フレアは無言で、半月ソルジャーを燃やした手のひらを見つめていた。

「誰が？」

サーシャは、ドラゴンキラーを構えた。

「今は…誰もいないわよ」

サーシャとフレアの後ろまで来た理香子が、言った。

「！」

サーシャは、理香子の顔を見た。

「おそらく、空間能力を使える相手がいる。時間を止めるとかね」

理香子の言葉に、サーシャは目を見開いた。

「やはり…」

理香子はため息をつくと、

「この世界に、何かが起こっているようね」

丸焦げになっている半月ソルジャーを見下ろし、

「まずは…この男から、オウパーツをどうやって、手に入れたのかを聞き出しましょう」

目を細めた。

「く！」

顔をしかめながら、校門前に着地した乙女レインボーは、割れた眼鏡を外した。

「珍しいな」

黒のリムジンから降りた執事は、指先で眼鏡を押さえながら、スーツ姿に戻った女のそばに来た。

「君が負けるなんて…九鬼美琴くん」

そして、にやりと笑った。

「お言葉ですが…。私は、九鬼美琴ではありません。猫沢巫女です」

眼光鋭く自分を見つめる猫沢に、男は軽く肩をすくめ、

「まあ～騒ぎはおさまったようですしね」

猫沢から視線を校内に向けた。

「では…参りましょうか」

リムジンから運転手が降りると、後部座席のドアを開いた。

「お嬢様」

男の眼鏡が妖しく、光った。

「うっ！」

嫌な顔をしながらも、リムジンから1人の少女が降りて来た。

すると、猫沢が少女の後ろに移動した。

「素敵な学園生活が、貴女をお待ちしておりますよ」

嫌味とも取れる言葉を発すると、執事は少女に頭を下げた。

「く、くそ！俺に拒否権はないのか」

少女の背中に、冷たいものが当たった。

そのまま誘導されるように、校内へと向う。

その少女の後ろ姿に頭を下げた後、男はフッと笑い、

「お気をつけて…お嬢様。いや…」

ゆっくりと背を向けてリムジンに向けて歩き出しながら、呟くように言葉を続けた。

「太陽のバンパイアよ」

第6話　再会

「くそ！こんなにも早く…砂の使者がくるとは！」

黒のコートを身に纏った男は、大月学園から少し離れた雑居ビルの屋上に降り立った。

「やつらも根本的には、我々と同じはず！なのに！」

「それは、仕方ないわ」

突然、男の後ろに女が現れた。

「ティアか」

男は振り返った。

ブロンドの髪を靡かせて、ティアと呼ばれた女は、男ではなく…その向こうにある大月学園を見つめ、

「彼女達の未練は、絶望ではないから」

寂しげに笑った。

「絶望か」

男も笑った。

「ブルーワールド…」

ティアは、呟くように言った。

「？」

男は訝しげに、ティアを見た。

「その世界でのあたしは…幸せだったみたいね」

ティアの言葉に、男は肩をすくめ、

「知らんよ。あくまでも伝わっている話では、勇者と言われ…天空の女神を産んだらしいがね」

「女神を産んだ女か…」

ティアはお腹に手を当て、

「あたしは…産めなかった」

目を瞑った。

「…」

男は、そんなティアに背を向けると、少し間を開けた後に言葉を発した。

「行くぞ。この世界を崩壊させる為にな。それがお前の未練でもあるのだろ？ティア・アートウッド」

「ええ」

ティアは頷いた。

「もうすぐ絶望が、世界を破壊する。希望なき、世界。太陽なき世界が訪れる」

「そして、世界は一つになる」

「そう…人間は支配者から、転がり落ちるのだ」

男は、眼下に広がる町並みに両手を広げた。

「絶望こそが、人類の真実だ。すべての人間に、幸せは訪れない。しかし、絶望は…平等に与えることができる」

男の言葉に、女は軽く頷いた。

「だけど…。本当の幸せは…絶望の中にもあるわ」

ティアは、男に聞こえないように言った。

脳裏に浮かぶ幸せな風景。

（ただし…心が強くなければならない）

と思った時、ティアの耳に…歌声が飛び込んで来た。

はっとした顔を上げるティア。

「この歌は！？」

「フン」

男は、鼻を鳴らし、

「歌など…すべて鎮魂歌に変えてやる」

口許を歪めた。

「歌！？」

街中を歩いていた飯田直樹は、ふと足を止めた。

雑踏の中で、スピーカーから流れるような機械的な音ではなかった。

耳元で囁かれるような…生歌。

デジタルで、データ化した音楽ではない。

温かいアナログの音だ。

「…」

周囲を見回しても、そんな音を出しているようなバンドもいない。

（いや…この柔らかで軽やかな歌は…日本人にはほとんどいない）

音楽関係の会社で働いている直樹は、直感でその素晴らしさに気付いていた。

再び音を探す為に、耳を澄ませていると、携帯の機械的な音が飛び込んで来た。

軽く顔をしかめてから、直樹は上着のポケットに入れていた携帯を取り出した。

「もしもし…」

「あっ！ナオくん。ちょっと遅くなりそうだから、会社には戻らないからね」

直樹に電話をかけて来た女は、バーにいた。

「じゃあ～ねえ！バイバイ」

携帯を切った女の前に座っていた友達は、ため息をついた。

「相変わらず…仲がいいのね。一緒に仕事してるんだから、結婚したらいいのに」

その言葉に、携帯を鞄にしまいながら、女はにっと笑った。

「あたしらは、里緒菜達とは違うんです。そんなに急ぎませんから」

「そお」

里緒菜は軽く肩をすくめから、ワイングラスに指を伸ばした。

一口飲んでから、

「でも…ナオ…飯田君は、いい男なんだから…。うかうかしてたら、誰かに取られるかもよ」

ちらっと女を見た。

「それは、昔惚れていた女からの忠告ですかな?」

「ゴホ!」

思わず咳き込む里緒菜に、女はにっと笑った。

「そ、そんなんじゃないわ」

ワイングラスをテーブルに置いてから、里緒菜は女を睨んだ。

「そうでしたね」

女は、そっぽを向き、

「今は、イケメンの旦那様がいらっしゃるんですから」

舌を出した。

「ま、まったく…。香里奈に、からかわれるなんて…反省するわ」

里緒菜はワイングラスを手に取り、一気に中身を飲み干すと、お代わりを頼んだ。

「でも…里緒菜が和也君と結婚した時は、本当に驚いた。高校を卒業してすぐだったものね」

香里奈は、焼酎のロックを飲みながら、昔を思い出していた。

「懐かしいなあ～」

「そうね」

少しテンションが上がった香里奈とは違い、里緒菜は少し顔を伏せた。

その様子に気付き、香里奈はロックグラスを置いた。

「まだ…気にしているの？消えた先輩達のことを」

「少しね」

空になったワイングラスに、ボトルを持った店員が注ぎに来た為、2人は会話を止めた。

グラスに入っていく琥珀色のワインを見つめてしまう。

店員が頭を下げて、２人がいるテーブルから離れると、里緒菜は言葉を続けた。

「未だに…警察も行方を探してくれているけど…」

高校の先輩だった中山美奈子が主宰する劇団に、少しであるが、里緒菜の会社は寄付をしていた。

さらに、親の知り合いからのコネで、ある歌手の自伝的な劇をやってほしいと依頼もしていたのだ。

しかし、美奈子は一度受けた依頼を断り…行方不明になったのだ。

それも１人きりではない。

里緒菜の後輩と一緒である。

「あたし達が高校生の時にも、何人か行方不明になったでしょ？あの時は、明菜だけは戻って来たけど…」

「明菜…？あっ！行方不明に二回なった子だ」

香里奈は思い出した。

沢村明菜…。演劇部だった里緒菜の後輩である。

「あたしは…あの２人がいなくなったなんて、未だに信じられないの。特に、中山部長は…とてもしっかりした人だったから…。迷っていたあたしの肩を押してくれた人だし…」

高校の時、直樹を好きだった為に、親友の香里奈とギクシャクしかけた里緒菜に、けじめをつけさせたのが、美奈子だった。

「あの人が…」

もうグラスに手を伸ばさない里緒菜に、香里奈は笑いかけた。

「きっとどこかで、元気にしてるわよ」

にっと笑うと手を伸ばし、ロックグラスで置いてあるワイングラスに乾杯した。　心地よい音が鳴った。

「ありがとう」

里緒菜はワイングラスを手に伸ばし、改めて香里奈と乾杯した。

「は、は、は、は…」

人混みから離れ、路地裏を走る制服姿の少女に、迫る数人の男。

「！」

ついに、行き止まりまで追い詰められた少女の後ろから、ゆっくりと近付く男達。

「なぜ…あの店の前にいた！」

「普通の人間には、見えないはずだ！」

「我々の仲間かと思ったが…お前からは、匂いがしない！」

「ま、まさか…異世界から来た魔物か！」

「だとしたら…生かしては帰さない！」

男達の姿が変わる。

人間ではなくなる男達を見て、少女は呟いた。

「魔獣因子…」

「な！」

各々が化け物になった男達は、絶句した。

「ど、どうして…その呼び名を！」

「知っている！」

まるでゴリラのような姿になった男が、少女を掴もうと丸太のような腕を伸ばした。

しかし、次の瞬間…男達は目を疑った。

丸太のような腕が、斬り落とされたのだ。

「な」

男達の目は、斬り落とされた腕よりも、少女が手に持つ刀に目を奪われていた。

少女は目を細めると、血に染まった刀を一振りしてから、自らの鳩尾辺りに差し込んだ。

「！」

自害したのかと思ったが、刀は少女を貫くことなく、少女の中に収まった。

それから、少女はきりっと男達を睨みながら、ある言葉を口にした。

「モード・チェンジ」

「！？」

男達は、動けなくなった。

少女から、変わった女の姿を見てしまったからだ。

「あ、あなた様は！」

数秒後、断末魔の叫びが路地裏にこだました。

「じゃあね。里緒菜。元気出しなよ」

「ありがと」

店を出て、挨拶を交わすと、2人は別れた。

「…」

ゆっくりと、人混みの中を歩き出したが…里緒菜は足を止めた。

慌ただしく華やかな町並みが、なせが息苦しく感じたからだ。

一本だけ道を変えよう。

そう思った里緒菜は、メイン通りから離れた。

すると、別世界のように道は…姿を変えた。

静まり返った町並みに、微かに悲鳴が聞こえてきた。

その瞬間、里緒菜は走り出していた。

携帯を取り出し、場合によっては警察に知らせようとしていた。

しかし、里緒菜は、警察に電話をすることはできなかった。

路地裏から出てきた人物を見た瞬間、里緒菜は足を止めた。

「え」

携帯が手から滑り落ち、地面に落ちた。

「うん？」

路地裏から出てきた女も、里緒菜に気付いた。

「如月か」

女は、里緒菜の旧姓を口にして笑いかけた。

「部長」

里緒菜の瞳から、涙が流れた。

「元気そうでなによりだ」

「部長！」

涙で視界がかすれた。

「一体…今まで」

「すまんな」

「部長！」

涙を拭おうとした少しだけ、視線を下に向け…顔を上げた時には、

美奈子はいなくなっていた。

「部長！中山部長！」

何度、里緒菜が叫んでも…美奈子が姿を見せることはなかった。

まるで…幻だったみたいに。

ただ…確かにいたことを証明するかのように、僅かな砂が美奈子の立ち止まった場所に残っていたが、涙目の里緒菜に気付けるはずがなかった。

第7話　客人

カラン…。

小さく鈴がなった。

「いらっしゃいませ」

その音を合図に、カウンターの向こうにいる男は頭を下げた。

「お久しぶりです。マスター。いつもの頂けますか？」

小さなカフェに入ってきた女は、男に向かって微笑んだ。

「テ、テラ様！？」

マスターは一度下げた頭を、慌てて上げた。

目を見開き、

「ご、ご無事で！」

驚きの表情を見せた。

「無事ではないさ。魔王との戦いで、肉体を失ってしまった。今のあたしは、仮初めだ」

カフェに現れたのは、中山美奈子だった。

美奈子は、カウンターに座ると、

「まあ～いいさ。死んでからわかることもある」

にこっと笑った。

「ま、魔王…」

マスターの脳裏に、数十年前に出会った男の姿が戦慄とともによみがえった。

動きが止まるマスターに、美奈子は言葉を続けた。

「さっき…。ちょっと店に入るか悩んでいた時に、ここのお客に絡まれたんだけど…」

「!?」

「殺しはしていないけど…お灸はすえておいたから」

「め、女神にご無礼を!」

マスターは、頭を下げた。

「いいのよ。あたしには、元から女神の資格はなかったから…。ただ…町中で簡単に変化するからさ」

美奈子はそう言うと、カフェ内を見回し、感慨深気にため息をついた。

「…まさか、ここに戻ってくるなんて…」

「何か…あるのですか？」

マスターは、コーヒーカップを美奈子の前に置いた。

「少し…空気がざわめいていますから…」

その言葉に、美奈子は視線を、マスターに向けた。

「！」

上目遣いで、探るような瞳に…マスターは少し驚いた後に、微笑み、

「大した理由ではありません。空気が…いや、たまに吹く風が、昔を思い出すだけですよ。もう…数百年前の…懐かしい空気に」

「それは、ブルーワールドの風だ」

美奈子はコーヒーカップを手に取ると、一口飲み、

「次元の隙間から、流れて来ているんだろう」

フッと笑った。

「ブルーワールド！？」

その単語に、マスターの顔色が変わった。

「ま、まさか！」

絶句するマスターに、美奈子はコーヒーカップを置いた後、少し間を開けて、話し出した。

「そのまさかだ。この世界が何もしなければ、ブルーワールドに吸収される。簡単に言えば、それだけだ」

妙にあっけらかんという美奈子に、マスターは興奮気味にカウンターを叩くように手を置いた。

「そうなれば、この世界の住民は滅びます！」

「そうかな？魔獣因子を持つ者の中には、喜ぶ者がいるかもしれないぜ」

美奈子は、無理矢理笑って見せた。

「確かに！望む者はいるでしょう！だけど！」

マスターの目が血走り、

「彼らは！人間ではない肉体や能力を持ちながらも、人間なのです。この世界に育ったのですから！」

立て続けに話し続けた。

「彼らを、人間の進化した姿ととらえる者もいました。しかし、彼らの基本となる考えは、紛れもなく！人間の思考なのです！だからこそ、綾子様の死後！我々は、人間に対して取立てて、何もしなくなったのです！」

「わかったよ」

興奮しているマスターの様子に、美奈子はコーヒーを飲み干すことでこたえた。

「あたしもそう思う」

美奈子は、カウンターから立ち上がった。

「女神？」

「自分も、人間ではなくなったけど…考え方や捉え方は、人間の頃と一緒だからな」

美奈子は、お代をカウンターに置くと、立ち上がった。

「ご馳走さま」

手を上げて、扉へと向かった。

「女神…テラよ。またのお越しをお待ち申しております」

マスターは、テラの背中に頭を下げた。

「ああ…」

カラン…。

再び音を立てて開いた扉をくぐり、美奈子は外に出た。

しばらく歩くと、カフェは姿を消し…見えなくなった。

「おそらく…今回の騒動に、あいつらは関わっていないな」

「だけど…部長」

美奈子の姿が、変わった。

「まだ…油断はできませんよ」

「そうだな」

「人間が一枚岩でないように、彼らも一枚岩ではないでしょうから」

「ああ…」

美奈子の声は、頷いた。

「あ、赤星さん?」

突然、後ろから声をかけられて、美奈子から変わった女は振り返った。

赤星と呼ばれることにまだ慣れていない為に、一呼吸置くことができた。

「は、はい?」

少し驚いた振りも様になっていた。

「あっ！やっぱり、赤星さんだ」

向こうも不安だったのか…赤星の顔を見て、笑顔になった。

（そうだ！あたしは今…赤星麗菜なんだ）

少女の笑顔に、麗菜は改めて微笑んだ。

「こんなところで、何をしてるの？」

少女の質問に、麗菜は曖昧にこたえた。

「か、買い物に…」

「そうなんだ」

少女は、さらににこっと笑った。

「あ、あなたは…どうして、ここに？」

「あなたって、他人行儀じゃないの。同じクラスなんだから」

少女の不満げに、ちょっと膨れた顔に、戸惑う麗菜。

「ご、ごめんなさい」

「何してるの！和恵」

そんな2人に、少し離れた場所から声をかける女がいた。

サングラスをかけた細身の女。

「あっ！お姉ちゃん」

少女は慌てて、サングラスの女に手を振ると駆け出す前に、麗菜に言った。

「あたしの名前は、速水和恵。覚えておいてね」

「あっ！うん」

そうだったみたいに、わざとらしい態度をとって見せた麗菜に微笑みながら、和恵は走り出した。

その遠ざかっていく背中を見送りながら、麗菜は呟くように言った。

「クラスメイトか…」

「友達？」

そばまで来た和恵に、サングラスの女が訊いた。

「うん。同級生」

「そう」

会話は、それで終わった。

2人はしばらく、無言で町並みを歩いた。

ちらっと隣を歩く自分を見た和恵に、女は前を見つめながら口を開いた。

「今から、聴きに行くシンガーは…もしかしたら、時代を変えるかもしれない」

「え？」

「本物ならね」

女と和恵は、町外れにあるコンサートホールの前で立ち止まった。

そして、サングラスを外した女に気付き、コンサートホールに来ていたお客達がざわめき出した。

「天城志乃だ」

その声を無視して、志乃と和恵は会場内へ歩き出した。

「レダ」

志乃は、会場内に貼られたポスターを睨んだ。

第8話　夢うつつ

「何か…面白いことが起こりそうね」

大月学園から、北部…北西から南東に聳える山の頂上に、1人の女が立っていた。

「空気が懐かしいわ」

女はクスッと笑い、

「そう思わない？」

後ろに控える双子の女達に訊いた。

「は！」

「この匂いは、ブルーワールドの香り。おそらくは、時空間に歪みが生じていると思われます」

「そうね」

女は頷いた。

「このままでは、この世界はブルーワールドに飲み込まれます」

「そうね」

同じ言葉を繰り返した自分に苦笑してから、女は歩き出した。

「この世界…。あたしは、嫌いじゃなかったけど…」

歩き出した女に気付き、慌てて立ち上がった2人は、少し前を歩く女の背中を見つめ、

「よろしいのですか？」

「このままでは…」

少し出過ぎたことだと思いながら、訊いてしまった。

「そうね～」

また、同じ言葉が出た。

そんな時は、悩んでいるようで悩んでいないのだ。

「風は…炎を煽ることも、消し去ることもできる」

女は空に手を伸ばし、

「だけど…この程度の風では、あたしを感じさせることはできないわ」

風を掴んだ。

「それに…」

ゆっくり掴んだ風を離すと、目線を大月学園の方に向けた。

「別の炎が、揺らめいているようだし」

そして、目を細め、微笑んだ。

「！」

里緒菜と別れ、町並みを歩いていた香里奈は足を止めた。

どこから流れてくる歌声が、彼女を止めたのだ。

「レダ」

香里奈は、その歌手の名を口にした。

単なる流行の音ではない。来月には、消える音でもない。

所謂…本物である。

それも…とびきりの。

（だけど…彼女が凄いのは、歌だけでない。そこに込められたメッセージの深さ）

レダは、ありきたりのラブソングを歌っていた。

なのに、よく歌っている内容を読み解くと…そこに、メッセージが隠されていた。

よくある…平和の歌や、貧しい人々を助けてあげてなどではない。

香里奈はいつも…眉を寄せてしまう。

明らかに、レダの曲は鎮魂歌である。

しかし、その歌は…未来の惨劇に対して捧げられていた。

（崩壊した世界の為のレクイエム）

普通ならば、世迷い言葉と片付けるところであるが、彼女の歌唱力が、訴えかけるのである。

（世界が崩壊しても…生きてほしいと？）

そこまで彼女のメッセージを受け取ることのできる人間は、ほとんどいなかった。

それに、たどり着いたとしても…信じる者が皆無だった。

（だけど…）

香里奈もまた、信じてはいなかった。

なのに…心の底では、彼女のメッセージを真摯に受け止めている自分がいることに気付いていた。

（世界が崩壊する？核戦争でも起きるというの？）

香里奈の知識では、この世界そのものがなくなるという結果には導かれなかった。

恐らく…誰もまだ、想像もしていないであろう。

次元にヒビが入っていることに…。

「地獄か…」

指名手配中でありながら、堂々と町中を歩く男の名は、幾多流。

彼は、立ち止まっている香里奈の横を通り過ぎた。

「迫害されたキリスト教は、この世こそが地獄と説いた。だから、死ぬことで、やっと地獄から解放されるのだと」

幾多は、周りを歩く人々を見た。

カップル。仲間同士で楽しそうに歩く人々。項垂れた人。少し疲れた顔のサラリーマン。

そこには、幸せと不幸と疲れ…人それぞれではあるが、日常という暮らしがあった。

（日常は、地獄なのか？いや、幸せもある。しかし、常にはない。安定しない日々。それが、地獄なのか？だとすれば…天国とは何だ？常に幸せで、安定した生活ができる世界なのか？）

幾多は、前方を睨んだ。

（だとしたら…何て退屈なんだろ）

そう思ってから、幾多はフッと笑った。

（そうか！そんな心配無用だったな。この世界の末路に、安定も幸せも…退屈もない）

幾多は人混みから、外れた。

（崩壊するのだからね）

ビルとビルの間に入ると、幾多は目を瞑り、胸の前で十字を切った。

「リンネ様…」

刈谷雄大は、大月学園の体育館裏に立っていた。

勿論、刈谷がいる大月学園は、ブルーワールドの方であった。

「あなたは…向こうの世界に旅立たれた故に…炎の騎士団は、事実上崩壊しました」

刈谷は空間に手を伸ばし、

「我自身も崩壊しました。あなたのいないこの世界では…生きる意味がない。せめて…我に、時空間を越える力があれば」

空間を切り裂こうとした。

しかし、時空間の移動ができるのは、騎士団長のような最上位の魔神だけであった。

刈谷だけでは、時空間の壁をあけることはできなかった。

それでももがいていると、刈谷の魔力に導かれるように…1人の生徒が体育館裏に姿を見せた。

「!?」

その生徒の名は、九鬼真弓。生徒会長である。

数日前から、神隠しにあったように行方不明になっている学園情報倶楽部のメンバーを探していたのだ。

部室ごとなくなっていることから、体育館裏をもう一度調べようと来たところで、刈谷の魔力を感知したのだ。

「デスペラードの抜け殻か」

刈谷は振り返ることなく、後ろに現れた九鬼の正体を見破った。

「あなたは…人間じゃないのね」

すぐさま構える九鬼の様子に、刈谷はフンと鼻を鳴らした後、

「貴様に、女神の力があれば…時空間を越えられものを」

軽く唇を噛んだ。

九鬼ははっとした。

「時空間を越える!?ま、まさか!」

「貴様が探している人間達は、何らかの力でな」

刈谷は、情報倶楽部の部室が異世界に飛ばされたのを知り、体育館裏に来ていたのだ。

何者かによる力が少しでも、残留していないか…。もしくは、まだ道が繋がっていないかと期待していたが、ほとんど何もなかった。

「実世界に飛ばされたのか!」

絶句する九鬼に、刈谷は頷き、

「恐らくな。あの世界は、ここと兄弟みたいなものだからな」

ゆっくりと振り返った。

「じ、実世界か！」

拳を握り締め、悔しがる九鬼の姿を見て、刈谷は眉を寄せた。

「き、貴様…。やはり、そうか！肉体は、闇の女神のもの！だとすれば、力を使うことができるかもしれん」

刈谷の目が輝き、九鬼の体をスキャンした。

「く！」

次の瞬間、刈谷は顔をしかめた。

「貴様の魂が、デスペラードの力を封印しているのか！これでは、力を使えん！」

「あたしの魂が封印？」

九鬼は、刈谷を見た。

「しかし！」

刈谷の目の輝きが、消えていく。

「意識を飛ばし、我がお前に憑依すれば…」

普通の目の色に戻ったが、希望の光が灯っていた。

「いける！リンネ様のもとに！この空間に僅かに残る軌跡を手繰れ

ばな！」

刈谷の魔力が上がった。

そして、人間の姿を捨てようとした時、

「待て！」

九鬼は刈谷を止めた。

じっと刈谷の目を見つめ、

「協力しょう。あたしも実世界に行きたい」

拳をぎゅっと握り締めると、自らの脇腹に突き刺した。

「う！」

身をよじり、その場で崩れ落ちた九鬼は、意識を失った。

「フン」

この行為に呆れたように鼻を鳴らしてから、刈谷は変身を止め、九鬼に近付いた。

「魔物に身を預けるか…。他人の為に」

身を屈めると、うつ伏せに倒れている九鬼の額に手を当てた。

「遠慮なく、お前の肉体使わせて貰うぞ！」

刈谷の体が一瞬で消えると、九鬼の体を炎が包んだ。

そして、紙が尽きるよりも速く、九鬼の体も消えた。

2人は同化して、実世界へと向かったのであった。

第9話　あれから

「それにしても…」

部室に逃げ込んだ高坂達は、ため息をついた。

「まさか…ここにも、情報倶楽部があるとはな」

「でも、美人でしたね！気が強そうなところもいい！」

輝だけは、嬉しそうである。

「まったく～お前だけは」

緑は冷たい目で輝を一瞥した後、視線を高坂に向けた。

「部長。どうしますか？早くあたし達の世界に戻らないと」

「実際的には、あたし達の世界ではあるけど～部長の世界ではないですよね」

部室の奥で、パソコンを叩いていた舞がにやりと笑い、

「高坂くん」

振り返った。

実世界の大月学園には、高坂の席が残っていた。

それも一年にだ。

ブルーワールドに移動した時、高坂は二年過去に飛ばされたのだ。

「そ、そうでしたね！部長は、僕と同じ年なんだ！」

改めて驚く輝に、高坂はフッと笑い、

「時間軸の詳しいことはわからないが…ブルーワールドで二年多く過ごしたのは事実だ。それに…」

少し顔をしかめ、

「この世界でのことは、ほとんど覚えてなかったしな」

天井を見上げた。

「まあ～何にしても、あたし達がここに飛ばされたのが、偶然ではなく必然だったら」

舞はキーを叩く手を止め、

「何かしらの役目があるはずですよね」

椅子を回転させ、妖しく笑った。

「役目ねえ～」

緑は肩をすくめた。

「ところで、さやかはどこにいった？」

高坂ははっとして、部室内を見回した。

「如月部長なら、この学園に新聞部をつくると、理事長に直談判に行きましたよ」

舞は再び、パソコンに向かうと、そう告げた。

「そうか…」

高坂は頷いた。

たまたま情報倶楽部の部室にいた為に、如月さやかもこちらに飛ばされたのだ。

社交的であるさやかのお陰で、スムーズに学園に入り込むことができた。

しかし、高坂がこの世界からいなくなって、まだ2ヶ月程しか経っていないことになっていた。

（あちらの二年が、ここの2ヶ月という訳でもないな）

高坂はもう、この件で悩むことを止めた。

（とにかく…ここに戻った意味を探ろう）

部室から出た高坂が向かったのは、屋上だった。

同じ学園であっても、ブルーワールドから見える景色とは違っていた。

どこまでも広がる人工物。

ブルーワールドのように、遠くに魔物が飛んでいることはない。

（まだ…実感はないな。ここが、俺の世界だというな）

屋上を囲む金網に指をかけて、高坂は世界を凝視した。

「ここにいたのね」

突然、後ろから声をかけられたが、高坂は振り返ることをしない。

相手がわかっていたからだ。

「どうだった？何か思い出した？」

高坂の隣に来たのは、さやかだった。

「いや…別に…」

高坂はしばらく、さやかを見ずに、町並みを見つめ続けた。

「…」

さやかは、それ以上何も言わずに、ただ…高坂と同じように、後ろから町並みを見つめた。

「クッ」

軽く下唇を噛んでから、高坂は口を開いた。

「ただの事実確認だ。俺には、兄と妹がいた…。妹は兄に殺された。その兄が、ブルーワールドに恐らく逃げた。だから俺は…ブルーワールドに向かった」

「…」

さやかは、苦しそうな高坂の横顔に目をやった。

「なのに…俺は、ブルーワールドでも、やつを止めれなかった。それに、人殺しをさせない使命感はあるのに…妹を殺されたという実感がない。感情がわかないんだ。いや、怒りはあるのに…妹を殺されたのに！身を引き裂かれる程の憎しみがわいて来ない！」

高坂は金網を握り締め、

「俺は、こんなにも！薄情な人間なのか！」

自分自身への怒りで震えた。

「そ、そんなことは……！」

慰めようとしたさやかは、後ろに気配を感じ、振り返った。

すぐ後ろに、１人の男子生徒が立っていた。

いつのまに近くに来たのか…さやかはまったく、気付かなかった。

「高坂…」

男子生徒の声に、高坂は振り返った。

「中島!?」

「お帰り」

学生の名前が自然と出たことに驚く高坂に、中島は微笑んだ。

「!?」

その笑顔を見ていると、失った過去での学園生活を思い出していくように感じた。

いや…すべては思い出すことはできない。

しかし、本当にここにいたことは…確信できた。

「た、ただいま…」

高坂は返事をした。

中島は微笑みながら頷くと、さやかにも頭を下げた。

そして、ゆっくりと高坂の横に来ると、町並みを見下ろしながら、話し出した。

「この世界は、危機に瀕しているらしい。詳しいことはわからない

けど…」

中島はちらりと、高坂とさやかに目を向け、

「君達は意図的であり、偶然であったとしても…時空の歪みに巻き込まれて、この世界に来たことになる」

そのまま、空を見上げた。

「時空の歪みだと？」

高坂は掴んでいた金網から手を離すと、中島の方に体を向けた。

「…」

さやかは、中島の横顔を凝視していた。

「どうして、歪み出したのかはわからない。その歪みを元に戻す方法を、僕の仲間が考えている。勿論…月の女神もね」

「月の女神？」

さやかの呟きに、中島は顔を向けると微笑んだ。

「！？」

さやかは、その微笑みに息を飲んだ。とても優しく柔らかい笑みであるが…あまりにも優し過ぎたからだ。

「…で、俺達に何を言いに来たんだ？」

高坂は、軽く中島を睨んだ。

「別に…大したことじゃないよ」

中島は高坂に笑顔を向け、

「ただ…気をつけてほしいから」

今度は…心配そうな表情になった。

「ありがとう…。気をつけるよ」

高坂がそうこたえると、中島は満足そうに頷き、

「じゃあ」

そのまま屋上から消えた。

中島がいなくなっても、しばらく口を開かなかったさやかは軽く深呼吸をした後に、高坂に訊いた。

「今の彼は、人間なの？」

高坂は、中島が消えた屋上の出入口を見つめ、

「少なくとも、かつては…人間だったよ」

フッと笑った。

「それに…どんなに変わろうが…あいつの優しさは変わらないよ」

「思い出したの？」

「いや…」

高坂は首を横に振り、

「そう魂に刻まれている」

胸に手を当てた。

第１０話　歪んだ光

「～で、あの馬鹿は何か知ってたの？」

生徒会室の前で、中に入らずに腕を組んで壁にもたれていた里奈は、出てきた夏希に訊いた。

「覚えていないらしいわ。あの変なパンツを手に入れた理由をね」

夏希は、肩をすくめて見せた。

「やはり…駄目か」

生徒会長が不在の部屋の中で、椅子に縛りつけられた半月ソルジャーと目線を合わせ、記憶を探っていた理香子はため息をつきながら立ち上がった。

どんなに忘れたとしても、脳には残っているはずである。

しかし、それがない。

「これ以上やると、脳に障害が残るかもしれない」

虚ろな目で、椅子に座っている半月ソルジャーを見下ろす理香子に、蘭花が吐き捨てるように言った。

「こんなクズ。どうなってもいいでしょう」

「そんな訳にはいかない。記憶がなくても、やつらと接点があった。何かしらの痕跡が残っているかもしれない」

「だり～いな」

生徒会室の隅で、携帯をいじっている蒔絵が欠伸をした。

「…」

その様子を無言で見つめていた加奈子は、おもむろに扉に向けて歩き出した。

「加奈子」

理香子は、扉に手をかけた加奈子の後ろ姿に声をかけた。

しかし、加奈子は振り返ることなく、廊下に出た。

「加奈子？」

深刻な顔をして、生徒会室から現れた加奈子を見て、里奈は眉を寄せた。

「…」

やはりこたえることなく、加奈子は廊下を歩き出した。

「どうしたんだろ?」

夏希は首を捻ったが、里奈は別に驚くことなく、廊下の壁にもたれ直し、加奈子の背中を見送ることもしなかった。

「相変わらずよ」

「…」

無言で、軽く前方を睨みながら歩く加奈子。

生徒会室がある中央館から西館に入ると、人はいなくなった。

「考えは決まったかな?平城山加奈子くん」

光が入らない廊下の闇の部分にもたれていた男は、西館に入ると同時に加奈子に声をかけた。

「君は一度、仲間を裏切り…闇に染まったはず。今はどんなに体裁を整えようが、闇に染まった体が元に戻るはずがない」

黒のスーツに黒のシャツ、黒のネクタイに身を包んだ男は、にやりと笑った。

「仲間を裏切った?あたしに仲間などいない。だから、裏切った訳ではない。それに…」

足を止めた加奈子の全身から、黒い霧のようなものが立ち上った。

「あたしは、闇に染まったのではない！闇こそが真のあたしの色だからだ！」

黒い霧が、加奈子を包むと…粒子が固まり、まるで皮膚のような質感になった。

「黒龍の魔獣因子」

黒ずくめの男は、加奈子の変幻を見て、興奮から体をぶるっと震わせた。

「は！」

竜の姿になった加奈子は口から、火の玉を吐き出した。

「素晴らしい！」

男は歓喜の声をあげると、両手を広げた。

そして、敢えて…火の玉を全身で受け止めた。

「な！」

逆に、火の玉を放った加奈子が、絶句した。

男の胸元を、黒い霧のようなものが守っていたからだ。

「あ、あたしと同じ！？」

「違いますよ。この闇はね」

加奈子の攻撃は、霧の中に吸い込まれた。

「人間の心の闇…。底無しの闇。一部の支配者に搾取され、一生報われることのない人の闇」

男はゆっくりと、加奈子に向かって手を伸ばした。

「この闇を晴らすことができるのは、個人の幸せではない。この世界そのものの絶望！そう！この世界はもうすぐ、破滅する。すべての人間は闇に落ちる。平等に！しかし、あなたは違う！この世界で生きることが、地獄のはずです！」

「何が言いたい？」

加奈子は変幻を解き、人間の姿に戻った。

「この世界はもうすぐ…ある世界と融合する！しかし、その世界は魔が支配する世界！つまり、あなたのような素晴らしい力を持つ存在は、向こうの世界でこそいかされるのです！」

少し芝居がかっているが、自己陶酔している男を、加奈子は訝しげに見ていた。

やがて、加奈子はフッと笑うと、男に背を向けた。

「下らんな。あたしはどこにいても、あたしだ。もしこのあたしを

利用しょうとするやつが、いるならば…」

そして、歩き出した。

「殺すだけだ」

最後に殺意を込めてそう言った加奈子に、男は笑い…一呼吸置いてから言葉を発した。

「その覚悟が、普通の人間にない。殺す！殺すと言いながら、何と少ないことか！世の中！殺人が少なすぎる！」

「はあ？」

男の言葉に、加奈子は眉を寄せた。

「と思いません？この世界の不平等は多い！なのになぜ！人間は、我慢する！我々の努力を搾取するだけの人間を許す！恵まれた環境に生まれ、育っただけの人間をなぜ野放しにする！殺せばいい！奪えばいい！」

「お、お前！」

「いいですか？そんな人間よりも、下の人間の数は圧倒的に多いのですよ！」

男は、感情を爆発した。

「人間は社会的動物だ！しかし、奴隷ではない。働き蜂のように尽くせばいいのか！違う！人間は！人間は！」

「き、貴様！」

加奈子は思わず、乙女ケースを突きだした。

「人間ではない何かに！殺されるべきなのだ！人間同士の殺しが罪ならばな！」

「装着！」

「やめておけ…。人間は、誰も支配者にはなれない。それだけが、真理だ」

「え？」

加奈子は突然、後ろに現れた影にぞっとなった。身を震わせながらも、回し蹴りを放ったが…その足は、影に包まれた。

「！」

数秒後…影は消え、加奈子と男しかいなくなった。

にっと男は笑うと、拍手した。

「おめでとうございます！」

廊下に響く拍手の音に、加奈子は笑った。

「まあまあだな」

その声は、加奈子ではなかった。

「あなた様の復活を心から、お祝い申し上げます」

男はどこからか、黒薔薇の花束を取り出すと、跪きながら差し出した。

「闇の女神…デスペラードよ」

黒づくめの男の服装が、タキシードに変わった。

「フン！」

デスペラードは鼻を鳴らすと、加奈子の体の調子を確かめながら、周囲を見た。

「ここは…イオナの世界か…。成る程～壊れてきているな」

そして、口許を歪めた。

「天空の女神にすべての力を奪われたが…我の力のもとは、すべての生物の絶望！」

タキシードの男は、笑った。

「この世界が崩壊し、すべての人類が絶望した時…一人一人に闇は生まれる」

「そのすべての闇を食らえば…我は容易に復活する」

「九鬼真弓の肉体がなくてもな」

デスペラードとタキシードの男は、笑い合った。

「人間の闇こそが、この世で一番淀み…濃い！」

「それを提供してくれるのも、人間だとはな」

「互いに憎しみ合い、闇をつくればいい」

タキシードの男がデスペラードに近づくと、2人は融合した。

「この世界に、我を脅かす存在はいない」

「この世界の崩壊を早めてやろうぞ」

加奈子の体から、デスペラードの闇の魔力が溢れ出す。

「それは、できなくてよ」

デスペラードがいる廊下の先から、声がした。

「誰だ？」

振り向いた瞬間、デスペラードの目を光が射抜いた。

「ま、眩しい！？」

廊下中が光り輝き、そのあまりの眩しさに何も直視できない。

「な、何だ！この光は」

デスペラードは絶句した。

加奈子と同化したデスペラードの指先が、消えていくのだ。

「ただの光ではない！た、太陽のバンパイア！？ラ、ライか！い、いや！赤星浩一とかいうやつか！」

「失礼ね」

光の向こうから、声がした。

「レディをそんな人達と間違えるなんて」

「お、お前は！？」

光の中から現れたのは、学生服を着た男子生徒だった。

「光に照らされない闇は、ないわ」

男子生徒の唇に、笑みが浮かぶ。

「こ、この私が！こんなところでえ～！」

デスペラードの体は、光の粒子を化して消えた。

すると、廊下全体を照らしていた光も消えた。

「ふ～ん」

男子生徒は鼻を鳴らすと、廊下に倒れている加奈子を見下ろしながら、後ろに話しかけた。

「ねえ～。この程度の闇が女神なの？」

「いえ…。お嬢様。この女神はまだ完全に復活していませんでしたので…」

廊下の角から、執事が姿を見せた。

「だったら、もう少し泳がした方がよかったかしら？」

男子生徒は、加奈子のそばに落ちている乙女ケースに気付き、軽く蹴った。

「そうなれば…少し厄介になったことでしょう」

「そうよね。仮にも、おばさんになるんですもの」

男子生徒はクスッと笑うと、振り返った。

「真田」

「は」

真田と呼ばれた執事は、頭を下げた。男子生徒の口調が変わったからだ。

「この世界をやつらの好きにはさせない」

「は」

「何故ならば～」

男子生徒は身を捩り、

「地の底でもがき苦しむ民衆を、照らしてあげるのが！わたくしのお仕事！」

恍惚の表情をつくり、

「すべては、わたくしの光の許に生きる！そう！人間なんて、わたくしの光がなければ生きてゆけない。可哀想な生き物」

「その通りで、ございます…。開八神茉莉…お嬢様」

真田は深々と、頭を下げ、

「太陽は頭上にあります。しかし、おいそれとは見ることができません。人は、お嬢様のご加護の下で生きているのです」

「そんな哀れな人間を、わたくしは守っているのですよ。哀れで非力で卑しい人間達！だけど！」

男子生徒は、自分の体を抱き締め、

「綾瀬太陽様は違いますわ！あの方は、わたくしと同じ太陽！ですから…きちんとお守りするように」

真田を睨んだ。

「承知しております」

真田はまた、頭を下げた。

「だったらいいわ」

男子生徒は頷いた。

「しかし…」

真田は見えないように、にやりと笑った後、

「彼も幸せでしょう。お嬢様の身代わりになっているのですから」

ゆっくりと頭を上げて、微笑んだ。

「やっぱり～そう思う？お前も」

「はい」

「きゃ！太陽様！」

自らを抱き締めながら、身を捩りまくる男子生徒に再び頭を下げた後、真田は背を向けると、時計を確認した。

「時間か」

第１１話　欠伸のでる時間

「ふわぁ～」

半月ソルジャーによる騒ぎが治まり、授業は再開されることになった。

お決まりの転校生紹介を受けてから、開八神茉莉の体を持つ綾瀬太陽は、席に着いた。

開八神家の名は知る人ぞ知る名家であるが…高校生で意識している者はいなかった。

ここに来る前の学校は、開八神家の息がかかっていた為に、気持ち悪い程の特別待遇を受けていた。

大月学園に来て、久しぶりに普通のありふれた机と椅子に座ると、妙に落ち着いてきた。

（まあ～変な学校だけど…少しはましかな）

と綾瀬が思った次の瞬間、教室の前のドアが開いた。

「茉莉お嬢様ああ！」

今どき珍しい丸坊主に、今どき珍しい長ラン。よく漫画で見る…昔の不良の格好をした男が、涙を流しながら、絶叫した。

「どうして、お嬢様といっしょのクラスじゃあないんですかあああ

！！」

涙を流す大男の顔も…今どきではなかった。どう見ても、学生には見えない。

（おっさんだ！）

クラス中の生徒が一斉に思ったように…明らかに、おっさんだった。顔に刻まれた皺が、年輪を感じさせた。

「ゲッ！」

綾瀬は明らかに、嫌な顔をしてしまった。

（し、しまった！）

心の中で、そう思ったが、もう遅い。

次の瞬間、大男の表情が凍り付き…しばらくの沈黙の後、大男は額を教室の柱に、叩きつけた。

柱に、ヒビが走った。

「お、お嬢様…」

今度は髪の毛をかきむしりると、額が割れて血が流れている顔を、綾瀬に向けた。

「私をそんな目で見ないでくださああい！」

血と涙を流しながら、大男は絶叫し、その場で崩れ落ちた。

そして、肩を震わしながら、話し出した。

「松村純一郎…。お嬢様の為、就職後に…前の学校に派遣されて、十年！お嬢様の為！お嬢様の為に、生きてきた純一郎に…何という冷たい仕打ち！」

純一郎は再び額を、今度は床に叩きつけ出した。

（そうか…こいつは、中身が俺と知らないんだ）

開八神茉莉の精神が入れ替わっていることは、使用人の中でも一部しか教えられていない…重要機密だったのだ。

「うおおっ！」

号泣する純一郎に、綾瀬はため息をつくと、机に頬杖をついた。

（騒がしくなりそうだ）

やはり転校しても、安息などないのだと、改めて思った。

「少し遅れまして、申し訳ございません」

机とソファーしかない質素な理事長室内で、猫沢は頭を下げていた。

「仕方ありませんわ。さっきのような騒動があったのですから」

椅子から立ち、ディスクの後ろの窓から学園をみつめながら、黒谷理事長はこたえた。

「でも、そんなことよりも…」

黒谷はゆっくりと、振り返り、

「あなた方が、この学園に来られたことを歓迎しますよ」

猫沢の目を見つめた。

「!?」

その眼光の鋭さに、猫沢は少し驚いたが、表情には出さなかった。

「私達…月の防人である黒谷一族は、あなた方の転入を拒むことはできない。なぜならば、それは使命だからです」

その理事長の言葉を聞いて、猫沢は納得した。

黒谷は、まったく表情の変わらない猫沢を確認しながら、言葉を続けた。

「ここは、月の最終防衛ライン。しかし、それ故に…容易く相手に居場所を教えることになります。所謂…籠城状態に近くなります」

（フッ…）

黒谷の話を聞いて、猫沢は心の中で笑ってしまった。

「…」

そんな猫沢の笑みに気づいたかのように、黒谷は話を止めた。

そして、数秒だが…口をつむんだ後、言葉を続けた。

「まあ～そんなことは、あなた方ならば百も承知でしょうけど…」

黒谷は再び、猫沢に背を向けて、窓の外を見た。

そして、そのまま訪れた静寂に、猫沢はこれ以上話しても仕方がないと見切りをつけた。

「失礼します」

黒谷の背中に頭を下げると、猫沢は理事長室から出ようとした。

猫沢がドアノブに手をかけても、黒谷はすぐには振り向かなかった。

「やはり…何か起こっているのですね」

実世界の大月学園とブルーワルードの大月学園は、繋がっていた。

まるで、２つの世界が離れないようにしている楔のように。

だからこそ、世界が違うが、２人の黒谷理事長もまた繋がっていた。

漠然ではあるが、互いの危機を知ることができたのだ。

「今や実世界で、相当な力を持つ開八神家。その気にならば、一国の軍隊をも操ることができるはずです。その開八神家が恐れるものとは何ですか？」

黒谷の質問に、猫沢は答えることなく…頭を下げるとドアを開け、理事長室を出た。

「失礼します…」

最後の言葉を残し、あっさりと出ていった猫沢を引き留めることはせず、黒谷は本当に訊きたかったことを呟くように言った。

「あなたは…どうして、彼らといるのですか？九鬼様」

理事長室を出た猫沢が廊下を歩く東館の上…屋上では、サーシャとフレアがいた。

「貴様！何を考えている！」

サーシャは、金網にもたれるフレアに詰め寄っていた。

「貴様の能力は、人前で使わないと決めたはずだ！それに何よりも！オウパーツによって、何度も破壊された貴様の核！それを再生させている力は！」

「わかっている」

フレアは、サーシャの目を睨んだ。

「う！」

その眼力の強さに、サーシャは思わず怯んでしまった。

「心配しなくて…自分の体の限界のことは、わかっているわ」

サーシャの前からすり抜けたフレア。

「し、心配など！」

口ごもるサーシャ。

「あたしはそう簡単に死なない。もう二度と…」

フレアはそう言うと、全裸の体に炎を纏うと、温度調整し、さらに色をつけることで、大月学園の制服を身に着け、屋上を後にした。

「まったく」

サーシャは毒づくと、歩き出した。

「まさか…炎の騎士団親衛隊の蛍火のフレアとともにするとはな」

ブルーワルードにいたならば、明らかに戦っていた相手である。

「皮肉だが…仕方がない」

サーシャは学生服のスカートのポケットから、あるものを取り出し

た。

それは、指輪である。

「ロバート…」

サーシャは指輪をぎゅっと握り締めた後、左手の薬指にはめると、前方を睨み付けた。

「ブラックサイレンスの1人！サーシャ・ハイツ！参る！」

床を踏みつけるように、力強く歩き出した。

第１２話　情報倶楽部

「昨日は、遅くなったから…眠い」

赤星麗菜は、大欠伸をした後、窓際の席から外を眺めていた。

先程の騒動は、冷静に見守っていた。

「お前は、あまり動くなよ。やつらに悟られてはいけない」

「わかってますよ」

頭の中に響くような声に、麗菜は頷いた。

「お前の力は、やつらにとっての切り札になる」

「はい」

麗菜は頷くと同時に、授業の終了を告げるチャイムが校内に響いた。

おもむろに席を立つと、目の前に生徒がいた。

「さっきは、大変だったね」

気さくに声をかけてきたのは、速水和恵だった。

「え！ああ…そうね」

作り笑いで頷いた麗菜に、和恵は微笑み、

「でも、大丈夫だから。あんな騒ぎで、この学校を嫌いにならないでね」

それだけ言うと、麗菜から離れた。

「いい子じゃないか」

頭に響く声に、麗菜は頷いき、

「はい」

他のクラスメイトへ駆け寄る和恵の後ろ姿を見送った。

そんな麗菜の視線には入らなかったが、和恵の向こう…窓を挟んで廊下を、輝が歩いていた。

「異世界ねえ～」

周りを見回しても、学生しかいない。

それは、ブルーワルードの大月学園でも変わらなかった。

だけど、授業内容が違った。

魔物に関する情報や戦い方の授業がなかった。

「危機管理がないな。あっという間に蹂躙されるぞ」

ブルーワルードにいたときは、緊張感が足りないと言われていた輝

であるが、平和ボケした空間も居心地が悪かった。

（それについさっき…あんな騒動があったのに…）

輝の鼻は、犬神を宿しているからか…人間の発する…所謂、分泌物をかぎ分けることができた。

（あまり恐れていない。誰かが助けてくれると、安心しているからか）

輝は、足を止めた。

前から歩いてくる人物に、気付いたからだ。

「うん？」

突然足を止めた輝に気付き、里奈は首を傾げた。

（乙女レッド…結城里奈）

輝は、里奈をまじまじと見つめた。

（クッ！）

輝は顔をしかめた。

（そっくりじゃないか）

ブルーワルードにも、乙女ソルジャーはいた。

旧防衛軍の司令官だった結城哲也は、月の女神の力で新たな戦力を増強しょうとした。

その中には、月影ソルジャーの力も組み込まれていた。

「お前達は、邪魔よ」

学園の生徒達も巻き込んだ月下計画を阻止する為に、学園情報倶楽部は戦った。

しかし、乙女ダイヤモンドの力を手に入れた結城リオと…乙女レッドの力を手に入れた結城梨絵の姉妹に阻まれた。

その結果、学園情報倶楽部のメンバーは無期停学処分となったのだ。

「よわっちい～犬ころ！」

輝を踏みつけて、笑う梨絵の姿が忘れられなかった。

（しっかりしろ！）

輝は、よみがえりそうになったトラウマをぐっと我慢すると、再び歩き出した。

「結城里奈さんだね。あなたに話がある。僕は、学園情報く」

「見つけたぞ！月影一派！」

里奈に話しかけた輝の後ろから、声がした。

「え！」
「い！」

驚く里奈と輝。

「学園情報倶楽部部長！香坂真琴！貴様を連行する！」

「え！」
「い！」

真琴の言葉にたじろぐ2人。

しかし、連れていかれたのは…輝だけだった。

「ええ！」

首根っこを掴まれて、廊下を引きずるように連れて行かれる輝を見送りながら、里奈は首を捻った。

「助かったけど…。なぜ？」

「とにかくだ。この世界の崩壊を防ぐ為に、我々はこの世界に呼ばれたと考えるのが、妥当だ！」

部室内で高坂は、緑とさやか…パソコンに向き合ったままの舞に告げた。

「都合がいい解釈かもしれないが、それ以外に我々がやるべきことはない」

高坂の力説に、舞はにやけながら、キーボードに指を走らせた。

検索サイトに、世界崩壊のワードを打ち込んだ。

画面上に現れる大量の文字を、目だけで舞は飛ばして読んでいく。

「ゲームとか～映画とか…この世界は、滅びる話が好きですね」

舞は笑みを消して、画面を食い入るように見つめた。

「うちらの世界じゃ～こんなのご法度ですよ。人間が滅ぶなんて」

「リアル過ぎるわ」

緑はソファーに座りながら、肩をすくめた。

「人間が滅んだら、魔物達がすべての地域を支配するだけですからね」

再び舞の指が、忙しく動き出した。

「この世界は、人間が支配している。繁栄の裏には、破滅がある」

高坂はちらりと、パソコンの画面を覗き見た。

「人間が支配しているのにですか?」

緑は、高坂に訊いた。

「だが…人間内で、差がある。平等ではないからな」

高坂は、フッと笑った。

「差ねえ～。我々の世界もありましたけど…生きているのが、一番の成功者でしょ？」

「それは、つねに命を落とす危険がある者が感じる感覚だ。この世界では、紛争地域にでも行かない限りは、命の危機などない」

高坂は画面から視線を外すと、少し顔をしかめた。

「そんな安全な世界でありながら、破滅を夢見るか」

舞は、キーボードから手を離し、

「そんな願望の中に、不似合いなものを見つけましたよ」

にやりと笑った。

「うん？」

高坂は舞の後ろから、画面を覗き込んだ。

「希望ですよ」

「希望？」

「と言っても、絶望の後ですけどもね」

舞は、キーを指先で弾いた。

「？」

高坂は眉を寄せ、画面に映し出された文字を読み出した。

「世界が崩壊した後も、諦めずに希望を持って生きてほしい。そんなメッセージをある歌から感じた人が、書いているブログですよ」

舞は肩をすくめ、

「まあ～詩を訳しても、そんなメッセージはありませんけど。単なるラブソングです」

「だけど…そう感じている人がいるのよね」

緑もそばに来て、画面を覗き込んだ。

「一万人いたら～1人くらいかもしれないけど」

舞は、検索し過ぎて疲れた目を指でマッサージし出した。

「…でも、零ではないか」

高坂はパソコンから、離れた。

「まるで…パンドラの箱だな」

「パンドラの箱？」

緑は画面から目を離し、高坂を見た。

高坂は頷き、

「この世界の神話だ。あらゆる災害が詰まった箱。それを開けてしまった為に、世界に災害はばらまかれた。しかし、その箱の最後に入っていたのが、希望だ」

「イヒイヒ～。それは、希望と呼びますかね」

舞は笑った。

「そうだな。希望ってのは、解釈で変わるし…絶望を回避する為に、本人が希望を見つけたらいい。それは、未来でも…自分の中にある過去の経験でも、希望は絶望しなければ、見つけられる」

「つまりね。最後に希望が残ったら駄目ってこと！そのパンドラって箱を開けさす前に、何とかしなければいけないってことですよね。高坂部長」

「ああ…。絶望の次に、希望じゃない。明らかに、その間に後悔がある。箱を開けた後悔が」

高坂は部員達を見回し、

「おそらく…今、パンドラの箱を開けようとしている者も、いずれ…後悔するはずだ。ただし…」

ここでぐっと拳を握り締めると、

「人ならばな」

吐き捨てるように言った。

「…」

今まで何か考え込み、ずっと無言だったさやかは、高坂の最後の言葉に目を瞑った。

「とにかく、その歌が聴きたい！」

高坂の願いに、

「ダウンロードしましょうか？」

舞はマウスに手を伸ばした。

「いや…こんな機械からでは、すべての音を聞き取れないかもしれない。ＣＤを買うぞ！」

部室を出ようとする高坂に、緑が言った。

「うちら…この世界のお金持ってましたっけ？」

「う！」

高坂は怯んでしまった。

哲也達防衛軍との戦いの時から、いざというときに籠城する為に、ある程度の食料は確保し、二部屋ある内の奥のスペースは居住空間にしていた。

だから、当面の生活には困らないが…。

「我々の目下の敵は…お金という現実」

その場で崩れ落ちた高坂を見て、さやかはため息をつくと、ソファーから立ち上がった。

「CDを買うよりも、直に声を聴いた方がいいでしょ？」

さやかの手にはいつのまにか…二枚のチケットが握られていた。

「昨日と今日の二公演。あたしと行く？」

さやかは、崩れ落ちている高坂に訊いた。

「喜んで、お供致します」

高坂は元気よく立ち上がると、深々と頭を下げた。

「しかし～よく手に入りましたね」

舞はマウスを動かし、

「ソールドアウトアウトになっていますよ」

画面を確認した。

「少し気になっていたのよ」

さやかは軽く肩をすくめた後、

「この世界に来たときからね」

手に持ったチケットを見つめた。

「気になっていた？」

頭を上げた高坂は訝しげに、さやかを見た。

「ええ…。実際は、この世界に来る前から」

少し視線を外したさやかに、高坂は眉を寄せ、

「どういうことだ」

「簡単よ。ブルーワールドでも、この曲はかかっていた。だけど、伝わるメッセージは違うみたいだけど…」

さやかは、記憶を探り出した。

「新聞部をやっていると、やはり…流行のファッションや音楽のチェックもかかせない。そんな中で、彼女の歌に出会った」

「！？」

睨むように自分を見るさやかに、高坂は息を飲んだ。

「そんな彼女の歌が…この世界でも流れていた。気になるじゃない」

突然、さやかは笑うと…高坂に背を向けた。

「ここで、ごちゃごちゃ言っても仕方がないわ。彼女に会いに行きましょう」

「待て！」

歩き出したさやかの肩に、高坂は後ろから手をかけた。

「その歌手の謎は、今から考えるが…。そのチケット代は、どこから出た？」

「あら？」

さやかは振り返ると、高坂に妖しく微笑んだ。

「報酬よ」

「報酬？」

「そうよ。理事長に会いに行った時に、この世界の為に働く報酬に関しても、話をしたのよ」

「な、何！？」

驚く高坂に、さやかはチケットを突きだし、

「あたし達は、この世界の為に動く義務はない。だけど～動くならば、お金が必要です！」

にやりと笑った。

「く！」

顔をしかめた高坂とは違い、緑は拍手した。

「さすが！如月部長！頼りになるわ」

感心する緑。

「さあ～行くわよ」

さやかは、自分の肩を掴んでいる高坂の腕を取ると、強引に歩き出した。

「お、お前達は～学園内の様子を探れ！」

引きずられながら、高坂は舞と緑に指示を飛ばした。

「はいはい」

頷いた2人は、高坂達がいなくなった後、軽くため息をついた。

「それにしても…この世界に来てから休む暇はないわ」

緑は、制服のネクタイを指でほどくと、奥の部屋に進んだ。

「男連中がいない間に、シャワー浴びるわ。あんたはどうするの？」

「あたしゃ～まだいいわ」

舞は再び、パソコンを向き合った。

「あ、そう」

ネクタイを取り、シャワー室に向かおうとしてから、緑は思い出した。

「ところで～輝のやつはどうなったんだ？」

顔をしかめた緑に、舞はキーボードを叩きながらこたえた。

「さあねえ。でも、あいつは殺されても、死なないだろう」

「そうだな」

緑は納得して、隣の部屋に入った。

「へぇ～」

その頃、拉致された輝は…西館の一室で尋問を受ける寸前だった。

「さあ～吐いて貰うわよ。貴様らの目的を！」

椅子に座らされ、後ろ手に縛られた格好の輝の顔に、なぜがペンライトを当てながら、香坂真琴は詰め寄った。

第１３話　あこがれの地

「よく会うね」

大月学園を出て、調査がてらに歩き回っていたら、懐かしい場所に来た。

大路学園。

大月学園の姉妹高と言われているが…定かではない。

「思わず…ここに来てしまったな」

頭の中に響く声に、麗菜は頷いた。

「そうですね」

外から、校舎を見上げている時に…突然、後ろから声をかけられたのだ。

「え！」

驚きながら、麗菜は振り返った。

感傷に浸ってしまって、周囲に気を配るのを忘れていた。

すると、笑顔の和恵が立っていたのだ。

「赤星さんの家もこの辺なの？」

「う、うん…」

頷きながらも、麗菜は言い直した。

「ちょっと…離れてるかな」

「ふ～ん」

言いにくそうな麗菜の雰囲気を察したのか…和恵は、話題を変えた。

「この学校には、あたしのお姉ちゃんが通ってたんだ」

感慨深気に、校舎を見上げる和恵の横顔を見つめ、麗菜は記憶を探っていた。

（お姉ちゃん…。速水先輩か…）

記憶の中にある速水香里奈の顔を思い出し、

（あまり似てない姉妹ね）

少し失礼なことを思ってしまった。

「そうだ！」

突然、和恵は笑顔になると、麗菜の方に顔を向けた。

「あたしんちは、この坂を真っ直ぐ上がった所にあるんだ」

正門前を、山手までのびていく道。

「！？」

麗菜は思わず、道の向こうに目をやった。

「少し寄っていかない？あたしんちは、お店をやってるの。コーヒーや紅茶くらいならご馳走するよ」

和恵の言葉に、麗菜の頭に声が響いた。

（ま、まさか…あそこか！）

驚きの声に、麗菜は頭の中で頷いた。

（おそらく…そうですよね）

そこは、伝説の場所だった。

「行こうよ」

少し躊躇っている麗菜の腕を強引に掴むと、和恵は山に向けて歩き出した。

「！？」

結構な力に、麗菜はびっくりしてしまった。

（ど、どうしますか？）

頭の中の声に訊いた。

（仕方がない。行くぞ）

（わかりました）

麗菜は、覚悟を決めた。

営業中よりも明るい光が、店内を照らしていた。

店の扉を開けると最初に飛び込んでくるのは、長いカウンター席。

その左側の奥には、ステージがあり、テーブル席が並んでいた。

「ある意味…本物だったわ」

カウンターに座り、ワイルドターキーの入ったグラスを転がしながら、天城志乃はこたえた。

「ある意味って？」

カウンター内で、煙草をくわえながら聞き返した女の名は、有原里美。普段は、この店を仕切っていた。

「里美先生は、歌手って何だと思いますか？」

グラスをカウンターに置くと、中の氷を見つめながら、志乃は質問した。

「まあ～自己主張も踏まえて…メッセージを伝える為じゃないの？」

里美は煙草を灰皿に置くと、志乃のふさぎがちな瞳を見つめた。

「そうなんですけども…慈善事業のチャリティーソングでもない限り…まったく個性のない歌ってないと思うんですよ…」

ここまで口にしてから、志乃は自分の考えを否定した。

「いや、違う。あの歌い方はまるで…最後の遺言のような歌だった。己の明日はない。だからこそ…明日ある者に対しての思いやり…それとも、何もできない自分への悔しさ」

志乃は考え込んでしまった。

かつて、喉を壊し…二度と歌えないと宣告されたことがある志乃だからこそ、感じ得たものかもしれなかった。

「つまり…その遺言は」

里美は、志乃の言葉を続けた。

「あたし達…すべてのリスナーに向けられていると」

「そうなんですが…」

「…」

まだしっくりと来ない感じの志乃を見つめながら、里美は煙草を手に取ると、軽く肺の中に煙を吸い込んだ。

そして、煙を吐き出すと、煙草の先からも立ち上る煙に目をやり、

「いろんな歌手はいるわ。そのレダって子にも、いろんな事情が」

「並の歌手なら！」

志乃は突然、カウンターを叩いた。拳をぎゅっと握り締め、

「そんな風に思えるでしょう。あのレダの歌声には、魂をかけた真実があった！だけど、その真実の正体が」

「世界が終わるね」

里美は、煙草を灰皿にねじ込んだ。

「！」

驚いた志乃が思わず、顔を上げた。

「あら？意外かしら。あたしがわかったら」

里美は、首を傾げて見せた。

歌手ではなかったとはいえ、里美はドラマーとして活躍した時期があり、幼い頃の志乃を指導していたこともあったのだ。

「いえ…別に」

気まずそうにグラスを手に取ると、視線を逸らしながら、志乃は中身を飲んだ。

「明日香だったら、納得したんじゃないの？」

里美は、志乃に顔を近付けた。

「そ、そんなことは！」

志乃は椅子を動かして、身を反らした。

「まあ～いいわ」

里美は笑いながら、新しい煙草を取り出し、口にくわえると、真剣な顔をなった。

「でも…世界が崩壊するなんて…戦争でも起こるってこと？それはあり得ない。小競り合いは今もどこかであるけど…全面戦争なんて」

「だけど…否定できない強さが、彼女の歌にはある。それは、真剣に歌と向き合った人間ならば尚更…」

「志乃ちゃん？」

里美は、軽く震えている志乃の背中に気付いた。

「おばさん！只今！」

その時、唐突に扉が開いた。

夕方の眩しい日差しとともに、店内に入ってきたのは、和恵だった。

「お帰りなさい」

煙草を灰皿に置くと、里美は優しい笑顔で和恵を出迎えた。

「あのねえ！今日は友達を連れて来たんだ」

和恵は後ろに顔をやったが、そばに麗菜はいなかった。

「ここが…タブルケイ」

麗菜は店の前で立ち止まり、木造の店舗を見上げていた。

３人の歌姫を育てた場所。

学校の近くにありながら、なかなか行く勇気がなかった場所だった。

（そうか…。お前は初めてだったな）

頭の中の声も、どこか懐かしそうだ。

（部長はあるんですか！）

驚く麗菜に、声はフッと笑った。

（一度…如月とな）

「赤星さん！何やってるの！早く早く！」

店の中から、和恵が手招きした。

「ご、ごめんなさい」

麗菜は慌てて、走り出した。

「お店がとても、素敵だったから」

夕陽に照らされた木造の店と、すぐ目の前の山の迫力が、麗菜の心を久々に震わせていた。

第１４話　出会いに偶然はない

時とは何か。

時などはあるのだろうか。

我々あらゆる生き物…いや、形あるもの達が、存在する為にいるエネルギーが尽きるまでを時間というならば…死というものは、単なる電池が切れた状態をいうのだろうか。

ただ…生まれる時間が違うものがたくさんいるから、一斉にすべての存在がなくなる訳がないから…我々は時を感じるのだろうか。

一斉に電池が切れたならば…そこに残るのは、静けさしかない。

すべての生き物が、生きる為に他者を喰らう。

それは本来何もない世界に、生命達がが生き続ける為につくった…回る歯車。

食物連鎖という歯車。

なぜ生き物が老いるのか…遺伝子にそのプログラムが埋め込まれていることは、わかっている。

しかし、そのプログラムがどんなタイミングで発動するのかはわかっていない。

すべての生き物に、死はプログラムされている。

その逆である…生まれる。

なぜ生まれるのか…。なぜ子を作るのか。

すべては、歯車。

時という止まることのない中で、生きていく為のシステム。

そう…我々はシステムなのだ。

しかし、悲しいことに…我々人間には、自我があった。

自我を持つ歯車。

その自我は…死んでもなお、残るものなのか。

心は…記憶はどこにある。

（ここに来たか…）

懐かしそうに呟く声に、

（はい）

麗菜は頷くと、少し慌てるように扉へと向かった。

「ようこそ！ＫＫ（ダブルケイ）へ」

和恵はドアボーイのように頭を下げて、麗菜が店内に入るのを待った。

「…」

ちらっと後ろを見た志乃が、麗菜を確認した。

「いらっしゃい」

里美は、笑顔で迎えた。

「お邪魔します」

ぺこっと頭を下げた麗菜を、和恵が後ろから背中を押して、カウンターに促す。

「座って」

笑顔でそう言った後、和恵はカウンターの中にいる里美に、顔を向けた。

「おばさん！」

「はいはい」

里美は頷くと、煙草を灰皿にねじ込み、恐る恐るカウンターに座った麗菜に訊いた。

「コーヒーでいいかしら？」

「え―！おはざん、紅茶は！」

麗菜の隣に座った和恵が、カウンター内を覗き込んだ。

「紅茶は切れてます。ソフトドリンクは後で、酒屋が届けてくれるけど…」

里美はコーヒーの用意をしながら、

「コーヒーは、ここの伝統よ。恵子ママの時からね。明日香だって、ずっとこのコーヒーを飲んでいたんだから」

麗菜にウィンクした。

「！？」

緊張している麗菜は、何も言えなかった。

そんな麗菜に微笑むと、里美はコーヒーの入ったカップを2人の前に置いた。

「どうぞ」

「ありがとうございます。頂きます」

麗菜は頭を下げてから、カップを手にした。

「にが！」

隣で顔をしかめた和恵に気付き、里美はミルクと砂糖を出した。

「…」

恐る恐るカップに口を近付けて、コーヒーを飲む麗菜。

（飲める！味がわかる）

ぱっと笑顔になった麗菜を見て、里美はまた微笑んだ。

和恵の隣に座っている志乃は、何も言わずにただ2人を見守っていた。

「コーヒー飲んだら、上のあたしの部屋にいかない？」

満足気にカップを置いた麗菜とは違い、顔をしかめながらカップを置いた和恵がきいた。

「え！あ、あのお…」

予想外のさらなる誘いに少し戸惑ったが、麗菜はやんわりと断った。

「ごめんなさい…。用があるの」

「残念」

和恵は、肩を落とした。

「ゆっくりしていけば、いいのに」

ちらっと和恵を見た後、里美は麗菜に顔を向けた。

「いいのよ！おばさん。あたしが大路学園の近くで偶然出会って、無理矢理連れてきたんだから」

和恵は、少し困った顔をしてしまった麗菜を見つめながら、そう言った後、

「でも、もう一杯飲む？」

にやりと笑った。

あまりの感動で、麗菜は一気にコーヒーを飲み干してしまったのだ。

「あっ」

カップ内に気付いた麗菜は、これではあまりにも帰るのが早すぎると思い、おかわりをすることにした。

「はい」

里美は麗菜のカップに手を伸ばすと、再びコーヒーを注いだ。

「そ、そうだ！」

突然、和恵は手をポンと叩くと、麗菜の方に体を向け、

「赤星さんって、ここに興味があるってことは～音楽が好きなんだ

！ねぇ！そうでしょ！」

顔を近付けた。

「き、興味がない訳じゃないけど」

たじろぎながらも、麗菜は答えた。

「あたし！ドラムやってるんだ！赤星さんは、何かしてるの？」

興味津々で訊いて来る和恵。

「お、音楽はやっていないけど…演劇は少し…」

顔を逸らしながら、最後はぼそっと呟くように言った麗菜に、和恵は目を丸くして、

「え、演劇！！」

予想外に驚いて見せた。

「え、演劇かあ～」

体をカウンターの方に戻すと、頬杖をつき、

「里緒菜お姉ちゃんと一緒か」

何やら考え込んだ。

（里緒菜お姉ちゃん！？そうか…如月先輩は、速水先輩の親友だっ

たわ）

麗菜は、心の中で確認した。

「ああ～音楽に興味があれば…一緒にバンドを組めると思ったのにな」

残念そうに、首を落とす和恵を見て、隣にいた志乃が初めて口を挟んだ。

「そんなに…友達を誘うほど、音楽に興味あるの？昨日だって、退屈そうだったじゃない」

「昨日は！」

思わず強い口調で言いながら、志乃の方を向いたが…顔を見て、一気にテンションを下げ、

「あたしは、音楽をやる方が好きなの…。他人の盛り上がってるコンサートなんて、つまんない」

顔を志乃に向けたまま体を曲げて、カウンターに頬をつけた。

そんな和恵に、顔を見合わせる志乃と里美。

「大体！お姉ちゃんが、ライブ中に変なことを言うから…。この歌は、世界の破滅を歌っているだとか！いろんなことを言うしさ！何か…ずうっとボーカルを睨んでいたし…」

「え！」

和恵の言葉の途中で、麗菜は手にしていたカップをカウンターに置いた。

「世界の崩壊を歌っている?」

「そう~そんなことを言うんだよ。歌詞にはまったくないのに」

溜め息をついた和恵とは違い、麗菜はカウンターから立ち上がった。

「すいませんが…その歌手のこと教えて頂けませんか?」

真剣な表情で訊いてくる麗菜に、少し気圧された志乃はううんと頷いた。

「お願いします」

頭を下げた麗菜を、カウンター内から里美はじっと見つめていた。

「わ、わかったわ」

志乃は話し出した。

和恵のクラスメイトといっても、初対面である。

それなのに何故か…断ることのできない強さを、和恵の瞳は持っていた。

「歌手の名は、レダ。彼女のヒット曲…」

志乃は、説明し出すと冷静さを取り出してきた。

（この子は…あの歌に込められたメッセージに気付いているの？）

そのことが意味するのは…。

（この子は！）

志乃が心の中で感動している間に、説明は終わった。

「…」

麗菜は思い詰めた顔をすると、一気に残りのコーヒーを飲み干した。

「ご馳走様でした」

カップをゆっくりと、里美の方に戻した。

「え！もう帰るの？」

慌てて、和恵はカウンターから体を起き上がらせた。

「ごめんなさい。もう時間なの！」

扉へと走ろうとした麗菜を、里美が止めた。

「待って！」

「！」

鋭い声に、麗菜は思わず足を止め、振り返った。

「そのレダって歌手に、興味があるんだったら…行ってみない」

いつのまにか、里美の指と指の間に…コンサートのチケットが　挟まれていた。

「あたしの分なんだけど…やっぱり仕事だから行けないし…。勿体ないから、あなた代わりに行ってくれると助かるわ。興味があるんだったらだけど」

里美の言葉に、麗菜は目を輝かせながら、頷いた。

「はい！」

その力強い返事に、里美も笑顔で頷いた。

「え！赤星さんがいくなら、あたしも一緒に行きたい」

「あんたは、昨日行ったでしょ！それとも何かしら？あたしと行ったらから、つまらなかったと！」

「そ、そんなことはないよ」

和恵と志乃のやり取りを見て、軽く溜め息をつくと、里美は麗菜に向かって、チケットを差し出した。

「一枚しかないから…」

「ありがとうございます」

遠慮なく受け取った麗菜に最後、里美は告げた。

「よかったら、ここに来て感想きかせてね」

「はい！」

麗菜は、里美の目を見ながら頷くと、チケットを手にして、ダブルケイを後にした。

「いい子ですね」

出ていた後、志乃がそう言った。

「当たり前よ。あたしは初めて見た時から、ピンと来たし！」

当然とばかりに胸を張る和恵。

「彼女には、音楽の才能があるかもしれませんね」

志乃は、里美に顔を向けた。

「そうね」

だけど、里美は素直に頷かずに、煙草に手を伸ばすと、

「あるかもしれないけど…それ以上に」

口にくわえ、火を点けた。

「決意を感じたわ。まるで、成し遂げないといけない決意があるように」

煙を吐きながら、里美は…先程の麗菜のような決意の目を見たような気がしていたが…すぐには思い出せなかった。

第１５話　偏食

「結局！わからなかったじゃないの！」

真っ暗になった校舎内を歩く里奈と夏希。

「まあ～そんな簡単にわかる訳がないけどね」

苛立つ里奈に、少し呆れながら溜め息をつく夏希。

見上げれば、月が出ていた。

「あたし…いくね」

正門を出ると、夏希はいつもと違う方向に歩き出した。

どうやら、学習塾に通い出したらしい。

「…やっと、暇になったと思ったのに」

夜の戸張の中へ歩いていく夏希の遠ざかる背中を、しばし見送った後、里奈は駅に向けて歩き出した。

「いくぞ」

里奈と夏希が正門を出てから5分後に、高坂とさやかが姿を見せた。

勝手に1人で前を歩く高坂に、さやかは少しふくれてしまった。

「折角…2人で見に行くのに」

二枚のチケットを手に取ると、深く溜め息をつき、

「そんな気分じゃ…いけないのは、わかるけども」

さらに足を速めた高坂の背中を軽く睨んだ。

「ぐずぐずするなよ」

高坂は足を止めることなく、ちらっと振り返った。

「フン」

さやかはチケットを握り締めると、スピードを上げ、一気に高坂を追い越した。

「あんたこそ、ぐずぐずするんじゃないよ」

振り返ると、自分を睨んださやかの剣幕に、高坂は思わず足を止めた。

「な、何…怒ってるんだ?」

首を傾げた高坂に、理由がわかるはずがなく、ただ足を速めた。

「レダ…」

和恵に見送られながら、ダブルケイを後にした麗菜は呟くように言った。

（恐らく…彼女は）

そして、口を紡ぐと、心の中で念じた。

（ああ…多分な）

頭の中に声が響いた。

「モード・チェンジ」

微かに唇を振るわせて、麗菜は言葉を発した。

「あっ！」

ドアを閉めようとした手を止めて、和恵は動きを止めた。

「大丈夫かな？」

ダブルケイからの帰り道は、少し暗い。

心配になって、店の前の道に飛び出した和恵が見たものは…見知ら

ぬ背中だった。

「足…速！」

もう見えなくなったと判断した和恵は、店の中に戻って行った。

「やつらがいるかもしれない。用心をして、あたしで行こう」

美奈子は暗闇を見つめながら、気を探った。

（電車で行きますか？）

頭に響く麗菜の声に、

「いや」

美奈子は首を横に振ると、

「敢えて、走っていくぞ」

山手の道から眼下に広がる町並みに向けてジャンプした。

（先輩！？）

驚く麗菜の声に、美奈子はこたえた。

「電車とかでやつらに会ったら、厄介だ」

ダブルケイの近くにある地下鉄の駅を飛び越え、美奈子は…暗くなった市街地の屋根を疾走する。

「心配するな！魔力は抑えている」

と言っても、特急電車より速い。

上空を一気に駆け抜ける影に、普通の人間が気づくはずもなかった。

「間に合うのかな」

ダブルケイに入った和恵は、店内にある柱時計に目を向けた。

「開演時間には、間に合わないだろうけど…ライブは見れるわよ」

里美も時計に目をやりながら、開演時間と営業時間を確認した。

カラン…。

その時、店の扉が開いた。

「あら～。少し早かったかしら？」

店内に入ってきたのは、赤いワンピースを着た女性だった。

壊れそう程華奢な体に見えるのに、凛とした出で立ちは、はっとさ

せるくらいの強さを漂わせていた。

「いらっしゃいませ。どうぞ、カウンターの方へ」

里美は、女性に頭を下げた。

それを見た和恵は、店内照明を変える為に、カウンター横の厨房に走った。

少し早いが、開店である。

「失礼するわ」

カウンターに座った女性の前に、里美はコースターをそっと指で差し出した。

「ご注文の方は、如何致しましょうか??」

里美の言葉に、女性は微笑み、

「この世界の飲み物にあまり、詳しくないの」

コースターを見つめた。

「?」

意味がわからなかったが、里美も営業スマイルを崩さない。

「そうね…」

女性はクスッと笑うと、視線を上げ、

「炎も消える程の冷たい飲み物を頂けるかしら。冷たければ…何でもいいわ」

里美に微笑みかけた。

「！」

数秒だけ絶句した後、里美は頭を下げた。

「かしこまりました」

そして、キンキンに冷やしたジンをストレートで、出すことに決めた。

「人間くさいな」

思わず顔をしかめた男の名は、刈谷雄大。

ブルーワールドから、実世界へと時空間を越えた刈谷は、夜の大月学園から、外に出ていた。

目的は、リンネを探すことであるが…予想外の人間臭に、驚いていた。

普通の魔物であれば、興奮し、殺戮を繰り返すところであるが…魔神である刈谷は、その衝動を抑えることができた。

「それ以上に、空気が汚れている。やはり…人間とは」

そこまで考えて、刈谷は思考を止めた。

「人間に、リンネ様が興味をもたれている限りは…致し方無い」

自分に言い聞かせるように呟くと、刈谷はリンネを求めて歩き出した。

その様子を離れた場所から、完全に気配を消して見ていた者がいた。

幾多流である。

「やつが、この世界に!?」

魔神である刈谷とやりあう気はなかった幾多は、ただ様子を伺っていた。

「彼は、化け物かい?少し違った臭いがするけども」

幾多の後ろに、グレイのコートを羽織った男がいた。

「化け物?異世界の魔神だよ」

幾多は振り返ることなく、こたえた。

「ふ〜ん」

男は鼻を鳴らした後、幾多の前に出た。
闇に消えた刈谷の方を見つめながら、
「なかなか興味深いけど～人間でないならば、別にいいや」
肩をすくめると、幾多の方に振り返って微笑んだ。
「ところで、君は～今日、人を殺さないのかい？」
「フン」
幾多は鼻を鳴らすと、男に背を向けて、刈谷とは反対方向に歩き出した。
そんな幾多の背中に、男は声を放った。
「公にはなっていないが、君は殺人者として有名だ。それも大量殺人としてだ」
「残念ながら…別に、殺人が趣味ではない」
足を止めない幾多に、男は声を荒げた。
「それは、困る！僕は腹ぺこなんだよ。もう何日も食べていないんだよ」
そんな男の言葉に、軽く呆れた後、幾多は足を止めた。

「だったら…」

ゆっくりと振り返り、

「僕を殺したらどうだ?」

男を睨んだ。

「それは、駄目だよ!」

男は即答した。

そして、幾多の方へ一歩前に出ると、

「君は、料理人だ。大事な料理人だ!僕への料理を提供してくれるね。料理人は殺さない。だから、そんな目で見ないでよ」

少し混乱した後、何かに気付いたのか…はっとして、自分の手を舐めた。

「僕は、素材になりたくない。あまりおいしくないからね」

舐めながら、自分を見つめる異様な雰囲気の目の色に、幾多は殺意よりも、少し興味を持った。

しかし、そんな興味よりも、呆れる感情の方が強かった。

再び前を向いた幾多に、男は叫んだ。

「人の肉は美味しくないよ。雑食だからね。だけど、最高の食材に

変わる魔法がある！」

男は目を見開き、

「それは、恐怖だ！そして、絶望！その感情を覚え、怯える人間の肉が一番旨い！だからこそ、僕は！やつらに加担している。この世界が滅んだ時！絶望する人々を食べまくるんだ！ああ～まさに食べ放題だよ」

「偏食者が」

幾多は、顔をしかめた。

「だからといって、僕は～あいつらのように化け物ではないよ。人間だ！」

男の口から、大量の涎が流れていた。

「化け物が人間を食うの普通かもしれないけど、人間が人間を食うのは、最高でしょ」

「知るか」

幾多はもう相手するのを、やめた。

遠ざかっていく幾多の背中を見送りながら、男は口を尖らせた。

「仕方がないな。別の料理人を探すよ」

男はため息をつくと、町並みを見回し、

「人は誰でも、料理人になれるよ。最高の料理人にはなれないけど…殺したい相手は必ずいる」

にやりと笑った。

「さあ～誰かを殺せ！己の為！そして…」

男の目が、妖しく光った。

「僕の為に」

第16話　姫

「さっさとはきなさい！お前達の目的をな！」

椅子に縛られた輝に、鞭を片手に詰め寄る香坂真琴。

その異様な雰囲気に、輝は体にくねりながら、何とか逃れようとする。

「しゅ…主旨が違うような」

いつのまにか、真琴の手には、蝋燭も握られていた。

（き、期待と…不安）

そんな真琴の雰囲気に、妙な世界の入り口を垣間見た輝ははっとして、首を横に振った。

（ち、違う！今は、そんな趣味に目覚める場合じゃない）

輝は目を瞑り歯を食い縛った後に、言葉を吐き出した。

「た、助けて…」

か細い声だった。

そんな輝の声は、音を立てて開いた扉の音に、かき消された。

「お姉ちゃん！」

薄暗い部室に、廊下の照明が飛び込んできた。

「また！生徒を拐ったのね！」

怒りながら、部室に入ってきたのは、小柄で細身の女の子だった。

「これは、我が妹よ」

真琴は鞭と蝋燭を、部室の端に投げ捨てると、入ってきた女の子に両手を広げて見せた。

「お姉ちゃん！」

女の子は輝を指差し、

「これを何よ」

真琴をギロッと睨んだ。

（こ、これは何！？）

物のような呼び方に、軽いショックを覚えた輝。

「フッ」

真琴は不敵に笑うと、言い放った。

「人間だ！」

「そういう意味じゃない！」

ピシッと言い放つと、女の子は真琴を睨み付け、

「いつもいつも、生徒を拉致して！この部室が何と言われているか知ってるの！学園の北〇鮮よ！」

さらに睨み付けた。

「北〇鮮上等よ。だったら、我が妹よ！お前は、世界の警察を気取るアメリカか！それとも、口先だけの日本か！」

言い返す姉に、妹はキレた。

「誰がアメリカよ！口先だけの日本よ！あたしは！」

女の子は、腕に巻いた腕章を見せ、

「この学園の生徒会員よ」

ビシッと言い切った。

その腕章を見て、真琴を鼻で笑った。

「雑魚ね」

その言葉に、女の子は目を見開いた後、顔を真っ赤にしながら口を開いた。

「誰が雑魚よ！」

「フン！生徒会の中でも、地位が中途半端な会計が、何を言うか。会計に、この学園の治安が守れるか！」

真琴は突然腕を組むと、勝ち誇ったように言葉を続けた。

「この学園の平和を守るのは、あたしだ！文句があるなら、お前の上を呼べ！」

「う、上って…」

いきなり、女の子のテンションが下がった。

「フフフ…。そうだったな。噂の生徒会長は行方不明。そして、副会長も事故で学校を去ったんだったな。実質…生徒会は、お前だけ…ククク…ハハハハ！」

高笑いを始めた真琴を見て、悔しそうに握り締めた拳を震わす女の子。

それを見て、さらに笑い続ける真琴。

（…）

どこかほったらかしにされた感がある輝はただ…女の子を見つめていた。

（レ、レベル高けえ～）

しかし、ただ…ぼおっとしていた訳ではない。

（姉は、スレンダーボディに破壊力を見せつける2つの爆弾をそ、備えているが…）

輝は、真琴の胸元をちらっと見た後、女の子に目を戻し、

（これが同じ遺伝子を持つと思えないほどの違い！しかし！しかし！女の差は、胸じゃないないことを教えてくれる奇跡のバランス感覚！さらに、あどけないベビーフェイスを真っ赤にするほどの気の強さ！）

輝の心の中で、涙を流してくれた。

（神よ！あなたに感謝します！いろんな女性を用意してくれたことに！）

そして、心の中で敬礼した。

（犬上輝！確信しました！僕は、この世界で生きていけます！）

ぱっと笑顔になる輝。

（可愛い女の子がいれば、犬上輝は生きていけます！）

「…」

「…」

にやける輝を、いつまにか言い争いをやめた姉妹が見ていた。

「と、とにかく！」

咳払いをした後、女の子は視線を真琴に戻し、

「この生徒を解放して下さい！」

少し輝から体を遠ざけながら、強い口調で言った。

「解放？」

真琴はわざと眉を寄せて見せてから、フッと笑い、

「誰を解放しろと？」

意味深げに女の子に訊いた。

「？」

妙に自信ありげな真琴を、訝しげに女の子は見た。

「この男は、情報倶楽部の部員だ」

真琴はにやりと笑うと、輝に目をやった。

「え！」

驚いた女の子は思わず、輝に顔を向けた。

「嘘だと思うなら、訊いてみればいい」

自信たっぷりな真琴。

「そんなことはあり得ないわ！こんな独裁者の下に、部員なんて」

女の子は、にやけ続ける輝に訊いた。

「あ、あなたは、情報倶楽部の部員なの？」

「はい」

まだ半分夢見心地の輝は、頷いた。

勿論、輝が所属しているのは、別の情報倶楽部である。

「うっ！」

輝の答えに、後ずさる女の子。

「わかったか？あたしは、こいつを拉致した訳ではない。こいつは、自らの意志でここにいるのさ」

「そ、そんな馬鹿な！」

予想外の状況にショックを受けたが、女の子は生徒会の意地を見せる為に、反論しょうとした。

「で、でも！部員を縛るなんて…」

しかし、反論はできなかった。

女の子の目に、飛び込んできたものが…何も言えなくさせたのだ。

部室の角に転がる…蝋燭と鞭。

（そ、そっち！）

否定しょうにも、椅子に縛られた輝はにやけている。

「き、き、今日のところは…し、失礼するわ」

女の子は、蝋燭も鞭も輝も視界に入らないように目を閉じると、踵を返し、扉に向かって走った。

「うぶな子」

真琴は、微笑んだ。

「アメリカを気取るなら、不純異性交遊とか難癖をつけて、しょっぴけるのに」

「は！」

ここで、我に返る輝。

助かるチャンスを逃したことには気付かず、女の子がいなくなったことに驚いていた。

「い、今の素敵な少女は！」

「うん？」

真琴はちらりと輝を見た後、女の子が閉め忘れた扉に目をやり、

「我が愛しの妹…香坂姫百合だ。あたしの姫だ」

口許を緩めた。

「姫…百合…さん」

目を輝かせる輝に気付き、真琴は釘を刺した。

「手を出したら、殺す」

「…」

その口調に、輝は自分の置かれている状況を思い出した。

第17話　溜め息を彩る静けさ

演奏が終わった。

無駄な音を一切ない…完成された演奏とシンプルな楽曲。

それらを従えて、圧倒的な存在感を示す…歌姫。

拍手すら、忘れてしまう程の歌声に、観客は演奏の終了すら気付かない。

無音の空間に、観客が溜め息をつくと…次の曲が始まった。

ある意味…拍手ができるということは、余裕があるということであろう。

観客はただ…息をする自由しかない。

コンサートが終わるまで、魔法をかけられたように、観客は歌声に捕われていた。

割れんばかりの拍手は、歌姫が頭を下げるまで発生することはなかった。

まったく別の空間に変わったような会場内で、高坂はずっと腕を組み、歌姫を睨むように見つめていた。

「…帰るぞ」

アンコールを求める観客の叫びに、高坂の声は、隣にいるさやかにも聞こえなかった。

アンコールとは叫んでいないが、さやかも手拍子をしていた。

「…」

そんなさやかを見て、高坂は観客とは違う溜め息をつくと、席を立ち…ホール内から出ようとした。

異様な熱狂の中、アンコールを待たずに席を立ったのは、高坂を入れて2人だった。

「どうなさいましたか?」

ホール内から出てきた女に気付き、関係者が慌てて近付いて来た。

「少し…息苦しくって」

女は関係者に微笑むと、ゆっくりと歩き出した。

「確かに…凄い歌手だわ」

近づいてくる女の雰囲気に、関係者は息を飲んだ。

「だけど…」

女の目が一瞬だけ、鋭くなった。

立ち止まった関係者の横を、女はすり抜け、

「自由がないわ」

そのまま、外への扉に向かう。

「歌を楽しめる自由が…」

女は、外に出た。

もう…真っ暗になっていた。

外を見上げても、コンサート会場の光で、星は見えない。

（本当に凄い歌手だったわ。だからこそ…違和感があった）

女は前を向くと、町並みに目を細めた。

（その違和感が…彼女にとっても、不本意だったら）

そのまま、一度目を瞑った。

（だとしたら…）

女は、頭に浮かんだ言葉を飲み込んだ。

それからゆっくりと目を開けると、町を歩く人々を見つめた。

（音楽は…人を幸せにする。だけど…不幸にすることはない。だって…言葉通り、音を楽しむものなんだもの。楽しめないのは…自分のせいよ。音楽は関係ないわ）

その言葉は、女が口にしたことではなかった。

かつて…女が少女だった時に、ある女性が語った言葉だった。

（ママ…）

女の脳裏に、煙草を指に挟みながら、微笑む女性の姿が浮かんだ。

（確かに…ママの言うように、あたしは音楽で幸せになったわ。だけど…）

女の脳裏に違う女性が映った。

日本人ではない。

妹の遺骨を抱きながら、女性は自らの頭を、拳銃で撃ち抜いた。

（ティア）

女は、唇を噛み締めた。

（彼女は…）

女が思考を続けようとしたが、ふいに鳴った携帯電話が現実に戻した。

「はい」

画面を見ることなく電話を出た女は、聞こえてきた声に微笑んだ。

「元気にしてるの？香里奈ちゃん」

電話の相手は、速水香里奈だった。

「今は、日本よ。あなたこそ…」

と言いかけて、女は言葉を止めた。

「そう…あなたも日本なのね」

女は歩き出した。

突然、顔つきが変わった。

「…あなたも聞こえたのね。彼女のメッセージを」

女は目を瞑り、しばし電話の声に耳を傾けた後、徐に口を開いた。

「そのメッセージが何であれ…人々が不幸になるというのであれば…あたし達歌手は、それを伝えるだけではなく、不幸を止めなければいけない」

女は足を止めると、再び夜空を見た。

「昔…和美さんが言っていたわ。神が与えた試練である人々をわける言葉の違い。その壁を壊すことができるのが…歌手と」

女はフッと笑うと、

「自惚れではないの。ちっぽちな1人から発せられる歌声が、人々に届くなら…あたし達は伝えた責任を負うのよ。それは…レダという歌手も同じ。例外はいないわ」

女は、空を見上げるのを止めた。

「ママ…」

携帯から香里奈の声が、漏れてきた。

ママと呼ばれる女の名は、速水明日香。

彼女もまた、歌手であった。

「あたしは今から、ダブルケイに戻るわ。あなたはどうするの?」

明日香は母親の顔になると、微笑みながら歩き始めた。

「メッセージか…」

高坂はホール内から出ると、出てきた二つ折りの扉にもたれた。

「わからんかった」

音楽に疎い高坂には、レダからのメッセージを受けとることはできなかった。

「しかし…」

顎に手をあて考え込もうとした瞬間、突然扉が開き…高坂は前のめりに倒れそうになった。

「何ライブ中に、抜け出しているのよ」

会場から出てきたのは、さやかだった。

扉の隙間から、アンコールを歌うレダの歌声が聴こえてきた。

高坂は何とかバランスを取ると、閉まっていく扉の隙間からホール内を見つめた。

「最後まで聴くのが礼儀よ」

少し怒っているさやかを無視するかのように、高坂は扉が閉まると、外に向けて歩き出した。

「ごめんだな。あれ以上いたら、息が詰まる」

顔をしかめた高坂の背中を、さやかは睨んだ。

「あんたは、音楽がわからないのよ」

「わからなくても、会場内の空気はわかる。何だ?あの空気は!異様だ!なのに、周りの人間はそれに気付いていない」

高坂は軽く舌打ちし、

「もし…世界の崩壊を伝えているとしても、伝わらない！」

会場の壁を叩いた。

「崩壊を止めることはできない！それだ！」

高坂は振り返り、出てきた扉を睨み付けた。

「あの歌手は、それがわかっている！ほとんどの人に伝わらないことをな！わかるやつだけでいいのか！ふざけるな！」

「高坂…」

「だったら、もっと幸せになれる空間を作れ！せめてな」

そこまで言ってから、高坂ははっとした。

「ま、まさか！」

会場内を見回し、

「敵がいるのか？」

拳を握り締めた。

「彼女の緊張感が、歌によるものだけでないならば…」

しかし、周囲を見回しても、２人には敵の存在を確認することはできなかった。

第18話　闇

高坂達が飛び出したホール内で、壁にもたれてステージ上のレダを睨むように、中山美奈子は立っていた。

一時期は劇団を率いていたことがある美奈子は、レダの歌を理解することができていた。

しかし、そのメッセージが伝えたいことを知っていた美奈子にとっては、それを歌うレダの存在こそが注意すべき相手であった。

勿論、周囲にも気を配っていた。

（人間以外の気は感じない。恐らく…レダも人間。まだそれくらいで、確証はできないが…）

そこまで考えてから、美奈子は息を吐いた。

「フゥ～」

会場を支配する静けさと、妙にリンクしてしまった自分の緊張感を解く為だった。

（それにしても…ここまでの歌唱力とはな）

美奈子は改めて、レダの歌声に感心していた。

（部長）

そんな美奈子の頭に、麗菜の声が響いた。

「うん？」

目だけを動かした美奈子は、会場から出ていく明日香の姿をとらえた。

（あの人は！）

思わず目を見開いた。

美奈子の記憶が一瞬で、過去に飛んだ。

まだ人間だった頃、美奈子の劇団は、里緒菜のコネで…高校生の頃の明日香を主人公にした劇をするはずだったのだ。

しかし、劇団員だった松野彩香が、魔獣因子に目覚めたことにより、美奈子の日常は激変した。

そして、魔物の腕を移植された神野真也との出会い。

さらに、劇団に紛れ込んでいた…炎の魔神リンネとの遭遇。次々に起きる日常の変化が、美奈子の体に眠っていた女神の力を目覚めさせる結果になった。

そして、彼女は…人間ではなくなった。

もし…それらの出来事がなかったならば…美奈子は今でも、劇団を率いて幸せに過ごしていたかもしれなかった。

（幸せ？）

美奈子は、そんな考えを鼻で笑った。

（何も知らないことが、幸せだというならな）

美奈子は、明日香が扉の向こうに消えても…しばし、見つめていた。

（知ってしまったからには）

美奈子は拳をぎゅっと握り締め、

（戦うだけだ！この世界を守る為にな）

改めて、決意を固めた。

「敵は、何者なんだろうね」

廊下を並んで、教室側を歩く理香子に、中島が訊いた。

「わからないけど…」

理香子は首を捻りながらも、女神としての本能が確信したことだけを口にした。

「匂いが…この世界のものなのよ…ね。つまり、さっきの男は紛れもなく…この世界で生まれた人間…。だけど…」

理香子自身が一瞬、間違えた…闇の波動を思い出すと、そう決めつけていいのかわからなかった。

（魔獣因子と呼ばれるものは…月の女神であるあたしが生まれ変わる以前に、この世界を創った時にできたバグみたいなもの。あたしが目指したのは…人間の為の世界）

理香子はちらりと、廊下の窓から外を見た。

（魔物がいない世界なら…人は幸せになると思っていた…）

窓の向こうに見える人工物を見つめながら、理香子は口を閉ざした。

窓と理香子の間にいる中島は、自分を見ていない理香子の複雑な瞳の色に、下を向いた。

そのまま…無言で廊下を歩いていく2人の後ろ姿を見送る者がいた。

猫沢巫女である。

「フン！」

軽く鼻を鳴らすと、猫沢は理香子達に背を向けて歩き出した。

しかし、すぐに足を止めた。

柱の影にもたれるように、真田がいたからである。

「ご苦労」

眼鏡を指先で上げながら、真田はフッと笑った。

「…」

猫沢は無言で、頭を下げた。

「もうすぐお嬢様のお帰りの時間だ。護衛を頼むよ。純一郎だけでは、心許ないからな」

それだけ言うと、影の中に消えようとする真田に向かって、猫沢は口を開いた。

「ここは、月の故郷。知られ過ぎています。そんな地になぜ？」

「出過ぎた質問だが…」

真田は眼鏡を外すと、猫沢の横顔を見つめ、

「君ならばこたえよう」

口許を緩めた。

「！？」

猫沢は無意識に、距離を取り、構えた。

恐ろしい程の魔力を感じたからだ。

「フッ」

真田は、眼鏡をかけ直した。

そして、廊下の窓から外を見つめながら、話し始めた。

「闇が生まれたのは…月があるからだ」

「！」

その言葉に、猫沢は目を見開いた。

「厳密に言うと、闇はあった。しかし、昼と夜。闇と光のように、明確に別れていた。それなのに…月ができた為に、闇は光を知り、嫉妬した」

真田は天井を見上げ、その上にある月を睨んだ。

「闇の女神デスペラードは、元から闇の女神と呼ばれていた訳ではない。彼女は、月の女神イオナがいた為に、闇となったのだよ」

そう言うと、真田は猫沢に視線を戻し、

「嫉妬。欲望。羨望。絶望。それは、月の許にある。ならば、月の光こそが、やつらの餌になる。そして…」

にやりと笑い、

「やつらは、太陽に気付かない！次元が違うからな」

そのまま、影の中に消えた。

最後に、一言だけ残して。

「故に、君は職務だけ全うすればよいのだよ」

「！」

真田が消えると同時に、猫沢の周囲に濃い闇が立っていた。

（先程の魔力を感知したのか！）

猫沢は、傷だらけの乙女ケースを取りだした。

「装着」

乙女ケースが開くと、七色の光が漏れだした。

「人は…闇」

校門の影の中から出てきた真田は、眼鏡を人差し指で上げると、迎えに来ていたリムジンの中に入った。

「なのに…光を生める存在でもある。しかし、光を放つのは、1人でいい。たった1人で」

真田は、リムジン内のソファーにもたれると、眼鏡を外した。
リムジン内は、結界を張っており、魔力が漏れることはない。

「真田家の悲願。お仕えするお家を、天下一にすること。今回は、しくじる訳にはいかない」

真田の眼が、赤く輝いていた。

「月の女神も月影も…。砂の使者も…。我らの為に働くがいい」

真田は、運転席でハンドルを握っている男に話しかけた。

「と思わぬか？才蔵」

「御意」

才蔵といわれた男は、頭を下げた。

「我が策に抜かりはない。近い内に、この世界の国々は一つになる。太陽に照らされてな。そう…人間は、見上げることなく、分相応に前だけ向けばいいのだよ。人の幸せは、真上にはない。前だけだよ」

真田は再び、眼鏡をかけ直した。

お嬢様となった綾瀬が、近付いてきたからだ。

第19話　闇に咲く花

「終わりだ」

跪く男の後頭部に、冷たい銃口が押し付けられた。

「そうかな…」

男はそんな状況でありながらも、にやりと笑い、

「終わるはずがない…。お前の腕に、王パーツがある限りな」

着ている背広の内ポケットからカードを取り出すと、素早くパスワードを打ち込んだ。

「!?」

すると、男の姿が消えた。

「知ってたか！カードシステムは復活したのだよ」

銃を突き付けていた相手の背後に、テレポートした男は再びカードにパスワードを打ち込んだ。

「死ね！」

炎が放たれ、後ろから相手を丸焼きにしょうとした。

その時、かん高い金属音が周囲を振るわした。

「な！」

男が放った炎はかき消され…男の体も一瞬で塵と化した。

「…」

銃を突きだしていた男の右腕が、人の肌ではなく、メタリックな金属ような材質に変わっていた。

「やれやれ」

少し離れた曲がり角から、グレーのスーツを着た男が肩をすくめながら、姿を見せた。

「やる気があるのか？塵にしたらは、やつらの情報をはかせることができないだろうが」

かん高い金属音が聞こえなくなったのを確認すると、グレーのスーツを着た男は、塵と化した男のそばまで歩き出した。

道の真ん中に少しだけ降り積もった塵の山は、路地裏を吹き抜ける風にすぐにかき消された。

「まあ…いいか。すぐに次の刺客が来る」

塵の跡に立つと、グレーの背広を着た男は、煙草をくわえ…火を点けた。

煙草を吹かす男に、メタリックな右腕をした男は苦笑した。

「呑気でいいな。公務員は」

「そうでもないさ」

男はフッと笑うと、空を見上げ、

「何も知らされていないだけさ」

自嘲気味に笑った。

「何か起こっているのか？」

メタリックだった腕の表面が変わり、人の皮膚のようになった。

「ジェース」

グレーの背広の男は、煙草を吸うのを止めると、じっとジェースと呼んだ男の目を見つめた後、おもむろに口を開いた。

「知らんな…」

「ケッ！」

男の言葉に、ジェースは頭をかき、

「これだから、公僕は！」

その場から歩き去ろうとした。

「…お前の失ったオウパーツの件は、進展がない。だから、こいつらを誘き寄せている」

男は、足元に煙草を捨てると、体重をかけて踏み潰した。

「しかしな。それ以上の混乱が起きているらしい」

「混乱？」

ジェースは、足を止めた。

「ああ…」

男はもう一度、空を見上げて目を細めた。

「？」

ジェースも、空を見上げた。

満天の星空が、眩しかった。

「空が…割れるらしい」

目を細めたジェースの耳に、男の言葉が飛び込んで来た。

「空が、割れる？」

ジェースは思わず、視線を男に向けた。

「ああ」

男は頷き、

「恐らくは…空間にヒビが入っているのだろうな」

腰を屈めると、吸殻を拾った。

「どういうことだ？」

眉を寄せたジェースを見ずに、男は虚空を見つめながら、話を続けた。

「これは、俺の推測だが…異世界との壁が開いているのかもしれない」

「異世界？」

目を見開いたジェースに、男は苦笑すると、逆に背を向けて歩き出した。

「詳しいことは、わかり次第、報告するよ」

後ろ手を軽く上げると、男はゆっくりと歩き去った。

「チッ」

その後ろ姿をしばし見送った後、ジェースは舌打ちした。

そして、男とは反対方向へ歩き出した。

その様子を、途中で振り返りながら見送った男は、足を止めた。

「オウパーツを奪ったのは、やつらと思っていたが…違う可能性があるな」

グレーの背広の男の名は、田所純一。

もと防衛軍の戦士であったが…今は、刑事をしていた。

田所は前を向くと、再び歩き出した。

（だったら…誰が？）

ジェースの仲間であった…左腕のオウパーツを移植された女…玲奈。

彼女は、戦いの中でジェースを庇い…死亡した。

彼女の遺体は、ジェースの手によって、埋葬された。

誰も知らない場所に。

しかし、墓は掘り起こされ…玲奈の遺体とともに、オウパーツも奪われたのだ。

（墓をあばいたのは…やつらと思っていたが…）

田所は、玲奈を奪い去ったのは、防衛軍の中の組織だと勘繰ってい

た。

新生防衛軍のトップであるジャスティン・ゲイは、実力、人望、人気とも申し分なかったが…彼を快く思わないものもいた。

それは、彼がかつて組んでいたパーティー…ホワイトナイツに関わることであった。

伝説のパーティーである彼らは、たった3人で魔界に攻め込み、あと一歩で魔王ライを討ちとるところであった。

しかし、その結果…彼らのリーダーであったティアナ・アートウッドは、魔王と結ばれ…現魔王であるアルテミアを産むことになった。

そのことを持ち出して、ジャスティンを失脚させようと企んだ者がいた。

しかし、計画は失敗した。

トップであるジャスティンには、地位に対する執着心がなかったが、彼を守ろうとする者達の団結が強かったからだ。

それに、ティアナのことを差し引いても、彼の功績は大きかった。

（総司令を失脚させることを諦めたやつらが、力をつける為に、再びオウパーツを狙ったと思っていたが…）

田所は前を向いて、歩き出した。

（事態は、そう簡単ではないのかもしれないな）

また煙草に火を点けると、溜め息とともに煙を吐き出した。

「お招き頂き、ありがとうございます」

深々と頭を下げた男と、細長いテーブルを挟んで座っている白髪の男は、ワインを片手に頷いた。

「よく来てくれたね。固い挨拶は抜きだ。さあ～腰をかけて、くつろいでくれたまえ」

「は」

男は腰かけると、すぐにそばにいた執事が、空のワイングラスに中身を注いだ。

それを確認すると、白髪の男はワイングラスに口をつけ、

「もうすぐこの世界と、ある世界が融合する」

ゆっくりとテーブルに置いた。

そして、前に座った男を見つめ、

「そこは、人が支配する世界だ。我々にとっては、憧れの世界だ！しかし！」

いきなり立ち上がった。大きく両手を広げると、

「その世界から来る人間にとっては、地獄へと落ちることになる」

にやりと笑い、再び椅子に座った。

「人の数が増えますね。圧倒的に」

男は、グラスに手を伸ばすことなく、中の琥珀色の液体に目をやった。

「しかし！すぐに減る！魔物餌食になって」

「？」

男は、眉を寄せた。

そんな男の表情の変化に、満足げに頷くと、白髪の男は一気にワインを飲み干した。

「何万人…いや、何億人の命が一気になくなるのだよ。ディーン君」

白髪の男の表情も、変わった。目を細め、ディーンと呼んだ男を見つめた。

「…」

無言で答えながらも、ディーンは白髪の男の言葉で、目的を知った。

会話の空気を変える為に、ディーンはワイングラスに手を伸ばし、一口だけ飲んだ。

その行動に、すべてを理解したと確信した白髪の男は、満足げに何度も頷いた。

それから、次々と料理が運ばれて来たが…ディーンは楽しむことができなかった。

頭の中では、白髪の男の企みに関して考え込んでいたからだ。

「失礼します」

食事が終わった後、席を立ち…そのまま立ち去ろうとするディーンに、白髪の男は口許をふきながら言った。

「ディーン君。どんなときでも、楽しむこと。それが、人生で一番大切なことだ！」

そう言った後、ガハハハと笑う男に、深々と頭を下げると、部屋からディーンは出た。

「兄さん」

廊下に出ると、金髪で軽く天然パーマぽい頭をした…細身の男が待っていた。

「レーン…」

ディーンは、弟の前を通ると、睨みながら歩き出した。

「あの人は、やるつもりだ」

「！」

後ろに続くレーンが、慌ててディーンの横に来た。少女のような美しい顔を歪めて。

「異世界の人間達の命を触媒にして、巨大な魔法陣を発動させるつもりだ」

そこまで言ってから、ディーンは舌打ちした。

「それも、魔物達に向かってではない！防衛軍本部に向けて、攻撃魔法を発動させるつもりだ。何億人の命を糧にした魔法だ！その威力は、女神の一撃をも凌駕するはずだ！」

「！」

「くそじじいが！」

吐き捨てるように言ったディーンが去った部屋では、白髪の男がワイングラス片手に笑っていた。

「人間を支配するのは、この私だ。あの女神の小娘でもなくな」

第２０話　沈黙の闇

「人の欲望…か」

大月学園の西館屋上で佇みながら、サーシャは呟いた。

ブルーワールドではあり得ない…どこまでも、果てしない人工物。

各々に無造作な姿は、各々の人間の欲望を示しているように思えた。

半月ソルジャーによる騒ぎから、数日。

学園は、平穏を取り戻したかのように見えた。

しかし、この星のどこかで、空間が破壊されているはずだった。

（神レベルでないとおいそれとは、異なる世界の壁を壊すことはできない。だからこそ…）

サーシャは、足下を見た。

（この学園から、攻めると思っていたが…）

大月学園は、この世界でもっともブルーワールドと繋がっている場所であった。

（ここは、あいつに任せて…他を当たるか？）

サーシャが考え悩んでいると、後ろに誰かが立っていた。

（！）

一瞬、気配を感じることができなかったサーシャは、振り返り様に床を蹴り、手刀を繰り出した。

その攻撃を片手で、軽く流したのは、理香子だった。

「月の女神！？」

目を開いたサーシャはすぐに、後ろに飛ぶと、構えを解いた。

「その体…。人の肉体ではないわね。だけど、物凄い魔力を感じるわ。あたしよりも、遥かに高い」

理香子は目を細め、

「天空の女神？いえ…彼女の魔力とも違う」

サーシャの体を凝視した。

「月の女神」

サーシャは話題を変える為か…一歩前に出て、理香子の目を見据え、

「この前、あなたの前に現れた男のことを知りたい。教えてくれないか？やつらの正体を」

「知らないわ」

しかし、理香子は即答した。

「!?」

驚くサーシャの表情に、理香子は悲しげに笑うと、視線を外の景色に移し、話し出した。

「あなたが思う程…あたしには力がないの。この世界を創る時に、ほとんどの力を失い…転生を繰り返す内に、女神と呼べる程の力を失った。でも」

理香子は微笑み、

「それは、あたしが望んだこと。あの人と同じ…人間になりたかったから」

懐かしそうに町並みを見つめた。

「女神…」

サーシャは、そんな理香子の気持ちを女としては理解した。

しかし…。

「わたしには、理解できません」

サーシャは軽く、理香子の横顔を睨んだ。

「え」

予想外の言葉に、驚く理香子。

サーシャは軽く深呼吸すると、自らの思いを口にした。

「我々ブルーワールドの戦士は、レベル百…つまり、神レベルに近付く為に、日夜血が滲む程の努力をしていました。だけど…そのレベルまで到達した者は、皆無に等しい！神の力があれば、どれ程の人間を救えることか」

「そうね…」

サーシャの熱い言葉に、理香子は睫毛を伏せた。

そして、数秒黙った後に、言葉を続けた。

「ブルーワールドにいる人間ならば、そう願うわね。だけど、あたしは…そんなことを願わなくてもいいような…この世界を創った。だけど…」

理香子は、屋上を囲む金網に近づき、

「この世界に産まれた人間達が、今…崩壊の危機にさらされている。それを救う力が…今のあたしにあるかどうか」

金網の隙間に指を入れて、握り締めた。

「女神…」

「今のあたしは、無力。愛する人を1人…守る力しかない。そして、親友と肩を並べて戦えるくらいしか…」

女神であるはずの理香子の苦悩を垣間見て、サーシャは黙り込んだ。

（…別に、月の女神の力をあてにしていた訳ではない）

サーシャは、理香子から視線を入口の方に向けた。

開いた扉の向こうに、心配そうな中島が立っていた。

（愛する人か…）

サーシャは無意識に、左手の薬指を触った。

今はなくした…指輪がはめてあったところ。

「…」

サーシャは、理香子の背中に頭を下げると、扉の方へ歩き出した。

無言で、中島の横を通り過ぎると、階段を降りていった。

「相原…」

中島は、理香子の背中を見つめながら、決してそばに近付こうとはしなかった。

自分という存在が、彼女を苦しめている部分があることもわかっていた。

しかし、それでも離れることはできなかった。

理香子にとっても。

何故ならば…2人は愛し合っているからだ。

「うん？何か薄暗いわね」

屋上で理香子が苦悩している頃、同じ校舎の真下を歩いていた結城里奈は、足を止めた。

まだ昼間だというのに、夜になるかのように…ゆっくりと日が落ちていく。

そして、闇に変わった。

さっきまでの喧騒が嘘であるかのように、静かな闇が世界を包んでいた。

ちらっと窓の外を見たが、闇しか見えない。

いや…里奈の目には、自分の姿さえも見ることができない。

光なき世界では、色も景色もない。

（畏れるな）

里奈は見えなくても、確かにあるものを確認した。

まずは、足場。

次に…。

「装着！」

乙女ケースを握り締めると、里奈は叫んだ。

闇に、赤い光が一瞬輝くと、里奈は乙女レッドへと変わった。

顔にかかった眼鏡のレンズに、廊下の様子が映った。

（やはり…学校の中）

周囲を確認する為に振り返ろうとした瞬間、蹴りが飛んできた。

「な！」

咄嗟に、後ろにジャンプして、その攻撃を交わしたが…頬が切れた。

「月の戦士よ。その脆弱な力で何をする？ただ目的もなく、存在するならば…消えよ！」

「人間！？」

相手を確認し、再び構えようとするが、それをさせない。

鋭い手刀と蹴りが、交互に乙女レッドに襲いかかる。

「な！」

乙女レッドになり、運動能力が一段と上がっているのに、かわすことしかできない。

「月の防人を倒し、まずは月の結界を解く！」

攻撃パターンがいきなり、変わった。立て続けの蹴りが、槍のように伸び、乙女レッドの鳩尾に突き刺さった。

「うぐう！」

くの字に体を曲げて、後方にふっ飛ぶ乙女レッド。

そのまま、廊下を転がった。

「おかしいな」

蹴りの体勢のままで、固まっているのは…腰まである髪を垂らした細身の男だった。

手と足が、普通の人間に比べて異様に長かった。

「貫く予定だったのに」

男は足を下ろすと、背中を少し曲げた。

それだけで、長い腕は床についた。

「どうやら…防御力は高いみたいですね」

男は両手と両足で、床を蹴った。

「次は、串刺しにします」

信じられないスピードで、何とか起き上がろうとする乙女レッドの背中に向けて、襲いかかる男。

「な、舐めるな！」

振り返る乙女レッドの手に、いつのまにか剣が握られていた。

背中を向けることで敢えて隠していた横凪ぎの斬撃が、男を斬り裂いたはずだった。

「え！」

男の手が、剣を掴んでいた。

「惜しいですね」

乙女ソードに、男の血が流れる。

「あり得ない！」

「そんなことはないですよ」

男はにやりと笑うと、もう片方の手で、乙女レッドの眼鏡を叩き落とした。

変身が解けると同時に、剣も消えた。

「少しは、戦い慣れているようですが…決意が足りない！」

男は、目を見開いている里奈の額に、頭突きを喰らわした。

「う！」

低い声を上げて、里奈は再び廊下に倒れ、そのまま気を失った。

「人を殺す決意が」

男はゆっくりと立ち上がると、血塗れの手で手刀を作った。

「どうせ…近い内に死ぬのです。せめて、楽に殺してあげましょう」

そして、里奈の首筋に突き刺そうとしたが、途中で止めた。

廊下の向こうから、近づいてくる足音が聞こえたからだ。

「驚きましたよ。まさか、この空間を認知できる人間がいるなんて…」

男は里奈から離れると、闇を凝視した。

「砂の使者でもありませんね。この感覚は、人間！」

男はにやりと笑い、

「わかるんですよ。人間の臭いが！人間の存在が！だって、人間が大嫌いだから！」

再び両手を床につけた。

「この世の中の生き物の中で！人間が一番醜いから！」

まるでロケットのように勢いのついた男の体が、ゆっくりと近付いてくる学生服を着た女子生徒に突進する。

「そういうお前が…一番、醜いと思うがな」

男の突進を、体を横にするだけで避けた女子生徒は、スカートを靡かせた。

「！？」

男の突進がいきなり止まると、床に片膝をつけた。

女子生徒は、そのまま倒れている里奈のもとに行くと、彼女を抱き上げた。

「そうか…」

男は口許を緩め、

「嫌いな臭いに…闇の臭いと血の臭いが混じっている。あんた…。こっち側だね」

振り返り、里奈を抱き抱える女子生徒の後ろ姿を見つめた。

「何者だい？」

男の胸元が裂けており、そこからポタポタと血が滴り落ちていた。

「名乗る名はない」

「へえ～」

男はもう片方の膝も、床につけた。

「敢えて…名乗るなら」

女子生徒は歩き出した。

「闇夜の刃だ」

「へえ～。覚えておくよ」

男はそのまま、前のめりに倒れた。

と同時に、闇が消えた。

廊下に、昼間が戻った。

「…」

振り返ることなく、廊下を歩き続ける女子生徒。

しばらくすると、女子生徒の腕の中で、里奈が目覚めた。

「うう…」

呻きながら、最初に目に飛び込んで来た女子生徒の顔を見た瞬間、里奈は微笑んだ。

「真弓…。お帰りなさい」

「ただいま」

女子生徒は、微笑んだ。

「うん」

里奈は安堵からか…再び気を失った。

「なんだ！」

その時、階段の上からサーシャが飛び降りて来た。

「この感覚は、やつらが！」

着地と同時に構えたサーシャと、里奈を抱える女子生徒の目があった。

「！」

「！」

互いを見て、相手のレベルを察知して、２人の間に緊張が走る。

しかし、女子生徒はすぐに緊張を解くと、サーシャに頭を下げて、そのそばを通り過ぎた。

（この生徒は！？）

サーシャは振り返り、遠ざかっていく女子生徒の背中をしばし見送った。

その女子生徒の名は、九鬼真弓。

「生徒会長！」

西館の廊下に偶々足を踏み入れた…香坂姫百合は、九鬼の顔を見て、涙を浮かべながら叫んだ。

「ご機嫌よう。姫百合さん」

九鬼は、姫百合に微笑んだ。

九鬼真弓。

生徒会長の帰還だった。

第２１話　種火

（この感覚は？）

九鬼が出てきた廊下の角に、身を隠して、様子を伺っている少女がいた。

開八神茉莉である。

しかし、その中身は…茉莉と入れ換わった綾瀬太陽だった。

（ブルーワールドの匂いにひかれて、やって来たけど…）

太陽には、九鬼の背中に見覚えがあった。

（生徒会長とはねえ）

腕長の男を撃退したのを確認すると、太陽は異空間から戻っていく廊下に背を向けた。

（ということは、彼女も世界を越えたのか。しかし、どうやって…）

太陽が悩みながら、歩いていると、いつのまにか一階の渡り廊下に出た。

右に曲がれば、グラウンドに出る。

「うん？」

ふっと視線を感じて、太陽は足を止めると、右斜め前を見た。

中央館の壁にもたれて、こちらを見る女子生徒がいた。

まだ少し…学生服が似合っていないように見える生徒に、太陽は息を飲んだ。

（!?）

女子生徒は微笑むと、ゆっくりと太陽に向かって歩き出した。

太陽は金縛りにあったように、動けない。

そんな太陽の真横で立ち止まると、女子生徒は囁くように言った。

「浮気者」

「!!」

予想外の言葉に、太陽の体が軽く跳ね上がった。

女子生徒はそんな太陽の反応に、微笑むと西館の方に歩き出した。

「ち、違う!フ」

振り返り、女子生徒の名前を言いかけて…太陽は息を飲んだ。

先程自分が出てきた出入口から、サーシャが姿を見せたからだ。

太陽は慌てて、背を向けた。

「どうした？フレア」

あまり感情を表に出さないフレアが、楽しそうに笑っているのを見て、サーシャは眉を寄せた。

「何でもない」

首を横に振ると、フレアはサーシャの横を通り過ぎた。

「？」

サーシャは、中庭で身を強張らせながら、背中を向けている太陽に目をやった。

（普通の生徒か）

気を探ってみたが、魔力は感じなかったので、サーシャは西館に入ったフレアの後を追った。

「やつらの気を感じた。それに、空間に結界を張った痕跡も残っている」

サーシャの言葉に、廊下に立ち尽くすフレアは頷いた。

九鬼達は反対側から、校舎を出た為に、廊下にはいなかった。

「闇の波動…。だけど、ブルーワールドの闇とは異なる」

フレアの分析に、サーシャも頷いた。

「そして…闇と言っても、魔物のものとは違う。人間の気に近い？」

フレアは、元に戻った廊下の空間に手を伸ばし、手では掴めないものを掴もうとした。

「闇に堕ちた人間。あたしは、それに近いと思う。戦いの中で、恐怖から狂う者もいた…。そんなやつらから感じる狂気に近い」

不快な空気は、まだ廊下に漂っているような気がした。

腕を伸ばしているフレアの横を通り過ぎるて、サーシャは廊下の真ん中に立った。

「人は闇を畏れる。しかし、狂った人間には関係ないか。やつらは…闇を従えている」

「…」

フレアは、伸ばしていた手をぎゅっと握り締めると、腕を下ろし、口を開いた。

「あたしには、人間の思考はわからない。だけど…御姉様が言っていたわ。人間は、本能を失った…狂った生き物だと。だから、敵わないあたし達に歯向かってくると」

「それは、違うな」

フレアの首筋に、ドラゴンキラーの切っ先が差し込まれた。

「生きる為だ」

一瞬で間合いを詰めたサーシャは、フレアの横顔を睨み付けた。

「そうね」

フレアはフッと笑うと、一瞬だけ体が炎に変わった。

喉元に突き付けられたドラゴンキラーを、そのまま通り過ぎると、再び人間の肌に戻り、ゆっくりと振り返った。

「だけど…狂った生物が、正しい判断ができるのかしら？」

「人は、ただ生きるだけじゃない！時には、自分を犠牲にしてでも、誰かを守る時がある！どうにかして、自分一人でも生き残るのが本能だというならば、人間は本能が壊れていてもいい。自分を犠牲にしても、他者が残ればいいと思い、行動する！それこそが、人だ！」

「そうね」

サーシャの叫びに、フレアは前を向くと、目を瞑った。

瞼の裏に、倒れた赤星浩一と、彼を殺そうとする魔王レイの姿がよみがえる。

そして、その間で…両手を広げ、赤星浩一を庇う自分の姿が。

（あたしは…種火）

フレアは、ゆっくりと目を開けた。

「人は、壊れてなどいない！」

「そうね」

フレアは頷くと、身を屈め…床に手をつけた。

そこは、先程の戦いで腕長の男が倒れ、消えたところだった。

「微かに魔力を感じる。これは、人間のものではない。やはり…やつらの後ろには、操っている者がいる！？」

「フフフ…」

フレアとサーシャが、廊下に残った魔力を探っている頃。

とある場所で、1人の男が座っていた。

「地獄…」

何もない場所で、男は闇の中にいた。

「天国」

にやりと笑い、

「それらは、すべて…この世界にある。勿論…闇と光も」

ゆっくりと目を開いた。

しかし、眼窩に…眼球はなかった。

「そして、すべてがある！すべてが！」

男は立ち上がった。

「それらは、人が作った！人が！人が！人が！作ったのだ！創造力という力でな！勿論、絶望も！そして、希望も！人は常に、光と闇！まったく対極にあるものを想像した」

男は前方を睨み、

「人間の想像したもので、実現しないものはないと！断言する者もいる！ならば！」

何もない空間を拳で叩いた。

「神や悪魔も、存在するのではないかね？それは、各宗教が唱える人間をつくりし神ではなく！」

男は天を仰いだ。

「人間が創った神！いや、悪魔だ！」

興奮して叫んだ瞬間、男の口が裂けた。

「そうね」

その闇の中で、ティアが笑った。

「そう…」

ジャックは、煙草に火を点けた。

「人間は、自ら創った悪魔によって、真の地獄に落ちるのさ」

「しかし、悪魔をつくれば…神もいるはずだろ？」

ジャックは、煙草を吹かした。

「心配しなくていいわ。人の神は希望。この世界では、希望を抱いて生きている者は少ない。神の力は、悪魔に比べて微々たるものよ」

ティアは笑い、

「今頃…神の言葉は、虚しく響いてるはずよ」

そして…目を細めた。

第一章　月影編　第２２話　決意

人間が繁栄することのできない極限の景色に囲まれながら１人、目を瞑る少年の名前は、赤星浩一。

そんな彼の後ろに、突然来訪者が訪れた。

「すまないね。こんなところに呼び出して…。あまり人目につきたくなかったからね」

来訪者は白い息を吐きながら苦笑すると、周りを見回し、

「だけど…行き過ぎかな？」

頭をかいた。

アルプス山脈の一番高い山頂に立つ２人。

周囲は、万年雪と…空に青空しかない。

「いえ…」

数秒後、ゆっくりと目を開けると、僕は目の前の景色を見つめ、口を開いた。

「問題はありませんよ。ジャスティンさん」

そして、笑顔を作ると、振り返った。

その無垢な笑顔に、ジャスティンは少し驚いた後、微笑み返した。

「こんなところに呼び出して、簡単に来れるやつはいないからね。それに、空気が旨い」

ジャスティンは深呼吸した後、山脈の奥に目をやった。

そこは、魔界の入り口であった。

「アルテミアは元気かい？僕の立場だと、あまり会うことができないからね」

防衛軍の総司令であるジャスティンが、魔界を統べるアルテミアと会うことはない。

「元気ですよ。最近はあまり、会っていませんけど…」

そこまで言ってから、僕は思わず笑ってしまった。

「本人は、外に出たいようですけども…ギラにサラ…それに、カイオウが止めているようですよ。何でも、真の王になる為の教育が必要だとか」

「そうか」

ジャスティンは魔界にある城の方を見つめ、

「彼女にはいい経験になる」

さらに微笑んだ。

再び数秒の余韻の後、ジャスティンは僕の方を向くと、ここに呼び出した理由を話し出した。

「赤星くん。君なら、何か知ってるんじゃないかと思ってね。数日前、空から人が落ちてきた。それも、百人だ。たまたま、海に落下した為に、助かったものもいた。しかし、落下の恐怖と突然の環境の変化から、パニックになっている者が多くてね。まともに話を聞けていない。しかし、彼らの断片的な話から…この世界の人間でないことが確認された」

ジャスティンの話を、僕は黙って聞いていた。

「それに、彼らが空から落ちてきた時を調べてみると、空間に亀裂が入っていたことがわかった。すぐに、自然修復されているが…世界中の空を探ってみると、何度か穴が空いた事実が浮き彫りになった。そんなことを感知し調べるできるのは、空間把握能力者だけだ。百人が落ちてくるまで、気づかなかったよ」

「そうですか」

僕は空を見上げ、

「やはり…すべての空間を守ることはできていませんか」

呟くように言った。

僕の言葉に、ジャスティンははっとなった。

「ま、まさか…君が！？」

僕は悲しげにフッと笑うと、視線を握り締めた自らの拳に移し、

「ライに言われましたよ。お前は、自分の能力の使い方を知らないと…。僕は、強大な力を手にしました。それを戦いの中で、使い方を覚え…成長してきたつもりでしたけど…破壊する力は、経験できても、守る力が足りない」

さらに拳を握り締めた。

「赤星くん…」

「ジャスティンさん」

心配そうなジャスティンに、僕は敢えて強い視線を送ると、言葉を続けた。

「問題は、僕が生まれた世界で起こっています。しかし、ある人に言われたんです。僕があの世界に戻ると、バランスを崩すと…だから、行ってはいけないと。その為、別の人間が行ってるんですけども」

僕の瞳から、ジャスティンはその力を垣間見ると、静かに頷いた。

「成る程…。君はもう神レベル。いや、神だ。そんな君が、不安定になっている世界に行くことを、その人は注意しているんだろうね」

「神と言っても、何もできません。いや…やり方を知りませんから

…」

少し項垂れる僕に、ジャスティンは優しく話しかけた。

「君は君なりに、この世界を守ってきた。そして、今も…この世界だけではなく、生まれた世界も守ろうとしている」

ジャスティンは僕に近付くと、肩に手を置き、

「それで十分だよ。君には力がある。その力の使い方も、追々わかってくるだろう」

「ジャスティンさん」

「僕がここに来た時、君は最初気づかなかったね。まるで、意識を別の場所に集中させているような感じがしたが」

ジャスティンの洞察力の鋭さに、僕は目を見開いた。

そして、驚きながらも説明した。

「ライに学んだんですよ。彼のやり方から」

僕は再び、周囲に目をやると、

「あらゆる世界の動きを見ることが、できます。だけど、それは…雲の上から下界を見るようなもので、一つ一つを詳しくは見れません。だから、一人一人に焦点を当てなければならない。僕の生まれた世界も、空間を隔てても見ることができました。しかし、詳しくはわからない。あの世界で…誰が何を考えているのかまではわかり

ませんから、知り合いから数珠繋がりで、周囲を探ってました」

「その結果は？」

「まだわかりません。だけど…手掛かりは掴みました。あとは、彼らに近付くだけです」

「どうやって？」

「それこそ…ライから、学んだことが役に立つのですよ」

僕はジャスティンに、すべてを話した。

ジャスティンは少し驚いたようだが…あまり動揺はしなかった。

それよりも、ライがしたことに驚いていた。

「成る程な。これで、天空の騎士団に、団長が3人いた理由がわかったよ」

ジャスティンは嬉しそうに、頷いた後、改めて真剣な表情になると、僕の肩から手を離してから、目を見つめた。

「しかし、君は凄いな。君のこれまでしてくれたことに、この世界の代表として、礼を言うよ。ありがとう」

ジャスティンは、深々と頭を下げた。

「そ、そんなこと！やめて下さい」

と言ったけど、ジャスティンはしばらく頭を上げなかった。
僕はただただ…照れてしまった。

「それにしても…君は…」

ジャスティンは頭を上げると、

「魔神の中には、君こそが、王に相応しいとの声もあるようだし…。
実際、ライを倒したのは君だからね」

「実際的には、僕は彼を倒していません。彼は自ら、命を絶ったようなものです」

僕は、ジャスティンに背を向けた。

「赤星くん」

そんな僕の背中を、ジャスティンは見つめ、

「君は…」

何かを言おうとしたが、僕は自分の言葉で遮った。

「僕は…人の為に生きます。弱き人の為に」

僕は振り返り、

「勿論、人は決して弱くなんてないですよ。無限の可能性があり、強くなれる。だけど、1人では強くなれない。親、仲間、友達、師匠…さらに敵達と交わることで、成長し、強くなります」

「赤星くん」

「僕は、そんな人間の道しるべでありたい。この世界でも、あの世界でも」

そう言って、笑顔になる僕に…ジャスティンはまた、頭を下げた。

「ありがとう」

「ふぅ〜。やっぱりいるよな。みんな」

ため息をつくと，綾瀬太陽は額に流れた汗を拳で拭った。

「！」

そして、開八神茉莉の体である手の甲についた汗を見つめた。

（女の人と体を交換するのは、慣れてるとはいえ…。相手の体をそのまま使えるのは、初めてだし…）

そして、太陽は目を細め、

（それに…この体。器としたら、無限の深さがある。いざとなったら、使える！だけど…しかし…）

「お嬢様。どちらにいかれてました？トイレにしては、長過ぎると、純一郎が騒いでおりましたが」

いつのまにか、太陽の後ろに、猫沢がいた。

さらに、目をやらないが…数百メートル先にも、監視の目を感じた。

（完全に巻いたはずだが…。やはり、この距離では数分が限度か）

太陽は心の中で、舌打ちした。

そんな太陽をじっと見つめた後、猫沢は言葉を続けた。

「やつらが、この学園に潜入している。お前は、デコイとはいえ、この体自体をやつらに渡す訳にはいかない。この体は、太陽の器だからな。まあ～偶然、お前と同じ名前だがな」

（太陽の器？）

太陽は心の中で、眉を寄せた。

「お嬢様！」

遠くの方から、純一郎が泣きながら駆け寄って来るのが見えた。

「私もあまり、お前に構うことができない。勝手な行動はするなよ」

と言うと、猫沢は消えた。

「はぁ～」

僕は…いや、俺はため息をつくと、前から走ってくる純一郎に目をやった。

「だけど…大人しくはできないね」

俺は仕方なく、歩き出した。

（この世界を、崩壊させる訳にはいかないからね）

「だけど…向こうの世界には、別の人間が行ってるんだろう?彼らと力を合わせたら、いいんじゃないのかい」

頭を上げたジャスティンの言葉に、罰が悪そうに僕は鼻の頭をかくと、

「いやあ～。彼女達を送り込んだ人には、僕はこの世界を守れと言われてますし…。それに…あのお…」

「うん？」

口ごもる僕に、ジャスティンは首を傾げた。

「助けに向かった人達に問題が…。1人ならまだしも…2人…。ア、アルテミアが知ったら…あははは」

突然、笑い出した僕を、ジャスティンは訝しげに見た。

仕方あるまい。

どんなに、力があっても…アルテミアが怖い。

この世で、一番。

それが、僕の弱味であるけど…すべての行動の根っこでもあった。

アルテミアがいるから…。

僕は何でもできるのだ。

そう…これからも。

第２３話　幽玄の如く

「モード・チェンジ！」

玉座から立ち上がったアルテミアの姿が、変わった。

背中から生えた二枚の白き翼を羽ばたかせて、飛び立とうとした瞬間、アルテミアの鼻スレスレに、一筋のビームが通り過ぎた。

ビームは、玉座の間の壁を貫通すると、数キロ先の地面に着弾した。

凄まじい火柱が上がると、城中を照らした。

「どこに行かれるおつもりですか？」

アルテミアの横にいつのまにか、人差し指を突きだしたサラが立っていた。

「い、いやあ～。べ、別に、どこにも行く気はないけど」

慌てて翼をしまうと、アルテミアは倒れるように、玉座に座った。

「あなたは、この魔界の王…即ち、神になられたのです。しかし、まだまだ学ぶことは多い。この世界の魔神達を統べ、さらに人間達にも影響を与えなければなりません」

「別に～神になんかなりたくないし」

サラの言葉に、口を尖らせた瞬間、アルテミアに人差し指が向けら

れた。

「な、なんてね」

アルテミアは変身を解くと、改めて玉座に座り直した。

そんなアルテミアにため息をつくと、サラは腕を下ろし、玉座の間から見える景色に目を向けた。

「確かに…おかしなことが起こっています。この魔界にも、数百人の人間が落ちて来ました。彼らはすぐに、魔物に捕食されましたが…」

「！」

サラの言葉に、思わず腰が浮くアルテミア。

そんなアルテミアに視線を戻すと、サラは話を続けた。

「しかし、この件に関しては、我々は動くことは致しません。これは、人間達の問題です」

「だが、魔物に殺されているのだろうが！」

先程とは違い、アルテミアの声に怒気があった。

「アルテミア様」

サラはアルテミアに体を向けると、跪いた。

「！？」

それを見て、アルテミアの動きが止まった。

「この世界の道理…。魔物は、人間を食らいます。あなた様の思いは、わかりますが…魔物達も生きているのです。大軍を率いて、人間達を大量に殺すことは、あなた様の代になればなくなるでしょう。しかし！魔物の捕食を禁じることはできません」

「しかし、空から落ちてきた人間は！」

「異世界の人間です」

サラは言い放った。

「！」

「彼らを助ける義務は、王であるあなた様にはございません」

「し、しかし！」

「彼らをこの世界に落としているのは、向こうの人間です。人間の問題は、彼らがどうにかするべきです」

「く！」

アルテミアは顔をしかめると、玉座から立ち上がった。

「アルテミア様」

「どけ！サラ」

アルテミアの魔力が上がり、一気にサラを蹴散らそうとした。

「しかし…どこの世界にもお節介はいるものです」

サラは顔を上げると、アルテミアを見た。

「！」

そのサラの表情に、アルテミアははっとした。

その瞬間、脳裏に浮かぶ赤星浩一の姿。

「チッ」

アルテミアは舌打ちすると、玉座に座り、顔を背けた。

「ご理解頂けましたか」

サラは立ち上がった。

「だけど…あいつは、頼りになるようで、頼りにならない時もあるぞ」

「心配ですかな？」

「うん？」

アルテミアは視線を、サラに向けた。

少しにやけたサラに気付き、軽く睨むと、再び顔を背け、

「べ、別に～心配などしていないが…。あいつは、時々無茶をするからな」

自分の膝に頬杖をついた。

「心配しなくても、彼なら大丈夫でしょう。彼は誰よりも成長し、強くなられた。そして、今も成長しておられます」

「そ、そうかな…」

「はい」

まだ心配そうなアルテミアに、サラは頷いて見せた。

「…」

所変わって、実世界の授業中。

教室の真ん中に座る太陽の後ろに、仁王立ちの姿で控える純一郎。

真後ろの生徒はまったく黒板が見えなかった。

しかし、教壇の前に立つ教師も、純一郎には注意できなかった。

いや…純一郎というよりも、開八神家を恐れていたからだ。

大月学園に転校するにあたり、開八神家は多額の寄付をし、さらに数日前の半月ソルジャーの事件で、壊れた学園の修繕費も負担していたからだ。

「ふぅ～」

太陽は、緊張感が走る教室内で息を吐いた。

そんな息が詰まる授業が終わると、俺は廊下に出た。

（大金持ちも大変だな）

廊下を歩くだけで、周囲からの好奇の視線にさらされた。

「お嬢様！」

慌てて、教室から飛び出す純一郎を気にせずに、俺は廊下を歩き続けた。

（あんな騒動がなければ、普通の学校と変わらないな）

ずっと前を向いているが、周囲の気を探っていた。

（しかし…神レベルに近い程の実力者が、数人いるとは…。１人は、生徒会長。もう１人は…猫沢。それに…）

隣の校舎のどこかから、こちらを監視する目は、学校にいる間は常に感じていた。

（姿は確認していないスナイパー。あとは、月の女神か）

月の女神である理香子にも会ったことはなかったが、今すぐに接触するつもりはなかった。

（彼女達がいるなら…そう簡単には、ここを攻め落とすことはできないはず）

俺は無意識に、足を止めた。

（なのに…何だ。この胸騒ぎは）

「お嬢様！」

廊下を走って追いかけてきた純一郎は、俺の斜め後ろ右側に止まると、いきなり今日のスケジュールを話し出した。

「本日、すべての授業を終えた後…パーティーにご出席のご予定が、救急入りまして～」

（下らない）

こんな時に、パーティーをやるとは…。

呆れながら、歩き出そうとしたが…次の純一郎の言葉に、俺の動きが止まった。

「そのパーティーは、先日でライブツアーを終わらせた歌手…レダの…」

「レダだと!?」

足を止めて、俺が振り返ると、後ろにいるはずの純一郎がいなかった。

「な!?」

俺は慌てて、後ろにジャンプした。

いつのまにか、廊下の床が真っ暗になっていたからだ。

「空間に穴が空いている!?」

「あらあら、落ちませんでしたか?お嬢様」

突然廊下中が真っ暗になると、まるで…洞穴の中にいるような感覚に襲われた。

「もっとも、あなたを落とすつもりはありませんでしたけどもね。太陽のバンパイア殿」

(太陽のバンパイアだと!?)

俺の後ろに、暗闇よりも黒い影が姿を見せた。

「それに驚いていますよ。この空間で、意識があるとはね」

影は拍手をした。

「流石です」

（!?）

俺の体は後方にジャンプしたまま、空中で固まっていた。

「先程…レベル1の空間では、邪魔が入りましたからね。用心の為に、レベル3まで上げましたよ」

影はにやりと笑うと、両手を広げた。

「ようこそ!時の止まった世界へ」

（時を止めただと!?）

俺の体で、思考だけが働くことができた。

目も開いているが、神経が止まっている為に、何も脳に情報が来なかった。

「世界の支柱であるあなたを、手に入れれば…この世界は一気に崩れるはず!もしくは、この体を乗っ取り、我々の神の器にするか…」

影の体に、色がついていく。

「選択肢が広がることは、いいことです」

この学園の制服姿になった男は、にやりと笑った。

「生憎」

「え！」

男は驚きの声を上げた。

「選択肢はないよ」

なぜならば、男の首筋に、俺の手が差し込まれたからだ。

「何！？」

唖然とする男をそのまま、真っ黒になった廊下の床に叩きつけた。

「あ、あり得ない！時が止まっている空間で動けるなんて！」

「自分だけが、特別だと思わないことだ」

俺の目が、赤く輝いていた。

その瞳に気付いた男は、絶句した。

「な！」

「先程言ったお前達の神とは、何者だ！」

「ま、まさか…目覚めていたとは…不覚！」

「お前に、時を止める力はない！誰だ！その神は！言え！」

俺の目がさらに赤く輝くと、強制的に吐かせようとした。

その時、周囲を包む闇が…男の両目に突き刺さった。

「何！」

俺の全身にも、闇が絡み付いていた。

「申し訳ございません。神よ！」

目を潰されながらも、男は叫んだ。

次の瞬間、男の体は闇の底に落ちていった。

「人はすべて！地獄へ！この世界を汚した人間に、生きる資格はない！」

男は落ちながらも、喜んでいた。

「そんな人である私に！罰を！」

「く、くそ！」

俺は、全身から魔力を放出した。

光が廊下を包むと、一瞬で元の景色に戻った。

「！」

廊下の床に手をつけて、しゃがんだ格好になっている俺のそばを生徒達が通り過ぎていく。

（ブルーワールドが地獄だと！？）

唖然とする俺に、声をかける生徒はいなかった。

「いい！いい！」

ブルーワールドに落ちた男に、群がる魔物。

押し合いながら、突然のご馳走に食らいついた。

「人間は虫けらです！食料です！生きる価値はないのです！ありがとうございます！神よ！」

食べられながら、男は歓喜の声を上げた。

「お嬢様！」

そんな中、素手で魔物をどつきながら、ブルーワールドの草原をさ迷う純一郎。

「ご予定に遅れます！お嬢様！」

純一郎は魔物を蹴散らしながら、魔界の奥へと進んでいった。

第２４話　リバース

「お嬢様」

大月学園にある時計台の真下の部屋の中で、佇んでいる学生服の男のもとに、真田がやってきた。

「やつらとついに、接触したそうです」

「そう」

真田の報告に、学生服の男は頷くと、振り返ることなく訊いた。

「で…太陽様は、ご無事なのですか？」

「はい。純一郎はおそらく、落ちたと思われますが…あの男は無事です」

「そう…。よかったわ」

満足げに頷く学生服の男の方へ、真田は一歩近づくと疑問をぶつけた。

「しかし、茉莉様。綾瀬太陽という男…。もしかしたら、只者ではないかもしれません。あの空間で捕縛されて、無事であるとは」

「そうかもしれませんわね」

茉莉は、自らの手を見つめ、

「この体…わたくしの魂にとてもしっくりきますから…」

ぎゅっと握り締めると、

「やはり、太陽様は、わたくしと魂で結ばれた特別なお方！運命なのですわ」

きゃっと身をよじった。

「お嬢様…」

「それに…そうでなければいけませんわ。あの程度のゴミにやられるようでしたら」

「御意」

真田は、頭を下げた。

「フン」

茉莉は鼻を鳴らすと、部屋にある小さな丸い窓に近づき、

「そういえば…運命を口にする女がいたわね」

空を見上げた。

「もうすぐ…陽が落ちるわ」

そして、にやりと笑った。

そんな茉莉の背中に頭を下げながらも、真田の眼鏡の奥は妖しく光っていた。

「生徒会長！あなたがいない間に、こんなに決済を頂かなければならないものが、たまっています。至急だったものに関しては、あたしが独断で決めさせて貰いましたけど…。一応、目を通しておいて下さい」

姫百合の手より渡された書類の山を見て、生徒会長の席に座った九鬼は、一瞬たじろいだ。

しかし、よく見ると、そのほとんどが処理されていた。

「お願いしますね」

びしっと言うと、生徒会を真っ赤な顔で出ていった姫百合の姿に、九鬼は苦笑した。

「あたしがいなくても、生徒会は安泰ね」

九鬼は確認だけとなった書類に、目を通し始めた。

「うん？」

数分後、九鬼は書類を捲る手を止めた。

人の気配がしたからだ。

ドアの方を見つめると、九鬼は席を立った。

生徒会に用があって来ても、なかなか中にまで入れない生徒は多い。

だから、こちらからドアを開けてあげるのだ。

「…」

九鬼は笑顔を作ると、ドアを開いた。

しかし、そこには誰もいなかった。

「！」

驚いた九鬼は本能で、ここにいた生徒を探した。

廊下の左側はるか向こう…一番奥で、こちらを向いて立っている男子生徒がいた。

「中島君？」

それは、九鬼のクラスメートであるが…久々の再会だった。

「九鬼」

遠く離れていたが…中島の囁くような声は聞こえてきた。

「早く…ここで出て、絶対に変身しないでほしい」

「どう意味？」

九鬼は生徒会から、飛び出すと、中島のそばに駆け寄ろうとした。

「そうだ。先に帰ってくれ。外に迎えは来る。純一郎に代わる護衛が来るまでは、学園内では1人になるが…ちゃんと守りは固めている」

中島が立つ廊下と反対側から、猫沢が姿を見せた。

「夕食までには帰る」

猫沢は、九鬼の背中を発見すると携帯を切った。

同時刻の保健室内。

「本当…無防備なんだから」

九鬼に運ばれた結城里奈は、ベットに横になっていた。

そんな里奈に近づく白衣を纏った半田。

彼女は、里奈のスカートの中から、あるものを取り出した。

それは、赤色の乙女ケース。

「ウフフフ…」

半田は、乙女ケースを指でつまむと、笑って見せた。

「憎き月の力…。今こそ、あたしに」

そして、目の前まで持ってくると、赤いボディを見つめながら、叫んだ。

「装着！」

「装着！」

九鬼の背中をとらえた猫沢は、一気にスピードを上げた。

走る彼女の体を、七色の光が包んだ。

「中島君！」

中島のそばに、駆け寄ろうとした九鬼は、殺気を感じて、前のめり

に倒れるように身を屈めた。

九鬼の頭があった空間に、風を切り裂く蹴りが通り過ぎた。

九鬼は床に手をつくと、そのまま転がり、距離を取って立ち上がった。

「誰だ！」

構えようとして、九鬼は目を疑った。

「七色の乙女ソルジャー」

「フン！」

蹴りがかわされると、即座に手刀に攻撃を変えた乙女レインボー。

人のスピードを超えた鋭い攻撃であるが…正確に急所を狙う為、九鬼は何とか避けることができた。

しかし、服や皮膚の表面が切り裂かれていた。

（この動き！？）

よけれた理由は、それだけではなかった。

どことなく、自分の動きに似ていたのだ。

連続攻撃をかわされた乙女レインボーは、改めて構え直した。

（来る！）

新たな攻撃に敵が入る前に、九鬼は変身しょうと、乙女ケースを突きだした。

「装ちゃ」

叫ぼうとしたが、中島の言葉が九鬼を止めた。

（変身しないで）

その一瞬の躊躇いを、見過ごす乙女レインボーではなかった。

神速の動きで、九鬼の手にある乙女ケースを蹴り上げ、さらに半転すると、九鬼の脇腹に蹴りを叩き込んだ。

「クッ」

とっさの動きで、脇腹に蹴りが当たる寸前、動きに逆らうことなく、九鬼は横に飛んだ。

廊下の窓ガラスを叩き割り、外に飛び出した九鬼。

「ウッ」

上手く飛んだが、脇腹に痛みが走った。蹴られた部分が赤く腫れ上がっていた。

思わず身を捩った九鬼の顔が、空を見上げた。

一瞬…痛みでわからなかったが、いつもと違う空に絶句した。

「な！」

それは、痛みを忘れさせる程だった。

「つ、月が！」

「フッ」

変身を解いた猫沢は、新たに手にいれたもう1つの乙女ケースを握り締めていた。

「九鬼家の悲願！フフフ…」

シルバーの乙女ケースを握り締める猫沢の腕が、震えていた。

「あのお祖父様が求めた！神殺しの力が！今、あたしの手の中に！」

猫沢は、歓喜の声を上げた。

「この力は、真弓！あなたが手に入れるものではなかった。最初は、あたしが…！そうよ。あたしこそが！」

猫沢は、シルバーの乙女ケースを突きだした。

「乙女シルバーよ！装着！」

銀色の光が、猫沢を包んだ。

「月が！」

九鬼は空を見上げた。

「黒い！」

その時、九鬼の横の壁が、窓ガラスごと吹き飛んだ。

「！」

九鬼は横に飛ぶと、距離を取って構えた。

着地の瞬間、脇腹が痛んだが、気にしている場合ではない。

「乙女シルバー…」

廊下から飛び出してきた乙女ガーディアンを見て、九鬼は顔をしかめた。

「いや…違う！」

シルバーだったのは一瞬で、直ぐ様表面が酸化して、黒くなっていく。

「乙女…ダークか」

「うん？」

屋上で、監視の為立っていたサーシヤの前に突然、地上から金網を飛び越えて着地したのは、乙女ブラックだった。

「月の戦士か？」

そして、体育館の屋根で佇んでいたフレアの前にも、いつもよりもナイスバディな乙女レッドが立っていた。

「もう…日が暮れたか」

猫沢との通話を終えた俺は、携帯を切ると、正門に向けて歩き出した。

レダのパーティーまでに時間があった為に、校舎内を探索し、時間を潰していたのだ。

クラブ活動の時間も終わり、帰る生徒もいない。

1人歩いていると、後ろから鞄を抱えた生徒が追い抜いて来た。
補習を終えた桃子だった。
「やっと帰れます！」
嬉しそうな顔で走る桃子の動きが、正門のそばで止まった。
「え…」
少し驚くような声を上げると、桃色の光が桃子を包み…乙女ピンクへと変身させた。
「うん？」
その様子を見ていた俺も、足を止めた。
ゆっくりと振り返った乙女ピンクの手に、バズーカ砲が握られていたからだ。
「！？」
目を見張る俺に向けて、バズーカは発射された。
「月は、反転した。人々を照らす光から、蝕む光へと」

手長男と…生徒会室に監禁されていたはずの半月ソルジャーを従えて、廊下を歩くのは…死んだはずの副会長、桂美和子だった。

そして、その前に…中島が姿を見せた。

軽く自分を睨む中島を、桂はせせら笑った。

「反抗的な目ね。いいのかしら?そんな目をして」

制服姿の桂は、瓶を中島に示した。

その中に、小さくなった…理香子が入っていた。

気を失い、丸くなりながら…。

「月の女神の命は、我々の手の中にあるのよ」

桂はにやりと笑い、

「女神を助けたければ、闇と反転した月影リバース達とともに、邪魔者達を排除しなさい!」

瓶を握り潰すふりをした。

「く!」

中島は、顔をしかめると、その場から消えた。

「乙女ダーク…。さらに、月の色の変化」

九鬼が間合いを取る為に、後退していると、正門の方から爆発音がした。

「チッ！」

九鬼は、舌打ちした。

「何の音だ！」

部室内にいた高坂と緑は、体育館裏の出入り口から飛び出した。

「部長！」

緑は直ぐ様、体育館の屋根に立つ乙女レッドを発見した。

「乙女レッド！しかし、爆発音は、正門の方から…」

何かが起こっていると直感した高坂は、ダイヤモンドの乙女ケースを取りだそうとした。

しかし、いつもの学生服のポケット内になかった。

「ぶ、部長！」

慌てて、全身を探していた高坂の耳に、緑の声が飛び込んできたと同時に、ダイヤモンドの輝きが、目に入った。

「緑！」

眩しさに目を瞑った高坂が、次に目を開けた時…目の前に、乙女ダイヤモンドが立っていた。

「お前！勝手に、俺のケースを」

注意しょうと近づこうとした高坂に向けて、乙女ダイヤモンドは拳を振り上げた。

「フゥ～」

間一髪で、乙女ピンクの攻撃を避けることができたが…校舎内にクレーターができた。

「意味がわからないけど」

俺は、前に立つ乙女ピンクを睨んだ。

今度は、バズーカではくマシンガンが握られていた。

「何かの冗談って訳でもないようだな」

クレーターの側に、乙女ブルーと乙女パープルが立っていた。

ブルーの手には、青竜刀が握られ…パープルの周りに、無数の包丁が浮かんでいた。

「殺る気だな」

俺は頭をかいた。

「もしかして…お嬢様って、結構怨まれている？」

肩をすくめて見せたけど、そんな余裕はなかった。

3人の月影は、一斉に攻撃を開始した。

第２５話　舞姫

凄まじい爆音と土煙の中、俺は逃げていた。

（魔力を使う訳にはいかない）

魔力を使わなくても何とかなると思っていた俺の安易な考えは、月影達の怒涛の攻撃により、夢物語と化した。

（だけど、だからこそ…逃げれる隙間がある）

爆音と爆風、さらに爆煙は…俺の姿を隠すのにちょうどよかった。

正門への道を転がりながら外れ、植木の隙間を潜ると、体育館の裏手に出た。

そこで、一息つくつもりが…どこにも安住の地はなかった。

「緑！」

拳を振り上げた乙女ダイヤモンドのパンチが、高坂に突き刺さろうとした瞬間、茂みの中から飛び出してきた俺とぶつかった。

「うわあ！」

横に倒れる高坂に変わって、乙女ダイヤモンドの拳が、俺に迫る。

（アルテミア！）

人は最後の時…走馬灯のように過去を思い出すと言うが、俺の頭に浮かんだのは、アルテミアの顔だった。

（！）

その顔を見た瞬間、俺は思い出した。

その間、コンマ数秒であろう。

「名も知らぬ女子よ」

自分の身代わりになったであろう女子に向かって、高坂はよろけながらも、手を伸ばした。

「フゥ～」

しかし、高坂の心配は無駄に終わった。

乙女ダイヤモンドの拳を、片手で受け止めている俺がいたからだ。

「間に合った」

俺はため息をついた後、にやりと笑った。

ストロングモード。

アルテミアのように、見た目は変わらなかったが…大幅に肉体が強化された。

（俺にも、使えるとは思っていたけど…）

俺は乙女ダイヤモンドの拳を握り締めると、もう片方の手で殴り付けた。

ふっ飛ぶ乙女ダイヤモンド。

（魔力を使わないモード・チェンジは、あとは…フラッシュモードか）

能力を確認すると、気を溜めた。

（いける！）

そう確信した。

ガッツポーズを取った俺の鼻先を、飛んできた包丁が通り過ぎた。

「ゲッ！」

いつのまにか無数の包丁が、俺を囲んでいた。

（モード・チェンジ）

と言う前に、どこからか飛んできた弾丸が、包丁をすべて撃ち落とした。

（スナイパーか！）

いつも俺に、監視の目を光らせているボディーガードだが…姿を見たことがない。

「だけど！」

俺は、唖然としている高坂の手を取ると、体育館裏を駆け出した。

スナイパーが隠れていると思われる学園外のマンションの屋上に向けて、乙女ピンクはバズーカをぶっ放った。

八階建てのマンションの屋上部分が、ふっ飛んだ。

「名も知らぬ女子よ。どこに逃げる？」

高坂は、俺に引かれながら、空を見上げた。

「月が黒い？」

「恐らく、彼女達はあの月の光に操られている！何とかしなければ」

体育館裏をぐるっと周り、グラウンドに出ると、屋上から飛び降りてくる２つ影が目に入った。

「乙女ブラックか！」

高坂は、目を細めた。

「チッ」

落下しながらも、校舎の壁を蹴り、威力を拡散させたサーシャは、着地と同時に後方にジャンプした。

「速い！」

そんなサーシャの動きよりも、乙女ブラックの方が速い。

「しかしな！」

サーシャは右腕を振ると、ドラゴンキラーを装着した。

「単純だ」

振り向き様の横凪の斬撃が、乙女ブラックを切り裂いたと思った刹那、乙女ブラックは頭上にいた。

「何！？」

サーシャが斬ったのは、残像だった。

「ブラックキック」

サーシャの頭上から、乙女ブラックが落下してきた。

「月影リバースの能力は、三倍は上がっている」

瓶を握り締めると、桂も校舎から出た。

「お前達は、太陽の器を手に入れろ」

「は！」

手長男と半月ソルジャーは頭を下げると、体育館の方へ走り出した。

「…」

無言で乙女レッドと対峙するフレアは、体育館の屋根の上からちらりとグラウンドを見た。

何とかブラックの蹴りを避けたサーシャと、乙女ソルジャー達に囲まれた太陽と高坂の姿が、瞳に映った。

フレアは軽く目を瞑ると、グラウンドに向かって飛び降りようとした。

しかし、その動きをよんだ乙女レッドのパンチが進路をふさいだ。

フレアは後方に飛ぶと、屋根の中央まで移動した。

拳を突きだした形の乙女レッドの全身が、いきなり燃え上がった。

「フン」

乙女レッドが気合いを入れると、炎が消えた。

そして、にやりと笑うと、乙女ケースを剣へと変えた。

炎に対して耐性のある乙女レッドは、ある意味…フレアに取って大敵だった。

「うおおおっ！」

雄叫びを上げると、乙女レッドは突きの体勢で突っ込んで来た。

「…」

冷静に対処しょうと、構えたフレアは、真後ろに殺気を感じた。

慌てて避けると、フレアがいた空間をビームが通り過ぎた。

「ウフフフ…」

含み笑いをもらしながら、乙女グリーンが屋上に現れた。

「！？」

グリーンの笑い声を聞いた瞬間、フレアは目を見開いた。

「うおおおっ！男なんてええ！」

怒りを増す度に、パワーが増加する乙女レッドは、屋根を凹ましながら再び、フレアに襲いかかる。

フレアの目が光り、乙女レッドの全身が燃え上がるが、すぐに吸収された。

「フン。相変わらずの甘さね」

グリーンは鼻を鳴らすと、少し呆れながらも、口許を緩めた。

「でも…らしいわね」

「うおおおっ！」

剣を振り上げた乙女レッドの全身を火柱が包んだ。

その次の瞬間には、乙女レッドは消滅していた。

装着者を失った乙女ケースは、屋上を転がりながら、下へと落ちた。

その状況になっても、フレアは驚くことなく、乙女グリーンを見つめていた。

「…」

それから、ゆっくりと頭を下げると、背面跳びのように後ろ向きで、地面に向けてジャンプした。

その様子を見つめながら、乙女グリーンは笑った。

「本当なら…貴女にもできるのにね」

乙女グリーンは、眼鏡を外した。

変身が解け…屋根の上に佇むのは…リンネであった。

「相変わらず、何もかも…あなたらしいわ」

リンネは苦笑した。

「どこか、安全な場所に！」

「それは、俺の台詞だ」

グラウンドに出たのが、まずかった。

俺と高坂は、乙女ソルジャー達に囲まれてしまった。

「おれ…じゃない。私は大丈夫です。あなたをどこか安全な場所に！」

俺は、高坂を庇おうとしたが…高坂は、俺を庇おうとしていた。

「女性に守られる程、落ちぶれてはいない」

高坂は周囲を見回し、

「部室なら、籠城できたが…」

乙女ダイヤモンドを見て顔をしかめた。

「再び体育館裏に戻れないな」

いつのまにか…乙女パープルが、グラウンド内にいた。

さらに、俺達が出てきた通路には、乙女ダイヤモンドが立ち塞がり、左右を乙女ブルー、乙女ピンクが武器を片手に立っていた。

さらに、半月ソルジャーと手長男が合流した。

「お前が、太陽の器か！」

半月ソルジャーの言葉に、目的は自分であることを悟ったが、俺を庇う高坂が邪魔だった。

（ありがたいことなんだけど…）

今の自分で、守りながら戦う自信はなかった。

その時、空からフレアが落ちてきた。

「フレア！」

思わず名前を呼んでしまった。

フレアは、後ろから半月ソルジャーを蹴り飛ばすと、俺と高坂の前に立った。

「フレア！頼んだ！」

俺は高坂を庇いながらも、グラウンド中を見回していた。
戦いの中で、ただ1人…傍観者がいた。
校舎から出てきた女である。
悠然と腕を組み、にやけている姿に、俺は確信した。
この騒動を起こしているのは、あの女だと。
俺は、顔をしかめて踞る半月ソルジャーの横を駆け抜けようとした。
「行かせないよお」
その動きを読んだ手長男が、両手両足で地面を蹴ると、俺の進路を塞ごうとした。
「モード・チェンジ！」
しかし、俺のスピードは一気に音速を越えた。
グラウンドの端から、女の前まで、まるで…ワープしたかのように見えただろう。
「お前は一体！」
一瞬で移動した俺は、腕を組む女の胸ぐらを掴もうとした。
しかし、突然横から現れた人物の蹴りに、音速で走る俺は突き飛ば

された。

（な）

一瞬、言葉が出なかった。

すぐに体勢を立て直したが、俺は絶句した。

女の前に、学生服を着た少年が立っていたからだ。

「邪魔はさせないよ」

その少年は、中島だった。

第２６話　雷鳴を纏いし・・・哀

（な、何だ！？この禍々しい魔力は）

俺は、中島の気を感じて唇を噛んだ。

（どんどんと魔力が上がっていく）

黒い霧のような魔力が、中島の全身から漂い、その霧の中で光がスパークしていた。

「できれば…使いたくなかった」

中島は呟くような声で、話し出した。

「俺も…相原も、この世界で、人間として健やかに暮らしたかった」

（涙！？）

俺は、中島の瞳に涙を見たような気がした。

「ククク！やりなさい」

桂は、後ろから中島に命じた。

「但し、肉体は残しておくのよ！」

「！？」

唖然とする俺の目の前で、中島の姿が変わった。

人間である原型は残らず、四肢で空中に浮かぶ姿は…この世界に存在する動物にいかなかった。

しかし、それでも…俺は知っていた。

存在しない架空の存在として。

「麒麟か！」

龍に似た顔の額には角があり、鹿の身体に牛の尾と馬の蹄を備えた…その姿は、まさしく神獣麒麟。

雷雲を身に纏い、グラウンドを見下ろす麒麟に、俺の全身が身震いした。

（面白い！）

心の中でにやりと笑い、茉莉の体であるが、牙が生え…瞳が赤くなった瞬間、世界がブレた。

（な！）

俺は絶句すると、赤くなった瞳が戻した。

（あなたが向こうに行けば…世界のバランスが崩れる）

和美の言葉が、頭の中でよみがえった。

（ま、まじかよ！俺の魔力は、3分の1だぞ。そんな魔力を、少し使うだけでも駄目なのか！クソ！）

俺は、興奮による魔力の発動を抑えた。

そんな数秒の葛藤が、俺に隙を作ることになってしまった。

「君に罪はない。ごめんよ」

麒麟となった中島の体を覆う雷雲から、雷が放たれ、俺に直撃した。

「く」

俺が麒麟と化した中島の攻撃を受けている時、西館の裏では、九鬼と乙女ダークの戦いが続いていた。

いや、戦いとは言えなかった。

一方的な力による…いたぶりだった。

乙女ダークと九鬼との差は、天と地ほどあった。

乙女ダークの攻撃を受け流すこともできなかった。

合気道の達人も、走っている新幹線を投げ飛ばすことができないように…九鬼は、乙女ダークの攻撃を受け流すことができなかったのだ。

だから、逃げ惑うしかないのだが…スピードも、乙女ダークが上だった。

（遊ばれている）

とわかっていても、どうすることもできなかった。

乙女ダークという鳥籠の中にいる九鬼は、その中でもがくだけだった。

だんだんと避けるだけで、九鬼の制服は切れ…皮膚にも綺麗な傷が走っていった。

「フン！私の絶望は、こんなものではなかった」

乙女ダークは動きを止めると、冷や汗を流す九鬼を睨んだ。

「あ、あなたは、一体？」

九鬼は、乙女ダークの攻撃の型を見て、どこか自分に似ていると感じていた。

まるで…道場の同門とやるような。

「お前と話すつもりはない」

乙女ダークは、腰を屈めた。

その様子に、九鬼は必殺技が来ることを確信した。

（仕留めに来る！だけど！）

普段ならば、カウンターで合わせるのだが…明らかに差があった。

（それでも、少しでも…報いることができたら）

九鬼が覚悟を決めて、乙女ダークと同じ体勢をとろうとした時、後ろから声がした。

「わからんな～。なぜ使わない？その力を」

「！？」

九鬼は目を見開いた。

「一度、封印を解いてやったんだ。だから、お前のやりようで何度でも解けるはずだが？」

真後ろに現れたのは、刈谷であった。

「はあ～」

乙女ダークの足元に、淀んだムーンエナジーが絡み付く。

「神の力…。使わぬのか？」

刈谷の言葉を背に受けて、九鬼は目を見開いた。

「そうだ。それでいい」

刈谷は笑うと、九鬼に背を向けて歩き出した。

「月影」

「キック！」

乙女ダークと九鬼が同時に叫ぶと、２人はジャンプした。

「フッ」

少しにやけている刈谷の前に、乙女グリーンが着地した。

「知らなかったわ。お前が、そんなにお節介だったなんて」

眼鏡を取ると、リンネに戻った。

刈谷はさっと跪くと、頭を下げ、

「私はただ…炎の騎士団として、やつに借りを返しただけでございます。この世界で、リンネ様にお仕えする為に…あやつの力を借りた故に」

「そう」

刈谷の言葉に、リンネはただ背を向けると歩き出した。

「リンネ様」

刈谷は動かない。

「しつこい男は嫌いだけど…忠義心は好きよ」

「リ、リンネ様…」

刈谷の背中が震えていた。

「好きにしなさい」

「は！」

刈谷はもう一度地面に額がつくほど、頭を下げると、立ち上がった。

「♪」

リンネは歩きながら、緑の乙女ケースを軽く投げて遊んでいたが、西館を曲がり、九鬼達とは反対側に回ると、開いている窓から、乙女ケースを差し入れた。

「ありがとう。でも…あなたはよかったのかしら？」

「…」

校舎内で廊下の壁にもたれ、携帯でメールを打っている花町蒔絵は、送信してから、乙女ケースを受け取った。

すると、リンネの胸元からメールの着信音が響いて来た。

リンネは谷間から携帯を取ると、メールを確認した。

「了解」

それだけ言うと、蒔絵の近くから離れた。

「クスッ」

少しの笑い声を残して、リンネは消えると、その後を追って刈谷も消えた。

「黒焦げにしてもいいけど、灰にはしないでね」

中島の怒涛の攻撃を見て、満足気に頷くと、桂はその場から歩き出した。

「あたしにもやることがあるから」

そして、九鬼と乙女ダークが戦っているはずの西館裏に向かった。

「生徒会長様は、今頃ボロボロにかしら？」

鼻歌混じりで楽しそうに、西館裏に向かった桂は…予想外の結果に一瞬、言葉を失った。

倒れているのは、九鬼ではなく…乙女ダークの方だった。

激しく肩で息をする九鬼を見て、桂の表情が変わった。

「ど、どうして！あんたが！」

「！」

桂の声に気付き、九鬼は顔を向けた。

「桂さん？まさか…あなたに会えるなんて…死んだはずのあなたに」

少し笑顔になった九鬼に、桂はキレた。

「どうして、あんたは！また生きているのよ」

桂は血走った目で、九鬼を睨み、

「あたしは、あんたが生きていることが許せない！」

プラチナの乙女ケースを突き出した。

「そ、それは、理香子の乙女ケース！」

九鬼は驚きの声を上げると、表情を強張らせた。

「これは、あたしが頂いたのよ！力だけではなく」

桂は九鬼の変化に喜ぶと、スカートのポケットから、瓶を取りだして見せた。

「女神自身もね」

「桂さん！」

九鬼は、桂に向かって走り出した。

「フン！」

桂は鼻を鳴らすと、顎を上げて見下すような格好になりながら叫んだ。

「装着！」

プラチナの光が、桂を包み…乙女プラチナへと変身させた。

「理香子を返して！」

助走をつけ、飛びかかろうとする九鬼に、乙女プラチナは瓶をつまんで見せた。

「下手な動きをすると、握り潰すわよ」

「クッ」

空中で顔をしかめると、目の前に着地した九鬼の首筋に、乙女プラチナは回し蹴りを叩き込んだ。

ふっ飛んで、地面を転がる九鬼を見て、乙女プラチナは歓喜の声を上げた。

「最高～！無敵の生徒会長様も、こう見たら…無様ね」

「あ、あなたの目的は何？」

何とか立ち上がると、九鬼は乙女プラチナを見つめた。

「目的？目的は簡単よ」

乙女プラチナは、瓶をポケットに入れると、九鬼を指差し、

「あなたが生きているのが、許せない！いや、あたしが死んでいるのに…みんなが生きているのが、許せない。だから、みんな死んで貰うのよ！」

にやりと笑った。

「そ、そんな理由で」

九鬼は構え直した。

「それに、心配ないわ。死んでも、こうして～あたしはいるわ。だから、大丈夫！みんな、死んでも！ねえ…だから…みんな死んでよ」

懇願するような桂の瞳の奥に、九鬼は哀しみを見た。

だからこそ、構えた。

「命を好きにさせない！」

「命なんて、奪ったもののものなのよ」

乙女プラチナの全身が、輝く。

「誰にも権利はない！」

九鬼は、拳を軽く握り、桂に向けて突き出した。

「だったら、なぜあたしは死んだの？だったら、なぜ毎日誰かが殺されるの？この世界は、こうやって動いている。弱者は採取され、殺される！だけど！」

乙女プラチナは動いた。

一瞬で、間合いを詰めた。

2人の視線が、絡まる。

「だけど、死んだ今だからわかる！あたしは、死ぬことで！強者達より上に立てた！そして！」

乙女プラチナの蹴りを、九鬼は避けた。

「死んで初めて、人は平等になれる。だって、あたし達に食欲も物欲もない！あるのはただ…」

乙女プラチナの攻撃は、続く。

「生きているものを殺してあげたいという思いだけよ」

「ふざけるな！」

乙女プラチナの攻撃の隙間をついて、九鬼の蹴りが入った。
胸元にヒットしたが…乙女プラチナはびくともしない。

「無駄よ。死んだ者を殺せない」

「く」

九鬼は顔をしかめると、乙女プラチナから離れた。

「それに…」

乙女プラチナは瓶を取りだし、九鬼に見せた。

「あたしの手には、これがある」

楽しそうに笑った乙女プラチナの後ろで、雷鳴が輝いた。

「生きている人間って、ほんと…不便ね。こんな女1人の為に、苦しんでる」

「まさか！」

九鬼ははっとした。

「あの雷鳴は…中島が起こしているのか！」

「馬鹿な男よ。人間以上の力を持ちながらも、それを使うことなく過ごすのが、願いなんてね。小さい男よ」

「中島！」

九鬼の脳裏に、2人並んで恥ずかしそうに手を繋ぐ理香子と中島の姿が浮かぶ。

「そんな苦しみも死んだらなくなるわ」

乙女プラチナは、瓶を示し、

「あなたを殺した後、女神も殺して上げる。だけど…変な動きをしたら、先に殺すけどね。どうする？先がいいかしら？」

乙女プラチナは、首を傾げて見せた。

（桂さん…）

九鬼は乙女プラチナを睨みながらも、心の中では泣いていた。

桂は、こんな人間ではなかった。

しかし、闇に堕ちて…死んだ。

（人は弱く儚い。故に、強くなりたいと心掛けないと…すぐに、弱さに負けてしまう）

桂に哀しみを感じたからと言って、同情する訳にはいかない。

（あたしも負けてはいけない！）

九鬼は覚悟を決めた。

「はっ！」

経験の差か…。次第に乙女ブラックの動きを見切ったサーシャ。

「グラビティアーム！」

血に色濃く残るエルフの魔力を発動させたサーシャの瞳が、エメラルドグリーンに輝く。

次の瞬間、乙女ブラックの動きが止まった。

数倍の重力が、乙女ブラックだけにかかり、動きを封じたのだ。

地面にめり込んだ足が、乙女ブラックの技をも奪った。

「は！」

気合いとともに、乙女ブラックの横を通り過ぎたサーシャ。

ドラゴンキラーを一振りすると、乙女ブラックに向かって言った。

「安心しろ。やっと終わりだ」

「！」

乙女ブラックの眼鏡が真っ二つになると、地面に落ちた。

すると、変身が解け、崩れ落ちるようにグラウンド上に倒れた。

「さてと…」

サーシャは深呼吸すると、自分の立ち位置を確認した。

ほぼグラウンド中央にいる自分の右側…体育館前には、フレアがいた。

校舎寄りには、太陽が…麒麟と化した中島の攻撃を受けていた。

「…」

サーシャは迷うことなく、太陽のもとに向かおうとした。

「大丈夫です！」

そのサーシャの動きを読んだ太陽が叫んだ。

「大丈夫ですよ」

数発の雷撃を受け、地面に片膝をつけてしまったが、何とか立ち上がることができた。

「電気には、慣れてしますから…。もっと凄い雷撃を喰らわされたこともしばしば…」

脳裏に浮かぶ…ブロンドの悪魔の姿。

しかし、その時と今とは、肉体が違う。

（これ以上喰らったら、アウトだ）

と思っていても、言葉に出す訳にはいかない。

「向こうに行って下さい！サーシャさん」

俺は、頭上に浮かぶ中島を睨み付けると、サーシャに向かって叫んだ。

「サーシャさん？なぜ…あたしの名を？」

サーシャは眉を寄せた。

しかし、そんなことを気にしている場合ではないことは、わかっていた。

それに…ボロボロになりながらも、立ち上がった少女の背中が、自分の知る…ある少年と重なった。

「！」

サーシャは目を見開くと、なぜか次の瞬間には、太陽に背を向けて走り出していた。

その足音を背中で聞きながら、俺は今の状況を打破する方法を考えていた。

（どうする？）

魔力も使えない。

このままでは、勝ち目はない。

（くそ！）

考え悩んでいる俺を見て、頭上に浮かぶ中島は重い口を開いた。

「できれば…このまま、気を失ってほしい。そうすれば、もう…痛い思いをせずに、終わることができる」

中島の言葉は、優しいように聞こえるが、違った。

俺は顔をしかめ、

「気を失ってる間に、殺して…肉体を奪う！そんなことをしょうとしている癖に、何を言ってやがる！」

中島をさらに睨んだ。

そして、中島を指差すと、

「お前は、そうすることで、自分の罪を軽くしたいだけだ！その方が痛みを与えなかったと、自分を慰めたいだけだ！そんな言い訳に

付き合えるか！」

俺は、怒りを露にした。

その怒りは、中島に対してでもあるが…それ以上に、そんなことを彼に、そして彼女らにやらしている相手に向けられていた。

「俺が、あんたを倒す！」

俺が決意を決めた瞬間、どこからか…回転する2つの物体が飛んできた。

「例え…魔力が使えなくても…普通の人間は、いつも戦ってきた。弱い肉体を守る為に、強い相手に立ち向かう為に！」

中島を指差している俺の手におさまる前に、回転する2つの物体は十字にクロスした。

「武器を手にした！」

俺は、それを握り締めると、一振りした。

「ライトニングソード！」

時空を越えて、俺の手に伝説の剣が握られた。

第27話　魔王の力

「ライトニングソード！」

フレアとともに、月影との戦うサーシャは、太陽の手にある剣を見て、驚きの声を上げた。

「どうして、あの剣が！この世界に！？」

「剣？そんなもので！」

中島の全身を覆う雷雲から、雷が放たれたが、俺の手にあるライトニングソードがすべてを吸収した。

「モード・チェンジ！」

俺はライトニングソードを振り上げながら、空中に向かってジャンプした。

瞬きの間に、中島を追い越し、見下ろす程の空中に飛び上がった。

「うおおおっ！」

咆哮を上げると、振り下ろす力と落下する力がライトニングソードに加わり、そのまま俺は地面に着地した。

「え！」

麒麟の姿になった中島を中心にして、空が割れた。

「な、何！？」

乙女ダイヤモンドを蹴り飛ばしたサーシャは、裂ける空を見上げた。

スライドしたように見えた空は、数秒後には元に戻った。

しかし、その異様な光景は、サーシャに戦慄をもたらした。

「な、何だ！？この威力は！」

驚いているのは、サーシャだけではなかった。

ライトニングソードを振るった俺自身が、唖然としていた。

中島の中にある魔獣因子だけを、切り裂こうとしたはずなのに…空間が裂けるなど予想外だった。

それに、ライトニングソードを振るった腕が痺れていた。

（前よりも…数段、いや段違いに強力になっている）

そこまで考えて、俺ははっとした。

（そ、そうか！もしかしたら…ライの力が加わったから）

まじまじと刀身を見つめていると、後ろで落下音がした。

「!?」

慌てて振り返ると同時に、俺の手から、ライトニングソードは分離すると、2つの物体に戻り、どこかへ飛んで行った。

（やり過ぎたか！）

ライトニングソードの威力を見て、俺は中島の体も真っ二つになったと確信していた。

下唇を噛み締めながら、中島のもとへ走った。

砂煙が消えると、グラウンドにめり込んだ中島が姿を見せた。

麒麟の姿ではなく、人間の姿をした中島がいた。

胸元に、ライトニングソードによる傷が走っていたが真っ二つにはなっていなかった。

「よかった…」

何とか制御できたようであった。

ほっと胸を撫で下ろしが、まだ腕が痺れていることに気付き、俺はまじまじと手を見た。

「相原…」

気を失いながらも、中島が呟いた言葉に、俺ははっとした。

「月の女神は！？」

（空が割れた？）

乙女プラチナと戦いながら、九鬼は一瞬の変化に気付いていた。

「余所見をするな！」

乙女プラチナの回し蹴りをかわし、後方に逃げた九鬼の横に倒れている猫沢がいた。

そして、猫沢のそばには黒く変色した乙女ケースがあった。

「乙女シルバーの力を使わないのかい？もっとも、変身した瞬間、闇に堕ちるけどね」

乙女プラチナはせせら笑いながら、九鬼に近付いてきた。

（死者である彼女を倒す為には、乙女シルバーのムーンエナジーがいる！しかし！）

九鬼の頭上にある月は、変色していた。

「どうした？拾わないの？」

乙女プラチナが神速の動きに入ろうとした瞬間、回転する2つの物体が遮った。

「な、何だ!?」

突然、戦いに割って入ったものに、乙女プラチナは足を止めた。

同じく…乙女ケースに手を伸ばしかけていた九鬼も、動きを止めた。

「これは!?」

九鬼の記憶が、よみがえる。

（赤星君!）

しかし、西館裏に飛び込んで来たのは、赤星浩也ではなく、女の子だった。

「行くぞ!」

俺は走りながら、乙女プラチナの動きを止めた2つの物体が戻ってきた瞬間、掴んだ。

すぐに、胸元でクロスさせると、今度は十字架に似た剣に変わった。

「シャイニングソード！」

「小娘が邪魔をするな！」

乙女プラチナの姿が振り向き様、消えた。

「モード・チェンジ！」

俺の姿も消えた。

「！？」

その様子を見ていた九鬼は、目を見開いた。

「は、早い…」

九鬼がそう呟いた時には、戦いは終わっていた。

「な」

絶句する乙女プラチナの動きが止まると同時に、彼女の体は浄化されて…消えた。

プラチナの乙女ケースが、地面に落ちて転がった。

（何？まったく見えなかった）

九鬼は、いつのまにか自分を追い越していた俺に気付き、振り返った。

シャイニングソードは分離すると、どこかへ飛んでいった。

「な、何とか…やれたな」

ほっと安心した瞬間、いきなり体が重くなり…俺は、足から崩れ落ちた。

（やはり…モード・チェンジの使い過ぎか…。この体でも、これが限界）

太陽の器と言われているが…普通の人間の女の子の体である。

（でも…それよりも）

崩れ落ちた体よりも、俺は手に握っていた瓶を気にしていた。

（何とか…取り戻せた）

瓶に閉じ込められた月の女神の無事を確かめると、胸を撫で下ろした。

そして、よろけながらも立ち上がると、瓶を開けようとした。

しかし、瓶を開ける力がなかった。

「申し訳ないけど…開けてくれるかな?」

俺は、後ろにいる九鬼に声をかけた。

「あっ。はい」

九鬼は慌てて、俺に近付くと瓶を受け取り、蓋を回した。

すると、光が瓶から飛び出し、頭上の月に注がれると、もとの色へと戻った。

その瞬間、グラウンドにいた月影達は勝手に変身が解け、そのまま気を失った。

俺は空を見上げ、月を見つめた。

「理香子！」

解放され、もとの大きさに戻った理香子を、九鬼が抱き締めていた。

ちらっと視線を2人に向けた後、俺はゆっくりと歩き出した。

「待って！あなたは！」

その動きに気付いた九鬼が、呼び止めたけど…俺は足を止めなかった。

ふらつきながらも、校舎内に入り、あてもなく歩き続けていると突然、目の前がブラックアウトした。

（気を失ったのか？）

冷静に考えていると、俺を包む闇が笑った。

（力の使い方すら知らないお前が、今度はその弱き肉体で、何をする？）

俺は、その声に聞き覚えがあった。

（ライ！）

（フッ）

ライは笑うと、

（この世界を救い…あの世界も救いたいか？）

今度は真後ろから声がした。

（お前のような中途半端な力では、何もできない）

（何だと！）

俺が、反論しょうとした時、再び笑い声が聞こえた。

（しかし、もがくがいい。それが、お前の言う…前に進むことなのだろう？）

（ライ！）

（必要ならば、我の力を使うがよい。但し…今のお前に使えるかな？ハハハハ）

ライの高笑いが耳から遠ざかっていくと、視界に光が戻ってきた。

（！？）

俺はふらつくと、思わず廊下の壁に手をついた。

ほんの数秒だが…目を見開きながら動きを止めた後、倒れそうになった俺を、人が見たらおかしく思っただろう。

だけど、廊下の柱に手をついた俺の後ろを、携帯片手の蒔絵が通り過ぎたが…まったく無視された。

「成る程な…。気をつけろということか」

俺は下唇を噛み締めた。

どうやら、先程…中島が真っ二つにならなかったのは、俺が制御できたのではなく…ライのおかげのようだった。

（しかし…先程の空を割る程の力を…示してしまった。これから、きつくなるな）

それは元々、覚悟していたことだった。

時計台の下の部屋にいた真田と開八神茉莉は、戦いを結末までずって観覧していた。

「今の武器…。この世界のものではありませんな。威力が桁違いで

す。それに…」

真田は人差し指で眼鏡をあげると、

「あのような武器を、どこで手に入れたのか？それに、あの身体能力」

グラウンドに倒れている中島を見下ろした。

「流石は～太陽様ですわ。わたくしの伴侶に相応しいお方！わたくしの体にも、なじんでいらっしゃるご様子」

茉莉は、嬉しそうに微笑んだ。

その様子を見て、真田は気付いた。

「お嬢様。あまり…驚かれていないご様子ですが…」

「ウフフ…」

茉莉は胸に手を当てると、

「この体に入ってから、わかりますの。あの方の特別さを。やはり、あの方は…この世界のアダムになりますわ」

目を閉じ…にやりと笑った。

「くっ」

ダメージが、すぐには回復しなかった。

俺はふらつきながらも、正門を目指した。

「お嬢様」

西館から中央館、そして東館を抜けた俺の前に、小柄な男が突然姿を見せた。

深々と頭を下げた後、男は顔を上げた。

「ご予定通り、御迎えに参りました」

「？」

一瞬、首を傾げたが、すぐに思い出した。

（レダのパーティーか）

俺は歩こうとしたが、すぐにふらついてしまった。

「肩をおかししましょう？お嬢様」

どこか淡々とした物言いの男の申し出を、俺は断った。

「大丈夫です」

笑顔を男に向けた俺の腕を後ろから、掴む者がいた。

「そう言わずに、素直になりましょうよ。お嬢様」

「！」

驚いた俺の脇に、強引に肩を入れたのは、高坂だった。

「ご級友ですか？」

男の質問に、高坂は笑顔でこたえた。

「ええ。今日のパーティーには、お嬢様からお誘いを受けておりまして」

「な」

勿論、そんな約束はしていない。

「さあ～行きましょう」

しかし、高坂は強引に、俺を連れて歩き出した。

普段なら、振り払うのだけど…今の俺に、そんな力はない。

「わかりました。それは、予定外ですが…お一人くらいは…」

「いや…もう1人追加してくれ」

反対側の脇に、サーシャが肩を入れてきた。

「サーシャさん…」

思わず目を丸くした俺に、サーシャは顔を向けずに、小声でこたえた。

「お前の正体は、後で確かめる。今は…」

そこまで言ってから、サーシャは前に立つ男を見た。

一見、小太りの普通の男に見えるが…。

（佇まいが違う！只者ではない）

サーシャは、男の立ち方一つで力量を推測していた。

「では…行きましょうか？」

男は三人に頭を下げると、前を向き、歩き出した。

「いくぞ」

サーシャの号令で、高坂が歩き出した。

俺も引きずられるように、足を進めた。

「あのお～」

歩きながら、俺は高坂に顔を向け、

「今から向かう場所は…何があるかわかりません。サーシャさんはともかく…あなたは、危険です」

きっぱりと言い放った。

「確かにそうかもしれないが…」

高坂はフッと笑い、

「危険な場所にいかないと知ることができないなら…俺は行く。何があっても。それが、情報倶楽部部長としての生き方なんでね」

肩を入れ直した。

「…」

その意志の強さを感じ、俺は諦めた。それに、無理矢理振りほどく力もなかった。

（とにかく、今は…体力の回復に努めよう）

体力が戻れば、守ることもできるはずだった。

そう考えていた俺の耳に、昔聞き慣れた…ある音が飛び込んで来た。

「失礼」

高坂は上着のポケットから、携帯を取り出した。
しかし、鳴っているのは…携帯ではなかった。
「!?」
高坂も驚くと携帯をしまい、あるものを取り出した。
「!」
俺は目を見張った。
それは、一枚のカードだった。

「真。聞こえる?」
洗脳が解けて、意識を失った緑を、情報倶楽部の部室まで運んださやかは、カードを耳に当て、高坂に連絡していた。
「どうやら…向こうの世界と少し繋がっているようね。カードシステムが、復活しているわ」
「カードが使えるのか!」
高坂は驚きの声を上げた。
「あまり喜ばしいことではないけどね」

さやかは、部室内のベッドに横になっている緑を見つめ、

「汚れた月に操られていた他の子達は、保健室に運んで、生徒会長が見ているわ」

「そうか…。了解した」

「あんたも無茶をしないようにね」

さやかとの通信を切った高坂の手にあるカードを、俺はまじまじと見つめた。

「うん？」

あまりの視線の強さに、高坂は俺の顔を見、誤魔化すように言った。

「最近の携帯は、ついにこんなに薄く…」

「体力回復させてくれませんか？」

高坂の言葉を遮るように、俺はじっと目を見つめ、頼んだ。

その瞳の強さに、高坂は理解した。俺が、そのカードを知っていることに。

だから、素直に本当のことを口にした。

「残念ながら…このカードにはポイントがない。使えるのは、通信

機能だけだ」

カードシステムとは、ブルーワールドでティアナ・アートウッドが考案、開発したものであった。

魔王ライにより、妖精や精霊が住めなくなった世界では、人間は魔物を使えなくなった。契約できないからだ。

そんな状況を打破する為に、カードシステムは作られた。

倒した魔物から魔力を奪い、それを使役する為に。

（そうか！この世界には、魔物がいない。だから、ポイントを貯めることができないんだ）

ポイントとは魔力である。

そんなことを真剣に考えている俺の顔を見て、高坂が口を開きかけた。

「君は…一体」

しかし、最後まで話すことはできなかった。

いつのまにか…校門前に着いていた。

「お嬢様」

黒いリムジンが校門前に移動すると、小柄の男はドアを開き、深々と頭を下げた。

その行為に邪魔された形になった高坂は、口をつむんだ。

3人がリムジンに乗り込むと、前の席に小柄の男が座った。

ゆっくりと発車する車の揺れに、身を委ねながら、俺は先程の月影の騒動を思い出していた。

（仮にも女神であるものを、瓶の中に封印する相手がいるとは…）

俺は、それが気になっていた。

しかし、その封印した相手は、あの場にはいなかった。

（神レベルの…それも強力な相手がいるな）

俺は確信した。

「…」

リムジンの広い車内の中でも、高坂は気を許してなかった。

どこか…落ち着かない雰囲気があった。

サーシャは、車内に入ってからずっと、目をつぶっていた。

「ふぅ～」

高坂は軽く息を吐くと、まだ手に握り締めていたカードに目をやった。

「！？」

何と、カードの反応が消えていた。

（まさか）

高坂は、カードをぎゅと握り締めた。

（まだ使える場所が限られているのか。すると…完全に繋がった訳ではないのか）

3人を乗せた車は、市街地を抜けた。

第２９話　序曲

「ま、まさか…こんなところに来るなんて」

華やかなパーティー会場で、１人浮いてるように感じていた飯田直樹の横で、小太りの紳士と談笑を終えた天城志乃は、ため息をついた。

「単なる自慢の見せ合いよ。金と暇をもてあました奴らのね」

各々に着飾った姿を、高貴と見るか…滑稽と思うか。

「そして…この場で、最高のデコレーションのご登場よ」

作り笑いで笑い合う人々の声が、歓声に変わった。

「レダ…」

会場に現れたのは、歌姫…レダであった。

ステージ上では、大きく見える彼女は…同じ目線で見ると小さく見えた。

早速、彼女に群がる人々。

その姿はすぐに、見えなくなった。

直樹は、手に取っていたワイングラスを置くと、人混みを見つめ、

「しかし…まだ、彼女はデビューしたばかりの新人でしょ？こんなパーティーが開かれるなんて…」

「そんなことはないわ。それだけ彼女に、魅力がある。そして…金の匂いがするのよ。ここに集まった奴等は、そういうのにだけ鼻がきくのよ」

少し吐き捨てるように言った志乃は、口直しに、グラス内のワインを飲み干した。

そんな2人から離れたテーブルに、2人の外国人がいた。

「ウフフ…」

レダに群がる人々を見つめながら、妖しく微笑んだのは、ティアだった。

「いつ見ても面白いわね。金に成る木に群がる…金ずる達」

「そうだな」

1人に立つジャックは、にやりと笑うと、煙草に火を点けようとした。

「ジャック」

「あっ…そうだったな」

ティアのたしなめる声に、ジャックは手を止めた。

煙草をスーツの内ポケットにしまうと、顔をしかめた。

「死んでから…金への執着や食欲もなくなったのに、煙草だけ手が伸びやがる」

「それが…あなたの魂に刻まれている習慣なんでしょうね」

ティアはジャックから目を離し、レダの方を見た。

「大したことないな。俺も」

ジャックは苦笑すると、ティアの横顔を見つめ、

「ところで～あんたの魂に刻まれているものは、何だい？それに…この世界に戻った理由も知りたいねえ」

にやりと笑った。

「…」

ティアは無言で目だけを、ジャックに向けた。

「あんたは自殺したと聞いている。ということは、祖国を内乱状態にした…民主主義国家への復讐かな？前のように、アメリカに対する」

ジャックの探るような言い方に、ティアは視線をレダに戻すと、口を開いた。

「時代は変わったわ。民主主義とか社会主義の対立だけでは、説明

をできなくなった。インターネットによって、情報を簡単に得ることができるようになった社会で、アメリカとか国家を壊したところで、世界は変わらない」

「だとしたら、あんたがいる理由は？」

「人にばかりきいて、あなたの理由は何なの？」

ティアは横目で、軽く睨んだ。

「お、俺か？」

突然震え出すと、ジャックは無意識に煙草に再び手を伸ばし、

「簡単なことさ。死んだやつが願うことは、生きてるやつらの死だ」

唇にねじ込んで初めて手を止めた。

「そう…」

ティアは、ゆっくりと歩き出した。

「あたしの理由は…まだわからないけど…。魂に刻まれたものはわかるわ」

「ほぉ～」

ジャックは、今度はしまうことなく、火を点けた。

「音楽よ」

ティアはレダを真っ直ぐに見つめながら、彼女に近付いて行く。

「音楽ねえ～」

ジャックは煙草を吹かすと、ティアの遠ざかる背中を見つめ、

「あまり退屈にはさせないでくれよ。あんたは、俺に貸しがあるんだからな」

ゆっくりと目を細めた後、煙草の煙を吐き出した。

「あんたが、俺を殺すように手配したことは…わかっているんだからな」

しかし、すぐに煙草を簡易灰皿にぬじこむと、ジャックは口元を緩めた。

「あんたが死んでなければ…俺の目的は決まっていたんだけどな」

手だけをテーブルに伸ばすと、ワイングラスを掴んだ。

「ちょっと息苦しくないですか？」

レダに近付くこともできずに、手持ちぶさたになった直樹は、空気が薄いことに気付いた。

大勢の人間が、部屋の中に詰まっているからだろうか。

「そうね」

志乃もそう思っていた。

音楽業界の関係者達に、一応挨拶をするという仕事はある程度終わった為に、２人は会場から出ることにした。

ドアを開けて、会場の外に出ると、４人の新たな来客が到着したのを目撃した。

「お嬢様。会場に入る前に、着替えの方を」

入ってきたのは、太陽達だった。

「必要ない」

俺は、学生服のままで中に入るつもりだった。

さっきの戦いで、少し汚れてしまったが、ドレスのような動きにくいものを着る気にはなれなかった。

「お嬢様！」

小柄な男の声を無視すると、俺は真っ直ぐに会場に入るドアを目指した。

車内で少し休んだ為に、歩けるようになっていた。

（血を吸えば…回復するかもしれないが…この体に、牙はないしな）

俺は歩きながらも、体の回復状態を確かめていた。

「お嬢様！」

「仕方ないな」

高坂は頭をかくと、俺の後に続いた。

勿論、サーシャもだ。

ドアから出てきた直樹と志乃は、接近してくる俺から異様な気を感じたからか…道を開けた。

俺は2人に軽く頭を下げると、勢いよくドアを開けて、会場に飛び込んだ。

「うん？」

中に入った瞬間、俺は足を止めた。

なぜならば…誰もいなかったからだ。

いや…正確には、3人だけいた。

「おや。来客だぜ」

煙草をくわえた男が、俺の方を見た。

「そう」

レダの前で、服装の乱れをチェックしている金髪の女は、背中を向けている為に、俺は顔を見れなかった。

「どうした?」

真後ろにいた高坂が、肩越しに会場内を見た。

「まだ始まっていないのか?」

人数が少なすぎると思ったが、テーブルに並んだ取り皿を見て、眉を寄せた。

「え…。誰もいない」

高坂の横から、顔を覗かせた直樹は、絶句した。

「何だ!」

突然、足下に違和感を感じた。

俺は咄嗟に、振り返り叫んだ。

「入るな!」

次の瞬間、足下の床がなくなった。

「さようなら」

レダの前にいた女が振り返り、微笑んだ。

「!?」

その顔を見た瞬間、俺の全身の力が抜けた

「ティアナさん!」

底が見えない穴になった会場から、俺は落下した。

だけど、回転する2つの物体が穴の底から飛んできて、合体すると足場になった。

「どうして、ティアナさんが!」

チェンジ・ザ・ハートの中心に立つと、俺は叫んだ。

「残念だけど…あたしは、ティアナではないわ」

狼狽えている俺に微笑むティア。

しかし、俺には…ティアナさんにしか見せない。

「あなたは、勘違いしている」

「馬鹿な!」

またま納得できない俺の肩に、後ろから誰かが手を置いた。

そのまま、俺の肩を弾くと、前方に飛んだ。

「！？」

ティアは、目を見開いた。

なぜならば突然、目の前にドラゴンキラーの切っ先を向けたサーシャが飛び込んで来たからだ。

サーシャはドアからジヤンプすると、俺の肩を中継点にして再び飛ぶと、ティアに襲いかかったのだ。

「サーシャさん！」

足場のないはずの穴の中央で、普通に立つ３人。

一番近いティアの胸を、ドラゴンキラーは突き刺したはずだった。

しかし、現実は違った。

ドラゴンキラーは、ティアの前に回ったレダの左腕に止められていた。

「何！？」

驚くサーシャの耳に、モーターが回るような音が響いて来た。

その音を聞いた瞬間、俺はサーシャに向かって叫んだ。

「逃げて！」

「チッ！」

サーシャは舌打ちすると、レダの腹を左足で蹴って、後ろに飛んだ。

着地した瞬間、会場は元の状態に戻った。

しかし、サーシャの左足の爪先と、ドラゴンキラーを装備していた右腕がなくなっていた。

「く！」

顔をしかめたサーシャの右腕と、左足の先から砂が零れ落ちた。

「砂？」

その様子を見た直樹は、目を丸くした。

しかし、それよりも、驚くことがあった。

「オウパーツ！」

高坂は、絶句した。

目の前に立つレダの左腕に、オウパーツがついていたのだ。

第３０話　似ていて非なる者

「オウパーツだと！？」

床が元に戻った為、足下で分離したチェンジ・ザ・ハートを、俺はシャイニングソードに変えると、ジャンプした。

「どけ！」

縦と矛の関係にあるシャイニングソードで、オウパーツを弾き返そうとした。

しかし、びくともしない。

「な！」

俺は、目を見開いた。

少し腰を屈めて、顔を俯き加減にしながらも、オウパーツの左腕でしっかりと受け止める安定感に、ただ者ではないと直感した。

「…」

レダはゆっくりと、顔を上げた。

「！」

長い睫毛の下にある憂いを帯びた瞳を見た瞬間、俺はレダに深い悲しみを感じた。

だが、そんな悲しみとは別に、シャイニングソードを受け止める左腕が唸り声を上げた。

「チッ！」

俺は舌打ちすると、後ろにジャンプした。

オウパーツから放たれた振動波が、レダの足下の床をすり鉢状に抉り取った。

（その体では、振動波に耐えられない）

俺は、改めてシャイニングソードを構え直した。

「ご機嫌よう。お嬢さん」

ティア達は微笑みながら、会場奥の従業員通路から、外に出た。

「ティアナさん！」

俺は後を追う為に、シャイニングソードで突きの体勢を取った。

それを見て、サーシャが叫んだ。

「目標を見失うな！用があるのは、あの女ではない！」

「く！」

俺は顔をしかめた。

確かにその通りである。

ティアナ・アートウッドにそっくりな女と、オウパーツの出現に取り乱してしまった。

（ま、まさか…ティアナさんにそっくりな人がいるなんて…）

それは…何処と無く、アルテミアに似ているということになる。

（くそ）

サーシャの言葉で、冷静になれたが、目の前のレダが危険であることには変わりなかった。

（フラッシュモードで、腕だけを斬るか）

そんな物騒なことを考えている俺の横に、高坂が来た。

「君は…何者なんだ？」

高坂は、静かに佇むレダを凝視した。

あまり殺気を感じないが、近付けば…塵になる。

「いや…」

高坂は、俺から一歩前に出ると、

「質問を変えよう」

拳を握り締めた。

「？」

高坂の動きで、場の空気が少し変わった。

俺は一度力を抜くと、深呼吸をした。

レダに攻撃をするよりも、高坂を守らなければならなくなった。

「君は…」

高坂は、真っ直ぐにレダの目を見つめた。

「奴等の味方なのか？」

高坂の言葉に、レダは首を横に振った。

「君は！」

高坂は、さらに前に出た。

「この世界の人間ではないね」

その言葉に、レダは頷いた。

「やはり」

高坂は頷いた。

「この世界の人間じゃない？」

サーシャは、右腕を押さえながら、眉を寄せた。

「あたしは！」

突然、レダの雰囲気が変わった。

左腕が、再びうねりを上げた。

「あの世界に戻りたい！」

「！？」

驚く高坂に向かって、床を蹴ると、レダは左腕を突きだした。

「モード・チェンジ！？」

俺の姿が消えた。

次の瞬間、レダの左腕が飛んだ。

「うおおっ！」

それだけではなかった。

レダの体も、中を舞っていた。

「やめろ！」

サーシャが叫んだ。

しかし、俺は止まらない。

レダは、後方に着地した。

「クッ」

しかし、腹に激痛が走った。腕を斬られただけではなく、腹を蹴られていたからだ。

「何という速さだ」

と、レダが呟いた時には喉元に、シャイニングソードの切っ先が突き刺さる寸前だった。

（お前は、人を殺してはいけない）

突然、アルテミアの声が響いた。

「間に合わないか！」

サーシャは、床を蹴った。砂になった右手が復活していた。

「！」

まったく反応ができなかったレダは、喉にシャイニングソードが突

き刺さることを覚悟した。

しかし――。

「はあ、はあ、はあ」

俺は、踏み止まっていた。

シャイニングソードの切っ先は、レダの喉にほんの少しだけ触れていた。

俺のそばに来たサーシャは、奇跡的に止まった剣の先を見つめ、ほっと胸を撫で下ろした。

しかし、少しは喉に刺さっている為に、出血するはずだった。

「な」

サーシャと俺は、絶句した。

何故ならば…流れたのは、血ではなかったからだ。

「砂…」

俺の後ろに立つ高坂は、目を見張った。

「あはははは！」

言葉をなくした3人に向かって、レダは笑った。

「そう！砂よ」

笑いながら、後ろに下がる間に、傷口は塞がった。

「あたしは、この女と同じ砂の世界から来た！」

レダは距離を取ると、足を止めた。

「砂の世界？」

高坂は知らなかった。

「未練や恨みを持った死人が、転生できずに…永遠に、生前の姿で暮らす世界よ」

サーシャは、レダを睨みながら説明した。

「！」

高坂は、サーシャの元に戻った腕と足に気付いた。

しかし、気にしている場合ではない。

高坂も視線を、レダに戻した。

「先程…あなたは、奴等の味方ではないと答えましたね」

シャイニングソードを下に下ろすと、俺はレダを見据え、

「だったら、なぜ彼らを逃がした？いや、それよりも、どうしてあ

んな歌を」

疑問をぶつけた。

「それは…」

レダは俺を見てから、視線を下に向けた。

そこには、オウパーツが転がっていた。

「わからない」

「わからない？」

俺は、眉を寄せた。

「なぜなら…あたしは、レダではないから…」

そう言うと、レダはオウパーツに向かって歩き出した。

「！」

レダの告白に、3人は言葉を失った。

レダはふらつきながら、オウパーツのそばに来ると、腰を下ろした。

「あたしは死に…砂の世界に落ちた。そして、奴等の計画に乗った」

「計画？」

俺は、しゃがんだレダの背中を見下ろした。

「奴等は、この世界の人間をブルーワールドに落とすだけではなく…砂と同化したあたし達の新たな肉体を、落とした人間からプレゼントすることを約束した」

伸ばしたレダの指が、オウパーツに近付いていく。

「しかし、あたしの肉体は残っていた。このオウパーツと共に…。だから、この世界に来たら…奴等を出し抜いて、肉体を取り戻すはずだった！なのに！」

そして、指先が触れた瞬間…レダの体は消えていく。

「あたしの体はなかった…」

レダは睫毛を伏せた。

その動きを見て、俺はレダの瞳に見た悲しみの正体を知った。

「他人の体を得て、生き返っても意味がないから」

レダの体が消えていく。

「待て！奴らの目的は、この世界の人間の肉体を奪い、ブルーワールドで生き返ることなのか！」

サーシャの質問に、レダは笑った。

「それが…すべてではないわ」

微笑みながら、レダは消滅した。

いや、実際的には…彼女はレダではない。

俺が彼女の名を知るのは、大分後のことである。

「…」

俺は、オウパーツのそばに溜まった砂を見つめた。

「彼女は、レダではない!?そう言えば…ステージでの歌声と…いや、歌になると声の感じが変わる者もいる」

悩む高坂を無視して、俺はオウパーツに手を伸ばした。

「や、やめろ!」

その行動に気付き、高坂は叫んだ。

「これは、魔王の防具だ。王の資格がある者。もしくは、適合者でなければ、塵になるぞ」

しかし、高坂の忠告とは違い、俺は難なく左腕に手にした。

(王の資格があるのか?)

サーシャは、右腕を見つめる俺を見つめた。

(やはり…この女の正体は)

サーシャが確信を持とうとしている中、俺はいろいろ考えていた。

（奴等の目的は、この世界の人間をブルーワールドに落とし、砂の世界の人間達に肉体を与える）

それだけでは、どうもしっくり来なかった。

（それに、本物のレダはどこに？）

すべては、まだ謎であるが…当面の目的は、レダ探しと、ティアナに似た女の行方を突き止めることに決めた。

「お嬢様」

変な空気が流れる会場内に、小柄な男が入ってきた。

俺に頭を下げると、

「お時間です」

周りの状況を気にせずに、淡々と言った。

「え」

俺は、オウパーツを手にしながら、目を点にした。

その夜のニュースは、会場内での五十人をこえる失踪事件を伝える…ことはなかった。

ただ…ラジオの生放送から、レダの声が聞こえてきた。

「皆さん。お元気ですか？」

第３１話　忘却の彼方

「どうだ？どこかに出ていないか？」

情報倶楽部の部室に戻った高坂は、舞を使って、徹底的に調べていた。

それは、昨日起こった事件に関してである。

「何十人の人間が消えたんだ。それに、レダだっていなくなったはずだ！」

パソコン前で、マウスを走らせる舞の肩越しで、高坂は画面を睨んでいた。

「やっぱり～ないですね」

舞は高速でマウスを移動させながら、目を忙しく動かしていた。

「そんなはずは！」

「レダに至っては」

舞は、画面をクリックした。

検索画面から、華やかな壁紙を施したホームページに変わった。

「ブログを今日の朝に、更新していますし」

「何！？」

高坂は、画面に顔を近付けた。

「ぶ、部長！」

舞は、首を曲げた。高坂の頭が邪魔で、画面が見れない。

「昨日だと！？」

高坂は、最新の日記を見て、眉を寄せた。

「舞！昨日とは、今日の昨日か！」

「どいて下さい」

舞は強引に高坂を、画面からどけると、マウスを移動させた。

「確かに、昨日ですね。部長が行ったパーティー？え！」

日記の内容に、目を走らせた。

「どうした？」

舞の表情が強張ったのに気付き、高坂はまた画面に顔を近付けようとした。

「邪魔！」

舞は肘で、高坂の動きを止めると、食い入るように画面を見た。

「昨日は…大辻でライブ？」

日記の横には、ライブ会場の様子が映されていた。

舞は下唇を噛み締めると、画面を変えた。

「パーティーに関しての記述がありません」

そして、トップページのスケジュールをクリックした。

「スケジュールにも、パーティーはありません」

「どういうことだ？」

高坂は画面から離れると、舞の横顔に目をやった。

「部長達が、パーティーにいた時間と…ライブの時間はかぶっていませんが…場所が離れ過ぎている。テレポートでもしなければ、すぐに移動できない」

画面は、地図検索に変わっていた。

「どういうことよ」

舞が苛ついている中、高坂は無言になり、次々に変わる画面を見つめていた。

「…舞」

数秒後、高坂は舞に命じた。

「もう一度、さっきのライブ映像を見せてくれるか？」

「は、はい」

画面が変わり、日記の横にあるライブ映像が映る。

「う～ん」

顎に手を当てて、高坂は画面を凝視した。

「どうしました？」

「他の映像は、ないのか？」

高坂の注文に、舞は巨大な投稿サイトへと移動させた。

「恐らく…あるかと」

レダの映像は、すぐに見つかった。

再生ボタンをクリックすると、ライブ映像が流れた。

しばし無言で見つめた後、高坂は目を細め、

「歌声は同じ…。しかし、演じているのは、別人のような」

もう一度、画面に顔を近付けた。

「うん？」

舞は、別の映像に変えた。

「そうですかね？」

舞には違いがわからなかった。

映像だけではなく、写真も検索する。

「映像の分析ソフトとか、あるといいんですけど…」

目で確認するだけでは、わからない。

「…」

高坂は無言で、カードを取り出すと、画面にかざした。

「！」

舞は、高坂の手にあるカードに気付き、

「ま、魔法ですか！」

目を見開いた。

「しかし、ポイントがない。魔物を狩らなければ、ポイントが入らない」

そう言うと、カードを握り締め、制服の内ポケットにしまった。

「カードシステムが復活したというのは、本当なんですね。あたしはずっと、部室にこもっていたので～ポイントが零のままで…」

「！」

舞の話の途中で、高坂は思い出した。

「そう言えば…。彼女は、カードを知っていた」

「この世界のカードのことじゃないんですか？」

舞は、マウスを持つ手を止めた。

「いや。体力を回復させたいと言った。彼女はなぜ？」

悩む高坂と違い、舞は検索画面に名前を打ち込んだ。

「開八神茉莉…」

しかし、個人情報の為か…彼女の名前は出てこなかった。

「そんな検索で出てこないだろう。しかし、相当な金持ちだと聞いている」

「ですね。でしたら…信憑性は落ちますが…」

舞は、サイトを移動させた。

巨大掲示板にアクセスすると、開八神と打ち込んだ。

そして、表示されたスレッド名を見て、

「いい噂はありませんね」

クリックしたが、すぐに読むのをやめた。

「レダに関してはどうだ？」

「彼女は…評判がいいようです」

「まあ～匿名サイトでの書き込みを、百パーセント信用はしないが…」

高坂は、パソコンから離れた。

「今のところは順調というところか」

と呟くように言うと、出入口に向かって歩きだした。

「こんな時間にお出かけですか？」

時間は、もう八時を回っていた。

「ちょっと呼び出しをくらってな」

高坂は、外に出た。

「寒っ！」

体育館裏に集合したのは、里奈達…月影であった。

高坂が部室を出ると、既にみんな集まっていた。

「揃ったわね」

理香子と九鬼の前に、里奈、夏希、蒔絵、加奈子、桃子、蘭花が立っていた。

「突然だけど」

理香子は、みんなの顔を見回し、

「しばらく、月影の力を封印します」

「え！」

里奈と夏希だけが、口を上げた。

他は無言である。

「先日…。月の光が汚染して、あなた達が操られるという事態に陥りました。敵の力は、強大です。また再び、月影が操られるかもしません。そんな危険がある為、乙女ケースを回収致します」

理香子の説明を聞いて、蘭花はその場から歩き出した。

「黒谷さん！」

理香子は、蘭花の背中に叫んだ。

蘭花は足を止め、

「お言葉ですが…。先日のことは、あたしが未熟だっただけです」

それだけ言うと、理香子に頭を下げ、体育館裏を後にした。

「あたしもそう思う」

加奈子も、理香子に背を向けると、手を上げて去っていった。

「あ、あたしは！」

桃子は一瞬、乙女ケースを返そうとしたが…思い止まり、

「変身はしませんが、返しません」

慌てて背を向けると、走り出した。

「ありゃ」

そんな3人の行動を見て、里奈はため息をついた。

「やはり…。何があるかわからない。月の様子を気にしながら、戦うしかないな」

九鬼は、理香子の隣で月を見上げた。

「真弓…」

理香子は、そんな九鬼の横顔を見つめた。

「…」

蒔絵はずっと携帯をいじっていたが、静かに歩き出した。

「まあ～何とかなるさ！」

先日の騒動を知らない里奈は、背伸びをすると、夏希の腕を取り、愛想笑いを浮かべながら、理香子達から離れた。

「気をつけるからさ」

里奈はそう言うと、みんなの後に続いた。

「待って！危険なの！ほんとに！」

彼女達の後を追おうとする理香子を、九鬼が腕を横に伸ばして制した。

「みんな、覚悟をしている」

「ま、真弓？」

「それに、同じへまはしない。しかし、それでも…気になるなら」

九鬼の伸ばした手の中には、シルバーの乙女ケースがあった。

「返すが」

微笑んだ九鬼を見て、理香子は溜め息をつき、肩を落とした。

「あんたは、いいよのね。あなたの力は、特別だから…」

もう一度、溜め息をつくと、理香子は追うのを止めた。

「女神」

それまで無言だった高坂は、理香子を見つめ、

「俺もこいつが必要だ」

ダイヤモンドの乙女ケースを示した。

「まったく〜もおっ！」

苛立ちが頂点に来た理香子であるが、内心は嬉しかった。

みんな、あんな目に合ったのに、戦うつもりだからだ。

「一つ…教えてくれないか？」

高坂は乙女ケースを握り締めると、理香子を見据え、

「女神である貴女を、閉じ込めることができる程の相手とは、一体…誰なんだ」

質問した。

しかし、その答えを…理香子は持っていなかった。

「わからない…」

「え」

驚く高坂に、理香子は言葉を続けた。

「ただわかっているのは、それほど…恐ろしい相手ということよ」

第３２話　真実は罠

理香子の言葉に、高坂は言葉を失った。

女神が勝てない相手に、人間である自分が敵う訳がなかった。

（しかし…）

高坂の脳裏に、空を切り裂いた開八神茉莉の姿が浮かんだ。

（彼女なら…）

「その件ならば、調査中だ」

数日ぶりに、開八神家の屋敷に戻ってきた真田に、俺は詰め寄っていた。

「待てよ！仮にも、お嬢様である俺が、あんなところに招待されたんだぞ！何とも思わないのか！」

どこぞの宮殿を思わせるフロアは、一面大理石で覆われており、床には赤い絨毯がひかれていた。

真田の後を追いかけても、すぐに行き止まりになることはない。

フロアから奥の廊下に入ってもついてくる俺に、真田は頭を抱えた。

「やつらは何者なんだ！」

俺の質問に、真田は振り向くことなく、同じ言葉で答えた。

「調査中だ」

「待て！」

俺は後ろから、真田の肩を掴もうとした。

その瞬間、誰かが間に割って入ってきた。

「！？」

驚く俺。

「フン」

真田は鼻を鳴らすと、

「お嬢様は、お暇なようだ。相手をしてやってくれるか。才蔵」

割って入った者にそれだけを伝えた。

「誰だ！」

俺の前に現れたのは、黒のスーツを着た細身の男だった。

才蔵と言われた男は、真田の言葉に頷くと同時に、崩れ落ちた。

「いけね！」

俺は慌てて、後ろに下がった。

無意識の掌底が、才蔵の登場と同時に鳩尾に打ち込まれていた。

「ご、ごめんなさい」

踞る才蔵に、少し女ぽく笑顔で謝ると、俺は真田の後を追おうとした。

しかし、廊下に真田の姿はなかった。

「チッ！逃がしたか」

俺は舌打ちすると、踞っているはずの才蔵に目をやった。

だが、才蔵もいなかった。

（ここの奴等は、何者だ？普通の人間じゃない）

再び舌打ちすると、俺は今来た廊下を戻った。

「うう…」

大月学園の体育館とは反対側にあるプールの裏に、用務員室があった。

用務員室といっても、掘っ立て小屋である。

その中にある囲炉裏の側で、寝ていた猫沢は意識を取り戻した。

「こ、ここは！？」

目覚めたばかりで、まだ意識が朦朧としていた。

ただ耳元で聞こえる火鉢の音に、猫沢は段々と思い出してきた。

「剣じい」

猫沢は上半身を上げると、囲炉裏の前で、火の調節をしている白髪の爺を見つけた。

その肩には、拳銃がかけられていた。

「まさか…あなたが」

「違う。お前をここまで運んだのは、私だ」

用務員室のドアが開き、中に入ってきたのは、イベント会場まで太

陽達を運んだ小柄な男だった。

「伯父様!?」

目を見開く猫沢に、男は頷くと、囲炉裏のそばに来た。

「しかし、まさか!お前まで影響が出るとはな。予想外だったぞ。お前もそう思うだろう?筧」

剣じいこと…筧剣重郎。学園内で、中身が綾瀬太陽になった開八神茉莉を守るスナイパーである。

「…」

「相変わらず…答えぬか」

そして、小柄な男の名は…上月佐助である。

佐助は溜め息をついた後、猫沢の方を見た。

「巫女よ。お前の気持ちもわかる。しかし、我らが悲願は、開八神家が天下を取ること」

佐助は真っ直ぐに、猫沢の目を見、

「個人的な感情に流されるな」

釘を刺した。

「わかっております」

猫沢は立ち上がると、佐助に頭を下げ、

「今回はありがとうございました。屋敷での仕事がある故に…これにて」

その場を去ろうとした。

「待て」

佐助は腰を下ろしながら、あるものを猫沢に投げた。

「これは！？」

猫沢が片手で受け取ったものは、傷だらけの乙女ケースだった。

「俺が、拾っておいた」

「あ、ありがとうございます」

猫沢は頭を下げると、用務員室から出ていった。

その様子を見送りながら、佐助は剣じいに訊いた。

「しかし…我らの悲願。それは、このように達成しなければならないのだろうか…」

「…」

しかし、剣じいは答えなかった。

「フッ」

佐助は笑うと、火鉢に目を移した。

「畜生！」

俺は顔をしかめると、自分の部屋に戻った。

いくつかのボタンを押すと、だだっ広い部屋に電気がついた。

「合宿ができるな」

異様に広い部屋には、ベットと洋服ダンスしかない。

だからこそ、その広さが異常に感じられた。

（この部屋に、人間臭さがない）

俺は、６人は寝れるふかふかのベットに飛び込んだ。

床に横になる気には、なれなかった。

ベットに埋もれながら、天井を見つめ、少し休もうとした俺は、殺気を感じて起き上がった。

「な！」

入った時には、誰もいなかったのに、一番奥にある窓の前に、１人の女が立っていた。

俺は、その女に見覚えがあった。

「サーシャさん！？」

俺の声に、サーシャはゆっくりと近づいてくる。

どうやら、窓から入ったみたいであるが、セキュリティが万全である屋敷内に忍び込み、お嬢様の部屋までたどり着くなど、普通の人間には不可能のことであった。

「どうしてここに？」

理由を尋ねた俺に向かって、サーシャは突然走り出した。

「な！」

ドラゴンキラーを装備したサーシャの横凪の斬撃が、ベットの上にいる俺に襲いかかった。

慌てて、前にジャンプした俺は、サーシャの頭上を飛び越えて、真後ろに着地した。

「何の真似で…」

しかし、話す暇もなかった。

サーシャの攻撃は止まることなく、身を捩ると、今度は刃を突きだしてきた。

「ったく！」

額を狙う軌道を読んだ俺は、後ろに下がって避けようとした。

その瞬間、切っ先が伸びた。

（この技は！）

俺は避けるのをやめて、ドラゴンキラーの刀身を掴んだ。

「何の冗談ですか？」

指先でつまんで止めたドラゴンキラーに、肩を入れる寸前だったサーシャは、にやりと笑い、こう言った。

「さすが、アルテミア」

その言葉にしばし凍り付いた後、俺は叫んだ。

「違う！」

第３３話　君を殺せ

「俺は、アルテミアじゃない」

「何！？」

サーシャは一気にドラゴンキラーを後ろに引くと、俺の指の間から抜き取った。

その勢いのまま、後方に下がり、間合いを取ると、構え直した。

「だったら、何者だ！お前が使った武器は、チェンジ・ザ・ハート！女神専用の武器のはずだ！」

「だから、俺は…じゃなくて、僕は！」

サーシャに説明しょうとしたが、警戒を強めた彼女は聞く耳を持たない。

「あのですね」

「問答無用！」

サーシャの髪が、エメラルドグリーンに輝き出した。

「いっ！」

その瞬間、俺の体重が重くなった。

さらに、息苦しくなってきた。

「サイレントボム！」

「わからず屋！」

俺の目が光り、魔力を発動させた。

「な」

空間が歪み、部屋中のあらゆる物も歪んだ。

ほんの一瞬だったが、サーシャの魔法を発動させるタイミングを狂わせるには、ちょうどよかった。

すぐに、魔力の発動を止めると、サーシャの間合いに飛び込み、ドラゴンキラーを装着した右腕を蹴り上げた。

「人の話を聞いて下さい」

ドラゴンキラーが、元に戻った床に落ちた。

「な、なんという魔力！」

サーシャは一気に、俺から離れたが、小刻みに足が震えていた。

それでも、ナイフを取りだし、自らの足を傷付けると、震えを痛みで消した。

改めて構える姿は、戦士であった。

「参る！」

サーシャは心の中で、俺を危険と判断した。

味方でないならば、倒せなくても、ダメージは与える。

その覚悟を感じて、俺は心の中で頭を抱えていた。

（どうして、こんなことに）

望んでいないのに、サーシャと戦うことになってしまった。

「は！」

気合いを入れて、サーシャは俺に突進してくる。

「まったく～どうして、こんなことになっているんだろうね」

突然、窓の方から声がした。

「！」

サーシャの動きが止まる。

それは、俺も同じだった。

「すまないな。赤星くん。うちの女房が、話を聞かなくて」

ゆっくりと振り返り、窓の方を見た俺の目に、懐かしい顔が飛び込

んできた。

「ロバートさん！」

「やあ」

俺の声に、ロバートは微笑んだ。

旧防衛軍の結界士の黒装束を身に纏い、左右のバランスが均等で真っ直ぐに立つロバートは、ゆっくりと2人に近付いてきた。

「今、この世界はパニックになっているよ。世界中の人間が目眩を起こしたとね。一部電車は止まり、交通事故も多発しているようだ。たった数秒だけの魔力の発動でね」

そして、俺のそばで止まると、じっと見つめた。

「君が思うように、力を使えないのはそのせいだね」

「ロバートさん」

「しかし…知らなかったよ」

ロバートはまじまじと、俺の上から下まで確認した後、

「君にそんな趣味があるなんて！」

目を逸らした。

「違います！」

俺は顔を真っ赤にして、否定した。

「赤星？赤星浩一だと！？そ、それに、ロ、ロ、ロバート！？お前は、成仏したはずだ。砂の世界に、お前はいなかった」

驚きと困惑、さらに嬉しさが込み上げ、冷静なサーシャが混乱していた。

そんなサーシャに、優しい視線を送ると、ロバートは話しかけた。

「一つ一つ説明するよ。まず一番わかっている自分自身のことから…。俺は確かに、満足して死んだ」

ロバートは、母親の死の真相を知り…狂ったアルテミアに、人というものを教える為に、その命を投げうった。

「しかし、一つ心配事が残っていた。天国にいっても、愛する女がいない。だから、転生を拒否し待っていたら…俺は砂の世界に来てしまった。待つということは、未練だったのだろうね。そこで、紅に再び会い、理由を聞いた」

そう話しているロバートの体が突然、崩れ出した。

「おっと！やはり、君の血を受けていない体は脆いな」

ロバートは砂になっていく体を確認した後、俺に微笑んだ。

「少し待ってくれ」

すると、一瞬で崩れ落ちた砂が螺旋状に回転し、舞い上がると、そのまま一気にサーシャに向かって飛んでいった。

「!?」

すぐに、サーシャの体の中に吸収されると、彼女の左手の薬指に指輪ができた。

「モード・チェンジ!」

サーシャは迷うことなく、そう叫んだ。

「!」

驚く俺の目の前で、サーシャの姿が変わった。

「流石に安定しているな」

俺の前に、ロバートが立っていた。

「砂の体で来てわかったよ。この世界で、ずっと姿を保つには、強い力を触媒にしなければならない。君の血のようなね」

「?」

「つまり…やつらにも、君のような存在がいるということだろうな」

ロバートは、自らの体の調子を確認しながら、話していた。

「俺のような存在?やはり、敵に神レベルがいるのか」

俺は、顎に手を当て、考え込んだ。

その間に確認を終えたロバートは、俺の姿を見つめ、目を細めた。

「先程の魔力の発動による世界の震え…なのに、君の魔力で動いているサーシャがいても、何の影響もない。魔力の発動の大きさによるのか？それとも…」

結界士としての興味が、ロバートを悩ませたが、すぐにやめた。

「まあ…いい。今は、そうすればこうなるという現象だけを参考にしょう」

自ら頷くと、ロバートは改めて俺に目をやった。

「この体は、君の体ではないね」

開八神茉莉の肉体を見て、ロバートは直感した。

「はい」

俺は、頷いた。

「だとしたら、君は彼女の体に憑依しているのかい？アルテミアがそうしたように」

「違います」

今度は、ロバートの言葉を否定した。

そして、この世界に来た方法を説明し出した。

「和美さん…いや、紅さんから、赤星浩一としてこの世界に戻れば、バランスが崩れると言われました。前に来た時は、僕の妹が新たな神になっていた為に、世界は安定していました。しかし、その妹も…僕らの手で殺してしまった。そんなことがあったから…この世界は、僕を害虫として、駆除することを決めたらしいのです」

「おかしいな?その言い方では、まるで世界というものに、意志があるようではないか?」

ロバートは、眉を寄せた。

「ありますよ。人間のようなものではないですが…この世界を保つという意志は」

「何?」

「アルテミアは以前、この世界の地球の意思と話したことがあるみたいですが…人の思考とは違い、この世界を保つことのみを目的にしているようですね」

「惑星が意思を持つか…。それならば、少しは理解できるかな。元々そんな風に考える学者もいたしな」

ロバートは顎に手を当てた。

「そう考えると、僕は害虫というよりは、猛毒に近い。この世界に入ると、すぐに致死量を越えて死んでしまう。だったら、少し薄め

た毒素ならば…」

「待って」

そこで、ロバートは言葉を止め、

「その言い方ならば、ウィルスを予防する為のワクチンづくりに近い。抗体をつくる為の！君が害虫だというならば…」

今度は、俺が話を止めた。

「この話は、後程に…。だから、僕は赤星浩一の何分の一の力しか持たない綾瀬太陽をつくり、この世界に送り込んだ。世界を守る為に。しかし！この綾瀬太陽でも、魔力を発動させると、世界が崩れることがわかった。だからこそ、慎重に行こうとしていた時、俺は探索中に何者かに後ろから襲われて、意識を失った」

「何！君を襲って、気を失わさせるだと！？」

驚くロバートに、俺は頭をかき、

「来たばかりで、どれ程加減したらいいのかわからなかった時でしたし、それに綾瀬太陽の体に慣れていなくって…。次に意識を取り戻したら、この体の中に」

「相手は、君と知って襲ったのか？」

「違うようです。何でも…この肉体の持ち主であるお嬢様が、町で見かけた俺に一目惚れしたらしくって…」

妙に照れる俺を見て、ロバートは呆れた。

「まあ～一目惚れしたとして、どうして体を入れ換えるんだ？」

「その理由はわかりません。だけど、その為に…綾瀬太陽の体に慣れる前に、この体に慣れました。太陽の器と言われる体に」

「太陽の器？」

「はい。やつらは、この肉体をやつらの神に捧げると言っていました。結果は偶然ですが、この体に入り、やつらに近付くことができたのです」

「太陽の器」

ロバートはもう一度、その言葉を繰り返すと、開八神茉莉の体を凝視した。

「あと…計算外のことが一つ」

俺は先程の魔力を解放してから、ロバートに会い…話している間に感じた違和感を口にした。

「さっき…抗体というものを口にしましたが…もしかしたら」

「何だい？」

ロバートは考えるのを止め、意識を会話に向けた。

「もしかしたらなんですが…抗体ができているのかもしれません。

感じるんですよ」

俺は胸を押さえた。

「何かを…」

そう何か…。

それが、何であるか…俺にはわからなかった。

その頃、俺の実家では、ある異変が起きていた。

しかし、その異変を俺は知ることはなかった。

遠くで感じていても…。

妹である綾子の死後…彼女の意思で、家族から俺と綾子の記憶は消えていた。

そして、子供がいなくなったはずの赤星家に、赤星麗菜という新たな子供ができた。

彼女の正体は、サーシャとフレアと同じ砂の世界から来た勇者である。

しかし、家族が増えた赤星家に、更なる異変が起きていた。

「只今」

学校から帰ってきた麗菜に、台所から母親が声をかけた。

「お帰り、麗菜。お兄ちゃんが帰ってきているわよ」

「お兄ちゃん？」

靴を揃えて脱ぎ、家に上がると、応接間に向かった麗菜は、そこで信じられない人物に会うことになる。

「お帰り…麗菜」

ソファに座り、寛いでいたのは…若い男の子だった。

そして、その男の子を…麗菜は知っていた。

「こうちゃん…」

絞り出すように、喉から出た名前。

「やっとお兄ちゃんが、一年ぶりに外国から帰ってきたのに…。ちゃんと挨拶しなさいよ」

固まった麗菜の後ろから、お茶をお盆にのせた母親が応接間に入ってきた。

「仕方がないよ。母さん。突然だったらから、びっくりしたんだよ」

母親から、お茶を受け取って微笑んでいる少年は、赤星浩一…その人に見えた。

第３４話　兄

体育の授業で、人並み外れたプレーを連発し…さらに、頭脳明晰、優しい性格。

帰国子女という設定が受けたのか…。

赤星浩一は、１日にして、大月学園の人気者になってしまった。

「ねえねえ」

普段話しかけても来ないクラスの女子が、麗菜に尋ねた。

「お兄さんって、好きな食べ物とかあるの？」

「さぁ～」

麗菜はわざとらしく首を捻ると、

「ずっと外国にいたから、あまり知らないんだあ」

はぐらかし、女子生徒から離れた。

体育の授業が運悪く、重なってしまった。

「きゃっ！」

黄色歓声が飛んだ。

赤星浩一はバスケ。麗菜は、バレーの授業だった。

コートから離れ、壁にもたれた麗菜の頭に、美奈子の声が響く。

（あっという間に、人気者になったな。あの赤星は）

美奈子の言葉に、麗菜は不機嫌な顔になり、

「あれは、こうちゃんじゃありません。こうちゃんは、運動神経が人並み以下で、照れ屋でドジで奥手で臆病で！鈍感だけど！誰よりも強くて、一生懸命で、優しくて！」

（最初と、最後では別人みたいだな）

美奈子は呆れた。

「あの人は、こうちゃんじゃないです。それに、歳が若すぎる！今も高校生の訳がないもの」

麗菜は、遠くからでも、ボールをゴールに決めた浩一を睨み付けた。

（それは、わかっている。しかし、あの男から強力な魔力を感じる。只者ではないぞ）

美奈子の言葉に、麗菜は頷いた。

「わかっています」

授業はすぐに終わり、体育館から出ようとした麗菜のもとに、笑顔を浮かべた浩一が近づいて来た。

「今日の昼は兄妹仲良く、一緒に食べないか？」

浩一は麗菜の肩を叩くと、彼女を追い越し、体育館から消えた。

（何者なんだ？）

美奈子もまた、遠ざかっていく浩一の後ろ姿をじっと見つめた。

「とにかく行きます」

麗菜は覚悟を決めた。

体育の授業が終われば、昼休みになる。

麗菜は着替え終わると、弁当を持って、屋上へと向かった。

「！」

階段をかけ上がり、鉄のドアを開けると、そこに浩一がいた。

真上にある太陽を、肉眼で見つめながら。

眩しさに思わず目を瞑った麗菜の耳に、浩一の声が飛び込んで来た。

「君は何者だい？」

その質問に、麗菜ははっとした。

浩一は太陽から目を離さずに、

「赤星浩一の妹は、綾子という名前だったはず。それに、彼女は…この星の期待にそえずに、死んでしまったはずだ」

そう言った後、ゆっくりと目だけを麗菜に向けた。

「君は何者だ」

麗菜は、浩一の目力に怯みそうになった。後ろに下がりかけた足を止めると、浩一を睨んだ。

「あなたこそ何者よ！あなたは、こうちゃんじゃないわ」

「こうちゃん？」

麗菜の叫びに、浩一はにやりと笑った。

「そんな風に、赤星浩一を呼んだ女がいたな？」

そして、顎を引くと麗菜に目をやった。

赤く光る瞳を。

「ほぉ～」

浩一は、感心した。

「成る程な。彼女の中に感じた大きな力の正体は、貴女でしたか…。テラよ」

「…」

浩一の前に、立っているのは麗菜ではなく、美奈子に変わっていた。

「あんた何者だ?」

美奈子は、鋭い眼光を浩一に向けた。

浩一が肩をすくめると、

「あなたと同じような存在ですよ」

瞳の色が元に戻った。

「あたしと同じような存在だと?」

美奈子の眼光は、さらに鋭くなる。

「と言っても、あなたがいなくなったから、生まれたんですけどね」

浩一は、にこっと美奈子に微笑んだ。

その屈託のない笑顔に、思わずたじろいだ美奈子。

その瞬間、美奈子の前まで浩一は移動した。

「うっ!」

美奈子は、後ろに下がった。

「テラよ」

浩一は、美奈子の瞳の中を覗き、

「あなたにテラという名前は、相応しくない。この世界を捨てた貴女には」

そこに映る自分を見つめた。

「別に、あたしは！」

美奈子は、浩一の瞳を睨み返した。

「テラなんて、名乗ったことはない！」

美奈子の魔力が、浩一の瞳を射抜いた。

浩一は顎を上げ、身を反らした体勢になりながらも、にやりと笑った。

「了解しました」

ゆっくりと上半身を戻すと、浩一は美奈子を見つめ、

「もうあなたを…テラとは呼びません」

深々と頭を下げた。

その姿に、美奈子は不気味さを感じた。

「貴女が、この世界に害することがなければ…俺は何もしませんよ」

頭を上げた後、浩一は美奈子の横をすり抜けた。

「ま、待て！」

扉を潜り、階段を降りようとする浩一に、美奈子は慌てて振り返った。

「そうそう」

階段の途中で足を止めた浩一は、振り返ることなく、こう告げた。

「貴女ではなく、妹に伝えて下さい。しばらくは、兄妹の関係を続けるとね。でないとお互い…まずいでしょ？」

「く！」

美奈子は、下唇を噛み締めた。

「フッ」

階段を降りながら、浩一は口許を歪めた。

降りていく階段の先に、窓があり…太陽の照り返しで輝いていた。

「太陽は光。しかし、光の裏には闇がある」

浩一は階段から降りると、右に曲がり、教室を目指す。

「我は太陽。そして…」

浩一が歩く廊下の両端に、いつのまにか人間が並んで立っていた。

「人間は闇ではなく…まして、光でもない。ただのゴミ。いや、ゴミの方がましか。燃やせばいいのだからな」

浩一は廊下の途中で、足を止めた。

「この地球を汚す病原菌である人間を滅ぼす為に、我は生まれた」

浩一の瞳が、赤く輝いた。

「数が増えないように、戦闘好きな資質を与え、戦争をすることで、一定料以上増えれば減らすようにプログラムしても、自らの滅亡の危機に瀕すれば、大掛かりな戦争を止め、小競り合いばかり！本能が壊れたガラクタに、救いはない」

浩一はゆっくりと、歩き出した。

「この星を救う為には、人間を排除しなければならない」

そして、にやりと笑った。

「この赤星光一の手によって」

「何だ！あいつは！」

赤星光一の噂は瞬く間に、大月学園に広まった。

女子生徒は歓喜し、男子生徒は嫉妬する。

「赤星光一だと！？」

そんな中、俺だけは納得できなかった。１人、渡り廊下の手摺りにもたれ、グラウンドで活躍する光一を不満げに見ていた。

何故ならば、赤星浩一は俺だからだ。

しかし、モテモテの自分を見るのは微妙な感覚である。

学生時代、モテたことのない俺とそっくりな人間がいて、人気者である。

こんな幸せがほしかった。

なんて思っていると、サーシャが隣に来た。

「あの偽者をどうする？」

サーシャの言葉は嬉しいが…やはり微妙である。

「う～ん」

悩んでいる俺を見て、サーシャはため息をついた。

「こうもあからさまな偽者がいたら、何かあると思うな。しかし…」

サーシャは、赤星光一を凝視し、

「あやつのレベルは、計り知れない。偽者というには、高過ぎる」

彼の全身から漂う魔力に、冷や汗を流した。

「そうですね」

俺は頷いた。

見た目は偽者だが…強さは本物だった。

「もし…やりあったら」

「ただではすまないな」

サーシャは、光一から視線を外すと、俺から離れた。

「うん？」

サーシャの動きに気付き、俺が隣を見ると、少し離れて麗菜が手摺の前に来た。

（ヤバい）

俺は慌てて、顔を逸らした。

麗菜は、グラウンドにいる光一の方を真っ直ぐに見つめていた。

「赤星さんのお兄さん。人気あるね！」

すると、麗菜の隣に和恵が来た。

「ええ…」

はぐらかすように言う麗菜を見ないように、ゆっくりと俺は手摺から離れた。

「…」

ずっと無言で、光一を見つめる麗菜の耳に、和恵のクスクス笑いが飛び込んできた。

「やっぱり気になる？お兄さんのこと」

「？」

麗菜が横に顔を向けると、目を輝かせている和恵がいた。

「べ、別に！」

麗菜は慌てて、否定した。

「ええ～ほんとにい？」

じぃ～と麗菜を見つめる目が近付いてくる。

「ううっ」

たじろぐ麗菜。

そんな2人の会話を耳にしながら、俺は渡り廊下から東館へと入った。

そこには、先に入ったサーシャが腕を組んで窓ガラスにもたれていた。

「話さないのか？」

サーシャの言葉に、俺は逆に訊いた。

「サーシャさんこそ、話さないじゃないですか」

俺の問いに、サーシャは鼻で笑うと、

「あたしらとあいつらは、別行動を取っている。この世界は、あいつらの方が詳しいし、あたし達は敵の目を引き付ける」

「成る程」

俺は納得すると、先程のサーシャの質問に答える代わりに、まじまじとサーシャを見つめ、

「似合ってますよ。制服姿。かわいいです」

褒めて上げた。

「な！」

突然のことに、サーシャは顔を真っ赤にして、絶句した。

ブルーワールドでブラックサイレンスの1人として戦い続けてきたサーシャは、あまりかわいいと言われたことがない。

「な、な、な」

サーシャが少しパニックっている間に、俺はその場から離れた。

すぐに思考は、光一のことに戻った。

（敢えて…魔力を放出していたな。俺の波動に似ているが、異なる。やはり、あいつが…抗体）

普段の力が使えれば、容易に倒すことができるだろう。

しかし、魔力を使えない…今の俺では、やつに勝てないとわかっていた。

（まだレダとも接触していないのに）

問題が山積みだった。

ここ数年は、強大な魔力を身に付けていた為に、殆どの問題をクリアできていた。

しかし、再び…ただの人間に近くなると、不便であった。

（改めて思う。人間は、大変だとな）

それでも、まだましなのは…チェンジ・ザ・ハートとモード・チェンジが使えることだった。

（しかし…どうする？）

考え悩んでいると、俺の進路に誰かが立っていた。

「太陽様！」

その声に、俺は足を止め、絶句した。

「開八神茉莉…」

目の前で微笑んでいるのは、綾瀬太陽の姿をした茉莉だった。

「いやですわ～！太陽様！茉莉とだけ呼んで下さいませ」

少し口を尖らせた茉莉に、俺は何も言えなくなった。

「太陽様！」

信じられないことに、俺が本物の茉莉と会うのは、これが初めてであった。

第３５話　交差する運命

「開八神さん」

俺は敢えて、名字で呼んだ。

その瞬間、不満げに口を尖らせた茉莉を無視して、俺は訊いた。

「どうして、体を入れ換えた？」

「そんなことよりも、先程の女は誰ですか？」

俺の言葉を遮ると、茉莉は微笑みかけた。

しかし、目は笑っていない。

「？」

思わず、茉莉の瞳の奥を覗いた俺は、絶句した。

そのさらに奥に、何かとてもない力を感じたからだ。

「単なるお友達でしたら、今回は許します。だけど、わたしくし以外の女性と話すことは承知致しかねます」

「な！」

一瞬、言葉を失ったが、気を取り直して、俺は言った。

「お、女にされたのに！女と喋るなは、無理があるだろうが！男と

だけ話せというのか！この学園で！」

思わず力が入ってしまった。

そんな俺を、目を見開いて見つめた茉莉は、開いた手を口に当て、

「そう言われれば、そうですね」

驚いた顔を作ってから、改めて言った。

「ですが、できる限り女性と話すことは…」

強い表情で、真っ直ぐ俺を見つめながら近付いてくると突然、俺の手を取った。

「！」

その行動に、今度は俺が、驚いた。

「傷だらけの手…」

茉莉は、俺の手の甲を見つめ、呟くように言った。

「ご、ごめん」

俺は、素直に謝った。

よく考えれば、この体は茉莉のものである。

戦い続きで、いつのまにか傷だらけになっていた。

お肌のケアもしていない。

髪や身だしなみは、御付きの人がやってくれているが…。

痛いところをつかれて、俺は何も言えなくなってしまった。

しかし、そんな俺に、茉莉は微笑んだ。

「よろしいのですよ。わたしくしの体が、太陽様の為に傷付いても…。一向に、構いません」

その言葉に、俺はさらに何も言えなくなった。

「なぜなら…わたしくしと太陽様は一心同体。この体も、太陽様の為に傷付いたのならば、本望です」

傷付いた手を見ながら、うっとりとした表情を浮かべる茉莉に、俺はぞっとした。

「君は一体…」

何者なのか…どうして、俺と体を入れ換えたのか。

と訊きたかったが、答えは恐らくわかっていた。

しかし、その答えは重い。

今の俺には、重い。

なぜならば、その答えに応えるつもりがないからだ。

「太陽様」
「お嬢様！」

潤んだ瞳で、俺を見つめる茉莉の会話を止めたのは、俺ではなく、猫沢だった。

廊下の奥から姿を見せた猫沢は、早足で俺達のそばまで来ると、茉莉の背中に頭を下げた。

「真田様がお探しになっております」

「チッ」

猫沢の言葉に、茉莉は微かに舌打ちした。

そして、その時に見せた茉莉の一瞬の表情に、俺は目を見開いた。

（今のは…）

少女に、似つかわしくない邪悪な気を感じたように思った。

しかし、それはすぐに満面の笑みによってかき消された。

「それでは、太陽様！ごきげんよう」

胸に手を当て、数秒深々と頭を下げると、ゆっくりと頭を上げてもう一度、俺に微笑んでから背を向けた。

そして、頭を下げている猫沢のそばを、背筋を伸ばして通り過ぎた。
猫沢は頭を上げる瞬間、俺に一瞥をくれると、茉莉の後に続いた。
その様子を見送りながら、俺は思った。
（少女ぽくないか…。まあ～俺の体だしな）
男にしては、睫毛が長く…女の子ぽくつくってしまったかなっと、つまらないことを考えてしまった。
（魔力が使えたら、体を取り返すことができたか）
俺はため息をつくと、歩き出そうとして、足を止めた。
（っていうか…体を取り換えるって、どうやってやったんだ！真田は、開八神家の財力と力があったからと、曖昧なことを言っていたが…）
俺は考え込んでしまった。
（脳内の記憶を入れ換えたり、書き変えるというレベルではなく…魂を交換している）
俺は、はっとした。
（これは、科学というよりも、魔法？）
と思ってから、否定した。

（この世界は、魔法よりも科学が発展した世界のはず）

ブルーワールドと実世界は、対極にあり…一方は魔法、一方は科学と、発展の仕方が違うと思っていた。

しかし、そんな単純なことではないと、今は知っていた。

（月の女神は、この世界を人間の為に創った。魔物がいない安全な世界として。しかし、ブルーワールドを基本とした為に、魔物がまったくいなくはできなかった。それでも、圧倒的に少なかった故に、魔法ではなく…科学が発展した）

俺は、廊下から外に目をやった。

科学が発展した実世界とは言わば、消費の世界と建設の世界だと思う。

大量につくり、大量に消費する。

しかし、それができるのは…人間がこの世界の支配者であるからだ。

ブルーワールドでは、魔物に破壊されることが多い。

だからこそ、結界を張り…その中で町をつくっていた。

（初めてブルーワールドに行った時は、この世界とあまり変わらないと思っていた。しかし、根本的に違っていたんだな）

そんなことを考えながら、無意識に歩き出していた俺は…いつのまにか、廊下から中庭に出ていた。

「うん？」

ふっと目が中庭から、グラウンドに向いた。

練習を終えた男子生徒達が、引き上げてくるところだった。

その中に、赤星光一がいた。

同じ目線で、彼を見ると…やはり、鏡に映っているようだった。

（俺の偽者）

しかし、世代が違う。

思わず見つめてしまった俺の視線に気付いた光一は、微笑んだ。

（！）

自分の微笑みを客観的に見ると、気持ち悪い。

光一は微笑みながら、俺に近付いてくる。

「やあ～アダム」

すれ違う寸前、光一は俺だけに聞こえるように、微かな声で言った。

「！？」

意味がわからずに驚く俺の横を、にやけながら、光一は通り過ぎた。

「赤星。あのお嬢様を知ってるのか」

話しかけたことはわからなかったが、光一が開八神茉莉に微笑みかけたことは、回りにいた生徒達も気付いていた。

「ああ…知ってるよ」

光一は笑顔で頷き、最後の言葉は心の中で呟いた。

（生まれる前からね）

第３６話　歌姫の来迎

君が僕を愛するならば、すべてを捧げよう。

君が金を欲するならば、すべてが終わるまで…見続けよう。

幸せよりも、君の破滅を望みながら…。

幸せの価値を、お金で物を買うことと刷り込まれた…東洋の島国は、本音と建前を使い分けながら…今も、進んでいる。

国の予算がなくても、金を使うことだけを考えて…。

「人の価値は、何かしらね」

人里離れた山道を歩くリンネは、後ろに控える刈谷に訊いた。

「…」

刈谷は即答せず、少し考えた後に、口を開いた。

「人は脆い存在です。故に、高貴なる心かと。貧弱な肉体、純粋な戦闘能力ならば下級の魔物にも劣ります。それでも、挑む人間に、我は敬意を感じます」

「そうね。あたしもそう思うわ。だけど…人間はそう思っていない。金こそが価値よ」

リンネは足を止めると、周りに広がる自然を眺め、

「だけど…金に頼った人間が、強くなることはない」

それから…足下を見た。

雑草が、生い茂っていた。

リンネは徐にしゃがむと、雑草に手を伸ばした。

昔のように、触れるだけで燃え尽きることはない。

リンネは微笑んだ。

「この世界の人間に…この草ほどの強さもないわ」

「御意」

刈谷は、その場で跪いた。

そんな自然がほとんどない市街地。

しかし、アスファルトの片隅にも、雑草は生えている。

あまり気付かれることなく、ただ生きている。

そんな雑草達を、踏みつけて歩く少女の耳元につけたイヤホンから流れる…微かな音。

「うーん」

玉座に座りながら、週刊誌をめくるアルテミアは、あるページで手を止め、食い入るように紙面を見ていた。

「ア、アルテミア様！魔王レイが、幽閉されていた大陸での我が軍の侵攻状態ですが…」

そばで、報告する蛙男の話を無視して、アルテミアはずっと雑誌を読んでいた。

蛙男は肩を落としながらも、機械のように事務的に報告を続けていた。

「アルテミア様」

そんな状況の玉座の間に、サラが入ってきた。

「おおっ！サラ殿！」

蛙男は、助け船とばかりにサラに笑顔を向けた。

「今は、王としての責務の最中です。人間ごときの本など、読んでいる場合ではございません」

サラの注意を受けても、アルテミアは紙面から目を離さないで、首を傾げた。

「似ているだよなあ～」

アルテミアの言葉に、サラは眉を寄せた。

「アルテミア様？」

「お前も見てみろ」

アルテミアは突然、週刊誌を円盤投げの要領で、サラに投げた。

サラは、指先で摘まむように受け取ると、開いているページを見た。

「これは！？」

驚くサラに、アルテミアは真剣な目を向け、

「レダ…。人間界で人気のある歌手らしい」

背もたれにもたれた。

「ジェノサイドのジュリアン！？」

サラは、レダの写真を見て、絶句した。

ジュリアン・アートウッド。彼女はティアナ・アートウッドの妹であった。

歌手であり、格闘家であった彼女は、魔王と結ばれた姉を許すことができずに、たった1人でライに決闘を申し込んだ。

そして、破れた彼女は、血を吸われ…魔王の眷族になった。

しかし、元々あった正義感の強さが、彼女の中で攻めぎ合い…ついに、彼女は精神を病み、心が破壊された。

その為、無意識に戦うだけの存在となり、皆殺しのジュリアン、血塗れジュリアンといわれ…恐れられることになった。

その強さは、騎士団長クラスで、力を解放したアルテミアを手玉に取った程だ。

「彼女が死んだはずです。なぜだ?」

サラは、紙面を睨み付けた。

「そう…。死んだはずだ」

アルテミアは、目を細めた。

戦うだけの存在になったジュリアンであるが…精神が壊れている為に、自分に殺気を向ける相手や、向かってくる相手だけ、無意識に襲いかかっていたのだ。そのことに気付いた赤星浩一によって、倒されている。

それは…赤星浩一が初めて、人間を撃った瞬間でもあった。

「再び…あなたの歌が聴けるなんて、世界は幸せよ」

ステージの袖に立つレダの横で、満面の笑みを浮かべるティア。

「再び、あなたの歌が世界を救うのよ。ジュリア」

「御姉様…」

レダは、瞑っていた目を開けた。

数年前、世間を賑わせた歌手がいた。

その名は、ジュリア・アートウッド。

パーフェクト・ボイスと言われた彼女は、アメリカ大統領とのロマンスが囁かれる中、突如…自殺した。

「今の私は…レダよ」

レダは、ステージの向こうに広がる観客の歓声に耳をすませた。

「そ、そうだったわね。レダ」

ティアは、言い直した。

パーフェクト・ボイスと言われていた時は、ジュリアは顔を整形し、

心臓の手当てをし、目を移植していた。

今のレダと呼ばれるジュリアは、整形前の顔に戻り…目が見えない。

しかし、そのことをわかる人は少ない。

目が見えてるように演じきれていたからだ。

「いきます」

レダは白のドレスを翻し、ステージへと向かった。

「どうして、あのままなんだ?今の俺達だったら、目くらい簡単に」

ティアの後ろにいたジャックが、華奢なレダの背中を見つめ、

「それにだ。あの女は、自殺したんだろ?お前の凶行を止める為に。それなのになぜ、今ここにいるんだ」

軽く肩をすくめた。

「さぁ…それは…」

ティアは、ステージから観客に頭を下げるレダから目を離さなかった。

「わからないわ」

ブルーワールドのティアナとジュリアンと違い、ティアとジュリアは本当の姉妹ではない。

しかし、内乱が続く某国で、彼女達は、出会った。ティアの旦那さんによって助けられたジュリアは、妹になったのだ。

彼女達の内乱が続く原因は、政府や軍部の問題であったが…元を正せば、二つの大国の問題であった。

1つの大国が崩壊した後、ティアは残るもう1つの大国に復讐しょうとした。

大統領暗殺から、経済の混乱と…段階を踏んで、その国を破滅させる予定であった。

しかし、ジュリアの死によって、計画は終わったのだ。

死んでからよみがえったティアは、祖国を訪ねていた。

内乱が終わり、安定した国は…資本主義へと近付いていた。

あれほど迫害された音楽も、自由になり…ティアが知る国とはまったく、異なる環境に変わっていた。

人々は幸せになったのだろう。

だが、だからと言って、その過程で迫害され、殺された人々は浮かばれるであろうか。

「…」

ティアは、レダを見た。

歌が始まる。

（貴女の考えていることは、わかるわ）

ティアは、レダの歌の聴きながら、ゆっくりと目を瞑った。

（だけど…今回は、あなたが死んでも、あたしが死んでも、どうにもならない。それでも、あなたが歌い続けるならば）

ティアは、目を開けた。

（あたしは、止めはしない）

「ここか」

コンサート会場の前に止まったリムジンから、俺は出てきた。

楕円形の会場を見上げている俺の横に、上月佐助が来た。

深々と頭を下げると、佐助は言った。

「お嬢様。行きましょうか」

このコンサート会場は、開八神家が出資して建てられていた。

さらに、俺の命というか…レダが所属する会社の筆頭株主に、今朝なってしまった。

会えないならば、絶対会えるようにしてやると、軽い気持ちで、俺が言ってしまったからだ。

数時間後には、そうなっていた。

佐助に先導されて、俺は関係者専用出入口に案内された。

前に立つ警備員に、佐助が何やら説明すると、俺はすんなり通れるようになった。

「では、お嬢様。わたくしは、ここでお待ちしております」

佐助は出入口の前で、頭を下げた。

「いってらっしゃいませ」

「は、はい」

俺は1人、関係者だけが通れる通路から中に入った。

（でも、アポたしだよな。良いのかな？）

迷っていても仕方がない。

話せなければ、使った金が無駄になる。

少し常識がないけど、俺は楽屋の前で待つことにした。

第37話　偏食者

「つまらないよな」

ライブ会場で、警備のアルバイトについていた男は、大欠伸をした。

会場内で熱狂する人々を見つめ、

「みんな…。生きてるんだもん」

腹を擦った。

すると、腹の虫が鳴いた。

俺は、空腹だった。

人としての食事はしていた。

しかし…己としての食事は、長いことしていなかった。

（こんなに人がいるんだから～1人くらい）

男の目が忙しなく動き、会場内をチェックするが、倒れている人間はいない。

牛や鶏を見て、すぐに食欲がわく人間は少ない。

彼もまた、そうだった。

「藤崎くん」

そんな彼の後ろから、呼ぶ声がした。

「はい」

作り笑顔で振り返った男の前に、紺の制服を着た若い男が駆け寄ってきた。

「ここはいいから、裏口の子と交代してくれるかい」

制服の男の言葉に、藤崎は笑顔で頷いた。

「はい」

「まったく～お嬢様という割には、単独行動が多いな。まあ～それの方の有難いけど」

通路を歩く俺は、頭をかいた。

女の肉体ってのには、慣れて来たけども、長い髪がうっとおしかった。

それに、男の体とバランスが違った。

改めて、誰もいない通路を1人で歩いていると、変なことが気にな

ってきた。

着替えや入浴時は目隠しをされ、猫沢がすべてやっていった。

そう…俺は、見たことも触ったこともない。

（太陽様の為に傷付いたなら）

そんな時に、茉莉の笑顔が浮かんだ。

（わたくしと太陽様は、一心同体）

「うわああっ！」

俺は、頭を抱えた。

そんなことを思い出す理由は、一つだった。

今からしたいことへの罪悪感を拭うことである。

（お、俺は…勇者赤星浩一…）

と考えてから、自らの胸元を見下ろし、

（違う！）

否定した。

（赤星浩一は、今！ブルーワールドにいてるんだ）

屋敷にいても、常に監視され、1人ではない。

（やるなら、今しかない！）

俺は、己を捨てた。

だからと言って、全裸になる訳ではない。

（胸だけだ！）

深呼吸をして、両手で形をつくると、いざ参る。

（最低だな）

胸を鷲掴みにしょうとした瞬間、アルテミアの顔を浮かんだ。

俺の全身から力が抜け、膝から崩れ落ちた。

「だって～俺さ…」

ふさぎ込む俺の耳に、誰かが近付いてくる足音が飛び込んで来た。

慌てて、さっと立ち上がると、身なりを整えた。

そして、平然と歩き出した俺の目に、近付いてくる男の姿が飛び込んで来た。

そのまま、何食わぬ顔で通り過ぎるつもりだった。

俺と男は、数十秒後…すれ違った。

「…あんたさあ～」

男は突然足を止めると、振り返った。

「！」

俺はびくっとした。

（見られていた！）

女子高生が自らの胸を揉もうとして、崩れ落ちるシチュエーションなどあり得ない。

しかし、あり得ないからこそ…声をかけるやつもいないだろうと思っていた。

無言で振り返った俺に、男は言った。

「あんた…料理人かい？」

「い、いえ」

予想外の質問に、俺は焦りながらも返事をした。

「血の匂いがするんだよ」

男は、俺の目を見つめ、

「人の血の匂いが」

目を細めた。

「人の血の匂い？」

その言葉に、俺の焦りは消えた。

いや、男の言葉と言うよりも、俺を見る目の色が、危険だったからだ。

自分の目を見返す俺の眼光に、男は笑った。

「あんた！人を殺したことがあるだろ？その目！ただ者じゃない」

「俺は、人を殺したことがない！」

「俺？」

女子高生の言い方に、男は笑うと、

「ククク…。いいよ。あんた！素質はある」

履いているズボンのポケットから、名刺を取り出した。

「もし！死体の処理に困ったら、連絡をくれ！ちゃんと始末するからさ。勿論、無償で」

そして、名刺を俺に向かって投げた。

「何」

名刺を受け取った俺は、そこに書かれてある文字に目をやった。
名前と携帯番号しか載っていない。

「藤崎聖人…」

「じゃね！素敵なお嬢ちゃん」

藤崎は、俺に背を向けると、手を振った。

「あと、自分の胸くらい揉んだらどうだい」

「え」

藤崎の最後の言葉に、料理人の意味を問いただそうとした俺は凍りつき…動けなくなってしまった。

その為…みすみす、藤崎を取り逃がしてしまった。

「アンコールまで、少しだけ時間を下さい」

鳴り響く歓声をバックに、ステージから通路に出たレダとティアは、スタッフ達の間を縫いながら、楽屋に向かっていた。

「3分後に、アンコール！」

スタッフの声が、通路にこだました。

「え」

動けるようになった俺の耳に、そのスタッフの声が飛び込んで来た。

タイミングを失い、藤崎を追いかけることをあきらめた俺は、振り返った。

すると、さっきは気付かなかったが、もう…楽屋のそばまで来ていたようだ。

スタッフに、扉を開けて貰い、中に入ろうとするレダの顔が、俺の目に映った。

「な」

俺は絶句した。

頭の中が、フラッシュバックして…ある状況が浮かんだ。

俺の前に立つ…相手。

（クッ！）

俺は顔をしかめながら、ゆっくりと銃口を相手に向けた。

（どう見ても…人間じゃないか！）

躊躇う俺の頭に、女の声がこだまする。

（そう思う…あなたは、優しいのね）

（うおおっ！）

殺気を向けないようにしながら、俺は引き金を弾いた。

「ジュリアンさん…」

思わず出た言葉に、レダは俺を見た。

驚いた顔をするレダ。

「また会ったわね…お嬢さん」

レダの後に続くティアは、俺を見て、微笑んだ。

「あ、あんたは！」

ティアを見た瞬間、呪縛が解けたように動けるようになった。

近付こうとした俺をスタッフが、止めた。

「すいません！まだコンサート中ですので」

蹴散らすこともできたけど、混乱を招くだけだ。

何とか振り切って前に行こうとする俺を、数人のスタッフが必死で止めた。

「ウフフフ…」

楽屋に入って数秒で、レダが出てきた。

レダは無言でこちらを見ないが、ティアは俺の状況を見て、笑った。

「レダ！」

俺は叫ぶしかなかった。

観客の声がする方へ歩き出したレダは、前を真っ直ぐに見つめながら、ティアに訊いた。

「彼女は誰です？私をジュリアを呼んだ」

「さあ～。あたしも詳しくは知らないのよ」

はぐらかすティアの言葉に、

「そうですか…」

レダは頷くと、通路からステージ裏へと入った。

「行きます！」

すでに袖で準備していたバンドのメンバーに告げると、レダは颯爽と観客の前に飛び込んだ。

歓声が沸いた。

レダに、観客の目が行っている間に、バンドメンバーは各楽器の前に陣取った。

ドラムのカウントが始まり、演奏が始まった。

「これが…本物のレダの歌!?」

何とかスタッフを振り払い、ステージに上がる階段まで来た俺は、レダの歌声に目を見開いた。

「…」

そんな俺に気付き、ティアは上から見下ろした。

「凄い」

感嘆した俺の一瞬の隙をつき、闇が視界を奪った。

「ま、またか!」

歓声も消えた。

俺の周囲は、何もない闇に包まれていた。

「こんな技!」

躊躇なく、魔力を発動させた俺は、闇を破壊した。

空間に亀裂が走り、割れると同時に、魔力を消した。

「レダ！」

階段を上がろうとしたが、階段がなかった。

いや、通路もない。

同じような闇に包まれていたが、亜空間でもなかった。

周囲を光輝く夜の闇に囲まれた…別の場所に、俺はいた。

「海か！」

光輝く闇は、月明かりを反射する海面であることに気付いた。

「無理矢理、テレポートさせられたのか！」

足下にごつごつした岩が転がっているようだが、島という程広くはなかった。

「お嬢ちゃん…」

後ろから、声がした。

「！」

俺が振り返ると、数メートル先の海面から、人間が顔を出した。

いや、相手は人間ではなかった。

ゆっくりと海の中を歩き、陸地に上がってきた男の身長は、５メートル程あり…全身が鱗で被われていた。

「ようこそ、我が島へ。ここに来たということは、光栄です。なぜならば、あなたも島の一部になれるからです」

「島の一部だと！」

そこで、俺ははっとした。

足場になっていたのは、岩ではない。

人間の骨であった。

「我々の野望を邪魔する者は、殺します」

男の両腕は、蟹の手のようになっていた。

「野望だと？」

「我々は、人間を滅ぼす！」

蟹男は、両腕を天にかざした。

「結局、人間を殺すのかい？」

俺は笑った。

「この体に目覚めた時、人間は俺を化け物と言い、殺そうとした。だから俺は、殺した！だけど、人間がいる限り、俺は殺されるかもしれない。だから、俺は人間を滅ぼす！」

「フン！何という身勝手な理論だ」

俺は呆れた。

「人間がいなくなった時、初めて安心できる！」

蟹男は、両腕を俺に向けた。

「人間の死骸でできた島にいると、心が安らぐ！」

「すまないな」

俺は、フッと笑った。

「もっと簡単に、安らぐ方法があるぜ」

その瞬間、どこからか…回転する2つの物体が飛んで来て、蟹男の両腕を切り裂いた。

「お前を迫害した人間は、愚かだと思うよ。殺されかけたことにも、同情する。しかしな！」

俺は、回転する2つの物体を掴むと合体させて、槍にした。

「これ程の人を殺したお前に！同情できるか！」

そして、槍で鱗を突き抜くと、一撃で心臓を貫いた。

「お前は、その姿になったから…化け物になったんじゃない。人を殺したから、化け物になったんだ」

「な、な、何で…」

白目をむきながら絶命した蟹男から、槍を抜いた。

自ら積み上げた骨の山に、崩れ落ちる蟹男。

「…だとしたら、俺も化け物だな」

俺は、蟹男の死骸よりも、空にある月を見上げた。

「さて…どうやって、帰ろうかな」

第３８話　塵

「まったく～どうして、俺がこんなことを」

輝は、情報倶楽部の香坂真琴の命を受け、高坂真を調べる為に、情報倶楽部の部室に向かっていた。

ややこしいが、元々の古巣に戻ることになるだけで、ある意味解放だった。

しかし、どちらも報告義務があるから、邪魔くさかった。

「美人に命じられるのは、本望だけど…」

輝は、体育館裏に向かいながら、中央館一階から東館を結ぶ…渡り廊下の真ん中で足を止めた。

「うん？」

前から女子高生に囲まれて歩くという…輝が憧れるシチュエーションベストテンに入る羨ましい状況にいる男子生徒が、近付いて来たからだ。

変なジェラシーがわく前に、輝は男子生徒の顔を見て、眉を寄せた。

「あいつは？」

囲まれている男子生徒は、赤星光一であった。

輝は屈辱ではあるが、赤星達集団に道を開けた。

廊下の窓ガラスに背中を張り付けながらも、輝はじっと光一の横顔を通り過ぎるまで、見送った。

「そっくりじゃないか。異世界のそら似かな？」

窓ガラスから離れると、輝は光一の背中を見つめながら、首を傾げた。

その様子を、二本ある渡り廊下の奥側二階で見ていたサーシャは、光一が向かった方へ歩き出した。

「どう思う？あいつが、この世界を壊そうとしている黒幕だと思うか？」

サーシャの言葉に、ロバートは頭の中で答えた。

（それはないだろう。あの者が、赤星君を排除する為の抗体だとしたら、彼がこの世界に来てできたはず）

とまで言ってから、ロバートは悩み出した。

（そう言えば…赤星君は前に、この世界に戻ってきたことがあると言ってたな。その時にできた可能性もある）

「だけど！あの男が敵であることは、間違いないんだろ？」

サーシャは一目がないのを確認すると、渡り廊下の窓から一階に飛び降りた。

（待て！サーシャ！お前の力ではやつを倒せない！あの親衛隊長はどうした？）

「フレアなら、赤星君が来ないことに気付き、探しに行っている」

（健気だが…）

「心配しないで！どうせ、あたし達は死んでいる！恐れることはないわ」

サーシャは、廊下を風の如く走り抜けると、先回りをして、待ち伏せるつもりだった。

しかし、その時…先に、光一を待っている者がいた。

「君は」

周りを囲む女子高生に、笑みを送りながら歩いていた光一は、突然足を止めた。

「生徒会長…」

光一の足が止まったことに気付いた女子高生の1人が、前を見て呟いた。

「そうか。君が噂の生徒会長殿か」

光一は、進路を塞ぐように前に立つ九鬼に微笑んだ。

「何か用ですか？」

真っ直ぐに自分を見つめる九鬼の目を、逆に光一は逸らさずに見つめた。

「あなたに話があります」

九鬼の言葉に、周りの女子高生がざわめく。

光一は口許を緩めると、

「みんな、すまないけども…ちょっと生徒会長と話があるんだ」

無理矢理、女子高生達から離れた。

「え～え！」

一応、ブーイングが出たが、光一は気にすることはない。

「行きましょうか？生徒会長」

九鬼の前まで来ると、光一はウィンクした。

そんな光一の仕草に、九鬼は少しだけ目を見開いた後、顔を逸らし…背中を向けた。

「こちらで話しましょう」

そこまでの様子を、西館を越え、渡り廊下の先に到着していたサーシャは目にしていた。

慌てて身を隠すと、２人の後を追うことにした。

「ここでいいのかい？」

西館の屋上に来た九鬼と光一。

光一は両手を広げ、

「まさか、生徒会長様からお誘いを受けるとはね」

驚いた振りをした。

九鬼は、光一に背を向けたままで口を開いた。

「あなたは、赤星浩一でも…浩也でもないわ。だけど…」

ゆっくりと振り向くと、光一を見つめ、

「彼と同じように、強い力を感じる」

すぐに視線を下げた。

「それだったら、こちらも言いたいな」

光一は腕を下げると、

「君から凄い力を感じる。その力は、人間のものではない」

「!?」

九鬼は驚き、思わず顔を上げた。

光一は、そんな九鬼に微笑んだ。

その笑みは、やはり…浩也に似ていた。

「あなたは…」

九鬼は話をそらさずに、本題を告げた。

「彼と同じ勇者であるならば、あたし達と戦ってほしい。敵は強大で、未だに全貌がわからない。だけど、あなたならば!」

九鬼は拳を握り締め、

「この世界を守れるかもしれない!」

光一の方に全身を向けた。

そんな九鬼を見て、光一はフッと笑い、少しだけ視線を外した。

「どうやら…君は…赤星浩一を知っているようだね」

「…」

「確かに、僕は…この世界を棄てた赤星浩一と違い…この世界を守

りたい」

「だったら！」

光一の言葉に、九鬼の顔に笑顔が浮かんだ。

「しかし…」

光一はそこで、言葉を止めた。

「！？」

数秒の沈黙は、九鬼を戸惑わせた。

光一は笑みを封印すると、冷たい視線を九鬼に向けた。

「僕が守る世界に、人間はいらない！」

「！？」

突然、九鬼の視界から光一が消えたと思った時には、隣にいた。

そして、蹴りを喰らわすと、九鬼をふっ飛ばした。

一連の流れの速さに、九鬼は防御ができず、床を転がった。

「勘違いしないでおくれよ。これは、僕の考えではない！地球の考えだよ」

「何だと」

すぐに立ち上がった九鬼を見て、光一は驚いた後に、納得した。

「成る程、よけれないとわかると、自ら飛んだか」

「地球の意志だと！」

九鬼は構えようとしたが、脇腹が痛んだ。

「そうさ。今回、この世界で起こっていることは、地球も認めている。なぜならば、人間がいなくなれば、この世界は綺麗になれる」

「そ、そんな地球が…人間を…」

九鬼は最後まで、言葉を発することができなかった。

光一の膝が、九鬼の顎を突き上げたからだ。

「このスピードなら、反応できないだろ？」

弓なりの形で宙に舞い、落下した九鬼を見て、光一は微笑んだ。

「うぐぅ」

口の中が切れて、血が流れた。

「話し合いは、決裂だ。しかし、もう1つ案があるよ。君の為にね」

光一は、優しい笑顔をつくった。

「僕の仲間になれ」

九鬼に向かって、手を伸ばした。

「な！」

「君は、人間じゃないね。その体…その力を解き放ち、共に人間を滅ぼさないか？そして、今度は間違いを起こさない新たな人を…」

「どこかで、聞いた考えだな」

九鬼は両手を地面につけると、膝が震えながらも、立ち上がった。

そして、差し伸べられた手を払った。

「あたしは、人間だ！人間を滅ぼすなんて計画に乗るはずがない！それに、人間は間違いを起こすが、悔い改めることもできる！」

九鬼の言葉を聞き、光一はせせ笑った。

「ここまで、地球を汚しておいて、その言い方！実に人間らしいな」

「く！」

九鬼は顔をしかめると、後ろに飛んだ。

まったく予測できなかったが、光一の蹴りを避けることができた。

筋肉の動きではなく、勘であった。

しかし、前髪は切れていた。

（これでも、完全には無理なのか！？）

九鬼は心の中で、絶句した。

「よくわかったよ。君は人間だ。汚らわしい人間だ。だから、君を殺し！その体だけ頂こうか」

赤星の目が、赤く輝いた。

九鬼は顔を逸らすと、さらに後ろに飛びながら叫んだ。

「装着！」

黒い光が、九鬼を包んだ。

「フン！」

光一は鼻を鳴らすと、一瞬で姿を消した。

九鬼の姿も消えた。

「な！？」

出入口から2人の様子を見ていたサーシャは、絶句した。

「速い！」

目にも止まらぬ速さで、攻防を繰り返す2人。

いや、違った。

最初は、乙女ブラックとなった九鬼の攻撃をすべて受けていたが、すぐに立場は逆転した。

笑いながら、攻撃を繰り出す光一に、防戦一方になった九鬼。

「終わりだ」

光一の肘が、九鬼に突き刺さり、くの字に曲げると、蹴りを九鬼の腹に叩き込んだ。

「うぐぅ！」

上空に舞い上がる九鬼の体に向けて、光一は手のひらを向けた。

赤い火の玉が、光一の手の中に発生する。

「駄目だ！」

サーシャは、ドラコンキラーを装着すると、飛び出そうとした。

「うん？」

光一は眉を寄せた。

空中に舞い上がった九鬼は、１人ではなかった。

無数の九鬼が、空に浮かんでいた。

「月影！」

そして、乙女ブラックの体が、光輝いていく。

「流星キック！」

無数の乙女シルバーが、光一に向かって落下する。

「馬鹿な！」

光一が火の玉を放つ前に、乙女シルバー達の蹴りが炸裂した。

「…」

無言で、屋上に着地した乙女シルバー。

「チッ」

飛び出そうとして動きを止めたサーシャは再び、扉の向こうに身を隠し、

「化け物か」

再び観察することにした。

「ククク…」

含み笑いが聞こえた為に、乙女シルバーは振り返った。

「無駄だよ」

しかし、声は後ろからした。

慌てて振り向こうとした乙女シルバーの腹に、至近距離から光一の火の玉が炸裂した。

ふっ飛びながら乙女シルバーの戦闘服は粉々になり…九鬼は床を転がった。

もう気を失っていた。

「貰うぞ。その体」

ゆっくりと、九鬼に近付こうとした光一の動きが止まった。

「な」

突然、全身に信じられない程の負荷がかかり、動けなくなったのだ。

「しっかりしろ！」

いつのまにか出入口から飛び出したサーシャは、九鬼を背負っていた。

「き、貴様は！？」

光一は、エメラルドグリーンに輝くサーシャを見つめ、

「普通の人間じゃないな」

歯軋りした。

「サイレントボム！」

サーシャは光一に叫ぶと、一気に走り出した。

「逃がすか！」

光一の周りが、真空状態になり…そのまま、体が膨らんで爆発するはずだった。

「なめるな！」

光一の目が輝くと、サーシャの技は消えた。

「今の女！あいつも、ただの人間ではないな」

サーシャは、次々に階段を飛び降りた。

驚く生徒達を無視して、とにかく逃げることを優先した。

（追って来られたら、アウトだ）

サーシャは、光一が本気を出せば、逃げ切れるとは思っていなかった。

しかし、賭けた。

（あの男はまだ、人前で事を起こす気はない！生徒達に紛れれば、大丈夫だ）

そう考えたのは、ロバートだった。

「まあ…いい」

光一は、フッと笑った。

「やつらを殺るのは、いつでもできる」

まったくダメージを受けていないことを確かめると、光一は出入口に向かって歩き出した。

「それに、この学園を破壊することも、いつでも可能だ。それにより、この世界はブルーワールドと完全に、切り離される」

光一は、階段を下りだした。

「しかし、それでは…人間が残ってしまう。ゴミを棄てる廃棄場は、必要だからな」

「赤星君！」

下の階につくと、取り巻き達が、光一に群がってきた。

「ごめん、ごめん」

愛想笑いを浮かべると、再び取り巻きを引き連れ、光一は歩き出した。

（フン。ゴミどもが）

心の中では、毒づきながらも。

（まあ～いい。棄てる前に、調べてみるか。人間の醜さをな）

「赤星君」

一番積極的に話しかけてくる女子生徒に、光一は顔を向けた。

じっと彼女の目を数秒見つめた後、

「何？」

優しく微笑んだ。

「あ、いや…」

真っ赤になる女子生徒を見て、光一は決めた。

（ゴミでも、こいつは…燃えるゴミだな）

光一は心の中で、にやりと笑い続けていた。

炎を燃やしながら。

第３９話　永久に

「さて…」

骸骨でできた島で、月を見上げながら、瞑想している俺の元に、フレアは飛んできた。

ここに連れて来られてから、一時間も立っていなかった。

「フレア」

目の前に着地したフレアに、俺は微笑んだ。

「…」

フレアは無言で、俺を数秒見つめてから、口を開いた。

「この世界を守りたいのですか？」

その質問に、俺は驚いたけど、即答した。

「勿論だ」

この言葉に、フレアは笑顔になった。

「だけど…今の俺は、非力だ。ここまでは、何とかやってこれたが、神レベルの相手になると、どうなるか」

俺は、自らの手を見た。透き通る程の白い肌が、傷だらけである。

「あたしは…」

フレアは、俺の手を見つめ、

「あなたの世界を守りたかった。でも…魔物であるあたしが、この世界に馴染むのは難しい」

少し目を伏せた。

「まあ～何とかするよ。ティアナさんのように、剣一つで戦い抜いた人もいるしね」

やはり、昔から知っているからか…俺は、素直に話していた。

「あたしの一部は、あなたの血となり…そして、今は、チェンジ・ザ・ハートの中に宿っています。そして、残りの魂はここに！」

フレアは、自らの胸に当てた。

すると、その部分から、炎が発生した。

「フレア？」

驚く俺に、フレアは微笑んだ。

「あたしのすべてを捧げましょう。魔力の使えないあなたの為に」

「な、何をする気だ！？」

「…」

フレアはただ、微笑んだ。

次の瞬間、フレアの体は燃え尽きた。

「何！？」

と同時に、二つの羽が俺の背中に装備された。

（あなたの羽となり…あなたの武器となります）

フレアの声が、俺の頭に響いた。

「フレア！？」

（あたしの意識は…消えます。だけど…チェンジ・ザ・ハートにも、この羽にも…あたしの思いは残ります）

フレアは意識を消す寸前に、最後の願いを込めた。

それを、俺に告げなかった。

（永久に、あなたのそばに）

「フレア！有り難く使わせて貰うぞ！」

俺は、フレアの思いを理解してはいなかった。

ただ感謝だけしかしていなかった。

「戻るぞ！」

炎の羽を広げ、空中へと舞い上がった。

そのまま、月下の下…日本目指して海面上を進んでいった。

「赤星君…」

下から、背中に手を回し、光一にしがみつく女子生徒。勿論、服は着ていない。

「ああっ！」

突然、弓なりに身を反らすと、女子生徒は気を失った。

「やれやれ」

光一は立ち上がると、はだけた衣服を整えた。

「下らん」

西館四階の奥…使われていない教室。そこに並ぶ机の上で、数十人の女子生徒が裸で気を失っていた。

「やはり…人間の男が、女とやりたいと思うのは、単なる性欲だけ

だな。本能が壊れている癖に、生殖活動だけは盛んとはな。これも、滅びたくない一心かな」

光一はフッと笑い、

「やはり…神である僕が、こんなメスどもと何人やっても感じぬ。だがな！」

先ほど貫いた女の首筋に、手を伸ばした。

「わかったことはある！人間は、僕の餌だ！」

そのまま首を掴むと、片手で女を持ち上げた。

そして、指先を肌に突き刺した瞬間、気を失っていた女が目を覚ました。

「あ、赤星君！？」

「感じるよ！君に入れたときよりも、君の血の方がね！」

光一が指先に、少し力を入れただけで、女子生徒は悲鳴を上げることなく、干涸びて絶命した。

「ククク」

すると、女子生徒の体が発火し、一瞬で燃え尽きた。

「流石によく燃えるな」

光一は笑うと、次々に女子生徒達の首筋に手を差し込んでいった。

（魔力を感じる！）

赤星光一を探していた麗菜は、美奈子の声に廊下を歩く足を止めた。

（微かだが…魔力が上がっていくのを感じる）

「どこですか？」

麗菜は、中央館の二階にいた。

（西館の上だ）

「わかりました！」

頷くと、廊下を走り出す麗菜。

（途中、人目がないところを通れ！やつならば、お前がどうこうできる相手ではない）

「わかりました」

麗菜は大きく頷いた。

「うん？」

光一が最後の食事に、ありつこうとした時、教室の扉が開いた。

「何をしている！」

姿を見せたのは、如月さやかであった。

全裸の女子生徒を持ち上げる光一。そして、床に落ちている大量の制服と下着。

「何もしてませんよ」

しかし、光一が微笑んだ瞬間、持ち上げていた生徒も、衣服類も…すべて消えた。

いや、燃えたのだ。灰も残らずに。

「な！」

誰もいない教室に、1人…光一だけが、立っている。机も椅子も、きちんと揃っている…何事もなかったようになった空間を見て、さやかは絶句した。

「何もありませんよ」

光一は両手を広げ、さやかに微笑みかけた。

「え」

次の瞬間、光一が目の前にいた。

「何事も…ない」

「訳がないだろ？」

さやかの首筋に差し込まれそうになった腕を、乙女ダイヤモンドになった高坂が掴んでいた。

「ほお～」

光一は感心した。

「さやか！逃げろ！」

高坂は、光一の腕を離すと、全身でぶつかった。

「高坂！ダイヤモンドアタック」

吹っ飛ぶ光一。

「な、何が…」

少しパニック状態になったさやかを見て、高坂は廊下にいる緑に叫んだ。

「さやかを頼む！」

「しかし、部長！」

妖刀空切り丸を手に緑は、教室に飛び込むと、光一に向かって構えながら叫んだ。

「部長１人では…」

「１人ではないわ」

反対側の扉が開き、九鬼が飛び込んで来た。

「生徒会長！」

緑は、驚きの声を上げた。

「ほお～。ついさっき、助かったばかりなのに、戦いを挑むか。つくづく…愚かだな」

光一は、九鬼を見て笑った。

「愚かかもな。でも…あたしは生徒会長だ！この学園の生徒を守る義務がある」

九鬼は、乙女ケースを突きだした。

「装着！」

黒い光が、九鬼を包み…乙女ブラックになった。

「フン！」

さらに、力を込めると…黒いボディが、光輝き出した。

「闇夜の刃！乙女シルバー推参！」

さらに、光一の後ろの窓から、サーシャが飛び込んできた。

「雑魚が」

光一は振り返ることなく、集まった者達を目で威嚇した。

「緑！」

高坂の怒声に、緑はさやかの手を引いて、教室から出た。

「君達に、神が倒せるのかい？」

「やって見なければ…わからないだろ？」

廊下を走り出した緑とさやかとすれ違い、姿を見せた美奈子は、銃口を光一に向けた。

「お前は！」

「くらえ」

十三個の銃口が開いた装飾銃から、光の束が放たれた。

「今だ！」

高坂は、拳を突きだした。

「月影キック！」

九鬼はジャンプし、サーシャは光一の背中に向けて、突きの体勢で、ドラゴンキラーを装備し走り出した。

ここに集ったすべての者の一斉、攻撃。

しかし、光一はせせら笑った。

「無駄だ」

「な！」
「何！？」
「お前は！」
「馬鹿な！」

驚愕する４人の前に、現れた５人の女神。

「赤星浩一には相棒がいただろ？」

光一は、唇の片方をつり上げた。

「ア、アルテミア！」

サーシャの突きを指先で摘まんで、止めたアルテミア。

九鬼の蹴りを、蹴りで止めたアルテミア。

高坂の拳を片手で、止めたアルテミア。
美奈子の光撃を、すべて吸収したアルテミア。
「君は、逃げたやつを追ってくれ」
光一の前にいたアルテミアが頷くと、黒いスーツ姿になり、一瞬で姿を消した。
「他の者は、そいつらを殺れ！」
光一の言葉に頷くと、４人のアルテミアは反撃を開始した。
４人のアルテミアは一斉に、ストロングモードに変わった。
「うわあっ！」
４人のアルテミアの蹴りが、４人をふっ飛ばした。
サーシャは、窓ガラスを突き破り、外に落下した。
九鬼の体も、教室の扉を突き破った。
他の二人も、教室から廊下に転がった。
「ハハハハ！」
光一は、笑った。
「彼女達は、この世界に来た時の天空の女神を元につくられている。

君達では、絶対に勝てないよ」

その頃、西館の階段を駆け下りた緑とさやかの前に、先回りしたアルテミアが、立ち塞がっていた。

「天空の女神…」

逃げる途中で、気を取り戻したさやかは、激しく息をしながらアルテミアを睨んだ。

「あり得ない」

第４０話　強襲の女神

「天空の女神は、王となった。こんなところにいるはずがない」

さやかは、何とか息を調えようとしていた。

「この偽者が！」

緑は、木刀をアルテミアに振り下ろした。

しかし、指先一本で止められてしまった。

「え！」

そして、指で木刀を弾かれただけで、緑は後ろに吹っ飛び、尻餅をついた。

「クッ！」

窓の向こうでは、頭上から窓ガラスの破片とともに、乙女シルバーが着地した。

ほぼ同時に、着地したアルテミアの蹴りが、乙女シルバーを吹っ飛ばした。

「乙女シルバー！」

蹴られて、空中を飛ぶ乙女シルバーの姿が、さやかの目に映った。

アルテミアは、ゆっくりと九鬼の後を追う。

「天空の女神がもう1人！？」

さやか達の方を見ないで、窓を挟んだ向こう側をアルテミアが悠然と、進んでいく。

「馬鹿な！」

驚いていると、今度は乙女ダイヤモンドが落下してきた。

「高坂！」

仰向けに落ちた乙女ダイヤモンドのそばにも、アルテミアは着地すると、首根っこを掴んで、ほり投げた。

「！？」

驚いているさやかの前にいたアルテミアが突然、バランスを崩した。

「女神だとしても、人間と同じように二足歩行ならば！バランスを崩したら！」

尻餅をついていた緑はいつの間にか、片膝をつくと、木刀でアルテミアの足を払ったのだ。

「如月部長！」

緑は立ち上がると同時に、廊下を走り出した。

「わかったわ！」

さやかは、緑とは逆方向に逃げ出した。

どちらかがやられても、どちらかが生き残る方法を選んだのだ。

「…」

アルテミアはバランスを取り戻すと、迷うことなく…緑に向かって走り出した。

「上等だよ！」

緑は、木刀を握り締めると、アルテミアを迎え撃つことにした。

「学園に残っている生徒の皆さんは、速やかに下校して下さい！繰り返します。学園に…」

放課後の学園中に、校内放送が響き渡った。

九鬼の命を受けた香坂姫百合が、呼び掛けているのだ。

部活に入っていない月影メンバーはもう、学園には残っていなかった。

さらに、まだ完全に回復していない月の女神も、中島とともに学園

を出ていた。

幸いではあったが…彼女達がいたところで、状況がよくなることはあり得なかった。

「ひぇ～」

情報倶楽部の部室内で、パソコンを弄っていた舞は、悲鳴を上げた。

「最上級の神レベルが、５人も!?一瞬で、国がなくなっても、仕方がないかも」

「もしもし」

その言葉を、通信で聞いていた輝は冷や汗を流した。

「そんな相手だったら、僕はいらないんじゃないかな?」

本当は、何かあった時の為の奇襲要因としてに、光一がいた教室の隣で、机の下に潜んでいた輝は、まったく動けなくなっていた。

野生の勘が、輝の動きを止めていたのだ。

「状況が変わったのよ」

舞は、画面をモニターに切り替えた。

「とにかく、あんたは死なないようね」

「わかった」

通信を切ると、舞は学園中に仕掛けたカメラで戦いを映し、ため息をついた。

「打つ手がないかも」

西館四階の廊下で、美奈子は後退しながら、銃を撃ち続けた。

しかし、アルテミアには通用しなかった。

「くそ！」

美奈子の脳裏に、嫌な記憶がよみがえる。

自らが死ぬ寸前のことを。

魔王ライに、まったく自分の力が通じなかったことを。

「こ、こいつらは！」

美奈子の苛立ちは、銃の精度を落としていた。

並んでいる教室の壁が、流れ弾で吹っ飛んだ瞬間、麗菜が叫んだ。

「あたしがやります！」

「何をしている！女神の力を持つあたしが、敵わないんだぞ！戦闘向きではないお前が！？」

「それでも！」

麗菜は叫んだ。

「モード・チェンジ！」

「やめろ！」

美奈子の制止をきかずに、麗菜に変わってしまった。

少し驚いたように見たアルテミアは、フッと笑うと、いきなり走り出した。

（やめろ！）

美奈子の声が、頭に響く。

しかし、麗菜の意識はもう…アルテミアにしか向いていない。

（勝負は一瞬！）

麗菜は、自らの鳩尾に手を当てた。

「…」

アルテミアの拳が、麗菜に迫る。

「は！」

麗菜は、気合いを発した。

「！？」

次の瞬間、光が…アルテミアの突きだした右腕を中心として、走った。

（やった！）

勢い余って、麗菜の横を通り過ぎるアルテミア。

「ふぅ～」

麗菜の手には、日本刀に似た刀が握られていた。

次元刀。

時空間さえも斬り裂く…その刀の性質で、麗菜はアルテミアの腕を斬り落としたと確信した。

少し心が痛んだが、アルテミア本人ではないと言い聞かせ、麗菜は振り向き様の斬撃を放った。

光の半月が、刀から飛び出し、アルテミアの括れたウエストを通り過ぎた。

右腕が廊下に落ち、胴体から真っ二つになるはずだった。

しかし、赤い血の線が皮膚に一瞬走っただけで、アルテミアの体には傷一つ残らなかった。

「え」

驚く麗菜の目の前で、振り返ったアルテミアの瞳が赤く輝き、唇の両端から牙が覗かれた。

「バンパイア…」

アルテミアの瞳を見た瞬間、麗菜は体の自由を失った。

握っていた次元刀が、床に落ちた。

「フッ」

アルテミアは一瞬で麗菜の前まで来ると、首筋に噛みついた。

「!?」

しかし、すぐに違和感を感じると、首筋に突き刺した牙を抜いた。

2つの傷口から、流れる砂。

アルテミアは顔をしかめ、口に入った砂を吐き出す為に下を向いた。

その時、アルテミアの脳天に銃口が突き付けられた。

引き金が引かれ、至近距離から、光の弾が直撃した。

その反動で、2人は吹っ飛んだ。

「化け物め」

麗菜が意識を失ったことになり、強引に体を変えた美奈子は恐怖を緩和する為に、笑って見せた。

そして、再び引き金を弾こうと銃口を向けたが…アルテミアはいなかった。

いつのまにか、後ろに移動したアルテミアの回し蹴りが、美奈子の脇腹にヒットした。

次の瞬間、美奈子は廊下の窓ガラスを突き破り、四階から落下した。

アルテミアもその窓から飛び降りると、地面に激突した美奈子の背中に爪先を突き立てた。

「う！」

砂でできている肉体とはいえ、痛みは感じるようにできていた。

アルテミアは美奈子の首根っこを掴むと、グラウンドまで引きずっていった。

「チッ！」

フラッシュモードとなったアルテミアと、西館裏で激突するサーシヤ。

スピードは圧倒的にアルテミアが上であるが、軌道を読んだサーシヤは何とかしのいでいた。

（やはり、人形だ。攻撃パターンが決まっている）

ロバートの分析力とサーシヤの身体能力により、防御だけはできていた。

「しかし、このままでは！」

反撃ができないならば、サーシヤに勝ち目はない。

（天空の女神相手で勝てる者は、いない！せめて、赤星君に魔力が使えれば）

ロバートは、悔しそうに言った。

「く！」

サーシヤは顔をしかめ、止まることのないアルテミアの攻撃を防いでいたが、じりじりと後退していた。

そして、いつのまにか…グラウンドまで来ていた。

「うん？」

サーシャは横目で、グラウンドの中央を見た。

気を失っている美奈子を中心にして、乙女シルバーが構え、高坂が片膝をつけながらも、結局二人して捕まった緑とさやかを守っていた。

「高坂！あたしに、ケースを貸して！今のあなたじゃ…戦えない」

さやかの言葉に、高坂は頷いた。

「すまない」

乙女ダイヤモンドになっていた為に、四階からの落下に耐えることができたが…この後のアルテミアの猛攻により、高坂の体力は限界に来ていた。

「だが…勝てるかどうか」

高坂から乙女ケースを受け取ったが、さやかの手は震えていた。

そんな5人を囲むように立つ四人のアルテミア。

（どうやら、あそこに行かせたいらしいな）

ロバートの言葉に、サーシャは唇を噛み締めた。

「そんな思い通りにさせない！」

サーシヤはドラゴンキラーの刀身で、アルテミアの蹴りを払うと、そのまま回転し、一歩前に踏み出すと切っ先を突きだした。

その動きに、アルテミアは後方に下がった。

「いくぞ」

さらに前に出ようとしたサーシヤは、足を止めた。

「な」

絶句するサーシヤの目に、アルテミアの姿が映る。

白い翼を広げ、純白のドレスを身に纏った姿は…。

「エンジェル…モードか」

サーシヤの額から、冷や汗が流れた。

エンジェルモードとは、アルテミアのモード・チェンジの中でも、上位進化といわれ…数倍にもパワーアップした姿を言うのだ。

「…」

アルテミアは空に浮かぶと、翼を羽ばたかせた。

それだけで突風が発生し、サーシヤはふき飛ばされた。

「な！」

突風は、グラウンドにいた九鬼達にも届いた。

いや、それだけではない。

別方向からも、突風は吹き…九鬼達はグラウンドを転がった。

「い、たたた…」

砂煙が巻き上がり、それが晴れた時には、九鬼達のそばに、サーシヤがいた。

「チッ」

サーシヤは舌打ちすると、頭上を見上げた。

「万事休すか」

6人を囲むように、空中に浮かぶ5人の天使。

「な、何というプレッシャー」

さやかは、変身することも忘れていた。

「終わりだ」

先程の部屋にいた光一は、にやりと笑った。

5人のアルテミアの手にいつのまにか…槍が握られていた。

「ま、まさか…」

サーシヤは、その体勢を知っていた。

槍を一斉に、脇に挟むアルテミア達。

（女神の一撃か）

ロバートは、呟くように言った。

（防ぐ手立ては…ない）

誰もが絶望した時、5人のアルテミアは空中で、撃墜された。

「な！」

目を見開く九鬼達の頭上で、無数の火の玉が飛んできて、5人のアルテミアに炸裂したのだ。

「うおおっ！」

雄叫びを上げて、俺は…大月学園の上空に浮かぶアルテミアにそっくりな相手に、接近しながら、攻撃を仕掛けた。

背中につけられた炎の羽から、無数の火の玉を発射した。

「よりによって！アルテミアの姿だと！」

回転する2つの物体が、猛スピードで飛ぶ俺に纏まりついた。

その2つを掴むと、十字にクロスさせた。

「いくぞ！」

ライトニングソードを握り締めると、俺は5人のアルテミアに斬りかかった。

第４１話　届け物

（一瞬にかける！）

俺は、一番近くに浮かんでいるアルテミアに斬りかかった。

「うおおおっ！」

俺の気合いに呼応するかのように、ライトニングソードの刀身に電気が帯びた。

アルテミアの翼を斬り落とすと、そのまま彼女の体を蹴り、叫んだ。

「モード・チェンジ！」

空中でのフラッシュモードである。アルテミア達の体を足場にすることで、俺は次々に彼女達の翼を斬り裂いた。

「！？」

その速さは、地上にいる九鬼にも見切れるものではなかった。

翼を斬られ、地上に落下するアルテミア達。

それよりも速く、斬り裂いた勢いで、地面に着地した俺の額に冷や汗が流れた。

「やはり…」

5人のアルテミアの落下により、発生した砂煙に向けて、俺は振り向く様に羽を広げて、無数の火の玉を放った。

「あなたは！？」

近づこうとする九鬼を、俺は止めた。

「逃げて下さい！」

「え？」

「これくらいでは、やつらはびくともしませんよ」

俺は、砲撃を止めた。羽が消えると、ライトニングソードを握り締めた。

「！？」

砂煙の向こうで、今度は土が燃える臭いがした。

しかし、砂煙が消えた時…九鬼は絶句した。

赤いジャケットを羽織ったアルテミアは、悠然と歩いて来ているからだ。

「ファイヤーモードか」

俺は無理矢理、笑って見せた。

「無傷…」

乙女ケースを握り締めたまま、さやかは目を見開いた。

「やはり…偽者でも、アルテミアか」

俺は、５人のアルテミアのプレッシャーに身を震わせた。

先程のライトニングソードでの斬撃も、天空の女神であるアルテミアの偽者ならば、あまり効果がないかもしれないと思っていた。彼女は、雷鳴と風を操った。

（それに、ライトニングソードの切れ味が落ちている）

恐らく、ライの影響であろう。

（娘に、そっくりな相手を斬りにくいか）

俺は、シャイニングソードに変えようかと悩んでしまった。

その一瞬の迷いが、俺を窮地に追い込んだ。

いつのまにか…５人のアルテミアに囲まれていた。

どうやら…ターゲットを俺１人に絞ったらしい。

「これは…これは…」

５人のアルテミアに囲まれた様子は、圧巻である。

（能力的には、アルテミアと同じ！）

俺は全方向に気を配りながら、確証した。

（レベル的には…今のアルテミアの十分の一くらいだ）

ブルーワールドと違い、大気の汚れたこの世界で、アルテミアは本来の力を発揮できなかった。

そんなアルテミアをコピーしたからか。圧倒的に、本家に比べて弱く感じた。

しかし、それでも…魔力が使えない俺では、まともにやって勝てるとは思えなかった。

「危ない！」

九鬼の叫びに、俺は剣を振るいながら、回転した。

フラッシュモードで接近したアルテミアを、ライトニングソードで牽制した。

間髪を入れずに、ストロングモードのアルテミアが、飛びかかってきた。

「とぉっ！」

それを横から、飛びかかった九鬼が、迎撃した。

「月影キック！」

乙女シルバーの蹴りが、決まったが…すぐに蹴り返されていた。
それを見て、高坂は立ち上がると、さやかの手から乙女ケースを取り戻した。
「もがいてみるよ。何とかな」
「え…」
驚くさやかの横で、高坂は装着した。
「まだまだ！」
サーシャもアルテミアの1人に、襲いかかった。

（空中で、一体は…斬り裂くつもりだったのに）
予定外であった。
2人のアルテミアを相手にしながら、俺は下唇を噛み締めた。
「部長！」
「高坂パンチ！」
渾身の攻撃を、片手で掴まれ、動けなくなった高坂とアルテミアの間に向って、緑は走り出すと木刀を振り下ろした。

アルテミアの手首に決まったが、まったく痛がる様子もなく、ゆっくりとした動きで緑の方を見ると、雷鳴が走った。

「させん！」

高坂は拳を握られながらも、緑の方へ体を滑らせた。

「部長！」

盾となった高坂の全身を、雷鳴が至近距離でスパークした。

「う」

足から崩れ落ちた高坂であったが、アルテミアに拳を持たれている為に、倒れることはなかった。

「部長！」

身代りになってくれた高坂に、叫ぶ緑。

そんな緑に、アルテミアは高坂を投げた。

「部長！しっかりして下さい」

高坂の変身が解け、その手から乙女ケースがこぼれ落ちた。

「部長！」

気を失っている高坂を抱き止め、呼び掛ける緑に向かって、アルテ

ミアは指先を向けた。

「まったく」

さやかは頭をかくと、アルテミアの指先の軌道上に立った。

「あたしももがいてみるか！」

足下に落ちている乙女ケースを拾うと、叫んだ。

「装着！」

「くそ！」

戦いは熾烈を極めているように見えたが…違っていた。

5人のアルテミアは、本気を出していなかったのだ。

「フフフ…」

西館四階から、戦うの模様を観察していた光一は、楽しそうに笑った。

「アダムが加勢したところで、戦況は変わらない」

光一は天井を見上げ、

「お遊びは、終わりだ。とどめを刺せ！アダム以外は、塵と化しても構わない！」

グラウンドにいるアルテミア達に命じた。

「な！」
「チッ！」
「くそ！」

突然、攻撃を止めたアルテミア達は、後方にジャンプすると、槍をつくり構えた。

「女神の一撃か！」

先程と違い、地上に足をつけての攻撃体勢である。

俺は再び羽を出し、火の玉を放とうと思ったが、途中で断念した。

（先程は、奇襲だった。もう通じない）

俺はライトニングソードを握り直すと、真後ろの九鬼達を見た。

（ティアナさんのように、攻撃を斬り裂いて、懐に飛び込むことはできる！しかし！）

自分の進路はできるが、後ろの九鬼達を守ることはできなかった。

（どうする？）

悩んでいる暇は、なかった。

アルテミア達の槍が輝き、風が集まって来ていた。

（南無三！）

俺はフラッシュモードで、５人を一瞬で斬り裂くことに決めた。

「モード・チェ」

とまで言った瞬間、空から落ちて来た五つの雷が、アルテミア達を直撃した。

「このような所業！我が王を愚弄するとはな！許さん！」

「！？」

一瞬のことで、俺も何が起こったが、わからなかった。

振り返った俺の顔に、影が落ちた。

「久しいな。少年…うん？見違えたな」

３メートル近くはある体躯を目にした俺は、絶句した。

「ギラ？」

「見た目は違うと聞いていたが…まさか、女になっているとはな」

にやりと笑った男の頭には、一本の角が生えていた。

「ま、まさか…」

ギラの姿を見た瞬間、九鬼達は凍りついた。

「馬鹿な」

驚くサーシャの声に、ギラは気付き、

「ここに来るのは、サラの方がよかったかな？」

口許を緩めた。

「どうして、騎士団長のお前がここに！」

俺は、戸惑いを隠せなかった。

5人のアルテミア達は、ギラの雷撃を受け、同じ属性でありながら、痺れて動けなくなっていた。

「な、何だ？あいつは！」

ギラの魔力を感じ取り、光一の額に冷や汗が浮かんだ。

「手こずっているようだな。こんな偽者達に」

ギラは俺を見て、鼻で笑った。

「何をしに来た？まさか、加勢をしてくれるのか？」

「馬鹿を言うな」

ギラは軽く俺を睨んだ後、どこからか何を取り出した。

「俺はただ、アルテミア様にこれを渡すように頼まれただけだ」

指先に摘まんだものを、ギラは俺に投げた。

それを掴んで、俺は驚いた。

「これは、ブラックカード！？」

「アルテミア様が、ジャスティン・ゲイから譲り受けたものだ。このカードは、昔のように無限に魔力を引き出せる。但し…ブルーワールドと繋がっている場所だけで補充できる」

ギラはそれだけ言うと、俺の顔をじっと見つめ、

「貴様のことは報告するが、その姿は黙っていてやろう。貴様の為ではなく…アルテミア様の為にな」

そう言うと、空に舞い上がった。

「待て！」

俺はギラに手を伸ばし、

「例え、魔力を使えても！カードの魔力では、神レベルは！！」

思わず叫んだ。

「甘えるな！お前本来の魔力なら、やつらは倒せる！後は、自分で考えろ！」

ギラはそれだけ言うと、亜空海に消えた。

「考えろ…」

ギラが去ると同時に、５人のアルテミアを縛っていた雷撃が消え…再び女神の一撃の体勢に入った。

第４２話　再び

「考えろ」

俺は周りを見ずに、この状況を打開する案を考えていた。

「な、何なのよ！騎士団長って！」

さやかは、ギラが去った空を見上げた。

「クッ！」

九鬼は気持ちを切り替えて、アルテミア達に構えた。

「少年？」

高坂は、考え込む茉莉を見つめていた。

「くそ！」

緑も構えた。

「すべての力を使えば…１人くらいは！」

サーシャの言葉に、ロバートが反論した。

「やめておけ。１人倒したところで、状況は変わらない」

風が激しさを増し、立っているのも、やっとの状態になったとき、

気を失っていた美奈子が目を覚ました。

「うう…」

まだ定まらない焦点で、倒れながらアルテミアに銃口を向けた。

「この世界では、魔力を使えない！カードの魔力では、５人のアルテミアを……！？」

と、改めて状況を確認した俺は、はっとなった。

「そうか！」

ブラックカードを指先に掴むと、俺は叫んだ。

「全ポイント還元！そして！」

俺はカードの先を、５人のアルテミアに向けた。

「転送！」

「え！」

次の瞬間、風が止み…雷鳴が消えた。

静寂が戻った…夜のグラウンドに、サーシャ達だけが立ち尽くしていた。

「いない…」

九鬼は周囲を見回したが、姿形もなく…気配も消えていた。

「どこかにテレポートさせたな」

ロバートの声に、サーシャはドラゴンキラーを外しながら、訊いた。

「どこへ？」

「恐らく…。勝てる場所だよ」

ロバートの言葉に、サーシャは空を見上げた。

「さすが…ブラックカード。ポイントの心配はいらなかったが…まさか、時空間の壁も越えられるとはな」

俺はにやりと笑うと、一面の砂景色に目をやった。

足下が埋まる程に砂は溜まり、空には無数の糸のようなものが、複雑に絡み合い…縦横無尽に走っていた。

「!?」

俺の周りに、5人のアルテミアが降り立った。

「さあ～!初めようか!」

俺はブラックカードをしまうと、5人を見ることなく…ゆっくりと構えた。

「いくぞ!」

俺の瞳が、真っ赤に染まった瞬間、世界が震えた。

俺を中心にして、円が無限に広がり、砂漠の砂に軌跡を残していく。

しかし、アルテミア達は足下を気にすることなく、エンジェルモードに変わると、翼を広げ、襲いかかってきた。

「アルテミアを真似たことを、後悔しろ!」

低空で飛ぶアルテミア達を、俺は避けることなく、指先で弾いた。

5人のアルテミアの動きが、止まった。

いや、止まっただけでなく、弾き返された。

「終わりだ!」

弓なりに体を反らし、宙に舞う5人のアルテミアの上空に、5人の

俺がいた。

「!?」

慌ててモード・チェンジチェンジしょうとした5人のアルテミアは、俺の手から出た炎で、一瞬にして燃え尽きた。

「よし」

5人の俺が満足気に頷くと、1人に戻った。

砂の上に着地すると、後ろから拍手の音がした。

「やっぱり!あなたは強かったわね」

俺は、その声に聞き覚えがあった為、笑顔で振り返った。

「お久しぶりです。和美さん」

「信長と戦った時と比べて、見違えたわ。確かに姿も変わっているけど」

和美は、茉莉の姿をした俺を見て、軽く顔をしかめて見えた。

「だけど…よく俺だとわかりましたね?」

そう訊くと、和美は笑い、

「この世界は、魂は見えるの。あなたが、どんな姿で来ようとも、間違えることはないわ。だけど…」

途中で、和美の口調が変わった。

「あたしは…あなたに、あの世界に行ってはいけないと、忠告したはずよ」

俺を睨む和美の目に、思わず目を逸らしてしまった。

「だけど…本体とは別の…」

言い訳をしょうとしたが、和美は強い口調で遮った。

「魔力の使えない体で、どうするつもりだったのです。それに、体を交換させられるなんて」

最後は嘆き、ため息をつく和美。

それを見て、俺は慌てて言葉を発した。

「魔力に関しては、このブラックカードで」

「駄目よ」

和美はぴしゃりと言い放った。

「この世界は、砂のように脆い。あなた程の魔力を何度も使えば…崩壊する可能性があるわ。今さっきのでも、この世界は震えていたわ」

「！」

俺は、周囲を見回した。

確かに砂の量が、減っていた。

「この世界は、仮初めの世界。いつなくなっても、おかしくない」

「そ、そんな～」

肩を落とす俺に、和美は駄目だしをした。

「それに、そのカードが使えるポイントは、ブルーワールドの人々が必死になって集めたもの。ここまで、来るのにどれ程のポイントを使いましたか」

「う」

俺は焦った。

まさか…全ポイントとは言えなかった。

（やはり…使用するポイントは、最小限にしなければ）

俺は肩を落とし、ため息をついた。

そんな俺を見て、和美は話題を変えた。

「あなたは、特別な存在。力があるというだけではなく…何を為そうと、いつも頑張っている」

和美は空を見上げ、

「神とも呼べる存在になりながらも…あたなは、もがき…成長している」

「え？」

「成長する神は、珍しいわ」

和美は優しく、微笑んだ。

「だから…大丈夫よ。例え…魔力が使えなくても」

「和美さん」

俺は思わず、和美の方に一歩、足を出した。

「あなたの勇気と優しさが必ず…あの世界を救う。あたしが生まれた世界を」

その言葉が、俺の耳に飛び込んできた時には…俺は、西館の屋上にいた。

「な！」

俺は慌てて、ブラックカードを見た。帰りの魔法は使っていない。

生きた人間が、砂の世界に行くには、本来は…宇宙空間から、太陽と地球の間にできる影から入らなければならない。

そんな正当な方法を使っていない。

「和美さんが、帰してくれたのかな？」

俺は無理矢理納得すると、屋上から九鬼達を見下ろした。

「とにかく、守らなければならない」

視線を自らの手に向けると、

「この体！この力で！」

拳を握り締め、改めて誓った。

第４３話　やがて訪れる悲劇の為に

「必ず救う！」

屋上で、誓いを新たにしている俺の耳に、微かな歌声が飛び込んできた。

「？」

振り返ると、誰もいないが、出入口の後ろから声が聞こえてきた。

俺は恐る恐る近づき、覗いて見た。

目を瞑り、真剣な表情で歌う少女がいた。

（この子は？）

名前を思いだそうとしていたら突然、少女は目を開けた。

「え！あっ～え…きゃあ！」

口ごもった後、少女は悲鳴を上げながら、俺の横を通り過ぎた。

どうやら…先程のアルテミア達の襲撃の時もずっと、歌っていたようだ。

（周りの音が、聞こえなくなる程の集中力か）

俺は少し、感心してしまった。

しかし、当の本人は…顔から、火が噴き出しそうになる程、恥ずかしさで真っ赤になっていた。

少女の名は、香坂姫百合。

校内放送を流した後、校舎を出ることは危険と判断した彼女は、屋上から下の様子を伺いに来たのだ。

しかし、それが裏目に出た。

麒麟と化した中島の雷撃を、まともに見た姫百合は、屋上の階段裏に隠れ、恐怖を拭う為に、小さな声で歌を歌っていたのだ。

その集中力で、恐怖を消すことはできたが、戦いの終息を感じることができなかったのだ。

「な、なんたる失態！」

真っ赤になりながら、階段を駆け下りると、二階フロアの左側の廊下から香坂真琴が、姿を見せた。

「姫！一体、何が起こっているんだ？」

相変わらず、出遅れる姉の質問に、　姫百合はこたえることなく、さらに下に下りていった。

「姫！姫百合！」

姉の言葉では止まらない。

一階についた時、中庭から廊下に入ってきた九鬼の姿が、姫百合の目に飛び込んできた。

「生徒会長！」

姫百合の叫びに、疲れ果てていた九鬼は、笑顔を向けた。

「無事でしたか？」

「会長！」

姫百合は、九鬼の胸に飛び込んだ。

九鬼は、姫百合を抱き締めると、

「何とか…終わりました。帰りましょう」

微笑み、帰宅を促した。

「はい」

姫百合は、そんな九鬼の言葉にただ頷いた。

「終わったのか？」

部室に戻った高坂は、端にあるソファーに倒れ込むように座った。

「恐らくね」

その前に、さやかが座った。

「でも、この学園は変わってますね。異世界なのに、あたし達の世界のように、いろんなことが起きます」

隣に座った緑の言葉に、高坂は顔を天井に向け、無言になった。

「まあ～よかったじゃないですか」

ソファーとは反対側にあるパソコンの前にいた舞は、コーヒーカップ片手に振り返り、にやりと笑った。

「神レベルが５人ですよ。５人。生きているだけで、奇跡ですよ。さらに、騎士団長まで、現れるなんて！レア過ぎますって！」

妙に興奮している舞に、緑とさやかはため息をついた。

「まったく…」

さやかは自らの膝に、頬杖をつくと、天井を見上げている高坂を見、

「それにしても、あの開八神って女の子は、何者なの？騎士団長と知り合いみたいだったし…５人の女神と同時に消えたわ」

質問を投げ掛けた。

「開八神茉莉。開八神一族の若き当主です。想像できない程のお金持ち。そのことは、この世界の誰もが知っていますが…実状は誰も知りません。軍事産業に手を出してるとか、噂はありますけど」

高坂の代わりに、舞が答えた。

「まあ～そんなことよりも」

高坂は首を曲げると、

「問題は、赤星光一だ。やつを止めなければならない」

さやかと緑を見つめ、

「やつが、この世界の問題に関わっていることは間違い」

ゆっくりと体勢を戻し、前のめりになると、両膝の上に肘をのせ、手を組んだ。

「だけど、そう簡単にいきませんよ」

舞は、後ろを見ることなり、キーボードを指で弾いた。

すると、画面にあるデータが映し出された。

「赤星光一のレベルは、先程の天空の女神をさらに凌駕しています。それでも、恐らく本気ではない。あたし達が、どうこうできる相手

じゃないですよ」

舞の説明に、部室内に沈黙が走る。

「…」

数秒、考えた後…高坂は口を開いた。

「それでも、諦めたら人間は終わりだ。必ず、道は広がるはずだ。まずは、彼女に接近しょう。開八神茉莉…。俺は、彼女の方に…赤星らしさを感じるよ」

「はあ～？どういう意味ですか？」

緑は思い切り首を傾げながら、高坂の方を見た。

「ところで…」

高坂は緑にこたえずに、舞の方を向き、尋ねた。

「輝は、どうした？」

「あ！」

舞は声を上げると、パソコンの方に椅子を回転させた。

「忘れてた」

その頃、未だに西館の教室内で、机の下で待機していた輝。

「ま、まだかな…」

戦いが終わったのに、未だ…恐怖と緊張にとらわれていた。

「いい歌だった」

戦いの疲れを癒すような姫百合の歌声を思い出しながら、俺は屋上から階段を下りていたが…途中で、足を止めることになってしまった。

「フン」

何故ならば、下のフロアに、眼鏡を指で上げ、不機嫌そうな真田がいたからだ。

「どうして、ここに？」

「フン」

もう一度、鼻を鳴らすと、真田はゆっくりと俺の方を見上げて訊いた。

「貴様の武器。そして、女神達をどこかへと転送させた…あのカード。恐らくは、異世界の兵器だな？」

「！」

俺は、絶句した。

「お前を、ろくに調べもせずに拘束し、精神を交換させたのは、お嬢様の命。一目惚れされたお嬢様が、即座に指示されたからだ。そして、我々もそれでよかった」

「何が言いたい？」

俺は、真田の言葉に眉を寄せた。

「お前の素性など、どうでもよかったのだよ」

真田は、フッと笑った。

「どうでも、よかった？」

「そうだ」

真田は頷いた後、俺を睨み、

「しかしだ！貴様の武器を使い、お嬢様に刃向かうならば！容赦はせぬ」

鋭い殺気を放った。

「な」

その鋭さは、思わず俺に構えたさせた程だった。

「フッ」

そんな俺を見て、真田は口許を緩めると、ゆっくりと背を向けた。

そして、歩き出そうとする真田を、俺は慌てて止めた。

「待て！」

「最後に、一つだけ忠告しておこう。お嬢様の好意を裏切るな。お前がもし、この世界を救いに来たならな」

真田は足を止めることなく、階段下のフロアから消えた。

入れ替わりで、猫沢が姿を見せた。

「帰りましょうか？お嬢様」

深々と頭を下げた猫沢の丁寧な口調は、茶番劇の始まりを意味していた。

そして、拒否できないことも。

（どういう意味だ？）

俺もまた、茶番劇をキャンセル気にはならなかった。

開八神茉莉の肉体の謎や、いろんなことが気にかかったからだ。

（とにかく、渦中にいることは確かだ。今のままで、探ろう）

俺は軽く深呼吸すると、階段を下りた。

その頃、廊下を歩き、屋上に繋がっていない反対側の階段まで来た真田の前に、太陽の姿をした茉莉が現れた。

「太陽様に、何を話した？」

茉莉の存在に気付くとすぐに、真田は跪いた。

「大したことは…」

「できすぎたことはするな」

茉莉は腕を組むと、跪いている真田の頭に右足を置いた。

「太陽様が、あたしを裏切ることがあると、お前は思っているのか？」

茉莉が足に力を込めると、真田の顔は床に押し付けられて、めり込んだ。

「滅相もございません」

「太陽様は、運命のお方。次に、いらぬことを口にしたら、殺す」

茉莉は足をどけると、真田に背を向けて、歩き出した。

「は！」

めり込んだ床から顔を上げると、再び跪き、頭を下げた。

そして、立ち上がると、茉莉の後ろについて歩き出した。

「…」

前を歩く茉莉の背中を見つめ、真田は割れた眼鏡を指で押さえた。

（我が主君の命は、絶対。例え、世界が滅んでも、従うが家臣の務め）

そう決心しながらも、真田は渡り廊下に出ると、横目で窓の外を見た。

（しかし…）

心の中で浮かんだ言葉を、真田は敢えて消し去り、茉莉の背中にもう一度、頭を下げた。

第3章　運命の螺旋編　第４４話　レター

「首尾はどうかね？」

ただ広く、何もない部屋に置かれた椅子に座る男は、前に立つティアに訊いた。

「問題なく…」

とティアがこたえた瞬間、部屋の中にテレポートして来たものがいた。

「問題はあるよ。だけど、気にすることはない」

「おお～！」

椅子に座っていた男は、その声に立ち上がると、その場で跪いた。

「神よ！」

「フッ」

テレポートしてきたのは、赤星光一であった。

光一は、跪いた男を一瞥すると、ティアを見、

「それよりも、君の妹の方が問題だ。彼女は、歌で人々に警告を発しているね？まあ～そんなことで、計画が頓挫することはないが…あまりいいことではない」

光一の言葉に、ティアは鼻で笑った。

「単なる歌よ」

そして、ティアは光一を見、

「何の力もないわ」

それだけ言うと、失礼しますと呟き、部屋を出ていこうとした。

横を通り過ぎたティアに、振り向くことなく、光一は言った。

「君達の望みは、人間が支配するこの世界の崩壊…。つまり、人間を滅ぼしたいだったよね」

光一の言葉に、跪いている男はこたえた。

「はい！そうでございます」

「なのに…歌かい？」

光一は、目を細めた。

「鎮魂歌ですよ。少し早めの…。そして、最後の歌」

ティアはそう言うと、光一の背中に頭を下げ、部屋から出ていった。

「神よ！」

男は跪いたまま、話し出した。

「本当は、この世界の人間は、この世界で滅ぼすのが一番でございます。が！向こう側が、どうしてもこの世界の人間の魂がほしいと申すものですから」

顔を上げた男の眼窩に、目玉はなかった。

「…で、お前はどうすんだ？この世界が滅んだら？」

光一の言葉に、男はにやりと笑った。

「向こうで生きますよ。自由な姿で」

「…」

光一は、男の横を通り、椅子に腰かけた。

男は跪きながら、体を半転させ、もう一度頭を下げた。

「女神テラであった赤星綾子は、この世界を魔獣因子を持つ人間だけのものにしょうとしました。しかし、人間の数が多すぎます。一気に処理するならば、異世界に落とせばいいだけです」

「あなたは、人間が憎いのかい？」

光一は、男を見下ろした。

「この世界の人間が、憎いのです！少し違ったくらいで、差別する低能な！この世界の人間が！」

そう言った男の眼窩の底が、もぞもぞっと動いた。

「そうだね」

光一は、足を組み、

「君の思いは、理解しているよ。何故なら…」

口許を緩め、

「僕は、君達によって生み出されたからね。この世界を壊す為にね」

そのあと、にやりと笑った。

「か、神よ！無知で無能なこの世界の人間達に、絶望を与えてやって下さい！何とぞ！」

男の祈りに似た願いに、光一は頷いた。

「君の願いは、必ず叶うよ」

「ありがとうございます」

男は、額が床につくほど頭を下げた。

「よお」

その頃、部屋を出たティアが歩いていると、廊下の壁にもたれていたジャックが声をかけてきた。

「じじいは、元気だったかい？」

「…」

ティアは、足を止めた。

「それにしても、化け物の癖にな。よくこんな屋敷を建てられたものだな？」

ジャックは、廊下の先に目をやった。

この屋敷の持ち主の名は、菱山五郎。

戦前から、今の姿でいる化け物であった。

自らの力だけで、魔獣因子に目覚めた彼は、戦後の混乱期に頭角を示し、財を増やしたのだ。

その人間離れした力を使って。

だが、頭角をあらわしていく彼の正体を知った部下に、寝込みを襲われて、目玉を潰されたのだ。

勿論、その部下は殺されたが…その出来事があってから、滅多に人

前には出なくなり、裏で財を蓄えていったのだ。

「くくく…。まあ～いい金づるだがな」

ジャックは、楽しそうに笑った。

「…そうね」

ティアはそれだけ言うと、ジャックの前を通り過ぎた。

「……フッ」

ジャックは、横目で遠ざかっていくティアの背中を見送った。

「力か…」

宮殿のような家に帰った俺は、ベットに横になりながら、ブラックカードを見つめていた。

「いいアイデアと思ったんだけどな…」

さっきのように、砂の世界にいくのは、できない。

「だったら…ブルーワールドで」

とも思ったが、世界を越える時に使うポイントが申し訳なかった。
俺が、貯めたポイントならまだしも…ブルーワールドの人々の税金を勝手に使うようなものである。
（それに、魔力なしでも戦うと決めたはずだ）
俺はカードを握り締めると、枕元に置いた。
（うん？）
なぜか、妙な光を窓から感じた。
俺は上半身を起こすと、窓の方を見た。
「明るい？」
いつも真っ暗な風景しかうつさない窓は常に、カーテンで閉ざされていた。
そのカーテンが、外から明かりで透けていた。
「何だ？」
俺は窓に近付くと、カーテンを開いた。
少し離れた場所にある…巨大な屋敷が輝いていた。
「あんなところに、屋敷が？」

朝は起こされると、すぐに猫沢に拉致される為に、窓から外を見たことがなかった。

「世の中…金持ちが多いのか？」

自分が生まれた家を思い出して、俺はため息をついた。

ブルーワールドにいってからは、城とかを見たことがあったけど、実世界ではいたって庶民的な家しか、周りになかった。

明かりが消えれば、闇に溶け込む程の色使いの屋敷が、何故か今日だけ…輝いていた。

「うん？」

魔力で探ることのできない俺であるが、嫌な雰囲気をその屋敷から感じ取っていた。

「闇の…祭宴」

何故か…そんな言葉が、口から出た。

「窓は開けるなと言ったはずだが」

いつのまにか真後ろに、猫沢が立っていた。

「今日は、外が明るかったから…少し気になってね」

俺は後ろを見ずに、答えた。

別に、猫沢がいても驚くことはない。

「フン」

猫沢は鼻を鳴らすと、俺の背中に目を細めた。

注意されても、まだ外を見ている俺のそばに来ると、カーテンを閉めた。

「あのお屋敷は、お嬢様の親戚がお住まいになっておられる。しかしな。今は、疎遠になっている」

「疎遠？」

カーテンを閉めるとすぐに、俺から離れた猫沢の動きを目で追った。

「…」

猫沢は答えない。

「何かあったのか？」

俺は再び、カーテンを開けようとした。

すると、素早い動きで、猫沢がそれを止めた。

再びそばに来た猫沢の目を、俺は見つめた。

「クッ！」

お嬢様の体でいる俺の瞳は、開八神茉莉のものである。

声もまた…。

猫沢は顔をしかめると、目を瞑り、顔をそらした。

そして、数秒後…猫沢は話し出した。

「お嬢様が生まれたからだ」

猫沢は俺から離れると、背を向けて歩き出した。

「このことは、お嬢様にも言ったことはない。だが…あの方のことだ。薄々勘づかれていらっしゃることだろうがな」

猫沢は扉の前で足を止めると、

「だから、そのカーテンは開けるな！」

最後に念押ししてから、部屋を出た。

俺はしばらく、閉まった扉を見つめた後、再びカーテンに目をやった。

「？」

いつのまにか、明かりが消えていた。

（何だったんだ？今のは）

ほんの数分間だけ、ついた明かり。
俺には、何を祝福していたかのように思えた。
（闇の祝福？）

「フッ」
その頃、男の部屋を出た赤星光一は、ティアとは逆の方向に歩いていた。
「初めまして、そっくりさん」
「！？」
突然、真横から声をかけられて、光一は足を止めた。
そして、目だけを向けると、
「客人か」
「ウフフフ」
廊下の壁にもたれていたのは、リンネだった。
「何か用かな？」

光一はゆっくりと、体を向けると、顎を上げ、見下ろすようにリンネを見た。

リンネはそんな光一に、微笑んだ。

「何がおかしい？」

リンネの無意味な笑みが、光一の癇に障った。

「別におかしくはないわ」

リンネはじっと見つめながら、腕を組んだ。

「ただ…姿形を似せても、あなたと彼は違うと思ったの？」

「彼？」

リンネの言葉に、光一は眉を寄せた後に、せせら笑った。

「ああ！あいつのことか！この世界の神になれるはずが、たった1人の女に騙されて、すべてを失ったあいつか！」

「…」

リンネは、光一を見つめたまま、何も言わない。

「女など！腐るほどいる！どんなに美しい女も、すぐに飽きる。それに、美しい女もまた、腐るほどいる！そして、簡単に手に入る！」

光一は手のひらを、リンネに向け、

「しかし、神は1人だけだ」

拳を握り締めた。

「そうね」

リンネは素っ気なく、こたえた。いつのまにか、顔から笑みが消えていた。

光一は自分の言葉に酔っているからか…リンネの変化に気付かない。

「客人よ。あなたには、期待している。あなたの力で、この世界を焼き尽くすことをな！ハハハハ！」

拳を下げると、光一は体の向きを戻し、廊下を歩き出した。

光一が見えなくなると、リンネのそばで、刈谷が跪いた。

「あの無礼な男…。ご命令とあらば」

「よい」

リンネはそう言うと、逆方向に歩き出した。

「リンネ様？」

「つまらない男。たった1人なのは、神だけではないわ」

リンネは、前方を睨んだ。

「それなのに…」

そこまで言ってから、リンネは苦笑した。

不機嫌になっている自分に対してである。

「まあ～いいわ」

リンネは再び微笑みと、ゆっくりと廊下を歩きながら、空間に染み込むように姿を消した。

刈谷も跪きながら、頭を下げると…同じく姿を消した。

第４５話　因子

「今日も…進展がなかったな」

リビングで、新聞を広げると、香坂真琴はため息をついた。

「お姉ちゃん！何て格好を！」

二階から下りてきた姫百合が見たものは、下着姿でソファーにもたれる姉の姿であった。

「別にいいだろう？」

香坂真琴は、新聞から顔を覗かせた。

「そうだ。構わんよ」

香坂真琴の前に、テーブルを挟んで父親がいた。

「お、お父さん！？」

「フッ」

父親は煙草をふかすと、天井を見つめ、

「ただ…娘の成長に、感動しているだけだ！」

拳を握り締めた。

「姫、そうだぞ。気にするな。風呂上がりは、楽にするものだ」
新聞を下ろした真琴の胸を見て、姫百合はたじろいだ。
「そうだ。姫百合も」
笑顔を向けた父親に向かって、姫百合は座布団を投げた。
「変態親父が！」
リビングを抜けて、キッチンにいくと、笑っている母親がいた。
「あんなパパで、ごめんね」
母親は笑いながら、謝った。
しかし、その母親の胸を見て、また姫百合はたじろいだ。
（こ、この家系は！）
気を取り直し、姫百合は母親に訊いてみた。
「ママ…。確か、おばあちゃんは、外国人と結婚したんだよね？」
いきなりの姫百合の質問に、母親は首を捻り、
「ああっ！あたしのお母さんね」
思いだしたように頷き、テーブルに置いた急須から湯飲みにお茶を入れながら、言葉を続けた。

「最初の旦那さんが、外国の方で…子供ができて、すぐに亡くなったそうよ。あたしは、その次の旦那さんが…つまり、あなたのお爺ちゃんとの間に、できた子供よ」

「じゃあ！前の旦那さんの子供は？」

姫百合は、人数分のお茶を入れ終わった母親に向かって、テーブルから身を乗り出した。

「残念なことに、行方不明になったそうなの。戦後の混乱に紛れてね。随分、探したそうだけど…」

母親は、お盆に湯飲みを置いた。

「結局、見つからずに…。旦那と子供を失ったショックから、おばあちゃんが立ち直るに時間がかかったそうよ。あたしの父親に出会うまでね」

祖父母が、姫百合の母親を生んだのは、四十歳手前だとは、聞いていた。

「だから、あたしによく言っていたわ。お前には、兄がいるとね」

母親は、真琴達のテーブルに湯飲みを運んでいく。

「確か名前は…クラーク」

「クラーク…」

姫百合は、会ったことのない叔父の名前を口にした。

「うん？」

湯飲みを2人の前に置いた後、母親は首を捻った。

「そう言えば…前の旦那さんと結婚する前に、婚約者がいたと…え？籍は入れていたのかしらね？そこまでは、覚えていないわ」

母親の旧姓は、本田であった。

その本田の名は、父親方の名前ではなかった。

「へぇ～」

母親の話に、真琴が感心した。

「でも、どうしてこんなことを訊くの？」

リビングに来ない姫百合の前に、母親は湯飲みを持って戻ってきた。

「べ、別に！」

姫百合は椅子に座ると、キッチンでお茶を飲むことにした。

「複雑だねえ。いつ聞いても」

父親は煙草を灰皿に置くと、湯飲みに手を伸ばした。

「あたしができてからは、精神的に落ち着いたと言っていたわ。そ

の行方不明になった兄が、きっと…自分の願いを叶えてくれていると」

「願い？」

父親は眉を寄せた。

「それだけは、教えてくれなかったのよ」

母親は、ため息をついた。

「…」

姫百合は無言で、お茶を飲み干すと、椅子から立ち上がった。

「ご馳走様」

そして、慌てて二階へと階段を上った。

「風呂入れよ…ヒクシュン！」

再び新聞を広げた真琴は、くしゃみをした。

「あんたは、何か着なさい。湯冷めするわよ」

父親の隣に座った母親は、真琴に向かって言った。

その頃、部屋に入った姫百合は、着ていたTシャツを脱ぐと、鏡に背中を向けた。

「やっぱり…遺伝じゃないんだ」

うっすらとだが、金色の産毛が生えていたのだ。

それから、前を向き…小さな胸に手を当てた後、姫百合は目を瞑った。

「やっぱり…剃ろう」

ゆっくりを背中を鏡に向けると、金色の産毛を剃ることに決めた。

「女神よ」

マスターの声に、美奈子はコーヒーカップを持つ手を止めた。

ここは、喫茶店。

しかし、あるものが、目覚めた者しか来ることのできない場所。

アルテミア達との戦いでダメージを受けた美奈子は、疲れを癒す為にここに来ていた。

カウンターに座り、ゆっくりと一杯目を楽しんだ後のおかわりが、目の前に来た時…マスターが口を開いたのだ。

「何だ?」

美奈子は、コーヒーカップを置いた。

「近頃…目覚める者が、多くなっているようです。恐らく、この世界の危機に対応して」

「で、どうしているんだ?」

美奈子は、上目遣いでマスターを見上げた。

「初期段階は、わかりませんが、ある程度まで目覚めた者は保護しております」

マスターは、じっと美奈子の目を見つめていた。

「フッ」

美奈子は視線を外すと、コーヒーカップを手に持ち、一口啜ってから、言葉を続けた。

「で、どうしたい?」

美奈子の問いかけに、マスターは即答した。

「あなたの力をお借りしたい」

「しかし…新しい神は、できたはすだが？」

「！」

美奈子の言葉に、マスターは目を見開いた後に、顔をしかめた。

「あれは、我々が求める神ではありません。人工的、作為的な神です！我々が求めるのは」

「あたしは、無理だ」

美奈子は、マスターの言葉を遮った。

「め、女神！」

「だけど、目覚め始めた人達のケアはしなければならない。そのホローはする」

美奈子は、コーヒーを飲み干すと、カウンターを立った。

「女神！」

まだ何か言おうとするマスターの前に、美奈子はお金を置いた。

「ご馳走様」

そして、マスターに微笑むと、カウンターから離れ、店を出た。

「部長」

店を出るとすぐに、麗菜の声が頭に響いた。

「女神になってる暇はない」

美奈子は、真っ直ぐに前を見つめ、

「それに…その前に、この世界をどうにかするぞ」

そのまま…町の雑踏の中に紛れていった。

振り返ることなく。

もし、振り返ったとしても…喫茶店を見つけることはできないであろう。

第４６話　同食

「す、すいません…」

明かりの消えたマンションの一室。その真ん中で、怯えながら携帯電話をかける男。

「ひ、人を…」

男の足下に広がる血溜まり。

「こ、殺しました」

この言葉を聞いて、着信を受け取った者は、にやりと笑った。

「毎度あり」

それだけ言うと、携帯は切れた。

数分後…明かりが消えた部屋に、外からの光が射し込んだ。

まだ１２時前だ。

開けたドアを締めると、藤崎聖人は、顔をしかめた。

「いい匂いだ」

鉄分を含んだ独特の匂い。それは、血の匂いだった。

黒のコートを翻し、藤崎は、土足のままマンション内に上がった。

「こんちは！ご連絡ありがとうございます」

匂いが漂ってくる部屋に、足を踏み入れようとした藤崎は、床に落ちている名刺を気付き、拾い上げた。

そこには、自分の名前と携帯電話が書かれてあった。

「処分するものは、どこですか」

血溜まりの中で、こちらに尻を向けて、土下座するかのように、頭を床につけている男がいた。

先程、電話してきた男である。

「処分するものは？」

最初、藤崎も…懺悔の土下座だと思ってしまった。

しかし、その考えは数秒で、変わった。

「やれ、やれ」

藤崎の耳に、微かに聞こえる…ピチャピチャという音。

「一番、最悪のパターンだ」

藤崎は、頭をかいた。

男は、土下座をしていた訳ではなかった。

床に溜まった血を、舐めていたのだ。

蜥蜴のような長い舌で。

「チッ。殺した反動で、目覚めたか」

藤崎は、舌打ちした。

「本当に…ついてないな」

名刺を胸ポケットに突っ込むと、藤崎は立ち去ろうと、男に背を向けた。

「他を当たるか」

欠伸をして、部屋を出ようとした藤崎の背中に向けて、何かが飛んできた。

振り返ることなく、それを避けた藤崎。

飛んできたものは、針のように細く長くなった舌であった。

壁に突き刺さった舌を見ることなく、振り向いた藤崎は、人間ではなくなった男を睨んだ。

「人を呼んでおいて～物(ぶつ)はないわ。今度は、命を狙うかね？」

いつのまにか、男の腕が二本増えていた。

「俺は、お前らが嫌いなんだよ。食事はかぶるし…」

藤崎はため息をつくと、コートの中に手を入れた。

「不味くて、喰えないし」

そして、手を出した時には…デザートイーグルが握られていた。

「じゃなあ」

藤崎は躊躇うことなく、引き金を弾いた。

「…やれ、やれ」

何回か引き金を弾いた後、硝煙の匂いに、藤崎は顔をしかめた。

「折角のいい匂いが、台無しだ」

肉片に変わった男に、一瞥をくれると、藤崎は部屋から出た。

「まだ変幻の途中でよかったよ。あいつら…銃で死なないやつもいるからな」

マンションから出た藤崎の携帯が、また着信を告げた。

「やれやれ…。今度は、普通の人間にしてくれよ。こちとら、主食

をしばらく食べていないんだからさ」

コートから携帯を取り出すと、耳に当てた藤崎は、にんまりと笑った。

「君か！連絡を待っていたよ」

「マスター」

喫茶店のカウンター内で、コーヒーを入れていたマスターの前に、1人の男が駆け込んで来た。

そして、小声で連絡事項を伝え、すぐに店を出た。

「そうですか…。何とか処理できましたか」

マスターへの報告内容は、藤崎が殺した男の処理についてであった。

血の匂いをかぎ分けることに長けた者達が、日夜警戒に走り回っているのだ。

「目覚めた者の中には、すぐに悪意や憎しみにかられ、すぐに相手を殺す場合が多いです。そして、その衝動は、憎しみから食欲に変わります。人を口にしてしまったものは、正気に戻った時、知ります。自分が人間ではなくなったと…。しかし…」

マスターは入れ終わったコーヒーを、カウンターから出て、テーブル席に運ぶ。

「その者は、再び…人間世界には戻れない」

カップルの前に、コーヒーを置くと、マスターはカウンター内に戻っていく。

「我々は、人間と生きることを決めた。初期衝動で殺し、食べたとしても…心のケアによって、心だけは人に戻ることもある」

「そうですね」

カウンターの端に座っていた浅田仁志は、コーヒーカップの中身を見つめながら、静かに頷いた。

「だが…そんな目覚めたばかりの者を殺し回っている連中がいるようだ」

仁志の前に来たマスターの目に、怒りが浮かぶ。

藤崎が彼らを殺しているのは、意図的ではない。

しかし、それがわかることはなかった。

「やつらでしょうか?この世界を破壊しようとしているもの達の」

仁志の言葉に、マスターは首を横に振った。

「違うだろうな。私が知っている範囲では、やつらの目的は…この

世界の崩壊。ならば、目覚めさせた方が、人々の混乱を産むはずだ」

「だったら、誰が？」

仁志は、首を捻った。

「それは…」

マスターが考え込もうとした時、店の扉が開き、新たな迷い人が入ってきた。

「いらっしゃいませ」

何故店に入ったのか、自分でもわからずに、ただキョロキョロするお客に、マスターは笑顔を向けた。

「やあ～。久しぶりだね。君から連絡をくれるなんて、嬉しいよ」

笑顔を浮かべる藤崎を、人里離れた山奥に呼び出したのは…俺だった。

「何人、殺したんだい？こんなところに連れてくるなんて…秘密の貯蔵庫とかあるのかい？」

期待に胸を膨らませている藤崎には、悪いが…俺は、まったく違う

ことを考えていた。

（こいつの体から、漂うのは…火薬と血の匂いだ）

「最近の高校生は進んでるね！何人もやっちゃうなんて」

藤崎は、俺の方に鼻を向け、風が運んでいる匂いを嗅いだ。

「確かに…俺は、人を殺したこともある。数多くの人以外の存在も殺した！しかし、それは…この世界ではない。なのに、気付くとは…あんたは一体何者だ？」

俺の質問に、藤崎はきょとんとなり、まじまじと顔を見つめた後、

「何を言っているんだ？こんなに血の匂いを染み込ませているのに」

ゆっくりと俺の体を指差した。

「え？」

俺は驚いた。

やつが感じ取ったのは、俺の魂ではない。

この肉体に染みついた匂い。

そして、この体は…開八神茉莉のものであった。

第47話　ブラッディマリー

「何!?」

絶句した後、思わず自分の体の匂いを確認しようとする俺に、藤崎は軽く肩をすくめて見せた。

「何をしてるんだい?二、三人を殺したら、殺人だけど…万を越えたら、英雄になれる。君の匂いは、神にも等しい。自慢すればいいのに」

「お、俺が!何万人も殺しただと!?」

藤崎の言葉に、思わず素の喋り方になってしまった。

「そうさ。間違いない」

藤崎は突然、コートの中からデザートイーグルを取り出した。

「思い出せばいい」

そして、俺の額に向けて、引き金を弾いた。

「神よ」

「!?」

藤崎の動きはゆっくりであり、簡単に避けることができたはずであった。

しかし、何故か俺は…避けることができなかった。

（体が動かない！？）

銃弾は意図的であろうが、貫通することはなかったが、俺の額の端を少し抉った。

銃器の中でも、圧倒的な威力を誇るデザートイーグルでの繊細な射撃は、驚くことに、額の端から真っ赤な血を流すだけに終わった。

そして、その血が、俺の顔を流れた時…変化が起こった。

ドクン。

心臓が、大きく動いた。

（な）

俺は、心の中で驚いた。

全身の毛が、逆立つ。

（この…感覚は！？）

俺の手が、無意識に額から流れる血を拭った。

（この衝動は！？）

そして、指についた血をぺろっと舐めた時…俺は、確信した。

（バンパイア！）

口元が綻び…瞳が、血よりも赤く染まった。

「いい感じだ！」

藤崎は、歓喜の声を上げた。

（魔力！？）

俺の体…いや、茉莉の体が変わった。

（俺の魔力ではない！か、彼女の魔力！？）

迸る力が、一気に…神レベルに上がった。

「いいよ。いいよ！」

藤崎は、興奮していた。

しかし、その喜びは、すぐには続かなかった。

「え…」

牙を生やし、バンパイアへと進化した茉莉の瞳が、自分を射抜いていたからだ。

「く！」

瞳の呪縛に捕われる前に、藤崎は目を逸らすと、デザートイーグルを草むらに向けた。

そして、辺り構わず発砲した。

草むらや茂みに隠れている動物を狙ったのだ。

「こ、こんなところで！」

だけど、大型動物はいなく、鳥くらいにしか当たらなかった。

「少ない！」

藤崎は後退りながら、動物を探した。

彼の考えは、こうだ。

動物の血を流させることで、茉莉の体の気をそらそうとしたのだ。

「食うのはいいけど！食われるのは御免だ」

茉莉を見ないようにして、移動していたが…視界の端に、赤い瞳が映った。

次の瞬間、藤崎は躊躇うことなく、指で左目を抉った。

そして、その目玉を茉莉の後ろの方に投げた。

飛んでいく目玉に、気を取られている間に、藤崎は全力で逃げた。

「冗談ではない！は、話が違う！」

飛んでいく目玉を目で追う動きを、俺は茉莉の中で、まるで映画を見ているように見ていた。

（体がいうことをきかない！）

意識と肉体が切り離されているかのように、暴走し始めた茉莉の体は、藤崎の目玉を口に含んだまま…咆哮した。

その叫びは、山々にこだました。

「暴走したか」

「はい」

真田の言葉に、篁剣重郎と上月佐助、猫沢巫女が頷いた。

「久々の血の洗礼だ。暴走するのも当然」

真田は、眼鏡を人差し指で押し上げた。

山一つ隔てた螺旋状の国道の下、斜面に生えた木々の上に、４人はいた。

「神故の業。それを知らなければならない」

真田は眼鏡の奥で、目を細めた。

「それにしても…よろしいのですか？」

猫沢は、真田の方に顔を向けた。

「フッ」

真田は口元を緩めると、魔力が立ち上る山の向こうから目を離さずに、言葉を続けた。

「我々に選択権はない。もし…あるとすれば、あいつだけだ」

そう言った後、真田は3人に命じた。

「いつもの如く…扉を開けろ」

「御意」

3人は頷くと、四方に消えた。

「…いくか」

3人が消えると、真田もまた、前方に向けてジャンプした。

（あり得ない！）

魂と肉体のシンクロ率が下がり、俺はただ暴走する茉莉の体を第三者的立場から、見守ることしかできなかった。

茉莉から離れ、魔力だけで仮初めの肉体を作ることもできるが…その瞬間、世界が崩壊する。

残された方法は、何とかシンクロ率を戻すしかなかった。

（やれるか！）

四苦八苦していると突然、茉莉の周りの空気が変わった。

（結界！？）

茉莉を中心として、幅一キロ程の正方形をした見えない壁が張られていた。

「は！」
「は！」
「は！」
「フン！」

四方に散らばった真田達４人の手を角にしてできた結界は、気合いを入れると、手から離れ、狭まっていく。

そして、茉莉の体を囲む結界が、２メートル程の大きさになった時、中の景色が変わった。

次の瞬間、正方形の結界は砕け散った。

（ここは！？）

一瞬にして、日本から見知らぬ土地にテレポートさせられていた。

（難民キャンプ）

砂漠地帯に広がる粗悪なテントの数々…。

そして、ボランティアの車。

「×××――！」

声にならない奇声を上げると、茉莉の体はテントに襲いかかった。

「神の行いは、天災に近い。気の毒だが…仕方があるまい」

真田達は、先程まで茉莉の体がいたところまで、来ていた。

「多少の犠牲はつきものだ。それに、この世界のすべての人間を食わすだけの食料がないのだ。ならば、貢ぎものになって貰う他あるまいて」

「ふざけるな！」

真田が、スーツの内ポケットから煙草を取りだそうとした瞬間、目の前に俺がテレポートしてきた。

真っ赤になった口元を拭いながら、戻ってきた俺を見て、真田は煙草から手を離すと、フッと笑った。

「暴走は落ち着いたか…」

真田は、激しく肩で息をしている俺に目を細め、

「それに…お嬢様の力を制御できるようになったのか。貴様…何者だ？」

じっと俺を見つめた。

「な、何とかな」

俺は拳を握り締めると、やり場のない怒りに震えた。

「しかし！間に合わなかった。あそこにいたすべての人間が殺されるまで、俺は何もできなかった」

「上等だ。本当は、その先にいる難民も、殺していいと許可を貰っていたのだがな」

真田はやはり、煙草を吸うことにした。

「許可だと？」

俺は、眉を寄せた。

「そうだ。貴様が行ったキャンプの周囲は、難民で溢れかえっている。ボランティアではまかないきれない程な。財政も圧迫し、さらに数も増え続けている。だから、提供されたのさ。神の貢ぎものとしてな」

「神だと！」

「貴様も知ったはずだ。お嬢様の正体をな。彼女は、この世界の根本を支える神」

「テラか！」

思わず出た俺の言葉に、真田は苦笑した。

「テラ？フン。ああっ…あの女神のことか。やつらと一瞬にするな」

真田は煙草を喰わえると、火をつけ、

「貴様にわかり易く言うとだ。テラは、総理大臣のようなもの。いなくなれば、新しいテラが生まれる。しかし、お嬢様は違う。人間でいう天皇のような存在。この世界を造った月の女神の血筋として」

「馬鹿な！月の女神は、いるだろうが！」

俺の言葉に、真田は煙草を吹かすと、少しだけ距離を詰め、

「お前は、どこまで知っている」

１７０近くある茉莉の体を見下ろした。

「このお嬢様が、バンパイアってことまでだ！」

俺は顔を上げ、真田を睨み返した。

「フン」

真田は鼻を鳴らすと、少し俺から離れ、

「人として生きることを決めた月の女神に、力はない。殆どの力は、お嬢様に受け継がれている。さらに、お嬢様は今までの方々とは違う特別の存在」

「太陽のバンパイアか…」

俺の呟きに、真田の指から煙草が落ちた。

「き、貴様！なぜ、その言葉を！」

いつもどこか冷静な真田の手が、震えていた。

「真田様」

今まで控えていた猫沢が、駆け寄ろうとした。

しかし、佐助が肩を持って止めた。

「面白い！貴様は！」

真田は落ちた煙草を踏みつけると、俺の顔をまじまじと見た。

「今まで、人間を家畜としか見ていなかったお嬢様が、貴様に惹かれた意味がわかった気がする」

そう言うと、真田はフッと笑った。

そして、俺に背を向けると、猫沢達に命じた。

「お嬢様のお帰りだ」

「は！」

3人は頭を下げると、俺の方に来ようとした。

「待て！話は終わっていない！」

俺は、真田の背中を見つめ、

「お前達は、いつもこんなことをして、お嬢様に血を飲ませていたのか！」

睨みつけた。

真田は足を止め、

「たまにだ。どうして、血が必要な時がある」

振り返らずに言った。

「何万人もか！」

「少ないものだ。人間は、第二次世界大戦から、増え過ぎている」

「そんなに殺したら、世間にばれるはずだ」

「ばれんよ。先進国で殺人があれば、1人でも騒ぐが…発展途上国で、何人死んでもあまり騒ぎにはならない」

「そんことはない！誰かが、知らせる！今は、ネット社会だ。すぐに広まるはずだ」

「ガキの考えだな」

真田は笑った。

そして、少し振り返ると、

「ネットが安全だと思っているのか？誰が書いたのかは、すぐにわかる。すぐに始末できる。焙り出す必要もない。自ら居場所を教えてくれるのだからな」

「！」

俺は、真田の言葉に絶句した後、ゆっくりと両拳を握り締めた。

すると、自然と殺気と混じった魔力が全身から溢れ出した。

「？」

真田は、目に見える殺気に片眉を跳ね上げた。

今度は、俺から真田に近付いた。

「まさか、お前達が！この世界を壊そうとしている首謀者ではないだろうな？」

俺の質問に、真田は笑い、ゆっくりと前を向いた。

「我々は人を救おうとしている。しかし、これだけは言おう」

目を閉じ、最後の言葉を吐いた。

「その為には、お嬢様と結婚しろ」

「は？」

俺は、首を捻った。

「どうしてだ！」

さらに問い詰めようとする俺の前に、３人が立ち塞がった。

「帰りましょう。お嬢様」

佐助は、温和な笑顔を浮かべた。

「う！」

再び…茶番劇が始まったのだ。

「ほんと…勘弁してくれよ」

山道を駆け下りた藤崎は、茉莉の気を感じなくなって、やっと足を止めた。

「腹が減って、力がでない時に…」

何とか国道まで出た藤崎の目に、バス停が映った。

ちょうど人が降りてくるところだった。

思わず、銃口を向けたくなった。

「いかん、いかん…。俺は、料理人ではないんだから」

しかし、首を横に振り、衝動から耐えて見せた。

降りてきたお客の1人が、道を挟んで立つ藤崎の片目の窪みから、血が流れていることに気付き、軽く悲鳴を上げた。

「ったくよ」

藤崎は慌てて、ハンカチで左目を隠した。

じろじろとこちらを見る人々に、顔をしかめ、

「食材になる前は、どうしてあんなに不味そうなんだ」

唇を噛んだ。

若い女が、自分を見つめ、何とも言えない顔をした時、藤崎の手は自然とコートの中に伸びた。

（殺してやろうか）

それは、殺意であった。

「何をしょうとしているんだ?」

突然、右隣から声がして、藤崎は目を見開いたまま、動きを止めた。

そして、にやりと笑った。

「旦那!」

隣に立っているのは、幾多流であった。

「…」

幾多は、藤崎には目をやらずに、バス停から離れていく人々の背中を見送っていた。

「よかった~!旦那、聞いて下さいよお。あの女!怪我してる俺を、気持ち悪そうに見やがったんですよ!人間として間違っているでしょ!」

「そうだな」

最後尾にいる女は、ちらっとこちらを見て、顔をしかめた。

バス停の下に、民家が密集していた。人々は、そこに帰るのだろう。

「だんな～あ！」

妙に甘えたような声を出す藤崎。

怪我と空腹で、少しおかしくなっているのだろう。

「…そうか」

幾多は無言で頷くと、藤崎に手を伸ばした。

「だ、旦那！」

その意味を理解した藤崎は、慌ててコートの中からデザートイーグルを取り出した。

そして、幾多に銃口を自分に向けて、渡した。

「ありがとう」

幾多は、ずしりと重いデザートイーグルの感覚を確かめた後、銃口を藤崎の頭に向けた。

「え」

藤崎の顔が驚きの表情をつくる前に、頭はふっ飛んだ。
銃弾の勢いで、よろけながら…首なしの体が道に倒れた。

「…」
幾多は、デザートイーグルの銃弾の残りを確認すると、自らの学生服の内ポケットに、強引にねじ込んだ。

静かな山道で響いた銃声に、顔をしかめていた女の表情が凍りついた。

にこっと、幾多が笑いかけた瞬間、女は慌てて逃げ出した。

「フッ」
幾多はそのまま…女とは、反対方向に歩き出した。

振り向く時、ちらっと藤崎の遺体を見た。

「お前は…人間を食材として見ていた。あくまでもね。しかし…さっきは、明らかに…人間として嫌悪した」

幾多はズボンに、両手を突っ込むと、山の上を見た。

向こうから、一台のヘリコプターが飛び去っていくのが見えた。

その中には、真田達がいた。

幾多は足を止め、しばらくヘリコプターを見送った後、再び歩き出

した。

あくまでもゆっくりと。

その頃、闇の屋敷にいた菱山五郎は、笑っていた。

「かつて…1人の男がいた。その男は、異世界に落とされたが、どんな手を使ってでも元の世界に戻ろうとした」

その男の名は、兜又三郎。

「彼が、開発した術式は…今、我の手にある」

菱山は、闇の中で手を伸ばした。

「戻ることができるならば、逆もできる！ククク…ハハハ！」

抑えていた感情が爆発した。

その笑い声を聞きながら、廊下を…赤星光一が歩いていた。

能面のように無表情で…。

第４８話　仮そめ

「…」

開八神茉莉の肉体が暴走した次の日、大月学園の屋上に、赤星光一がいた。

1人になると、能面のように無表情になってしまう。

屋上の扉の影で、そんな光一の様子を見張っている者がいた。

「フッ」

光一は笑うと、振り返ることなく、言葉を発した。

「出てきたらどうです？」

その言葉に、屋上から姿を見せたのは、麗菜であった。

「一応、妹になるのですから、ききたいことがあるなら、遠慮なく訊いたらいい」

「よく、そんな口を」

麗菜は、光一の背中を睨んだ。

「先日、あなたがやったことは！」

「それでも、家では兄妹を演じていたじゃないですか」

光一はゆっくりと振り返り、

「沢村先輩」

麗菜の顔を見た。

「え…」

麗菜は、驚きの声を上げた。

「…」

光一は、そんな麗菜からゆっくりと視線を元に戻した。

「あ、あなたは？」

思わず、麗菜の足が一歩前に出た。

「フッ」

光一は、屋上から見える世界に目を細め、ゆっくりと話を続けた。

「かつて…この世界から、ブルーワールドに5人の人間が、召喚された。あなたを入れれば…6人かな？」

光一は、ちらりと後ろを見、

「その中の1人は、己が選ばれた神の体を得たものと思い…人間も魔物も支配し、安定した世界をつくろうとした。しかし、結果は…」

光一は顔を見上げ、

「その者は、神の体を得てはいなかった！しかし！」

唇を噛み締め、

「やりようによっては、人の頂点には立てたはずだった！」

怒りを露にした。

「く！」

その怒りは、己に向けられていた。

「…」

何も言えなくなってしまった麗菜に気付き、光一は怒りを抑えた。

「…あなたと私は似ている」

光一は、体を麗菜に向けた。

「え」

麗菜は、目を見開いた。

光一は悲しげに笑い、

「真実の姿を晒していない」

じっと数秒だけ麗菜を見つめた後、歩き出した。

「！」

息を飲む麗菜の横を、光一はすり抜けていく。

屋上から階段を下りる頃には、麗菜のことは頭の中から消えていた。

その代わり…脳裏に浮かぶのは…。

物憂げな瞳を伏せ、湖の真ん中で翼を休める…天使の姿。

いや、天使ではなかった。

黒髪に、漆黒の六枚の翼を畳んだ…堕天使。

（そうだ！俺は…あの時）

湖の木陰まで、テレポートした者は、その美しき姿に恋をした。

（世界と同じくらい…いや、それ以上に、彼女がほしいと思ったのだ）

その出逢いが、彼の夢を計画を…狂わせたのだ。

「彼は…一体？」

光一が階段を下り出した頃、やっと我に返った麗菜は、慌てて振り返った。

（やつの正体が何となくわかった…）

麗菜の頭に、美奈子の声が響いた。

（恐らく…あの体に入っている魂は、５人の中の１人）

ブルーワールドに拐われた沢村明菜を救う為に、時空の壁を越えた赤星浩一。

その数日後、クラーク・パーカーより召喚された５人の高校生。

西園寺俊弘、守口舞子、佐々木神流、松永伸介、橋本正志。

（女である舞子ともう１人は、違うだろう。さすれば…）

「待って下さい！」

美奈子の考えに、麗菜が割って入った。

「今の赤星光一は、この世界がつくったのですよね？」

（そういう説が、有力だが…。肉体は確かに、この世界がつくったかもしれないが…魂はどうだろ？ああも人間社会にすぐに、対応できるものかな）

「で、でも」

（それに、やつが魔獣因子の持ち主で、赤星浩一と同じ能力を持っているならば、この世界の神に選ばれたとしても、問題はない）

「…そうですけど…」

麗菜は、光一が消えた階段の方に目をやった。

（沢村…）

美奈子は、麗菜の本当の名字を口にした。

（あたし達の最後は近い。正体もばれたしな。今のあたし達では、光一には勝てない。だとしたら、やることは一つ）

「わかっています」

麗菜は、自分の鳩尾に手を添えた。

「次元刀で、ブルーワールドとこの世界の絆を斬ります」

ブルーワールドと実世界は、兄弟のようなものである。

表裏一体ではあるが、繋ぎ止めている糸は、この学園にあった。

（ああ…。それが終われば、あたしに未練はない。大人しく成仏するよ）

美奈子の言葉に、麗菜…いや、明菜は頷いた。

「はい。あたしも…」

次の言葉をはく前に、明菜の脳裏に、赤星浩一の顔が浮かんだ。

明菜は、胸をぎゅっと抱き締めると、

「成仏します」

もう一度、深く頷いた。

明菜達が屋上にいる頃、俺は理事長に呼ばれ、理事長室を目指していた。

まったく知らない女子…高坂姫百合に、廊下ですれ違いざまに、紙を渡されたのだ。

東館の地下にある理事長室へ向かうには、一階の職員室の前を通り、一番奥の階段を下りるしかなかった。

階段を下り、さらに右に曲がると、理事長室があった。

「うん？」

俺は、理事長室の扉の前に立つ生徒に気付いた。

「生徒会長？」

思わず足を止めた俺に、生徒会長九鬼真弓は、頭を下げた。

「お客様がお待ちです」

「？」

九鬼の言葉に、首を捻ったが、悩んでいる暇はなかった。

九鬼が扉の前から避けると、俺は中に入った。

すると、十二畳くらいの部屋の奥にいた理事長が、机の向こうから立ち上がり、頭を下げると、手で隣の部屋を示した。

「お待ちになっております」

「？」

再び首を傾げながらも、また右側の扉を開け、隣にある応接室に入った。

「待っていたわ」

応接室に置かれた黒皮張りのソファーに座っていた女が、立ち上がり、サングラスを外した。

「ジャリアン」

反射的に出た名前に、女は微笑んだ後、首を横に振った。

「惜しいけど、違うわ。あたしの名は、ジュリア・アートウッド」

「ジュリア…アートウッド！？」

フルネームを聞いて、さらに目を丸くする俺を見つめながら、ジュリアはさらに言葉を続けた。

「今は…レダと呼ばれているわ」

「レダ…」

それは待ちわびた名前であったが、俺にとってはアートウッドの方が衝撃だった。

（アートウッド）

それだけで、謎が解けた気がした。

じっと見つめ返す俺に、ジュリアは座ることをすすめた。

「あなたのことが、気になって調べたわ。そしたら、あたしに会いたいと」

「はい」

2人は、対面する位置でソファーに座った。

「あなたは！」

俺はすぐに、話し出した。

「歌の中に、この世界の崩壊を暗示するメッセージを込めた。そんなことを何故？何故！分かりにくいことを！直接、言葉にすれば…」

「直接の方が、伝わりにくいことがあるわ。より深くあたしの歌が、響いた人は、そこに疑問を持つ。その隠されたメッセージの意味を知ろうとする」

ジュリアは真っ直ぐ、俺の目を見つめ続ける。

「しかし、それじゃ…多くの人に伝わらない」

「それに…あたしは、真実を歌える立場にいなかった」

「！？」

ジュリアはここで、視線を2人の間にあるガラスのテーブルに落とした。

「もし…思い通りに歌えたとしても、誰が信じるかしら？世界が崩壊するなんて」

「そ、それは」

俺は、口ごもってしまった。

「ずるいようだけど…あたしの歌は、この世界の人々には、レクイエム。だけど…」

ジュリアは、ここで言葉を切り、

「世界を救う力を持つ人には、救いを求めていたの」

ゆっくりと顔を上げた。

その瞳には、涙が溢れていた。

「歌手は、無力。何もできない。もうすぐ、計画が始まるのに…何もできない」

「待って下さい！」

俺は、一方的に話し出したジュリアを止め、

「計画とは、この世界の人間をブルーワールドに落とすことですよね。それをなぜ、あなたが知り…始まることもわかっているんですか！」

思わず声を荒げた。

「異世界への扉を開くには、生け贄が必要よ。その生け贄の魂の数が、もうすぐそろうわ」

ジュリアは、知っている理由を敢えて言わなかった。ただ、涙を拭った。

「や、やつらは！魂を集めているのですか？人間を殺して！くそ！」

テーブルを叩いた俺を見て、ジュリアの表情が厳しくなった。

「一体…どうやって」

考え込む俺に、ジュリアは言った。

「あなたは、知っているはずです」

「！」

ジュリアの言葉に、俺は思わず彼女の顔を見た。

「あなたは先日…いや、あなたではないかもしれませんが…多くの人を殺したはずです」

「！！」

俺は思わず、立ち上がった。

ジュリアは、俺を見上げ、

「あなたは、真実を見極めるべきです」

数秒見つめた後、ゆっくりと立ち上がった。

「あなたなら…できるはずです」

そして、ジュリアは俺に頭を下げると、ソファーから離れた。

「ま、待って！」

呼び止めたが、ジュリアは止まらなかった。

「ごめんなさい。これ以上は、話すことはないの。もうあたしには、時間がないし」

「ジュリアさん」

俺の叫びに、扉を開けようとしたジュリアの手が止まった。

「…ジュリア。そう呼んでくれた人は…御姉様と家族以外いないわ。ありがとう」

ジュリアは振り返り、頭を下げると、最後のヒントを口にした。

「あなたの敵は、近くにいます。カーテンを開ければすぐに」

「!?」

俺の頭に、闇に浮かぶ屋敷が浮かぶ。

「さよなら…」

「ジュリアさん!」

俺は、訊くのをやめた。

なぜならば…ジュリアが座ってたソファーの上に、砂がこぼれていたからだ。

「あなたの歌。最高でした。ジュリア・アートウッドは、最高の歌

手です」

「ありがとう」

ジュリアはもう一度、頭を下げると、

「本当は、ジュリア・アートウッドの歌を聴かせたかったわ。あたしが、歌ったのはレダのカバーだから」

「レダのカバー？」

驚く俺に、ジュリアは頷いた。

「本物のレダは、ブルーワールドにいる。２つの世界を憂いながら」

「レダがもう１人いる？」

眉を寄せる俺に、ジュリアは微笑むと、応接室から出た。

これが、俺とジュリアの最後の出会いとなった。

ほとんど初対面の俺に、この世界を託して、彼女は去っていった。

第４９話　さよならのメロディ

「…」

西館から出たジュリアは、真っ直ぐにある場所を目指して歩き出した。

「あ、あのお」

そんなジュリアに声をかけようと、慌てて校舎から出てきた姫百合を、後ろから肩を掴んで、九鬼が止めた。

「駄目よ。あの人には、時間がない」

九鬼は、ジュリアが歩いた後に残る微かな砂を見つめていた。

「…はい」

姫百合は、砂よりもジュリアの背中に漂う悲痛さを感じ取り、追うのをやめた。

「は、は、は」

激しく息をしながら、ジュリアが目指す場所は、一つ。

生前、行くことのできなかった場所…ダブルケイ。

内戦が続く祖国を訪れた…明日香達の音楽。

それが、生まれた場所。

あの時、聴いた音楽が…ジュリアの根になっていた。

（本当は…御姉様といきたかった）

町並みの遥か向こうに見える山。

その山の麓に、ダブルケイはある。

ジュリアはただ、真っ直ぐ…山を見つめながら、歩き続けた。

「じゃあね。バイバイ」

友達と手を振り別れた和恵は、自分の家であるダブルケイを目指し歩いていた。

結構、距離はあるけど、山へと向かう道は清々しく、ダイエットにもなると思っていたから、苦にはならなかった。

１５分くらい歩くと、学園から姉妹校にあたる大鳳学園に着く。その前を真っ直ぐ、坂道を登ると、ダブルケイへ繋がる山道に出るが、あまり歩く人間はいない。

遠回りになるが、電車を乗り換え、地下鉄に乗る方が楽であり、夜になると安全だった。

しかし、慣れた道である。

和恵は、軽快に歩き出した。

「うん？」

山道が見える距離まで来た時、和恵はふと足を止め、足下を見た。

道の真ん中に、砂の塊が落ちていたからである。

土砂を運ぶトラックが、落としたのかもしれない。

それくらいの軽い気持ちで、和恵は砂を避けると、ダブルケイに向かって歩き出した。

「馬鹿な子」

和恵が去った後、どこからかティアが現れた。

足下に溜まった土を見下ろし、

「あたし達は、彼らに体を与えられて存在している。彼らの命に背く行為をすれば…肉体は、砂に戻る」

ゆっくり屈むと、少しずつ風に飛ばされていく砂の塊に手を伸ばした。

「おい」

しかし、後ろからかけられた声に、ティアは途中で手を止めた。

「まさか～ここで、終わる気じゃないだろうな？」

「フッ」

ティアは手を引っ込めると、ゆっくりと立ち上がった。

「まさか」

そして、後ろに立つジャクに微笑みかけた。

「ケッ」

その微笑みを見て、ジャクは唾を吐いた。

「もうですよ。終わる訳がありません」

ジャクの後ろから、闇を纏っているかのような陰気な気を放つ男が、姿を見せた。

「ヤーン！」

ティアは、その男を見て、顔をしかめた。

ヤーンと呼ばれた男は、深々と頭を下げると、

「第一段階に必要な魂の生け贄は、集まりました。それを使い、大月学園一帯の人々を、ブルーワールドに落とします。元々、ここの大月学園は、向こうと繋がっています。ここから、穴を開けることで、一気に広がるでしょう」

笑いながら、頭を上げた。

「コンサート会場に来た人間を、ちまちま落としていくという計画は、必要なくなったしな」

ジャクは煙草を取りだし、口にくわえると、砂の塊を見下ろし、

「まあ～用なしだったな」

煙を吐き出した。

「しかし、問題ができた」

ヤーンは、ティアに目をやり、

「例のお嬢様が知ってしまった」

じっと見つめた。

「問題は、ないはず。彼女の取り巻きは」

「菱山様が、お許しにならない」

ティアの言葉を、ヤーンは遮った。

ティアはため息をついた後、

「でしたら…あたしが、何とかします」

大月学園に向かおうとした。

「無理ですよ」

ヤーンはティアを止め、にやりと口許を歪めた。

「彼女の力は、強大です。止めれるとすれば、彼しかいませんよ」

しかし、ティアを見る目だけは笑っていなかった。

「そして、それが最終目的でもあります」

ヤーンはおもむろに、目を伏せた。

「！」

その目の動きに、ティアは嫌なものを感じた。

「…」

ジャクは、煙草を吸いながら、黙っていた。

「…わかったわ」

敢えてきくことをせずに、ティアはその場から消えた。

「従順な女は、好きですよ」

ヤーンもその場から、消えた。

「ケッ」

2人がいなくなった後、ジャクは煙草を砂の上に捨てると、足で踏みつけた。

「…」

理事長室を出て、階段を上り、西館から外に出た俺は、校門に向けて歩き出す。

その様子を、横目で確認する九鬼。

「!?」

九鬼の隣に立つ姫百合は、威風堂々と歩く俺に、息を飲んだ。

ちらっとだけ2人を見て、俺は心の中で少しだけ驚いた。

（彼女達は、普通の人間ではない）

それがわかったところで、今は構っている暇がない。
俺が通り過ぎてから、少し間を開けて、九鬼も歩き出した。
別に気にすることなく、歩き続ける俺の先に、真田が立っていた。
校門の向こうに、リムジンが見えた。

「いくのか」

真田の問いに、俺はああと答えた。

「フン」

真田は鼻を鳴らした後、眼鏡を人差し指で上げた。
俺は、そんな真田の横を通り過ぎた。
勿論、リムジンに乗るつもりもない。
校門を潜った俺に、真田は振り返ることなく言った。

「今のお前の体は、お嬢様そのもの！だから、止めることはしない。しかしな！」

真田は、歩いてくる九鬼を見つめ、

「その肉体から、離れた時…俺は、お前を殺す。この前言った…忠告を無視するならな」

言葉に殺気を込めた。

「了解」

俺は、それだけ言うと、その場でテレポートした。

消えた俺を見て、慌てて駆け出した九鬼に、真田は告げた。

「菱山財団の屋敷だ」

「！！」

九鬼は思わず、足を止めた。

数秒後、頭を下げると、校門を潜ってからダッシュし出した。

今までの一連の流れを、体育館の上で見ていたサーシャは、九鬼の後を追うことにした。

「よろしいのですか？」

その様子を監視していたのは、他にもいた。

学園情報倶楽部のメンバーである。

隠しカメラからの映像を、パソコンに転送して見ていた舞の言葉に、高坂は肩をすくめて見せた。

「俺達が行っても、神レベルの戦いには邪魔なだけだ」

「そりぁ～そうですけど」

舞だけではなく、その部室にいた者達が顔を見合わせた。

いつもなら、なにがなんでもいくのが、高坂だと思っていたからだ。

しかし、行かない理由は、他にあった。

「ブルーワールドと繋がる糸…。それが、まさか…この部室だとはな」

高坂は、天井を見上げた。

「それは、間違いありません」

舞は画面を、切り替えた。

「だとしたら、動く訳にはいかない。適材適所。我々には、ここを守る義務がある」

高坂は、手に持つ…ダイヤモンドの眼鏡ケースを握り締めた。

開八神茉莉の体を使うことのできるようになった俺は、自らの魔力

を使うことなく、テレポートできた。

まるで、体に…2つのチャクラがあるみたいだが、混ぜる訳にはいかなかった。

テレポートアウト後、突然目の前に現れた漆黒の屋敷。

しかし、それをじっくりと見上げる暇もなかった。

「待っていたよ。イブ」

まるで、ここにテレポートするのを知っていたかのように、真後ろに赤星光一がいた。

「世界の崩壊が、始まる。だけどね。再生でもあるさ。君と僕がいればね」

「どういう意味だ?」

俺は、ゆっくりと振り向くと、光一を睨んだ。

「このことは、君の叔父である菱山五郎も知らぬこと」

光一は、肩をすくめた。

「人間が生き残る…いや、表現が違うな。ただ残す為には、この方法しかないと!君の執事は、悟ったのさ」

それから、ゆっくりと両手を広げ、

「だから、おいで…。僕の胸の中に」

にこっと微笑んだ。

「断る！」

俺は、それだけ言うと、屋敷内にテレポートした。

「おやおや」

光一は両手を下ろすと、

「無理矢理は、不本意だが…仕方ない」

屋敷を見上げた。

「イブ…。君が、バンパイアだとしても、僕には勝てない。なぜならば…男と女だからだ！」

ゆっくりと顔を、正面に向け、

「それこそが、摂理！僕の体は、君と結ばれる為にできたのさ」

口許を緩めると、テレポートした。

2人が消えた数分後、九鬼とサーシャが、屋敷の近くまで駆け寄って来た。

2人は互いの顔を見ないが、進むべき道は決まっていた。

「すまないが…ここから、先は立ち入り禁止だ」

突然、学生服を着た刈谷が立ちふさがった。

「あなたは！」

刈谷の姿を目にして、九鬼の足が止まった。

だが、サーシャは止まらない。

刈谷を飛び越えると、屋敷内に忍び込もうとした。

「！」

そんなサーシャは空中で、尋常ではない魔力を感じ、反射的にドラゴンキラーで着地と同時に、斬りかかった。

「…あなたが、サラのお気に入りね」

ドラゴンキラーは、突然姿を見せた女を真っ二つにした。

しかし、手応えがなかった。

サーシャは底知れぬ恐怖を、味わいながらも、間合いを取った。

しかし、後ろには、刈谷がいた。

「まったく～せっかちね」

サーシャは、笑う女の正体を思い出した。

「リンネか」

「リンネ…」

サーシャの声に、九鬼の目も刈谷の肩越し、リンネをとらえた。

「あたし…有名かも」

リンネは、２人にウィンクした。

第５０話　愛撫

屋敷内にテレポートした俺は…まるで導かれるように、ある部屋に来て、仰天していた。

「ここは？」

まるで、球場のように広い部屋の中に、無数のアルテミアがいた。

「残念だけど…逃げれないよ」

俺の後ろに、光一がテレポートしてきた。

「ここは…僕の懺悔の場所」

光一が姿を見せると、部屋にいたアルテミア達が一斉に跪いた。

「僕はかつて、この人形達に似たある者に、心を奪われた。この見た目にね」

光一は、俺の横を通り過ぎると、爪先でアルテミアの１人の顎を突き上げた。

「だが…見慣れると、大したことはない」

そして、アルテミアの顔に唾をかけた。

「き、貴様！」

本人ではないとはいえ、アルテミアにそっくりな相手に、そんなことをされると許せない。

怒りを露にした俺を見て、光一は両手を広げた。

「今、欲しいのは君だ。君と結ばれることで、俺は…」

光一の口調が変わる。

「王になれる！」

「ふざけるな！」

俺は、魔力を発動させた。

しかし、その凄まじさを間近で感じても、光一は表情一つ変えない。

「誰が、お前なんかと！」

俺は、光一に飛びかかろうとした。

その瞬間、跪いていたアルテミア達が、一斉に立ち上がり、雷鳴を轟かせた。

「！？」

雷撃が、直撃する寸前、俺の体を炎の羽が包んだ。

「フレア！」

しかし、雷撃の数が凄い。

炎の羽は、すぐにボロボロになった。

「フン」

雷撃に包まれた俺を見て、光一は鼻で笑った。

「うおおおっ！」

しかし、次の瞬間、雷撃の壁を突き破った俺の拳が、光一の顔面を狙った。

「おしい」

光一は片手で、俺の拳を受け止めると、そのまま空中にほり投げた。

「な！」

絶句する俺が空中に舞うと同時に、アルテミア達が一斉に翼を広げて、飛び上がった。

「くそ！」

歯を食い縛った俺の背中に、炎の羽が生え、空中を疾走する。

それを追いかけるアルテミアの大群。

部屋と呼ぶには、広すぎる空間で、空中戦が始まった。

「炎の騎士団長！リンネ」

サーシャの叫びを聞いて、九鬼は絶句した。

「騎士団長！？」

「今は…廃業中よ」

リンネは、にこっと笑って見せた。

「クッ！」

サーシャはドラゴンキラーの刀身を、地面と水平にした。

リンネを倒すには、体のどこかにある豆粒程のコアを貫かなければならない。

それは、簡単なことではなかった。

今は、皮膚の表面温度を人間と変わらなくしているが、貫いた瞬間、灼熱のマグマが剣を焼き尽くす。

コアの固さも半端なく、核兵器の直撃にも耐えると言われていた。

サーシャは、ドラゴンキラーの切っ先に、すべての気を集中させ、神速を持って貫くしかないと思っていた。

「騎士団長!?」

サーシャの言葉に、九鬼は唇を噛み締めながら、刈谷の肩越しにリンネを睨んだ。

「おいおい…」

刈谷は、そんな九鬼を見て、ため息をついた。

「リンネ様を意識する前に、目の前に集中しな!」

「!?」

見えない拳が、九鬼の鼻先を通過した。

軽い火傷をおった鼻に気付き、九鬼は我に返ると、回し蹴りを繰り出した。

「炎の魔神に蹴りは!」

刈谷は片手で、蹴りを受け止めようとした。

その瞬間、蹴りは軌道を変えて、真っ直ぐに突き出された。

「ほお」

顎の先で、止まった蹴りを見て、刈谷は笑った。

「フン」

九鬼は足を下ろすと、後方にジャンプして、乙女ケースを突きだした。

「そうちゃ」

「やれやれだわ…」

九鬼の言葉は、肩をすくめたリンネのため息によって、かき消された。

「別に…戦いに来た訳じゃないのよ」

リンネは、飛び込むタイミングを計っているサーシャに微笑んだ後、刈谷の背中に目をやった。

次の瞬間、刈谷は振り向くと、その場で跪いた。

「!?」

乙女ケースを突きだしたまま、固まっている九鬼にも、リンネは微笑んだ。

「心配しなくても、いいわ。この茶番は終わる」

「!?」

「!」

サーシャと九鬼は一斉に、空を見上げた。

凄まじい魔力を感じたからだ。

何もない空が避け、その向こうから誰かが下りてきた。

「天使…」

九鬼は、息を飲んだ。

「クッ！」

空中を飛び回りながら、炎の翼から火の玉を放つが、アルテミア達には効かなかった。

俺は顔をしかめると、床に着地した。

「観念したか！」

部屋の隅で、腕を組みながら様子を見ていた光一の顔に、笑みが浮かぶ。

「イブよ！次に目覚めた時には、俺を受け入れた後よ！」

アルテミア達は同時に、雷撃を放とうとしていた。

もう避けれない。

光一がそう確信する中、俺は空中に手を突き上げた。

「来い！」

俺の叫びに呼応したかのように、空間を破って、２つの回転する物体が飛んできた。

「あ、あれは！？」

光一は、目を見開いた。

回転する物体は、アルテミア達の間をすり抜けると、俺の手に向かってくる。

「う、撃て！」

焦った光一の命令に、アルテミア達が雷撃を放った。

しかし、すべての雷は…俺の手にあるライトニングソードによって、吸収された。

「な！？」

「モード・チェンジ」

間髪を入れずに、俺はフラッシュモードの速さで空中にジャンプした。

そのコンマ零秒の間に、ライトニングソードをシャイニングソードに変えた。

そして、空中に浮かぶアルテミア達を斬り裂いた。

着地とジャンプ。

それを数十秒の間に繰り返し、アルテミア達のほとんどを斬り裂いた。

しかし、流石は…アルテミアのコピーである。

何人かは、床におりると、同じくフラッシュモードになった。

「うおおおっ！」

俺はシャイニングソードに握り締めると、床を蹴った。

数十秒後…部屋の中で　立っていたのは、光一と…ボロボロの学生服を着た俺だけだった。

――パチパチパチ。

部屋内に、光一の拍手が響いた。

「素晴らしい！流石は、イブ！あんな雑魚の女達とは違う。それに、その武器！神が持つに相応しい」

うっとりとした表情で、シャイニングソードを見つめる光一。

「ふざけるな！」

俺はふらつきながら、シャイニングソードを光一に向けた。

「命をなんだと思っているだ！」

俺の叫びに、光一は答えた。

「王の！神の！貢ぎ物に過ぎない」

「な、何！？」

「この世界に、人間は多すぎる。異世界に落とし、調節する」

光一は、拳を握り締め、

「力で、破壊することはできるが…美しい自然を巻き添えにはできない。人間だけが、いなくなればよい」

俺の目を見つめ、

「君と俺で、この世界の神になる。そして、世界をやり直すのさ」

優しく微笑んだ。

「ふ、ふざけるな！」

叫んだ後、俺は唇を噛みしめると、シャイニングソードを光一に向けた。

「多くの人々を犠牲にして、世界を変えるだと！」

「そうだ！」

光一は、胸に手を当てた。

「この肉体を手に入れた時から、地球の声が聞こえる」

「地球の声だと！？」

「地球は…いや、この星に住むすべての生き物が、人間の犠牲になっている。食物連鎖の上に立っているという傲りから！」

「違う！世界は」

「だからこそ、この地球は、我々のような存在を生み出した！人々を食う…バンパイアを！」

「ち、違う」

「バンパイアは、完璧だ！完璧故に、数はいらない。少数で、この世界の頂点に君臨するのだ。人間のように、無駄な搾取はしない。人間の血を吸うだけだ」

「違う！」

俺は、シャイニングソードを握り締めた。

「何が違う?こうして、我々が存在することこそが、答えだ!」

「違う!」

俺は、光一に向かって走り出した。

「よかろう!同意はいらない。君の意識を奪った後に、すべてをすますだけだ。その身に、次の神が宿れば…考えも変わる」

光一は避けることなく、手を伸ばした。

「俺達は、人間の敵ではない!」

シャイニングソードを横凪ぎに振るった。

「敵とか味方ではない!食うだけの存在だ」

「ふざけるな!」

シャイニングソードの攻撃を、光一は気で包んだ腕でガードして、跳ね返すつもりだった。

「何!?」

しかし、シャイニングソードは、光一の気を斬り裂いていく。

「うおおおっ!」

俺は、再び咆哮した。

瞳が真っ赤になり、そのまま腕ごと斬り裂こうとした寸前、俺は光の攻撃を受けて、ふっ飛んだ。

「女の癖に！」

光一は、手のひらを突きだしていた。

「勝てると思ったか！」

血が流れる腕を見て、光一の目も赤く光った。

「王の体に！傷を！」

光一の口から牙が生え、両手の爪が伸びた。

「王とか神とか～どうでもいい」

俺は立ち上がると、構え直した。

「お前を倒し、人々を落とすことをやめさせる！」

「無駄だ。もう数十万人の魂は集まっている。後は、発動させるだけだ」

光一は、鼻で笑った。

「止める！」

「無理だ」

光一の魔力が、上がる。

「やってみせる！」

俺は、突きの構えを取った。

「女が、男には勝てない！」

光一の全身を赤い炎の魔力が、覆いつくす。

「違う！男は、女に勝てない！」

俺は、光一に向かって再び、走り出した。

「結界を発動させるな」

空の割れ目から、下りてきた天使の命に、後から続く影が頷いた。

「は！」

２つの影は、空中で別れると…１つは屋敷の中に、もう１つはリンネ達の側に下り立った。

「！」

九鬼は言葉を失い、サーシャは舌打ちした。

「あんたが来たのね。サラ」

リンネは、肩をすくめて見せた。

「フン」

サラは、鼻を鳴らすと、リンネを横目で睨んだ。

ニメートル近い体躯に、赤髪から突きだす…2つの折れた角。

1つは、ジャスティンゲイに折られ…もう一本は、サーシャによって折られていた。

しかし、その戦いの前に、サーシャはサラによって、命を奪われていた。

因縁の2人が、再び出会ったのだが、サラは気にかけることなく、屋敷に目をやり、

「邪魔するな」

それだけを、サーシャ達に言った。

「はいはい～。相変わらずね」

リンネは、片方の肩をすくめて見せた。

その時、屋敷内で、凄まじい爆発音が聞こえてきた。

「やってるようね」

リンネは、笑った。

「うわああっ！」

俺と光一のぶつかり合いで、弾けた魔力は、球場程の部屋でも抑え切れずに、爆発した。

部屋を包むように張ってあった結界に、穴があき、俺は壁を突き破って、廊下に転がった。

「痛ててて」

俺は、何とか離さなかったシャイニングソードを杖代わりに使うと立ち上がり、廊下を歩き出した。

「どこにある！人々の魂は」

最初から、光一に構っている暇はなかったのだ。

俺は魔力を抑えると、魂を探ることにした。

「あっちか」

ブラックカードを取り出すと、体力だけを回復させた。

（ありがとう。アルテミア）

俺は、このカードを送ってきてくれたアルテミアに感謝した。

「何だ？」

今の爆発音は、屋敷内にある客室で寛いでいたジャックは、廊下に出た。

「何事だ？」

ジャックは、隣の部屋にいるティアの扉を叩いた。

鍵が開いていた為、中を覗いたが、いなかった。

「魔力を感じる」

手が足よりも長い男が、ジャックの前の部屋から出てきた。

それだけではない。

すべての部屋から、人が出てきた。

「退いて下さい！」

シャイニングソードを握り締めながら、俺は廊下を走っていた。

「な、何だ？」

ボロボロの学生服の女が、剣を持って走ってくるというシチュエーションに、ジャックは思わず首を傾げた。

「ヒイヒイ」

手長男だけは、シャイニングソードの輝きを見て、悲鳴を上げると、部屋の中に戻った。

「な、何だ？」

剣を持っていることを頭が理解すると、ジャック達は壁際に、背中をつけた。

「すいません」

俺は、廊下の真ん中を駆け抜けた。シャイニングソードを輝かせながら…。

「な、何だ？今のは」

思わず道を開けてしまった自分に驚きながら、ジャックは煙草を取りだそうとした。

しかし…。

「え」

ジャックは、手がなくなっていることに気付いた。

「な、何だ」

なくなっているのではない。

砂に戻っていっているのだ。

「馬鹿な！」

ジャックは気付いた。

自分以外の廊下に出てきた人間達も、砂に戻っていくのを。

「そ、そんな～馬鹿な」

ジャックを形どっていたものが、崩れていく。

「俺は…まだ…」

口が崩れていく。

「満足して…いない」

目が、離れていく。

「復讐…も」

目玉が砂になり、脳も砂に戻った。

数秒後…砂の山が廊下中に、できていた。

「な、何だ…。あの力は」

茉莉とのぶつかりで、ふっ飛んだ光一は、突き破った壁を破壊して、部屋に戻った。

「俺は、あの女を従える為につくられたはず。すべての能力で、上に立つはずだ」

ダメージは受けていなかったが、逃がしたことに、光一は顔をしかめた瞬間、視界にあるものが入ってきた。

「うん？」

四方の壁がなくなり、何とか柱だけで存在できている部屋の真ん中に、アルテミアが立っていた。

「まだ残っていたのか？」

光一はフッと笑うと、アルテミアに向かってゆっくりと近付きながら、命じた。

「あの女を追え！いや、その前に…」

光一は、にやりと笑った。

「俺の靴を舐めろ」

そう言った次の瞬間、アルテミアの蹴りが、光一の顔面に突き刺さっていた。

後方に、背中から倒れた光一は、立ち上がると、アルテミアを睨んだ。

「何をする！ご主人様である俺に対して？」

その言葉を聞いたアルテミアの眉間に、血管が浮かんだ。

「ご主人様？」

ゆっくりと顔を向けたアルテミアの表情を見て、光一は戦慄を覚えた。

それは、今まで何百体とつくったアルテミアが、見せたことのない顔だった。

「誰に、そんなことを言ってやがる！」

アルテミアは、怒りを露にした。

「き、貴様！」

光一は、両手をアルテミアに向けた。

「失敗品だな？」

すると、手の先が赤く光り出した。

「消えろ！」

光一は、光の玉を放とうとした。

「むかつく！」

アルテミアは、光一を睨み付け、

「あいつの顔で、言われると特にな」

拳を思い切り血が出る程、握り締めた。

「消えろ！」

光一の手から、凄まじい力を秘めた光球が放たれた。

「フン」

アルテミアは鼻で笑うと、左手を光球に向けて突き出した。

「え」

光一は、目を見開いた。

自分が放った光球が、アルテミアの指先で止まっていたのだ。

「じゃあな。偽者」

アルテミアは、光球を指で弾いた。

「な！」

弾かれた光球の玉は、光一に近付く程に、大きくなっていった。

「ま、まさか…」

光一は迫ってくる光球よりも、もう自分に興味をなくしたアルテミアに目を奪われていた。

背を向けて、部屋から出ていくアルテミアの後ろ姿を見つめたながら、光一は光に包まれた。

（ほ、本物…）

光一は消滅しながら、決して届くことのない手を伸ばした。

光球は、光一を消し去った後、屋敷の天井を突き破り、空の彼方に

消えていた。

「くそ」

アルテミアは廊下に出ると、指の動きを確かめた。

「やはり…この世界では、力がでないな」

まるで砂利道のようになった廊下を見つめ、

「さっさとけりをつけるか」

アルテミアは背伸びをしてから、歩き出した。

第５１話　それぞれの愛の形

「ここは…」

一面の砂に覆われた世界に、西園寺俊弘は、立っていた。

「うわあああああっ！」

彼のすぐそばで、砂が盛り上がると、苦悩の叫びを上げながら、人の形になった。

「お、俺は！まだ、まだ諦めんぞ！」

砂は、ジャック・ウィルソンになると、どこにいくでもなく…ふらふらと歩き出した。

「…」

その様子を無言で見つめていた西園寺の後ろに、赤いワンピースを着た女が立っていた。

「どう？満足できた」

気配を感じさせなかった女の登場にも、西園寺は驚くことなく…女の名前を口にした。

「河野和美…。真紅の歌姫」

西園寺は口許に笑みをたたえながら、振り返った。

「あなたこそ、満足しているんですか？こんな世界にずっといて」

「あたし？」

和美は微笑み返すと、言葉を続けた。

「満足しているわ。だけど…いずれはね。しばらくは、この世界に留まるつもり。死んでもなお、砂となり…ここに来る人の為にね」

「フン」

西園寺は、鼻を鳴らすと、前を見て、

「生きていたら、偽善者と罵ったかもしれない。だけど…死んだ今も、貫く意思ならば」

目を閉じた。

「…」

和美は、西園寺の背中を見守るように、見つめ続けた。

数分後、西園寺は再び話し出した。

「俺は…生まれた世界に絶望していた。しかし、ブルーワールドに召喚され、力を得た時…世界をコントロールして、まとも社会をつくろうとした」

西園寺はゆっくりと、目を開けた。

もう一度、砂だけの世界を見回し、

「本当は…そんな権力や力よりも、1人の女性が欲しいかった！それは、今も！」

ぎゅっと拳を握り締めた。

「…」

和美は、無言で頷いた。

「だけど！それは、構わぬ夢！永遠に求め！永遠に愛しているならば」

西園寺は、ゆっくりと振り返った。

その目には、涙が溢れていた。

「その気持ちを捨てよう」

微笑んだ西園寺の体が、砂の世界に吹く風によって、削られていく。

「忘れられぬならば…無となり、消えよう。そして、もし…生まれ変わったならば…あの人と同じ女で…」

体は風に流され、言葉も発せられなくなってきた。

「せめて…友達」

それが、西園寺俊弘としての最後の言葉となった。

「なれるわ」

和美は頷いた後、歌を歌い始めた。

西園寺の為のレクイエムを。

彼は、成仏した。

苦しみと切なさから、自らを救う為に…。

これもまた、魂の在り方であろう。

砂が舞う世界で、和美の歌が響き続けた。

「ここか」

数万人の魂の波動を感じ、俺はある扉の前にいた。

少し深呼吸をした後、後ろを見た。

これほどの巨大な屋敷なのに、追っ手が来ない。

（光一の気は？）

自分の能力ではなく、茉莉の力を使っている為に、大雑把になっていた。

数万人の塊がある為か…細かい索敵ができないのだ。

（仕方がない。まずは、こちらを片付けよう）

俺は、仰々しい木造の扉を軽くノックしてから、中に入った。

（闇？）

それは、魔王の居城内で、玉座の間に入った時と感覚が似ていた。

しかし、決定的な違いはあった。

「何者じゃ？」

部屋の中心から、声がした。

俺の目が赤くなると、部屋の真ん中で椅子に座る男の姿をとらえた。

ライのような圧倒的な恐怖は、感じれなかった。

しかし、それでも、普通の人間とは感じなかった。

（魔獣因子）

すぐに、浮かんだ言葉で、俺はすべてを理解した。

「…」

ゆっくりと歩き出した俺の足音を聞き、男は椅子から身を乗り出した。

「この匂いは！茉莉か！どうして、ここに！」

男は思い切り、歯ぎしりをしたが…すぐに、顔をしかめた。

「違う！匂いはそうだが…魂が違う！」

男の叫びに、俺は足を止めた。

近付いて気付いたが、男のくぼんだ眼窩に、目玉はなかった。

「貴様は、何者だ！」

興奮から、思わず立ち上がった男の背中に、戦慄が走った。

「な、何？」

ゆっくりと振り返った男は、椅子の後ろに立つ…学生服を着た少年の存在に気付いた。

「伯父様」

少年は、男にウィンクした。

「茉莉！」

男は椅子から離れ、俺の方に後ずさった。

「こ、ここは！この屋敷に、出入りを禁じてるはずだ！」

男の言葉に、少年は笑った。

「伯父様がね。だけど、入ろうと思えば、いつでも入れたわ」

そして、ゆっくりと近付いてくる少年に気付き、男は後ずさりながら、叫んだ。

「誰かおらぬか！神はどうした！他の者でもいい！こやつを何とかしろ！」

男は、後ろを見ていない為に、俺にぶつかりそうになった。

仕方がなく、避けようとしたが、その前に…猫沢と上月が、男の肩を掴んだ。

「大丈夫ですか？菱山様」

俺の後ろから、真田が現れた。

「おおっ！真田！」

男は、嬉しそうな声を発した。

「お主からも言ってくれ！ここは、出入り禁止だと！そう先代と決めたはずだ」

「そうでしたね」

真田は頭を下げた後、男の前に来た。

「お嬢様がお生まれになられた時、あなた様はその力に、恐怖された。何度か殺害しょうともしたが…それもかなわなかった。だからこそ、あなたはこの屋敷に閉じ籠り…お嬢様以上の神の出現を待った」

真田は話しながら、猫沢に目をやった。

すると、男の後ろまで、猫沢は椅子を移動させた。

「どうぞ」

猫沢の言葉に、男は座った。

「菱山様」

真田は跪き、

「あなたが待った神は、生まれ…後は、お嬢様を手篭めにするだけだった。新たなる闇の力を持つ者達の力を借り、契約も結べた。数万人の魂と引き換えに、この世界の支配者となることも」

床を見つめながら、微かに笑って見せた。

「し、支配者ではない。今のわしは、ある意味この社会を支配している。しかし、神にはなれない」

菱山は震えながら、言葉を続けた。

「金を持ってるとかではない！権力でもない！人間のそういった感情を超越した時に、人は神になるのだ」

菱山の悲痛な叫びに、俺は心の中で、首を捻っていた。

（何の話だ？）

ブルーワールドにいる時も、神レベルとかいう時もあった。

しかし、それは…圧倒的な強さを意味していた。

真田や菱山が言う神は、違った。

「確かに…神にお金は、関係ない」

真田は頷くと、頭を下げ、菱山の前から移動した。

「伯父様」

菱山の目の前に、茉莉がいた。にこっと笑いかける無垢な笑顔を見た瞬間、菱山の体は固まった。

いや、実際は目玉がない菱山に見えるはずがない。

「チッ！」

舌打ちすると、俺は2人に近づこうとした。
すると、猫沢と上月が道を塞いだ。
「神とは…」
真田は、頭を下げ続けた。
「人間の常識をこえた存在。故に…無垢」
「き、貴様ら！」
菱山の体が、変幻した。
蜘蛛をイメージするその姿は、全長5メートルをこえた。
「私が、小娘に！」
椅子を踏みつぶすと、口から糸を吐き、少年の自由を奪うと、巨大な口を開いた。
「お前を食らい、神の力を手にいれてやる」
そのまま、頭から食らおうと、菱山が動いた次の瞬間、彼の体は細切れになった。
「やっぱりね」

少年は、微笑んだ。

細切れになった菱山の体から、白い光を放つ球体が姿を見せた。

「魂の塊。あんたごときが、その身に宿したとしても、扱える訳がないの」

少年が球体に手を伸ばすと、吸い寄せられるように、自ら飛んでいった。

「！」

その動きを確認すると、猫沢と上月は、俺の前から離れ、少年の前に移動した。

「時は、満ちました。後は、あなた様の思うがままに…」

真田はちらっと俺の方を見た後、少年の方に移動し、跪いた。

「大義であった」

少年は微笑むと、まずは上月の方に近付き、首筋に噛みついた。

「有り難き幸せ」

一瞬で、ミイラのようになった上月を見て、俺は少年の方に走った。

すると、俺がいた場所に、弾が着弾した。

部屋の隅から、ライフルを構えた剣じいが出てきた。

剣じいは、俺の動きを止めようと、再び銃口を向けた。

しかし、その瞬間、剣じいの首が飛んだ。

「太陽様に、何をしている」

一瞬で剣じいの後ろに移動した少年が、手刀で切り裂いたのだ。

「う！」

俺は、少年から漂う魔力に息を飲んだ。

その体は、俺が作ったものであるが…完璧に支配されていた。

中に入っている茉莉の魔力が、血管のように、全身に走っていた。

「太陽様」

満面の笑みを浮かべる少年に、俺は足を止めた。

「邪魔をするな」

跪いている真田が、俺に向かって言った。

「我々は、茉莉様の力となるのだ。これは、決まっていたことであり！名誉なことだ。魂を抜かれ、道具にされる者達よりもな」

「チッ！」

真田の言葉を聞いた瞬間、俺は移動し、真田の首根っこを掴むと、無理矢理立たせ、鳩尾に拳を叩き込んだ。

「う！」

一瞬で、気を失う真田。

「！」

驚いた猫沢が、立ち上がったが、俺の動きに何もできずに、一撃で気を失った。

「何をなさっているのですか？」

気を失った2人を床に寝かせる俺を見て、少年は首を捻った。

「彼らが、望んだことをしてあげるだけなのに」

「人の血を吸い、殺すことが彼らの願いだというのか？」

俺は立ち上がると、少年を睨んだ。

「やっぱり…」

そんな俺を見て、少年は顎に人差し指を当てると、少し考え込んだ。

――と、俺には見えた。

「太陽様は…自分が、何者なのか！わかってらっしゃらないのね」

「！」

俺の思考よりも、速く移動した少年は、後ろから俺の耳元に囁いた。

「太陽様も…神なの。だ・か・ら」

少年は、俺の耳に息を吹きかけながら告げた。

「人間のような考えは、捨てて下さいませ」

「なに！」

俺は、絶句した。

少年の速さだけではない。

いつのまにか、場所が移動していたからだ。

「ここは？」

俺は、周りを見回した。

校舎の位置。

見慣れた風景が、俺にここがどこか、教えてくれた。

「大月学園！？」

しかし、人の気配がない。

学園の周りにもだ。

周りを見回す俺を見て、少年はクスクスと笑った。

「誰もいないだと!?」

俺は、後ろに立つ少年に向かって、振り返った。

「そうですの」

少年は、手に持っていた魂の塊を上に投げた。

すると、遥か上空で太陽のように輝き出した。

「この世界は、あたしが創った世界です。人がいない…素敵な世界!」

少年はそう言うと、手を組み、嬉しそうに踊り始めた。

「世界をつくっただと!」

「そうです」

少年がパチンと指を弾くと、今度は一面がジャングルと化した。

それから、次々と変わっていく。

氷だけの世界。サバンナ…エベレストの山頂。

「クッ!」

俺は唇を噛み締めると、自分の魔力を発動させた。

「駄目ですわ」

突然、周囲の風景が混ざり、黒一色になった。

「まだ安定していませんのに」

少年の言葉に、俺は目を見開いた。

「ここは、まだ向こうの世界とくっ付いています。だから、あまりお使いにならない方がいいですよ。あたしは、別に～向こうの世界が壊れてもいいですけど！」

少年は、愕然としている俺に微笑みかけた。

「どういうことだ！」

俺は、少年の体を見て叫んだ。

「だったら、この体の魔力も！使えば、破滅するのでは」

「あまり、使ってませんわ。だけど～やっぱり、力を使うと、空間が壊れるみたいですわ」

少年は踊りをやめ、

「前に、太陽様と同じ会場にいた時も、穴が空きましたし」

また顎に人差し指を当てた。

「な！」

俺の脳裏に、オウパーツをつけたレダの偽者の姿がよみがえる。

少年は無邪気に、話を続けた。

「太陽様のお体を知る為に、いろんなところにお出かけしましたの。ちょっとだけ、魔力を使う度に、穴が空きましたけど…。あんまり気にはしませんでしたわ。なぜならば…人間なんて、いりませんから」

最後のいりませんからと呟くように言った時、俺は寒気がした。

しかし、怯むはずがなかった。

「待て！」

俺は、一歩前に出た。

「世界中で起きた事件は、君が起こしたのか？さっきの男ではなく」

「起こした訳ではありませんわ。だが、そうなっただけです」

少年は、肩をすくめた後…ため息をついた。

「じゃあ！やつらは、何なんだ！俺のそっくりさんや、大月学園を襲ったやつらは！」

「太陽様…」

少年はまたため息をつくと、俺の目をじっと見つめた。

次の瞬間、俺の胸に激痛が走った。

思わず片膝を、地面につけた俺を…俺が見下ろしていた。

「！」

立場が逆になっていた。

俺は、俺の体に戻っていたのだ。

「やっぱり…」

膝をつけている俺は、ゆっくりと立ち上がった。

「愛し合う時は、女の方がいいですわ」

「う！」

立ち上がった俺が、顔を上げた時、思わず怯んでしまった。

潤んだ瞳。濡れた唇。

そして…ボロボロの制服から、見える透き通った肌。

「太陽様」

茉莉は、優しく微笑んだ。

「消えた」

その頃、屋敷の廊下を歩いていたアルテミアは、強い気が消えたことに気づいていた。

「殺す」

女の勘だろか…。何故か、むかついてしまった。

すぐに、行き先を探ろうとしたが、アルテミアは思わず、足を止めてしまった。

あまりにも、唐突だった為に、驚いてしまったが…すぐに平常心に戻った。

「へぇ〜」

アルテミアは、廊下の先に立つ女を睨んだ。

「今度は、お母様の偽者か」

「…」

無言で、廊下に立っているのは、ティアであった。

「そんなことで、動揺すると思ったか！」

アルテミアは、氷の剣をつくると、ティアに向かって走り出した。

第52話　涙

「フン！」

アルテミアは右肩を入れ、体を真横にすると、氷の剣を突きだした。

「…」

ティアは、ゆっくりと瞼を閉じた。

恐らくは、瞼を閉じるよりも、剣が刺さるのが速い。

ティアは、そう確信していた。

しかし、数十秒たっても、剣が刺さった痛みがない。

砂の体とはいえ、刺されば痛みを感じる。

なのに、刺さっていない。

ティアは再び、目を開けた。

「！」

すると、剣先が額から数ミリのところで、止まっていた。

目を見開くティアから、アルテミアは剣を引くと、背中を向けた。

「待って！」

自分から離れようとするアルテミアを、ティアは困惑しながら止めた。

しかし、アルテミアは足を止めない。

「どうして、あたしを殺さない！あ、あなたの…」

ティアの瞳から、涙が流れた。

「お母さんに似ているから…」

その言葉に、アルテミアは足を止めた。

「あなたのお母さんと似ているから、あたしを殺さないの？」

まだ言葉を続けるティアに、アルテミアは顔をしかめた。

「チッ」

そして、舌打ちすると、振り返った。

「あんたとお母様は、違う！お母様は、あんたのように、簡単に命を捨てるような真似はしない！」

アルテミアは言い切ると、前を向いた。

「あたしは、勇者ティアナ・アートウッドの娘！自殺の手助けなどしない！」

アルテミアは、廊下の先を睨みつけながら、歩き出した。

「あああ…」

遠ざかるアルテミアの背中を見つめながら、ティアは自らのお腹に手を当てた。

「マルコ…。もし、あなたとの子供が産まれていたら…あの子のように、強い子になったかしら?」

ティアは涙を流しながら、笑った。

今さっきまで、自分は…愛する夫とお腹にいた子供を殺した社会に、復讐する為に、再び復活したと思っていた。

どうやら、それは違ったらしかった。

アルテミアの姿を見た時、ティアは自分の後悔を知った。

(ちゃんと…あの子を産んで上げたかった)

ティアの魂が、後悔から懺悔の涙を流した時…彼女は成仏した。

彼女だった体は、砂に戻り…廊下に溜まった。

しかし、そのことに、アルテミアは気付かない。

成仏したティアの魂が、砂の世界に戻ることはなかった。

ティアとしての生き方は、終わったのである。
次に、生を受けたとしたら、もう彼女ではない。

「ク、クソ！」

魔力を発動させれない俺は、肉体と体が一致した茉莉のプレッシャーに押し潰されて、動けなくなっていた。
両足が、地面に埋まっていく。

「太陽様。今、この世界には、あたし達2人しかおりませんわ」

茉莉は、さっきまでその体の中にいた俺が、ボロボロにした制服の胸元を、指で裂いた。

「契りましょう」

さらに、服を脱ごうとした時、俺の背中から炎の羽が生えた。
そして、一気に茉莉の上から、彼女を包み込んだ。

「フ、フレア…」

火の玉の中で、燃え上がる茉莉。

しかし、茉莉が炎の中で笑うと、一瞬で包んでいた炎は、消し飛んだ。

「太陽様…」

茉莉は、顔を真っ赤にして、恥じらいながら言った。

「せっかちですわね」

ボロボロだった制服だけが灰なった為に、茉莉の身につけているのは、白い下着だけとなった。

「フレアの攻撃が効かない！？」

茉莉の透き通るような白い肌には、火傷の痕一つない。

「さあ～太陽様！」

茉莉の目が、赤く光ると、背中から生えていた炎の羽が、消し飛んだ。

それだけではなく、俺の体が跳ね上がると、体の主導権を完全に握られてしまった。

「太陽様のお体に、少し細工を致しましたの」

茉莉がそう言った瞬間、全身に血管のように、茉莉の魔力が走り、俺は十字架にかけられたかのごとく、両足をピッタリとつけ、両手を真横に突きだした。

「それだけでは、ございません」

茉莉は俺に微笑みながら、躊躇うことなく、ブラジャーを取った。

「太陽様のお体の隅々を、調べさせて頂きました。」

茉莉は手を伸ばし、俺の頬に触れた。

「どこが…一番よいのか」

至近距離で微笑む茉莉の露になった胸が、嫌でも俺の目に入った。

「太陽様」

茉莉は指で俺の体をなぞりながら、両膝を地面につけた。

「太陽様の一番…」

「や、やめろ！」

俺は恥ずかしさから、目を背けたかったが、自由が効かなかった。

「恥ずかしがることはありませんわ」

茉莉は、俺のズホンのチャックを掴んだ。一気にあけることはせず…じわじわと焦らすように下げていく。

（どうして、あそこだけ～自由なんだ！）

自分の下半身の状況に、俺は嘆いた。

「心配いりません」

茉莉の手で、チャックは半分だけ開いていた。

「あたし達の子供が、新しい世界の神となるんですから」

茉莉はにやりと笑うと、一気にチャックを下ろそうとした。

しかし、それはできなかった。

茉莉は慌てて、立ち上がると、左の方を睨んだ。

「何者だ！」

今までの微笑みが消え、鋭い殺気を放つ茉莉。

しかし、突如この世界に現れた者の魔力は、桁が違った。

世界そのものが、震えていた。

そして、俺は…その者を知っていた。

体の自由が効かない癖に、汗が噴き出してきた。

さらに、寸前まで元気だったものが…縮こまっていた。

「あ～あっ！」

半裸の茉莉と、チャックが開いた俺を見て、その方の怒りはマックスを越えた。

「ぶっ殺す！」

その台詞を聞いた瞬間、俺は死を覚悟した。

第５３話　終わりゆく世界

「この世界に入ることが、できるなんて…」

茉莉は立ち上がると、侵入者を睨んだ。

「何者です？」

「フン」

しかし、侵入者は茉莉ではなく、俺を睨み付け…ただ殺気だけを放っていた。

（ひぇ～）

俺は動けないながらも、後ろにいるだろう侵入者の魔力を感じ、怯えていた。

「その態度！」

茉莉は、自分を見ようともしない侵入者の態度にキレた。右手を突きだすと、炎の気弾を放った。

しかし、侵入者は片手でそれを弾き返した。

茉莉の真横を通り過ぎ、後方で気弾は爆発した。

まだ安定していない世界が、激しく揺れた。

「え」

茉莉は、信じられないものを見たかのように、唖然とした。

「まったく～」

侵入者は、頭をかいた。

「何を！ちんたらやってるんだ」

そして、一瞬では距離をつめると、固まっている俺の背中を蹴った。

「うわあ！」

ふっ飛んで、そのまま倒れるかもしれないと思った俺の体は、反射的にバランスを取り、踏みとどまった。

どうやら、ショックで茉莉の呪縛が消えているらしい。

俺は後ろを見ないようにして、茉莉の方に目をやった。

「し、信じられない…」

全身を小刻みに震わせる茉莉の全身から、数秒毎に漏れる魔力の強さがあがっていく。

「や、ヤバい」

俺が振り返ると、両腕を組んだアルテミアと目があった。

「何が、ヤバいって？」

まだ赤く染まっていないアルテミアの瞳の奥に、言い様もない怒りを感じた俺は、思わず後退った。

「あ、あたしは！！」

茉莉は歯を食い縛ると、今度は両手をアルテミアに向けた。

「神よ！」

瞳が真っ赤になった茉莉の両手から、さっきとは比べものにならない程の炎の気弾が放たれた。

至近距離でありながら、球体の気弾の大きさは、半径十メートルをこえた。

炸裂すれば、この空間が破壊されるかもしれなかった。

アルテミアはにやりと笑うと、片手を突きだした。

「あなたのような存在を認めない！」

茉莉の叫びに、アルテミアは鼻を鳴らすと、気弾を片手で受け止めた。

それから、指を曲げると、気弾を少し圧縮し、くす玉くらいの大きさにすると、それを俺に向かって投げた。

「浮気をした罰だ」

「え！」

体の自由が戻ったとはいえ、魔力の使えない俺は、高速で近付く気弾を避けることもできなかった。

この世界が、向こうと裏表になっている限り、破壊させる訳にもいかなかった。

仕方なく…俺は、気弾の直撃を受け入れた。

「太陽様！」

茉莉は絶叫した。

「フン」

アルテミアは、そっぽを向いた。

気弾の直撃により、俺の体は一瞬で消滅した。

「太陽様あああ！」

絶叫する茉莉は手を伸ばしたが、気弾の炸裂によって発生した目映い光は、すぐに終息した。

再び何もない暗闇に、戻る。

「太陽…様…」

その場で崩れ落ちる茉莉。

その様子を無言で見つめるアルテミア。

「よ、よくも！太陽様を！」

すぐに立ち上がった茉莉は、アルテミアを睨み付けた。

アルテミアは息を吐くと、肩をすくめて見せた。

「太陽様は、わたくしが初めて好きになったお方！その方とならば、わたくしのつくる新しい世界に、人間をつくることも許したのに！」

茉莉の姿が、変わる。

「2人で、肉体を入れかえ！互いの体を確かめ合った仲なのに！」

蝙蝠の羽に、牙を生やした姿は…神ではなく、悪魔であった。

「肉体を入れかえねぇ～」

アルテミアは腕を組み直し、

「あたしは、嫌だね」

茉莉を見た。

「何！」

茉莉は、アルテミアの様子に眉を寄せた。

「だって、そうだろ？互いの体を入れかえてどうする？」

アルテミアも眉を寄せ、

「知りたいのは、相手の体か？心だろ」

右手の親指で、自分を指差した。

「肉体なんて、いつでも知れる。大切なのは、中身。てめえのやり方だと、一生相手の気持ちは、わからないぜ」

「な」

絶句する茉莉に、アルテミアは強烈な言葉を放った。

「お前…恋なんてしていないだろ？」

「！」

アルテミアの一言は、茉莉の心に突き刺さった。

「き、き、貴様！」

茉莉の羽が、左右に広がった。

「フッ」

アルテミアは、にやりと笑った。

実際…茉莉は恋をしていただろう。

しかし、茉莉は恋を知らな過ぎた。

アルテミアの挑発に怒りながらも、太陽を失ったことに対する怒りがわいていないことに、自ら気付いていた。

勿論…それは、錯覚である。

アルテミアの言葉に、翻弄されているのだ。

すぐに、来ない痛みこそ…真の痛みである。

この戦いが終わった…数時間後ならば、茉莉も気付いたかもしれなかった。

「死ね！」

すべての魔力を解放した茉莉が、アルテミアに襲いかかる。

アルテミアは、一歩も動かない。

ただ目だけを、茉莉に向けて言った。

「2人だけの世界？笑わせるな！」

「キイィ！」

甲高い声を上げると、茉莉の両手の爪が伸び、アルテミアを切り裂こうとした。

「2人だけで生きていける程…世界は甘くない」

アルテミアは右手を伸ばすと、飛びかかってきた茉莉の顎を掴んだ。

「！」

空中で身動きできなくなった茉莉が見たものは、赤く光ったアルテミアの瞳だった。

にやりと笑ったアルテミアの口許から牙が覗かれた。

「お前の力…貰うぞ」

「イ、ヤ…」

顎を捕まれている為に、茉莉はちゃんと話せなかった。もがこうとしても、まったく動けなかった。

背中から生えた羽は、消滅し…爪は落ち、瞳の色も戻っていく。

「殺すことは、簡単だが…」

数秒後、アルテミアは茉莉を床に捨てた。

「本当の愛を知ってからにしてやる」

「あ、あああ…」

茉莉は起き上がると、魔力を失った己の手を見て、わなわなと震え

ていた。

何とか魔力を発動させようとするが、まったくできない事実に気付くと、発狂したかのように、絶叫した。

「いやあああっ！」

「フン」

アルテミアは、茉莉を無視するかのように、背を向けた。

「いくぞ…赤星」

「うん…」

アルテミアの左手に、指輪がはめられていた。

そして、ピアスから俺の声がした。

「…ア、アルテミア」

歩き出したアルテミアに、話しかけようとした時、突然…足を止めた。

「どうしたの？」

アルテミアは、空を見上げた。

「アルテミア様」

真っ暗の空間に、サラの声が響いた。

「空間移転の術式は、破壊しましたが…おかしな波動が、アルテミア様の頭上に」

「そうらしいな」

アルテミアは空を見上げ、そこに浮かぶものに目を細めた。

先程、光を発して太陽のようになっていた何万人の魂の塊が、浮かんでいた。

光ではなく…闇を放ちながら。

「どうやら…この世界を包んでいるのは、人間の闇か」

アルテミアの背中から、翼が生えた。

「絶望が放っているのは、かつての願望。人の夢で、世界を形成する」

「アルテミア様！」

サラの声に、焦りがあった。

「わかっている！」

アルテミアは飛び上がると、魂の塊に手を伸ばした。

その次の瞬間、アルテミアの視界が真っ暗になり…床に着地した。

「おかえりなさいませ」

「!?」

着地したアルテミアは、顔を上げた。

「ここは!?」

断崖絶壁に囲まれた谷の底。

風に数百年削られた剥き出しの岩肌に、アルテミアは見覚えがあった。

「おかえりなさいませ。天空の女神…いや、今はこういうべきかな？魔王と」

谷底に、数百人の兵士がアルテミアを囲むように転回していた。

その輪の中から、黒いコートを身に纏ったヤーンが一歩前に出てきた。

ヤーンは、お辞儀をすると、アルテミアを見つめ、

「向こうの世界の人間の魂を使い、クーデターを起こすという計画は、あなたによって阻止されたようですが…代案が決まりましたので、気にしていません」

ヤーンは、顔を上げた。

「てめえ～。何が言いたい」

アルテミアは、自分を囲む兵士を見た。

（防衛軍？）

俺も、周りを見た。

「なぜならば、それ以上の戦力を我々は手に入れたからですよ」

ヤーンは、指を上に向けた。

「紹介しましょう！防衛軍、最強戦力！」

「な！」

空から谷底まで、一瞬で降りてきた人物を見た時…俺とアルテミアは、絶句した。

「赤の将軍！赤星浩一！」

なぜならば…俺だったからだ。

第５４話　二人と一人

「何！？」

俺は目を疑った。

アルテミアと俺の前に着地したのは、紛れもなく俺のオリジナルとなる…自分自身であったからだ。

「…」

防衛軍の軍服を着た俺が、アルテミアに向かって手を突きだした。

「チッ！」

アルテミアは舌打ちすると、後方に飛んだ。

俺の手から放たれた衝撃波は、アルテミアの後ろに聳える崖をすり鉢状に抉った。

その大きさは、アルテミアの身長の五倍はあった。

「クッ！」

腕をクロスして、防御の体勢にしたが、アルテミアの全身の肌が痛んだ。これでも、威力を流したはずだった。

「フン！」

崖に激突こそしなかったが、全身が痺れてしまったアルテミアに向かって、俺がジャンプした。

アルテミアの首根っこを捕まえ、すり鉢状に抉れた岩肌に、背中から激突させた。

「殺すなよ」

ヤーンは、楽しそうに笑った。

「あ、赤星」

アルテミアは顔をしかめ、俺の腕を振り払おうとしたが…首筋に深く入り込んだ手は、逃げることを許さなかった。

さらに力を込めると、アルテミアの体は岩肌にめり込み…そのままトンネルを掘っているかのように、穴が空き始めた。

すり鉢状態に抉れた岩肌に、さらにひびが走った。

「赤星！」

アルテミアの全身が輝き、光に包まれた。

同じく俺の体も、光で包まれていた。

「アルテミア…」

崖を削りながら、俺は腕を曲げると、アルテミアを引き寄せ、耳元で囁いた。

「!?」

しかし、何を言ったのは、ピアスの中にいる俺にはわからなかった。

俺は、アルテミアをさらに奥に押し込むと、ピアスに向かって言った。

「僕がいなくなったら、君が赤星浩一をやれ。だから、意識を一つにはしない!」

俺は、アルテミアの首から手を離した。

「アルテミアを頼んだ!」

そう言うと、俺は魔力を四方八方に放った。

「赤星!」

アルテミアは翼を生やすと、すぐに全身を覆い、ドリルのように回転し、上ではなく地下に掘り進み出した。

「うおおおっ!」

俺から放たれた魔力は、周囲の石を抉り、吹き飛ばしながら、消滅させた。

「クッ」

その魔力の凄まじさと、爆音と光に、崖側にいた兵士達は退避した。

ヤーンもまた、顔を背けながら、目を瞑っていた。

「赤星浩一！」

音が聞こえなくなってから、ヤーンは叫んだ。

手で庇いながら、目を開けた瞬間、ヤーンは絶句した。

目の前に、新しい谷ができていたからだ。

「な！」

その谷の真ん中に、赤星浩一が立っていた。

「ア、アルテミアはどうした！」

ヤーンの周りで、隊を組み直す兵士達。

赤星浩一は、空を見上げ…一言だけ言った。

「逃げられましたよ」

「何！」

ヤーンや兵士達が、空を見上げた時には、アルテミアの姿は見えなかった。

勿論、アルテミアは飛んで逃げたわけではなかった。

地下から逃げたのだ。

アルテミアが空けた穴は、赤星浩一の足元にあったが…彼によって埋められていた。

「おのれ～」

ヤーンは悔しがると、その場で地団駄を踏んだ。

「まあ～いい」

しばらく踏んだ後、ヤーンは赤星浩一の後ろ姿に、目を向けた。

「アルテミアをも凌駕する力！あの力さえあれば、いつでも始末できる！」

ヤーンは、ニヤリと笑った。

「赤星…」

防衛軍の魔敵詮索レーダーに引っ掛からないように、数百キロ向かうにある地中海海底まで、穴を掘り進んだアルテミア。

海中に出ると、マーメイドモードに変わった。

人形を連想させるその姿で、アルテミアはアフリカ大陸に向かった。

できる限り、離れるつもりだった。

（アルテミア）

水中での俺の声を聞いて、アルテミアは海面を目指し、浮上した。

顔だけを海面から出すと、辺りを警戒しながら、アルテミアは話し出した。

「防衛軍は、やつらの手に落ちたらしい。何でも…民衆をやつらは人質にしているようだ」

アルテミアは顔をしかめ、

「その為…ジャスティンは、防衛軍本部を無血開城し、今はどこかに幽閉されているらしい」

ゆっくりと海に流されるように泳ぎ出した。

俺は、あの短時間でよくそこまで話せたなと、自分ながらも感心してしまった。

「そして、あいつも…人々を人質にとられて、やつらの言いなりになっている！」

「え！」

俺は、アルテミアの話には驚いてしまったが…そう考えると、自分自身の行動の意味が理解できた。

「あいつが、分身であるお前と融合せずに、逃がした意味はただ一つだ！」

アルテミアは、海面から飛び出すと、翼を広げた。

「自分を殺しても、お前が残る！そう考えたんだろうがな！そんな勝手をさせるか！」

アルテミアは、一気に地中海から、アフリカ大陸の地平線に沿いながら、低空で飛んだ。

「勝手は許さん！自分勝手は、あたしだけの専売特許だ！」

アルテミアは、前方を睨んだ。

「フッ」

防衛軍本部内で、１人チェスをしていた白髪の男は、笑っていた。

いろんな形をした駒達。

それを指で、掴みながら、男は口を開いた。

「すぐに、本部を移そう。こんな猿臭い島にあるなど、虫酸が走る」

次々に駒を動かし、

「魔物と違い…人間は、一種類しかいない」

ふと手を止めた。

そして、前を向くと、磨き上げられた扉の表面に、己の顔を映った。

「我々…ブルーアイズこそが、唯一の人間。あとの瞳の色は…猿と同じ！」

男は再び、駒に目をやった。

「猿は、我々の糧になれ！そうでなければ…生まれた意味がない」

「帰ったか」

カードの魔法を使い、旧防衛軍本部内に入ったヤーンを、２人の男が出迎えた。

一際綺麗なブロンドの髪と青い瞳を持つ…兄と弟。

しかし、ヤーン自身は…黒い髪に、漆黒の瞳だった。

「少し計画が変わったが…問題はない」

3人の中で一番背が高い、兄のディーンが笑いかけた。

「兄さんは、何年も向こうの世界にいたんですから」

短髪の少し癖毛は、弟のレーンであった。

金色の剣聖と呼ばれる程の戦士であった。

「少し疲れた故に…失礼します」

2人の間を通り抜け、ヤーンは廊下を歩き出した。

「エリートか」

ヤーンは呟くように、それだけを口にした。

2人の方を振り返りことは、まったくしなかった。

「しかしな。フフフ…」

ヤーンは含み笑いをしながら、自らの腹の辺りをさすった。

すると、服の下が少し光った。

第５５話　続く思い

その場で崩れ落ち、止まらない涙を流し続ける開八神茉莉を見て、真田は敗北を知った。

「また…終わったな」

破壊された菱田の屋敷から、茉莉の豪邸が見えた。

「しかし…」

真田は目を細め、

「神の力は失っても…金と権力は残った」

事実を頭の中で確認すると、膝を折り、茉莉の横で跪いた。

「お嬢様」

「ううう…」

茉莉は、泣くことを止めない。

それでも、真田は言葉を続けた。

「例え、神でなくなりましても、お嬢様が特別な存在であることに変わりはございません。それからは、人の頂点として」

「太陽様が、死んでしまわれたわ！」

突然の叫びに、真田は目を見張った。

「太陽様が、亡くなられた。あの方はもうこの世にいらっしゃらない！」

茉莉の言葉に、真田は彼女の変化を知った。

太陽のバンパイアとして生まれ、人間など食料としか思っていなかった茉莉。

それ故に、彼女は…数万人を殺しても、食事程度にしか思わなかった。

世界を壊し、滅ぼし、新しい世界を創るということに関しても、大した感情はなかったはずである。

その茉莉が、綾瀬太陽を亡くしただけで悲しんでいる。

自分が、神の力を失ったことよりも…。

「お嬢様…」

再び泣き出した茉莉を見て、真田は長年仕えてきて、初めて気付いた。

彼女は、孤独だったのだと。

「お嬢様…申し訳ございません」

真田は深々と、頭を下げた。

そして、茉莉が泣き終わるまで、そばで控えることに決めた。

「アルテミア様！」

アルテミアの気配が消えたことに気付いたサラは、半壊した屋敷の屋根に立つと、空を見上げたまま、テレポートした。

「何かあったのか？」

屋敷内の空気が変わったことを、敏感にサーシャは感じ取っていた。

「どうやら…舞台が変わったようね」

リンネは肩をすくめると、ゆっくりと歩き出した。

「リンネ様」

九鬼真弓と対峙していた刈谷は、リンネが横を通り過ぎると、構えを解き、後ろに続いた。

「！？」

場の空気を感じ取っていた九鬼も、刈谷が離れると、緊張を解いた。

「待て！」

サーシャは振り返ると、遠ざかるリンネの背中に向かって叫んだ。

「どうなったんだ！」

「この世界は、救われたのよ」

リンネ達は、最後にそれだけ言うと、その場から消えた。

「救われたのか？」

サーシャが緊張を解くと、頭の中でロバートの声がした。

（舞台が変わった。恐らくブルーワールドに移ったのだろうな）

「！」

眉を寄せるサーシャに、ロバートは言った。

（この世界の首謀者は、死んだか…力を失った。一応は危機が去ったということだ）

「チッ」

サーシャは舌打ちすると、走りだそうとした。

（待て！）

ロバートは止めた。

（俺達が、肉体を持っていられるのは、この世界だけだ。ブルーワールドには戻れない）

「だけど！あたし達は、何もしていない！」

（サーシャ）

「赤星君に、何も返していない！」

サーシャの言葉に、近くにいた九鬼が訊いた。

「みんな…ブルーワールドに戻ったのですか？」

空を見上げ、置いてきぼりにされた子供のように悲しげな目をする九鬼に気付き、サーシャはじっと見つめた。

「この世界の危険が去ったならば、向こうの世界に行きたい。みんなを守る為に！」

ぎゅっと握り締めた拳に、サーシャはフッと笑うと、九鬼に話しかけた。

「君ならできるよ」

サーシャは装備していたドラゴンキラーを、九鬼の足下に投げた。

地面に突き刺さったドラゴンキラーに、九鬼は少し驚いてしまった。

「あたし達は、死人。もうこれ以上進めない。だから、君に託そう。

これからの人間の未来を」

サーシャは、九鬼に向かって微笑んだ。

（サーシャ…）

ロバートは、２人の戦いの終焉を感じていた。

禁呪を使い、サーシャの魂を留まらせ、２人で戦い続けた日々もあった。

（悔いはある。しかし…）

ロバートはフッと笑うと、考えるのをやめた。

それとほぼ同時…サーシャの体が崩れ始めた。

後継者を見つけたことで、安堵したのであった。

「ああ…」

九鬼は手を伸ばしたが、もう触れることはできなかった。

ただの砂と化したサーシャだったものを見下ろし、九鬼は肩を落とした。

「結局…何だったんだ」

詳しい全貌が、わからないまま…戦いの幕は下りた。

「結局…」

その戦いの終わりを感じているものが、もう1人いた。

「何だったんでしょうか」

赤星家から出た麗菜こと明菜は、ドアに向かって頭を下げた。

この辺りにかけた催眠術は、もうすぐ解ける。

浩一の母親も、夢から覚めるであろう。

頭を上げると、明菜はある方向に顔を向けた。

建物が密接している為に見えないが、明菜の実家があった。

異世界で死んだ明菜は、この世界では、行方不明となっていた。

「…」

明菜は、実家の方にも頭を下げると、反対方向に歩き出した。

今更、顔をだすつもりはなかった。

自分達は、死んだのだからだ。

「先輩…」

明菜は、真っ直ぐに前を向きながら、美奈子に訊いた。

「ここと向こうの絆を斬らなくて、よかったんですかね？」

（そうだな…）

頭の中で、美奈子の声が響いた。

少し悩んでいるようだ。

数十秒後、美奈子は言った。

（やはり…あたし達は死人だ。生きているやつらの世界をおかしていけない。だけどな！）

明菜から、美奈子へと姿が代わった。

「残さなければならないものもある！」

美奈子は前方を睨むと、テレポートした。

「麗菜ちゃん」

赤星家の玄関から、母親が出てきた。

「どこに行ったのかしら?」

そして、歩道に出た瞬間、催眠術は解けた。

「あ、あたし」

周りをキョロキョロ見回してから、家の中へと戻った。

「何をしに…出たのかしら?」

母親はドアを閉めながら、首を捻った。

その数秒後、母親はさらに驚くことになる。

自分が準備している食事の量の多さに。

「終わったのか?」

何の変化も訪れない静かな校内に、高坂達…学園情報部は集結していた。

綾瀬太陽と九鬼の動きを見て、何かが起こったことは事実だった。

「そのようです」

「!?」

突然、後ろから声がした為、高坂達が振り返ると、そこに相原理香子と中島がいた。

「この世界の神が、力を失いました。残念なことに…」

睫毛を落とす理香子を見て、高坂は視線を外して、口を開いた。

「神ってやつは、必要なんですか?」

「え」

思いがけない高坂の言葉に、理香子は顔を上げた。

そばにいた中小路緑や、犬上輝も思わず、高坂の顔を見た。

「この世界に、神はいらないじゃないかと思っただけです。人間が支配し、人間の天敵の数が少ない世界で…人間に対しての神はいりますか?神は、弱者が救いを求める存在。だとしたら、人間にはいらない。神がいるのは、その下の動物達」

高坂は、真上にある満月を見上げ、

「それに、神はいるとしたら1人のはず。それなのに、乱雑に神は増えている。お布施や寄付という名の金を生んでね。俺には、神と言われるものが、垢まみれに見える」

顔をしかめた。

そんな高坂に、理香子は微笑んだ。

「あなたは、純粋なのですね」

「え」

思いがけない理香子の言葉に、高坂は思わず彼女の顔を見た。

理香子は月を見上げ、

「もし神がいなくても、人間は神を。幻の存在でも、神は神。なくなることはありません。だけど、神がこの世界を潰してはいけないのです。あくまでも、何の干渉をせずに、ただ存在することが神なのです」

そこまで言うと、自嘲気味に笑い、

「今回のことで、転生する前の自分の子孫は、力を失ったようです。もう何もできないでしょう」

ゆっくりと顎を引くと、そっと目を閉じた。

「その言い方…。あんた、首謀者を知っていたな」

高坂は、理香子を睨んだ。

「！」

高坂の指摘に、息を飲む理香子。

「あ～あっ！」

高坂は頭をかくと、学生服のポケットに突っ込んでいた乙女ケースを理香子に向けて投げた。

「借りていた力を返す」

「部長！」

乙女ケースを返した高坂の行動に、緑は驚き、声を発した。

「おそらく…この世界じゃあまり使えない。あんたにとっては、この世界のものはどんなものでも、大切なはずだ。例え…人に危険を及ぼすものでもな」

高坂は、部室に戻る為に歩き出した。

「部長！」

慌てて、緑と輝が後を追った。

「…」

そんな三人を、無言で見送る理香子の後ろから、結城里奈達…乙女戦隊月影のメンバーが駆け寄ってきた。

「理香子！」

「丁度よかったわ」

理香子は振り返る前に、笑顔を作った。

「相原…」

隣に立つ中島は、心配そうな顔を向けた。

「里奈…みんな…」

理香子はここで、一呼吸置くと、真剣にこう言った。

「月影の力を返して貰います」

「部長！どうして返したんですか！」

緑の言葉に、輝は頷いた。

「そ、そうですよ！」

「やれやれ」

体育館の裏に回り、理香子の姿が見えなくなってから、高坂はこたえた。

「この世界に来てから、あの力は…敵に操られたことがあった。恐らく…月の女神の親族には通用しない」

「だ、だけど…今さっきの話では、力を失ったと」

輝の言葉を、高坂は一瞥して目で止めた。

「で、ですけど」

月影に変身し、操られた経験を持つ緑は口ごもった。

「何にしてもだ。危険なものに頼ることはできない」

「ですが！」

「くどいな。平和を守る俺達が、敵にまわることは許されない。月影の力なくても、守り抜いて見せる」

「どうかしらね？」

突然、前から声がした為、高坂は足を止めた。

そこには立っていたのは、少しだけ足下が崩れ始めた美奈子だった。

「力は、必要よ」

美奈子は三人を見つめ、

「大事なものを守れなかったら、一生後悔することになる。だから」

自分に銃口を向けながら、自らの力を高坂に差し出した。

第５６話　戸惑い

「あなたは！」

高坂は、美奈子の体から零れ落ちる砂を確認すると、頭をフル回転させた。

茉莉について、レダに会いに行った時…同伴したサーシャの腕も、攻撃を受けて砂に変わった。

彼女達に何かしらの接点があるとしたら…。

悩む高坂に、美奈子は言った。

「時間がない。あたしの女神の力を渡せるチャンスは、今だけだ」

「し、しかし…」

高坂は躊躇っていた。

アルテミアのコピー人形と戦った時に共闘したが、美奈子のことを知らなすぎた。

「ありがとうございます！」

そんな中、躊躇うことなく、輝は美奈子の銃を貰う為に、前に出た。

「ひ、輝！」

緑が慌てて、後ろから輝の首根っこを掴んだ。

「フッ」

美奈子は笑うと、２人のそばを通りすぎ、高坂の前に立った。

「あたしは、演劇部の部長をしていてな。少しくらいは、人を見る目があると思う」

美奈子は、装飾銃を高坂に差し出し、微笑んだ。

「貰ってくれ。君の為ではなく、守るべき人々の為に」

それが、美奈子の最後の言葉になった。

「！？」

一瞬で砂と化すと、高坂の足下に崩れ落ちた。

そして、高坂の手には、１３の銃口がついた白い装飾銃が残っていた。

「守るべき…人々の為に」

高坂は、掴んでしまった銃に目を落とした。

「砂の世界」

突然、前から声がした為、高坂は思わず顔を上げた。

「さやか…」

そこにいたのは、如月さやかだった。

さやかは、砂の前でしゃがむと、手で砂をすくった。

「噂で聞いたことがあったの。死んだ後、この世に未練を持ったものがたどり着く世界」

「砂の…世界?だったら、彼女達は」

「あくまでも、噂よ。死んでからの世界なんて、誰も知らないから」

さやかは、更々と指の間から零れ落ちる砂を見つめながら、笑った。

「…」

高坂は風に乗り、少しずつ消えていく砂をしばし眺めてしまった。

「その力、どうするの?」

さやかは、砂がなくなると、立ち上がった。

「あ、ああ…」

高坂は、手にある銃を目で確認した後、目線を横にそらし、

「勿論…人々の…」

思いを口にしようとした。

「一つ質問」

しかし、高坂の言葉は、さやかによって遮られた。

さやかは一歩、高坂に近付くと、目を見つめながら訊いた。

「守るべき世界は、どっち?今いるところか…それとも、ブルーワールドなの?」

「そ、それは」

高坂は、たじろいでしまった。

高坂は、兄である幾多を追ってブルーワールドに向かった。

世界の壁を越えた障害で、記憶を失っていた。

今の自分を形成するアイデンティティは、ブルーワールドの二年間である。

当初の目的も忘れていたが、今は少しずつ思い出していた。

しかし、それでも…今現在は、幾多を探すことよりも、人々を守りたいと思っていた。

そんな高坂の思いは、揺らぐことになる。

さやかがどこからか、茶色の封筒を取り出し、それを高坂に渡したからだ。

「はい」

「何だ？」

「読めば分かるわ」

「？」

高坂は首を傾げながら、封筒を開けた。

そして、中の手紙を読む前に…文面を見て、手を震わせた。

「こ、これは…」

「さっき会ったのよ。いえ…会ったというより、会わされたのよ。あなたのお兄さんにね」

「や、やつは！」

高坂は、手紙を握り締めると、さやかを睨んだ。

「来ているのか！この世界に！いるのか！」

高坂は叫びながら、走り出した。

すぐに、さやかを追い越すと、そのままあてもなく走り去りそうな高坂を、今度はさやかが声を張り上げて止めた。

「無駄よ！彼なら、ブルーワールドに戻ったわ」

さやかは目をつぶってから、言葉を続けた。

「助かった、この世界には用がないらしいわ」

さやかを前にして、幾多流は自嘲気味に笑うと、伝えてほしい言葉だけを話した。

「僕は、異世界に戻るよ。この世界は、一応救われたみたいだからね。その代わり…すべての災厄が向こうの世界に、移動した」

そこまで言うと、幾多は唐突に、話を中断し、さやかに背を向けた。

「あ、あのお」

さやかはすぐに、幾多の背中に声をかけた。

噂に聞く連続殺人犯としての殺気も、狂気も…感じることはなかった。

それは、そうであろう。

幾多流が捕まらない要因の一つに、そこがあった。

普段の彼の笑顔は、無垢であり…仕草や態度に迷いがなかった。

ブルーワールドで生まれたさやかにとって、殺人者とはある種…滅多にいない特殊存在であった。

魔物という圧倒的な捕食者がいる為に、殺人事件は少なかった。

決闘での命のやり取りは、あるが…ブルーワールドで殺人事件と言われるのは、見殺しが多かった。

仲間を置いて逃げるや、自分が狙われていたのを、相手にすり替えることなどを指した。

しかし、自らの命も危険だった場合、逃げるのは仕方がないと、最近はブルーワールドでもあまり裁かなくなっていた。

「何？」

屈託のない笑顔で振り向かれた瞬間、さやかは言葉を失った。

数秒待った後、幾多は頭を下げると、再び前を向き歩き出した。

「あいつが！」

高坂は、銃を握り締めた。

「いた！だけど、ブルーワールドに戻った」

高坂の震えは、全身にも及び…感情をセーブできていなかった。

「お、俺も！ブルーワールドに戻るぞ」

高坂は、新たな誓いを立てた。

「部長！」

「ゲッ！さやか」

緑と輝が、２人に駆けよってきた。

なのに、自分を見て足を止めた輝を、空気を変える為、さやかは捕まえ、首を締めた。

「如月先輩だろうが！」

そんな中、緑は高坂のいつもと違う雰囲気を感じで、近寄るのを止めた。

「部長…」

小刻みに震える高坂の後ろ姿を、見つめることしかできなかった。

第57話　依頼

「…で」

情報倶楽部の部室に戻った高坂は、コーヒーカップ片手に、パソコンの前に座る舞に訊いた。

「どうやったら、戻れるんだ?」

「知りません」

舞は、即答した。

「来たんだから、戻れるだろ?」

もっともそうな高坂の言い方に、舞は敢えて聞こえるようにため息をついた後に、答えた。

「どうやって来たのかもわからないんですよ。無理です」

「しかし、この部室の下に、こちらとあちらを結ぶ糸があるんだろ?どうにか、それを辿って」

なおも食い下がろうとする高坂に、舞はパソコンの手を止めて、背伸びした。

「う〜ん」

しばし、筋を伸ばした後、再びパソコンのキーボードに手を伸ばし

た後、検索文字を打った。

馬鹿を丸め込む方法。

その文字を見て、高坂は舞の肩に手を置き、握り締めた。

「こっちは、真剣に訊いてるんだが？」

「痛い！」

舞は顔をしかめた後、キーボードから指を離し、横目で高坂を睨んだ。

「う」

思わず手を離し、たじろぐ高坂を数秒睨んだ後、舞はパソコンに視線を戻し、顔をしかめながら、言葉を吐き出した。

「糸といっても、真っ直ぐ繋がっているのか、ジグザグなのかもわかりません！それにおそらく…糸といっても概念みたいなもの。辿って帰るのは、難しいと思います！」

言い方は丁寧だが、どこか怒気がこもった口調に、高坂は何も言えなくなり、そうかとだけ呟くと、肩を落とし部室から出ていこうとした。

そんな高坂の雰囲気に気付き、舞はキーボードを叩くと、椅子から立ち上がった。

「あくまでも…それは！我々人間の場合です。神レベルならば、自

ら時空間の扉を開き、道を作ることができるかもしれません」

舞の説明に、高坂は小声で、そう…とだけこたえた。

何故ならば、神レベルなど、高坂のような普通の人間には、ジャンプして大気圏を越えることができるようになるくらい…無理なことだった。

「邪魔したな」

部室を出ようとした高坂の後頭部に、マウスパットが飛んできた。

「最後まで話を聞け！」

舞のあまりの剣幕に、高坂は思わず背を伸ばした。

「あ、はい！」

「あんたは、女神の力を手にいれたんだろうが！その銃の力なら、道を作れるかもしれない」

舞は、直立不動の高坂の手をじっと見つめた。

「…で？」

こちらの世界でも、新聞部の部長になったさやかが、新聞片手に中央に陣取るソファに座りながら、くつろいでいた。

「だから、こいつの力を使って、ブルーワールドに戻ろうとしたんだが…まったく反応がないんだ。何回引き金を弾いてもな」

前に座る高坂は、２人の間にあるテーブルに、装飾銃を置いた。

「ふ～ん」

さやかは、銃の横に新聞を置くと、装飾銃を手に取り…１３の銃口を高坂に向け、引き金を弾いた。

「え！」

驚いた高坂は、ソファから逃げようとしたが…銃口からは何も発射しなかった。

「成る程…そのようね」

一応何度も引き金を弾くさやかに、戦慄を覚えた高坂は額から冷や汗を流した。

「お、お前！殺す気か！」

高坂のもっともな言葉に、さやかはテーブルに銃を置いた後にこたえた。

「女神の武器っていうから、女だったら、撃てるかもと」

しらっと言い切るさやかに、高坂はこれ以上文句を言うのをやめると、ソファに座り直した。

「女神の力が使えないとなると…」

あてにしていたことがなくなり、高坂はため息をつき、肩を落とした。

「女神の力か…」

さやかはそう言うと、もう一度装飾銃を手に取り、しげしげと眺めながら、高坂を見ずに話し出した。

「そう言えば、知ってる？この学園で、最近まことしやかに話されている話を？」

「うん？」

高坂は、顔を上げた。

さやか、は銃自体を観察しながら、話を続けた。

「一部の人だけが入れる喫茶店が、あるらしいの」

「喫茶店？」

「そうよ。噂になって、数人の生徒が言ったらしいんだけど…ほとんどが店を見つけられずに…帰ってきた」

「幽霊屋敷か何かか？」

高坂は、眉を寄せた。

「幽霊屋敷ではないらしいわ。普通の喫茶店みたい。但し、その店に入った者は…二度と戻れないそうよ」

「ちょっと待て！」

高坂は、ソファーから身を乗り出すと、話を止めた。

「おかしいだろうが！入ったら、二度と戻れないだろ？どうして、そんな話が広がるんだ」

「話は最後まで、聞くように」

さやかは、装飾銃のグリップを握り締めながら、笑いかけた。

「は、はい」

無意識に姿勢を正す高坂。

「帰ってきた人がいるのよ。喫茶店には入らずにね」

「いるのか！」

「うん。その子は、目が虚ろで少し様子がおかしい生徒を発見して、心配になって後をつけたら、喫茶店に入るところを見たの。だから、その子は、気分が悪くなって、休む為にお店に入ったんだろうと思って、その場は帰ったの。だけど、その生徒はそれから、一週間帰ってきていない」

「え」

「それを知ったその子は、学校の担任に報告したわ。そして、両親と担任が、その喫茶店に向かったけど…見つけることはできなかった。しかし、その子には見えるのよ。その喫茶店がね」

「成る程」

高坂は、頷いた。

「今回の事件は…この世界の謎に迫るかもしれないわ」

「しかし、それとその銃が何か、関係があるのか?」

「さあ〜」

さやかは肩をすくめ、

「でも、女の勘よ」

その後に、高坂にウインクすると、再び銃口を向け、引き金を弾いた。

「やっぱり出ないわ」

「あのなあ〜」

残念そうなさやかを、高坂は睨んだ。

「まったく！」

新聞部の部室を出た高坂は、正門を目指し歩いていた。

「依頼者は、その目撃者。依頼内容は、茶店で消えた生徒の確保。よろしくね。学園情報倶楽部様」

さやかを通して勝手に、依頼を受けられたが、仕方なく…高坂は待ち合わせ場所に向かっていた。

正門の方から、高坂に向かって、頭を下げる女子生徒を発見した。

慌てて、小走りに走った高坂は、顔を上げた生徒を見て、少し驚いた。

「君は！」

なぜならば、そこに立っていたのは、生徒会の一員にして、この世界の情報倶楽部部長の妹である…香坂姫百合であったからだ。

「依頼ならば、君のお姉さんがいるのではないのかい？」

意外そうな顔をした高坂を見て、姫百合は再び頭を下げると、ため息をつき、

「姉ならば、あたしに言われる前に、部員と2人で向かいました」
頭を抱えた。
「部員と2人？」
高坂は、少し引っ掛かったが、あまり深く考えるのをやめた。
「と、とにかく！まずは、その喫茶店のある場所へ」
「わかりました」
高坂は頷くと、学生服の内ポケットにあるカードを起動させた。
これで、高坂の位置は、部室で確認できることになった。
「いきましょう」
「はい」
2人は、姫百合を先頭にして歩き出した。
その頃、喫茶店の前に到着した者が、2人いた。
香坂真琴と、輝であった。

「ここか！」

喫茶店を見上げる香坂と違って、輝はキョロキョロしていた。

「どこに？」

目の前に来ても、輝には見えなかった。

「いくぞ！」

香坂に無理矢理腕を捕まれると、輝は引きずられるように、店に向かって連れていかれた。

しかし、輝には店は見えなかった。

ただの更地に見えた。

だけど、香坂が扉を開けた瞬間、輝は目を疑った。

小さいが、喫茶店の店内にいたからだ。

「いらっしゃいませ」

カウンターの中で、深々と頭を下げるマスターを見て、輝の中にいる犬神がざわめいた。

（ま、まさか…）

まじまじとマスターを見上げたながら、輝は周囲の気配を探った。

（人間じゃない）

それがわかった瞬間、輝は後悔し、すぐに出ることを選択した。

「部長」

自分から手を離し、カウンターに向かう香坂の気を、目覚めた犬神が感じ、頭の中で警告として信号を出した。

（ま、まさか！あの人も）

輝は絶句した。

第５８話　扉

「いらっしゃいませ。どうぞ、カウンターの方へ」

笑顔のマスターに導かれるようへ向かう香坂真琴とは違い、輝は恐る恐る足を進めた。本当は、奥に行きたくなかった。犬神が、輝に告げていたからだ。

奥にいる者が、危険だと。

「初めてのお客様ですね」

カウンターの向こうから、マスターは笑顔を向けながら、カウンターに座った真琴に説明しょうとした。

「当店に、お飲み物は、一つしかございません。但し…」

「あたしは、大月学園情報倶楽部部長！香坂真琴！」

マスターの説明の途中、真琴は自らの名刺をカウンターに置くと、顎を突きだし、下からマスターを軽く睨んだ。

「いかがなさいましたか？」

マスターは説明を止め、初めてのお客の反応に合わそうとした。

「惚けるじゃないよ！この茶店に入っていた！あたしの学園の生徒達が、行方不明になっているんだよ！」

真琴は立ち上がると、下から突き上げるように、マスターを睨んだ。

「ほう～。それは、知りませんでしたね」

「惚けるなと言っている！」

真琴は、カウンターを両手で叩いた。

その音が、カウンターに響いた瞬間、扉に近いテーブル席に座っていたお客達が席を立った。

その動きを見て、マスターはカウンターから目配せをして、座るように促した。

それから目線を外して微笑むと、マスターはカップを取りだし、カウンターの上に置き…ゆっくりとコーヒーを注ぎ始めた。

「申し訳ございませんが、そのような事態を把握しておりませんでした。当店をご利用頂いたお客様が、行方不明になられたとは」

マスターは入れ終わったカップを、真琴の前に差し出した。

「だとそれば、早急に警察に連絡をしなければいけません」

「そ、そうだ」

すぐに非を認めたマスターの言葉が予想外だった為に、真琴は思わず勢いが止まってしまった。

それに、カップの中から漂う…何とも言えない良い匂いが、まくし

立てようとした真琴を落ち着かせた。

「警察に連絡する前に…コーヒーを一口」

マスターは優しく微笑みながら、真琴にコーヒーを促した。

数秒だが、静寂の時が流れる。

真琴は息を飲むと、自分にとってたまらない匂いが漂うコーヒーカップ内を見下ろし、

「そ、そうだな。頂こう！」

震える手で、カップを掴もうとした。

なぜ…手が震えているのか…真琴にはわからなかった。

いや…震えていることすら、わからなかったのかもしれない。

今度は唾を飲み込み、カップを掴もうとした時――輝が後ろから、真琴の腕を掴んだ。

「帰りましょう。部長」

「え」

腕をぎゅっと掴まれた感覚が、呆けたような状態になっていた真琴の感覚を元に戻した。

「ここに、彼女達はいません。他をあたりましょう」

輝は、後ろから感じる殺気よりも、カウンターで微笑むマスターの穏やかさに、恐怖を覚えた。

しかし、怯んではいけなかった。

「…」

何も言わないマスターと、静かに目があった。

（く！）

輝は心の中で、顔をしかめた。

しかし、目を逸らす訳にはいかなかった。

だから、終わらす方法を取った。

「御馳走様でした」

カウンターに、コーヒー代を置くと、輝は扉に向かう為に、マスターから視線を外した。

「お代は、結構ですが…」

マスターがそう言ったが、もう輝の耳には届いていなかった。その場から、立ち去ることが優先であった。

「もったいないぞ！」

コーヒーに手を伸ばそうとする真琴を強引に引っ張って、輝は扉に向かって歩き出す。

「失礼しました！」

手を伸ばし、何とか開けると、外に出た。

「犬上！」

真琴が文句を言っているが、構っている場合ではない。

人混みに入るまで、振り返ることなく、輝は真琴を引っ張って歩き続けた。

「どういうつもりだ！部長の言うことをきかずに！」

周りに人が増えてくると、やっと足を止めた輝の手を、真琴は振り払った。

「捜査の邪魔になる！き、貴様は！首だ！」

少しヒステリックに叫びと、真琴はびしっと輝を指差した。

「とっとと帰れ！」

そして、再び喫茶店に戻ろうとする真琴の肩を、輝は掴んだ。

「首で結構！だけど！」

輝は、真琴の肩をぎゅっと掴み、

「学園の生徒を危険にさらす訳には、いきません。学園情報倶楽部のメンバーとして！」

真琴の目を見つめた。

だけど、真琴は輝を見てはいなかった。

「あれは、行方不明の女子！」

「え？」

目を輝かせ、輝の肩越しに、人混みの中から、行方不明になった生徒を見つけた真琴は、輝の手を振り払うと、猛ダッシュで走り出した。

「ち、ちょっと待って～」

輝が振り向いた時には、真琴の姿は、人混みに消えていた。

「な、何！？」

真琴を見失ったのは、ほんの一瞬である。それなのに、見えなくなるなんてあり得なかった。

「くそ！」

輝は唇を噛み締めると、真琴が走り去ったであろう方向に向かって、走り出した。

「フッ」

マスターは口元を歪めると、カウンターに置かれた小銭を数えだした。

「マスター！」

先程から殺気立っていた男が、マスターに駆け寄った。

「いいのですよ。お金を頂きましたし」

小銭を数え終わると、マスターはまたフッと笑った。

「まあ～。全然、足りませんが」

「…」

そんな2人の会話を、奥のテーブル席で寛いでいる男が黙ってきいていた。

「ここです」

姫百合に案内されて、やっと喫茶店にたどり着いた高坂は、内心は平常を装っていたが…心の中では、絶句していた。

（ここに、喫茶店があるだと！？）

何故ならば、高坂の目には、何もない更地しか映っていなかったからだ。

しかし、実世界とは違い、ブルーワールドで過ごした経験が、高坂にいろんなことを考えさせていた。

（異空間の扉でもあるか？いや、魔法が使えないこの世界で…。いや、神隠しとかあったか！）

ある日突然、人がいなくなることを神隠しと言った。

高坂は、そんな迷信を信じてはいなかった。

おそらく、誰に拐われたか、もしくは、異空間に引きずり込まれたが、正解だと思っていた。

「姉が、中にいるかもしれません」

恐る恐る中を覗こうとする姫百合を、高坂は止めた。

「慎重にいきましょう」

「あっ！はい」

自分の行動が軽率だったことに気付き、姫百合は直立不動になった。

だが、高坂は別のことを考えていた。

（最初の問題は、どうして…彼女に見えて、俺には見えないかだ。何か違いがあるのか？）

高坂は迂闊には、近付けなかった。

「相変わらず、固いな」

悩んでいる高坂の目に、何もない空間から、見えない扉を開けるように、男が飛び出してきた。

「！？」

驚く高坂と違い、姫百合は普通だった。勿論、彼女の目には、普通に店から出てきたとしか見えなかった。

だから、少し気になったのは、出ていた人が、高坂の知り合いのようだったからだ。

「流！」

冷静に判断しょうとしていた高坂は、幾多流の登場により、感情を露にした。

「お、お前は！ブルーワールドに戻ったんじゃないのか！」

「そうさ。戻ったけど、また来ただけさ。ここのコーヒーが飲みたくてね。普通の人間にも美味しいからさ」

「普通の人間！？」

高坂は、眉を寄せた。

「じゃあね～真！」

幾多は、どこからか…炎でできたナイフを取り出し、それを空間に刺し込んだ。

「できれば～ブルーワールドで会いたいな。向こうなら、いろんなことができるからさ」

そして、そのナイフをドアノブのようにして引くと、空間が開き、ブルーワールドへの道が開いた。

「な！」

あまりの驚きに、高坂は幾多に近づくタイミングを失ってしまった。

扉はすぐに閉まり、何事もなかったかのように、普通の景色に戻った。

「い、今のは！」

幾多がいなくなった瞬間を見て、呆気にとられた姫百合よりも、高坂は自分の不甲斐なさよりも、ブルーワールドへの帰り方を目にして、希望に心を躍らせた。

（普通の人間でもいける）

高坂は左腕の制服を捲ると、手首に巻き付いたブレスレットに目をやった。

「いけるな」

右手をブレスレットに添えると、形が変わり、装飾銃に変化した。

そして、その銃のグリップを握り締めた瞬間、高坂は目を疑った。

更地に見えた場所に、喫茶店が立っていたからだ。

「なるほど」

高坂は頷いた。

第59話　闇の光り

「今日は、お客様が多い」

扉につけた鈴の鳴る音を聞き、マスターは口許を緩めた。

「それも…」

先程来た輝達と同じ学生服を着た高坂達を見て、マスターは彼らの目的を悟った。

「…」

高坂は、姫百合を背中で庇いながら、カウンターへと進んで行った。

店が見えなかったこととといい、ここが普通の店でないことはわかっていた。

しかし、問題は…行方不明になった生徒達の安否であった。

「いらっしゃいませ」

進んで、自らの前に座った高坂達に頭を下げてから、笑顔を向けた。

「当店は、コーヒーしかございません。ですが～」

初めてのお客にする説明を聞きながら、高坂は黙って前を見つめていた。マスターと目が合わないように。

そして、説明が終わり、出てきたコーヒーカップを、輝のように断ることなく、高坂は手をつけた。

「旨い」

その感想を聞いて、姫百合もカップを手に取った。

「美味しい！」

思わず見開いた目で、姫百合はカップ内を見た後、高坂とマスターを交互に見た。

旨いと口にした高坂であるが、ゆっくりとカップをカウンターに置くと、マスターと目を合わせ、微笑んだ。

「この味でしたら…コーヒーだけでやっていけますね」

「ありがとうございます」

マスターは、頭を下げた。

「…」

高坂は無言になると、コーヒーを飲み干した。

元々、一杯目は少ない。

二杯目こそが、この店の真髄であった。

「あっ」

すぐに空にしてしまったことに、驚きの声を上げた姫百合の前にも、二杯目のコーヒーが置かれた。

そして、その二杯目を口にした時、言葉にならない程の感動を、2人は覚えることになった。

たった一口で、コーヒーの虜になった姫百合と違い、高坂は感動しながらも、冷静なもう1人の自分を心に残していた。

コーヒーの味と、今回の依頼は別問題である。

しかし、この普通の人間には見えない店での驚くべき味は、反比例しているようで、表裏一体していると感じた。

それは、カウンターの後ろ…天井近くに貼られた…古ぼけた写真を目にして、確信に変わった。

「ご馳走様です」

高坂は、カウンターから立ち上がった。

「おいくらですか？」

財布を取り出すと、マスターを見上げた。

「え？ぶ、部長さん？」

店を出ようとする高坂に、姫百合はカップを持ちながら、困惑した。

「お代は別に…」

拒否しょうとするマスターに、高坂は言った。

「私は、普通のお客として、またここに来たい。ですので、コーヒー代を払う義務があります」

真っ直ぐ見つめる高坂の目に、マスターはゆっくりと頭を下げた。

「かしこまりました。本日のお会計は」

結局、マスターは一杯目の料金は取らなかった。

会計を済まし、店を出ていく高坂の後ろに、仕方なく続く姫百合。

そんな姫百合に、マスターは声をかけた。

「いつでも来て下さい。お待ち申しております」

「あっ！はい」

足を止めた姫百合は振り向き、頭を下げた。

「特に…落ち込んだ時には、是非とも」

最後のマスターの言葉を聞き、高坂は扉を開ける途中で、手を止めた。

「わかりました！確かに、ここのコーヒーを飲んだら、元気になり

ます」

姫百合は、笑顔をマスターに向けた。

「…」

高坂は再びゆっくりと、扉を開けた。

そして、姫百合を外に出した後、扉を閉めた。

完全に閉まるまで、頭を下げ続けるマスターを見て、高坂も頭を下げた。

「あのお～」

ドアを閉めた高坂の背中に、姫百合は恐る恐る声をかけた。

「歩きながら、話しましょう」

姫百合の言いたいことはわかっていたので、高坂は促しながら歩き出した。

少し歩いただけで、振り返るともう店は見えなくなっていた。

「部長さん？」

姫百合が振り返ると、彼女の目には店が映った。

高坂はちらっと、姫百合の横顔を見た後、前を向き、話し出した。

「あそこは、単なる憩いの場所ですよ。もしくは…避難所」

「避難所？」

「ええ」

高坂は頷き、

「恐らく、行方不明になった生徒は、ここにすがるように迷い込んだ。無意識だとしても…。そして、真実を知った」

少し目を細めた。

「真実とは何ですか？」

「そ、それは…」

ここで、高坂は口ごもってしまった。

なぜならば、店が見えるということは…。

（彼女は、知っているのか？まだ気付いていないならば…言わない方がいいのではないか？この世界は…）

「教えて下さい！」

「そ、そうですね～」

誤魔化す為の言葉を探っていると、前から輝が走ってきた。

「部長！」

息を切らし、駆け寄ってくる輝を見て、姫百合は驚きの声を上げた。

「あなたは！」

「げっ！妹君！」

なぜか姫百合を見て、顔を赤くする輝。

「お前」

高坂は輝の様子を見て、彼が答える前に訊いた。

「1人なのか？」

「す、すいません！あっちの部長とはぐれまして！」

「はぐれた？」

「はい。何でも、行方不明になった生徒を発見したと！例の店には、いなかったですけど」

輝は息を調えると、振り返り、道を往来する人の流れを見つめ、

「目を離したのは、ほんの数秒なんですが…」

真琴の姿を探した。

「どっちを探した？」

高坂は、人の流れを見つめ、訊いた。

「こう振り返って、消えたので、右に流れる方を」

一回転した輝は、探した方を指差した。

「有無…」

顎に手を当て、考え込む高坂に、姫百合が言った。

「お姉ちゃん、足が速いから。それに、見つけるまで、戻ってきませんよ」

その言葉に、輝は高坂を見た。

「でも、よかったです。見つけたんですよね。さっきの店が、誘拐した訳ではなかったんですね」

少し気にいった店が、犯罪にかかわっていないことに、姫百合は安堵の息を吐いた。

それに、姉のこともあまり、心配していなかった。

事実…真琴は数時間後、自宅に帰ってくることになる。

少し目を虚ろにさせて。

「有無…」

まだ考え込んでいる高坂に、輝と姫百合の会話が止まった。

その時、姫百合の携帯が鳴った。

制服のポケットから、携帯を取り出した姫百合。

「会長！」

かかってきた相手に気付き、慌てて出た。

「はい！」

しばらく話を聞いて、

「すぐに戻ります！」

姫百合は携帯を切った。

そして、2人に頭を下げた。

「生徒会室に、鞄を忘れてまして、今から取りに戻ります！ごめんなさい！先に失礼します！」

すぐに頭を上げると駆け出した姫百合の背中を見送りながら、輝は口を開いた。

「部長…。あの店ですが…」

「わかっている」

高坂は頷き、

「しかし、我々にはどうすることもできない」

姫百合の後ろ姿を見えなくなるまで、見つめた。

「ほっておくのですか？」

輝は、高坂の横顔に目をやった。

「ブルーワールドと、この世界は違う。彼らを悪と言えるか？人間として、今まで育ってきたのに」

高坂の言葉に、輝は肩を落とし、頷いた。

「そうですね」

そして、再び人の流れに視線を移し、

「この世界には、人間しかいないのですからね…。一応ですけど」

無理に笑ってみた。

高坂は大きく深呼吸すると、ゆっくりと歩き出した。

「我々も戻るぞ。部室にな」

「はい」

2人は、左右に流れる人々を突っ切るように、真っ直ぐに歩き出した。

「…」

空間に差し込んだ炎のナイフを抜くと、幾多はブルーワールドに降り立った。

目立たないように、町の外れにある路地裏を出口に選んだ幾多は、静かに歩き出そうとして、足を止めた。

「フン」

鼻を鳴らすと、ビルとビルので間にできた闇を睨んだ。

「君も変わっているね。」

闇の一部が濃くなり、人形を取ると、ヤーンに変わった。

「あのような場所に飲みにいくなんて。まあ～他人の趣味をとやかく言うつもりはないけど」

ヤーンは、肩をすくめた。

「…」

幾多は何もこたえずに、ヤーンの横を通り過ぎた。

ヤーンは大きく手を広げると、大袈裟に嘆く素振りをした後、振り返り、幾多に訊いた。

「考えてくれたかい？新しい防衛軍に入ることを」

「！」

幾多は、足を止めた。

「やつらのように、人間から魔物になるのではなく…新たな進化の為に、君が必要なんだ」

ヤーンは、体を幾多に向けた。

「超能力でもない。人が生み出す最大の力。それが、闇だ」

ヤーンは、手を伸ばした。

すると、体から煙のような闇が立ち上った。

「かっての人が、恐れた闇ではない。我々の心が生んだ闇。その濃さは、闇の女神さえも凌駕する」

「…」

幾多は振り返り、ヤーンを凝視した。

「負の力と言われた闇が、人々を未来に導く！その為には、君の力が必要なのさ。炎の魔神すら、ファンにする君の力がね」

「フン」

幾多は、体をヤーンに向けると、目を細めた。

「何だい？」

ヤーンは、笑顔を向けた。

「あんたの力は、特異なものだ。人間の進化とはいえない」

幾多の言葉を聞いて、ヤーンはせせら笑った。

「アハハハ！おかしなことをいうね！」

しばし笑った後、ヤーンは涙を浮かべた目で話し出した。

「赤星浩一は、この世界の太陽になった。たった一つの！しかし、それは人間の進化とは言えない。彼は、魔神になった。だけど、闇に墜ちることに、人間を捨てる必要はない。君は人を殺して、魔物になったかい？」

ヤーンの言い方に、幾多はゆっくりと接近すると、闇を発生させている腕を掴んだ。

「！」

驚くヤーンに、顔を近付けて、幾多は言った。

「俺は、人間を殺しているじゃない。汚れた人間の心を殺しているんだ」

静かな殺気を放つ幾多の目を見て、ヤーンは震えだした。

「す、素晴らしい！やはり、君は素晴らしい！」

ヤーンは、幾多の目に顔を近付け、

「殺人者の目じゃない！なんて美しい目だ！この目だよ！ほしいのは！」

「チッ」

ヤーンの言葉に、幾多は彼の腕から手を離すと、背を向けて歩き出した。

「素晴らしい。やはり君は、必要だ。人間の常識を変える為に！進化の為に！」

ヤーンはそう叫びながら、闇と同化して消えた。

「フン」

幾多は、路地裏を出て、人混みに消えていった。

第６０話　月

「すいませんでした」

生徒会室に戻った姫百合を、九鬼は優しく出迎えた。

「いいのよ」

九鬼は微笑むと、息を切らしている姫百合に訊いた。

「最初は帰ったのかと思ったんだけど…あなたの鞄があったから…。どこかに行ってたの？」

「あっ…それは」

姫百合は、口を濁した。

行方不明者のことは、九鬼の耳にも入っていると思うが…自分が、噂のもとになっている喫茶店に行ったことはいいたくなかった。

戦い続きの生徒会長に、これ以上の心配事を増やしたくなかったのだ。

「ち、ちょっと…買い物に」

姫百合は引きつった笑いを浮かべると、机の上にある鞄を掴んだ。

「ほ、本当にすいませんでした。ご心配をおかけしまして！し、失礼します」

そして、頭を下げると、そそくさと生徒会室を出て行った。

「…」

九鬼は止めることなく、姫百合の後ろ姿を見送った。

しばらく閉まった扉を見つめていると数十秒後、再び開いた。

「本当に…そうなの？」

九鬼の問いに、生徒会室に入ってきた中島が頷いた。

「ああ」

「そうよ。彼女は…」

中島の後ろから、相原理香子が姿を見せた。

「魔獣因子の持ち主。まだ目覚めかけだけども」

「そう…」

九鬼は、２人に背を向けた。

その悲しげな背中を見て思わず、中島が口を開いた。

「しかし、目覚めて悪い訳じゃない。人以上の力も持てるし…変幻さえしなければ、人間の姿で入られる！」

中島の言葉に、九鬼は深呼吸すると、答えた。

「求めていない力はいらない。それに、得てして力は…人を不幸にする」

九鬼は振り返り、理香子に向かって言葉を続けた。

「月影の力は、月の女神がつくったこの世界の人間を、やつらから守る為のものだった。しかし、やつらが人間から変わるとわかった今！理香子！あんたは、どうする？」

射抜くような九鬼の強い視線に、理香子は彼女の思いを知った。

「真弓…」

しかし、すぐには何も言えなかった。

「確かに、目覚めた者の中には、人に害する者もいた！だから、あたし達は戦った！しかし、これからも、人々の中から生まれるとしたら、あたし達は！」

「心配いらない！」

九鬼の叫びを、理香子は強い断定で遮った。

真っ直ぐに、九鬼の瞳を見つめ、

「人を襲う者がいたら、駆除しょう。しかし、そのまま生きる者には、何もしない！」

最後の語尾を強めた。

「理香子…」

「人が、すべてとはいわない。あたしは、この世界に秩序があれば…今はいい。それに…」

自分で頷いた後、理香子は中島の方に顔を向け、

「あたしは、月の女神の生まれ変わりであるけども…この学園の生徒。今は、後者を大事にしたい」

微笑んだ。

「…」

中島に向ける理香子の笑顔に、九鬼はこれ以上何も言えなくなった。

数秒間、目を瞑った後、九鬼は頷いた。

「わかったわ」

「真弓」

「これで安心して、ブルーワールドにいけるわ」

九鬼は、決心を固めた。

「え」

驚きの声を上げる中島。

「真弓…ブルーワールドにいくって…」

九鬼の言葉に、理香子の全身が震えだした。

「冗談でしょ？」

「冗談ではないよ」

九鬼が微笑むと、全身を黒いオーラが包んだ。

「この魔力は！」

理香子は絶句した。

「く！」

九鬼から感じるプレッシャーに、中島の全身の毛が逆立った。

「この体は、闇の女神デスペラードが復活の為に用意したもの。彼女が、この体に宿ったら…闇の女神は完全体になれただろう！しかし！」

九鬼は拳を握り締め、

「今！この中にある魂は、あたしのもの！闇の体の中で研ぎ澄まそう！闇を切り裂く刃を！」

自らの体の調子を確認した。

「真弓！待って！」

理香子は手を伸ばしたが、闇のオーラが弾き返した。

「戦いは終わってはいない！数万人の犠牲とともに、舞台が変わっただけ」

九鬼は理香子に目をやると、最後の願いを告げた。

「姫百合や月影のみんなを頼む」

「真弓！」

「いつもごめんね。あなたには、迷惑をかけてばかりで…」

それが、九鬼の最後の言葉になった。

目を瞑ると、力を闇の女神の力を使い、九鬼はブルーワールドへの扉を開いた。

「生徒会長！」

「真弓！」

（そう…何も恐れることはない）

九鬼はゆっくりと、目を開いた。

（闇は恐れるものではない。常に、身の回りにあるもの。恐れるな。ただ…受け入れろ！）

目を開いた瞬間、九鬼はブルーワールドの大月学園にいた。

ほとんど変わらないように思えた。

しかし、匂いが違った。

（魔物…いや、血の匂い！？）

はっとして、振り返った九鬼の前に、軍服を着た男が立っていた。

「ずっと不在だと聞いていたが…やはり、帰ってきたか！」

男は、折り畳んだ鞭を持っていた。それを両手で伸ばすと、にやりと笑った。

「あなたは！？」

殺気を感じて、思わず構えた九鬼を見て、男はさらに嬉しそうに笑った。

「誇張ではなかったようだな。結城大佐を倒し、月の軍団を作る計画を邪魔したのが、たった1人の女子高生と聞いた時には！もっとましな嘘をつけと思ったものだがな！」

いきなり、男は攻撃を仕掛けてきた。

男の手から放たれた鞭は、音速を越えた。

「チッ」

九鬼は、後方に飛んだ。

「無駄だ！」

鞭は九鬼がいた場所で跳ねると、四つに分裂した。

「な！」

九鬼は空中で回転し、窓側の柱を蹴ると、飛ぶ方向を変えた。

四本になった鞭は、壁や窓を突き破った。

「は！」

さらに、九鬼は天井を蹴ると、男に向かって、かかと落としの体勢に入る。

「フン」

男は笑うと突然、鞭を離した。

「な」

男の手から離れた鞭のグリップが割け、口のようになった。

「キイイイッ！」

奇声を発し、九鬼を威嚇する鞭のグリップに気を取られた瞬間、壁や窓を突き破っていた四本の先っぽが、九鬼の背中を狙う。

「アハハハ！」

男は、大声を上げた。

「チッ」

避けることのできない空中。

しかし、舌打ちした九鬼の右足から、甲高い金属音がすると、生徒会室の空気が震えた。

「な、何！」

次の瞬間、九鬼の周りにあったものは、塵と化した。

「わ、私のキメラが！」

鞭に擬態していたキメラも、塵になった。

頭を抱える男の目に、右足のニーソックスが破れ、剥き出しになったグレイの金属が飛び込んできた。

「な、何だ！あれは！」

男は慌ててカードを取りだすと、右足の金属をサーチした。

「シ、シークレットアイテムだと!?ま、ま、まさか!オ、オウパーツ」

確認しながら、男は無意識に後退っていた。

「あり得ん!や、やつの武器は、月の鎧だけではなかったのか!」

生徒会室の真ん中に降り立った九鬼は、背筋を伸ばすと、男を睨んだ。

「ヒイイ!」

小さな悲鳴を上げると、男は生徒会室を出て、廊下を走り出した。

「…」

九鬼は別に追いかけることなく、穴が空いた窓に向かった。

そして、グラウンドを目にした時、九鬼は絶句した。

何故ならば、いつも整備されて綺麗なグラウンドに、数十台の軍用車両が止まっていたからだ。

「どうなっている!」

九鬼は窓を開けると、そこから飛び降りた。

2、3階くらいならば、生身で着地できた。

グラウンドに向かって立っている時計台を見上げると、軍旗がはためいていた。

「理事長！」

九鬼ははっとすると、東館にある理事長室に向かって、走り出した。

「どこ行かれますの？」

西館の入り口から入ろうとした九鬼の前に、中から出てきた桂美和子が立ちふさがった。

「ここは、関係者以外立ち入り禁止となっております」

「美和子さん！」

軍服を着た美和子の姿に、九鬼は眉を寄せた。

「ここは、防衛軍の駐屯地。まだ防衛軍に入っていないあなたが、勝手に出入りしてはいけない場所」

美和子が出てきた入口から、続々と軍人が出てきた。

九鬼の後ろからも、人が集まってきた。

「他の生徒は、どうなった！」

九鬼は、前に立つ美和子に訊いた。

「元々は、勇者育成の為の学校。即戦力になりそうな者は、振り分けられたわ」

「何！」

九鬼の叫びに、周りを囲む軍人達は、魔力銃を一斉に向けた。

「わからない人ね」

美和子はため息をつくと、九鬼の目を見て、首を横に振った。

そして、空を見上げた。

「でしたら、これでわかります」

美和子は顎で、九鬼を促した。

「うん？」

周囲に気を配りながら、空を見上げた九鬼は…言葉を失った。

「！！」

そこには、黒い月が浮かんでいた。

「ダークムーン。かつて、闇の女神復活の際にも見られたらしいけど、今回は違う！」

美和子は、月から視線を九鬼に向けた。

一瞬だが、瞳孔が開いているように見えた。

「これは、我が防衛軍の新兵器！月の光をもとにして、すべての人に降り注ぎ！力を与える！アハハハ！」

美和子は背中を反りながら、笑いだした。

「富国強兵！人類すべてが、兵士になり！魔物達から、この世界のすべての覇権を奪う！」

「それが、我々のやり方だ」

四国にある防衛軍の本部に入ったヤーンは、笑った。

「クッ！」

九鬼は顔をしかめると、構えた。

「乙女ブラック！九鬼真弓よ…。あんたは、いい闇の尖兵になるよ」

美和子がにやりと笑うと、周りを囲む軍人が、照準を九鬼に合わせた。

オウパーツを発動させて、塵にできるが…相手は人間である。

九鬼は、スカートのポケットからあるものを取り出した。

そして、叫んだ。

「装着！」

第６１話　月影の名の下に

九鬼が突きだした乙女ケースから、目映い光が放たれた。

そして、眼鏡がかかると、乙女ブラックへと変身させた。

いや、違う。

「フン！」

黒のボディが光輝くシルバーのボディに変わった。そのまま、ジャンプすると、腰を捻った。

「ルナティックキック！」

乙女シルバーの蹴りが、軍人達を蹴散らそうとした瞬間突然、空中で苦しみ出した。

「馬鹿目！」

美和子は笑った。

ジャンプした場所から、数センチ前に着地した乙女シルバーは、膝を地面につけて身を捩り出した。

「月影達が使用する力は、ムーンエナジー！つまり、月の光により、闇を消す力！しかし、今は！」

美和子の頭上にいる月は、黒く染まっていた。

「闇に侵食され、光など放たぬわ！」

美和子は嬉しそうに笑うと、銃口を乙女シルバーの額に向けた。

「よお～く考えたら、月影の力さえ奪ったら、あなたはいらないのよね。あたしが、乙女ブラックになればいいのよ」

美和子は、引き金に指をかけた。

地面に片手をつき、苦しむ乙女シルバーの色が再び、黒く染まっていく。

いや、黒よりも黒い…闇の色に。

「いいきみ」

美和子は唇の端を吊り上げると、一歩乙女シルバーに近付き、銃口を突き付けると、躊躇うことなく引き金を弾いた。

実世界と違い、魔力が込められた弾は、乙女ブラックの額に至近距離で、炸裂したはずだった。

いや、実際に炸裂したのだが…乙女シルバーに当たると同時に、消滅した。

「え？」

驚く美和子の目の前で、ゆっくりと立ち上がる乙女シルバー。

「ば、馬鹿な…」

美和子は慌てて、後ろに下がると、取り囲む軍人達に命じた。

「撃て！」

四方八方から一斉に放たれた銃弾は、すべて…乙女シルバーの表面で消滅した。

「や、闇に…侵されたのか？」

銃声が止み、静かに佇む乙女シルバーを見た時、誰もが闇に侵食されたと思っていた。

「と、捕らえよ！拘束し、学者達に分析させろ！」

美和子の言葉に、軍人達は魔力を込めたロープを取りだすと、乙女シルバーに向けて投げた。

しかし、ロープは…乙女シルバーを拘束することはできなかった。

「な！」

今度は消滅させられたのではなく、すべて…手の甲で弾かれた。

「…例え、闇に包まれようが…あたしを覆うことはできない！」

九鬼は顔を上げると、美和子を睨んだ。

「や、闇に落ちていない！」

たじろぐ美和子と違い、軍人達は今度は、剣を抜いた。
剣先を真っ直ぐ、乙女シルバーに向け、特攻の構えに入った。
その様子を冷静に見つめながら、九鬼は言った。
「あたしは、闇の中で生まれ…育った」
「う！」
「く！」
「な！」
九鬼が話している間に、すべての軍人の手から剣が落ちた。
次の瞬間、軍人達の手の甲が、真っ赤に腫れ上がっていた。
「み、見えなかった」
目の前まで来た九鬼の動きを、美和子…いや、その場にいたものは、誰も目視できなかった。
「それに、月影は！月の光によってできた影！闇になどに、侵されることはない！」
九鬼はジャンプし、蹴りの体勢に入る。
「ヒィ」
軽く悲鳴を上げた美和子の目に、空中で舞う九鬼の姿が映る。

「ほお～」

金縛りにあったように動けない美和子の耳許で、感心したような声が聞こえた。

「闇を纏う戦士か！」

次の瞬間、美和子は首根っこを掴まれると、後ろにほり投げられた。

「！？」

空中で、右足を突きだした九鬼の目に、金髪の男がにやりと笑いながら、見上げている姿が映った。

（誰だ？）

考える暇もなく、左右から九鬼目掛けてジャンプしてきたものがいた。

金髪の男の前にも、何かが立った。

「チッ」

九鬼は舌打ちすると、蹴りを止めて、真下に落下することにした。

闇に侵食された体が輝き、スピードを増すと、地面に着地した。

その真上では、飛びかかってきたもの同士が、ぶつかっていた。

九鬼は上を見ることなく、土を蹴った。

「速い！」

その動きを見て、金髪の男は目を見開いた。

「どけ！」

美和子に用がある九鬼は、２人を蹴散らそうとしたが、金髪の前にいたものが盾となって、立ち塞がった。

（土偶！？）

九鬼は、そのものを真っ直ぐ見た瞬間、縄文時代の土偶が頭に浮かんだ。

「クッ！」

九鬼の渾身の拳が、土偶に突き刺さった。

次の瞬間、土偶は砕け散った。

「！？」

九鬼はあまりの感触のなさに、砕けた土偶を見て、絶句した。

中身がなかったのだ。

「驚くことはない」

金髪の男は、砕けて破片となった土偶の前に出た。

そして、九鬼を見据えると、こう言った。

「こいつらは、元々中身がない」

「！？」

九鬼の目の前で砕けた破片は、地面に落ちることなく、空中で回り出すと、金髪の男の中に付着し出した。

「こいつは、鎧さ。生きたね」

金髪の男の体を、黄緑の鎧が包んだ。

「な！」

九鬼は構えた。

「こいつの名は、ディオネ。自然の鎧だ。そして、君の後ろにいるのが、水の鎧タイタン。火の鎧エンケラドゥス」

空中で、激突した青と赤の鎧を、背中で感じながら、九鬼は金髪の男を睨んだ。

「生きた鎧か」

「そうだ」

金髪の男は、顔の表情を引き締めると、軍人達が落とした剣を手に

取った。

「君の鎧…そして、オウパーツと違い、こいつは人を守る為につくられた鎧」

そして、剣先を九鬼に向けた。

「月影。報告は聞いている。しかし、その通りかな？」

「確かめてみろ」

九鬼は、右手を突きだし、指で手招きました。

その瞬間を狙っていたように、後ろから襲いかかろうとするタイタンとエンケラドゥスに、金髪の男がいた。

「邪魔するな」

その言葉を聞いた鎧の動きが、止まる。

「フッ」

九鬼は笑った。

「我が名は、レーン。防衛軍の大佐だ」

レーンの言葉に、九鬼は構え直す。

「月影！九鬼真弓！」

「フッ」

互いに笑うと、攻撃体勢に入った。

「参る！」
「参る！」

2人は同時に、動いた。

第６２話　甘さ

「フン！」

レーンの突きからの横凪の斬撃を、ジャンプで交わした九鬼は、右足を空中で突きだした。

「ルナティックキック零式！」

九鬼の蹴りが、レーンの左肩にヒットした。

「やはりな」

蹴りを喰らったレーンは、フッと笑うと、手首を返し、剣の柄を九鬼の脇腹に叩き込んだ。

「！？」

大したダメージを受けなかったが、蹴りの体勢でバランスを崩した九鬼は、真横に倒れると、回転し、地面に着地した。

「チッ」

舌打ちすると、蹴りが決まった肩口を確認し、再び構え直した。

「噂通りの甘ちゃんだな」

レーンは剣を下ろすと、顎で九鬼の向こうに控えているタイタンとエンケラドゥスに命じた。

動きを止めていた二体は一斉に、九鬼の後ろから攻撃を仕掛けて来た。

「は！」

九鬼は振り向き様の回し蹴りを、二体に叩き込んだ。

右足がうねりを上げると、オウパーツの特性により、砂になる二体。

「人が中にいれば…オウパーツの力を使わないか」

レーンは倒れている兵士から、もう一本剣を拾うと、左右に腕を広げた。

「！？」

レーンに向かって構えようとした九鬼は、砂を化した二体の鎧の残骸が、いきなり舞い上がり…一瞬で元に戻ったことに驚いた。

「オウパーツは、近付く者をすべて原子レベルで破壊し、すべてを砂に返す…神の鎧。ならば！」

レーンはゆっくりと、左右の腕を動かすと、胸元で剣先をクロスさせた。

「元から砂になることを前提して、作ればいい。こいつらは、こうして生まれた。オウパーツに対抗する為にな！」

レーンはクロスしていた剣先を、同じタイミングで、高速で引いた。

剣先に火花が走ると、レーンの姿が消えた。

「チッ！」

九鬼は身を捩ると、オウパーツがついた右足を虚空に叩きつけた。

その攻撃を、左手にある剣で受け止めたレーン。一瞬で、間合いをつめていた。

「やるな！」

レーンは笑うと、九鬼に体を密着させた。

「しかし！密着した体勢から、蹴りは出せまいて！」

それから、右手の剣を回転させると、背中から突きさそうとした。

「終わりだ！」

しかし、背中に突き刺したはずの剣先は、自らの鎧に当たっていた。

「な！」

九鬼の体が、消えていたのだ。

「月影…」

上から声がした為に、顔を上げたレーンの目に、落下している九鬼

の踵が映った。

「キック！」

避ける暇はなかった。

レーンの体に突き刺さった蹴りは、鎧を破壊した。

そして、蹴りの威力で、後方にぶっ飛びレーン。

「ば、馬鹿な…」

地面を背中で削りながら、レーンは唖然としていた。

「よ、鎧がなければ…死んでいた」

「…」

九鬼は眼鏡を外すと、レーンに背を向けて歩き出そうとした。

「待て」

胸元を押さえながら、レーンは立ち上がると、九鬼の背中を睨んだ。

「変身を解くとは…余裕だな」

よろけながらも、レーンが歩き出すと、再び鎧が身を包んだ。

「何度でも、鎧は復活する！」

「うわああ！」

「ぎゃあ！」

倒れていた2人の兵士から、悲鳴が上がった。

すると、白目を剥いたまま立ち上がり…その身を鎧が包んだ。

「もう一度！粉々にするがいい！しかしな！」

レーンは震える手で掴んだ剣を、九鬼に向けた。

「中にいる人間は、復活できない！」

そして、突きの構えで突進してきた。

少し遅れて、二体の鎧も向かってきた。

「く！」

三方からの攻撃に、九鬼は顔をしかめた。

再び月影になる余裕がなかった。

それほど、レーン達は速かった。

ギリギリのタイミングで、かわすしかない。

九鬼は、覚悟を決めた。

「まったく～相変わらず、甘ちゃんね」

レーン達よりも速い影が、九鬼の間合いに一瞬で入ってきた。

「え」

驚く九鬼に、飛び込んできた影は言った。

「後ろ！」

「！？」

反射的に、九鬼は後ろから向かってくる二体の足下に、蹴りを入れた。

バランスを崩した二体に、間髪を入れずに投げ技に入る九鬼。

空気投げとも言われる技に、二体は背中から地面に激突した。

「お、お前は！」

後ろから聞こえたレーンの驚きの声に、九鬼は慌てて振り返った。

その瞬間、九鬼の目に飛び込んできたのは、懐かしい背中であった。

「ど、どうして…お前がいる！」

レーンは叫んだ。

九鬼に突き刺すはずだった剣先を、指で摘まんで止めたのは、女子高生であった。

しかし、ただの女子高生ではなかった。

レーンは、押し込もうとしてもびくともしない剣に、歯軋りした。

「あ、あなたは！」

九鬼は、その女子高生の正体がわかった。

「カレン」

「カレン・アートウッド！」

2人が同時に、名前を呼んだ。

伝説のティアナ・アートウッドの姪にして、ジャスティン・ゲイの愛弟子。

その強さは、人類の中でも最強の部類に入り…魔神とも互角と言われていた。

「真弓…」

カレンは振り返ることなく、九鬼に話しかけた。

「あんたに頼みがある」

「え」

驚く九鬼。

「お、お前達！」

レーンは動かない剣を離すと、どこからか再び新たな剣を取り出し、カレンに襲いかかった。

「私を無視して、話すな！」

「じゃあ…」

カレンは指先に挟んだ剣を捨てると、一本前に踏み込んだ。

その瞬間、踏み込んだ足に力を込めると、手の甲を鎧の表面に叩き込んだ。

「黙っていろ」

「な…」

叩き込んだ手を中心にして、渦のような波紋が広がると、レーンはその場で崩れ落ちた。

「別に…中身だけにダメージを与える方法はあるさ。オウパーツのように触れないなら、無理だかな」

カレンは倒れたレーンに一瞥をくれると、振り向いた。

「！」

その目に起き上がった二体の鎧の姿が、映った。

「成る程…。しかし」

九鬼は飛んだ。

「こいつらは、違うな？」

「ああ」

頷いたカレンの膝が、タイタンの鎧に突き刺さり、九鬼の蹴りがエンケラドゥスに突き刺さった。

また粉々になった鎧の中から、軍人達が出てくると、前のめりに倒れた。

「真弓…」

戦いの余韻に浸る暇もなく、カレンが話し出した。

「お前が、帰ってくるのを待っていた。この世界は、富国強兵の名のもとに、すべての民間人が、軍人になるべく徴兵された」

「え」

「いや、すべてではないな」

カレンは振り返ると、倒れているレーンに目をやり、

「ブルーアイズ（青い目）以外の人間は、兵士として戦うことを義務付けられた」

唇を噛み締めた。

「…」

九鬼は無言で、目を見開いた。

「やつらの理想郷の為にな！」

カレンは、レーンを睨み付けた後、九鬼に目をやり、

「そんなふざけたことを止めさすには、やつらに捕まっているジャスティン・ゲイを解放しなければいけない。それに！やつらは、カードシステムを乗っ取り…人々のライフラインも握っている」

カレンは歩き出した。

九鬼も続く。

「あたし1人では限界がある。だけど、真弓となら…まだ可能性がある」

カレンは前方を睨みながら、歩き続けた。

「何があったの？もっと詳しく教えてほしい」

「歩きながら、説明する」

2人は、大月学園を後にした。

2人が去った後、倒れていたレーンは平然と立ち上がった。

「まずは、予定通り」

レーンは鎧を外すと、身軽になった。

一応、全身のダメージを確認した後、九鬼達とは反対方向に歩き出した。

「しかし…それでも、どうなるのか…」

三体の鎧は自ら砂になると、レーンの体に巻き付き…数秒後、純白のコートになった。

「!?」

正門に向かって歩いている途中で、岩と岩の間から生えている花を見つけた。

その名も知らぬ花に、レーンは微笑んだ。

「花は…どれも美しい」

「フッ」

それだけ言うと、倒れている兵士を残して、大月学園から消えた。

第６３話　新たな敵

けたたましく鳴り響くサイレン。

さらに、海上に浮かんでいる泡の多さが、広大な海に喧騒をもたらしていた。

「左舷後方より、多数の影を確認！」

「海兵丸！エンジン部分をやられました」

「巡洋艦ワトソン！停止！」

次々に飛び込んでくる現状の悪さに、ブリッジ内にいた艦長は顔をしかめた。

新生防衛軍の巨大空母アッシャーは、突然の襲撃に逃げることを余儀なくされていた。

魔王の軍勢との最終決戦に向けて、艦隊を組んで北極海を横切り、魔界への拠点となるべく進水していたアッシャーは、護衛を失い、実質行き場も失っていた。

空母自体は、戦うものではない。

搭載していた戦闘機も、整備中以外は、迎撃されていた。

「味方の船をおいてはいけない」

ブリッジの真ん中の席に座っていた船長は立ち上がると、言葉を続けた。

「このアッシャーは元々、海上基地として作られた…言わば、要塞！ここに留まり、拠点とする！」

艦長の命令に、アッシャーはゆっくりと止まった。

「艦長！整備中だった戦闘機！終わりました」

前に座るオペレーターの報告に、艦長は即座に訊いた。

「何機だ？」

「五機です！」

「よし！海兵丸とワトソンの応援に向かえ！」

艦長はそう叫びと、数多くの勲章がついた制服を脱ぎ捨てた。

すると、隆々の筋肉に、傷だらけの体が露になった。

「機体を発進後！デッキ上で、魔物達を迎え討つ！」

実世界と違い、飛行甲板は、海の中で戦えない人間達の重要な足場になっていた。

「はい！」

オペレーターの返事を背に、艦長はブリッジから出た。

その間に、五機の戦闘機は発艦し、魔物がいるであろう海中に向けて、爆弾を投下していった。

爆音とともに、空高くまで水柱が上った。

その水柱の先から、蛇に似た魔物が姿を見せた。

「撃て！」

アッシャーから発射された式神ミサイルが、全弾被弾したが、魔物はびくともしなかった。

奇声を発し、そのまま口を広げながら、アッシャーに向かってくる。

「構えろ！」

甲板に上がった艦長は、即座に指示を飛ばした。

「は！」

先に甲板に上がっていた兵士達は、カードによって結界をつくり、飛んでくる水飛沫を防ぐと、各々の武器を手に取った。

「残念」

蛇に似た魔物に気を取られていた兵士達の後ろに突然、無数の魔物が空から飛来し、甲板に着地した。

「！」

驚く兵士達が振り返る前に、魔物達の鋭い爪が、兵士達の背中に突き刺さった。

「お、おのれ！」

その状況を見て、艦長は走り出した。剣が召喚されると、表面に雷鳴をコーティングし、甲板に降りた魔物達を斬り裂いた。

「大丈夫か！」

刺された兵士達に駆け寄る艦長の目に、口を広げた蛇に似た魔物の姿が映る。

さらに、艦長の後ろにも魔物が降下してきた。

「許さん！」

同じように爪を突き刺そうとする魔物の攻撃を、振り返ることなく、剣で受け止めると、そのまま電流を流し込んだ。

「きぃぃ！」

悲鳴を上げて、丸焦げになる魔物。

しかし、その数は多い。

囲まれた艦長の真上を、戦闘機が何もできずに通り過ぎると、ミサイルを蛇に似た魔物に向けて発射した。

着弾したが、蛇に似た魔物にダメージを与えることはできなかった。

しかし、周囲に響く爆発音が、艦長にチャンスを与えた。

腰を落とすと、甲板に膝をつけ、魔物達の足元を狙って、円を描くように剣を振るった。

足を切断され、倒れる魔物を尻目に、新たに甲板に姿を見せた兵士達に叫んだ。

「攻撃を合わせろ！」

蛇に似た魔物に向けて、剣を突き出す艦長に合わせて、兵士達は放出系の魔法に切りかえた。

刀身に宿る魔力が、先に集束し…それを一気に、蛇に似た魔物に向けて、同時に放った。

その攻撃は、口を広げながら接近している蛇に似た魔物に直撃したが、少し身を捩らすだけに終わった。

「何！？」

絶句する艦長達の後ろの海中からも、蛇に似た魔物が浮かび上がってきた。

いや、一匹ではない。

合計、五匹となった。

「ウムム」

艦長は唸り声を上げると、周囲を睨んだ。

「な！」

他の船の守りについていた戦闘機のパイロットも、その様子に絶句した。

「艦長！」

オペレーターから、カードに通信があった。

「心配するな」

艦長はそう言うと、通信を切った。

「ここは落ちんよ」

そして、フッと笑った。

「きぃぃ！」

さらに上空では、飛び回る魔物の数が増え、海中に黒い影も増えていた。

「艦長！」

甲板にいる兵士達が、叫んだ。

「…」

艦長は無言で、目の前の魔物を見上げながら、剣を下ろした。

その行為は、敗けを認めたものではなかった。

「…来た」

にやりと笑った艦長の目に、スライドするように首から真っ二つになる蛇の魔物の様子が映る。

同じような事態は、残りの四匹にも起こった。

血を噴き出しながら、海面に倒れる蛇に似た魔物達が、水飛沫を上げる中…1人の少年が、甲板に着地した。

そして、少年が真っ直ぐに姿勢を正す頃には、他の船を襲っていた魔物達の動きが止まった。

（王だ）

（王だ）

（王だ）

魔物達の思念が、アッシャーに集まる。

（赤の王だ）

その思念からは、戸惑いよりも…圧倒的な恐怖を感じられた。

「やはりな」

艦長は、甲板にどこからか現れた少年を見つめた。

少年の名は、赤星浩一。

防衛軍の切り札であった。

静けさが戻った海上に、戦闘機の音だけが響いていた。

「きえええ！」

しかし、それでも甲板に降りていた魔物達が、恐怖から威嚇を始めた。

赤星浩一は、魔達を見ずに、ただ…甲板に佇んでいた。

その殺気のなさに、下級の魔物達が海中や空中から、赤星浩一の周りに集まってきた。

それでも、赤星浩一が動くことはない。

艦長達を無視して、本能的な恐怖から、赤星浩一だけを攻撃しようとする魔物達。

「どけ！」

その時、海中から水柱が上がり、その中から現れた魔物が、甲板に着地した。

「貴様らでは、相手にもならん」

その魔物は、他と気品が違った。

青く甲冑のように見える…全身を追おう鱗。濃い紺色の髪の毛に、２つの瞳以外に額に開いた小さな目。

海から出てきたばかりだというのに、全く濡れていない髪を風に靡かせながら、その魔物は赤星浩一に近づいていく。

「お初にお目にかかります」

魔物は、赤星浩一のそばまで来ると、頭を下げてから、名を名乗った。

「我が名は、海の騎士団長！アクアメイト！」

「同じく！」

上空にある太陽から、降ってきたように見えた炎の塊が、２つ…甲板に下り立った。

「炎の騎士団長！ライカ！」

「炎の騎士団！業火！」

女の姿をした２人の魔神が、名乗った後、頭を下げた。

「我ら！天空の女神にして、王！アルテミア様によりつくられた新しい騎士団長！」

アクアメイトの言葉にも、赤星浩一は反応しない。

「赤の王と言われる貴方でも」

「我ら騎士団長が集まれば、恐ろしくはないわ」

ライカと業火の言葉を聞いて、俯いたまま、目だけを向ける赤星浩一。

その瞬間、無意識に後退る2人。

「ば、馬鹿な…」

アクアメイトも、目を見開いた。

目からの殺気だけで、凄まじい魔力を感じたからだ。

「…うぐっ」

甲板上で繰り広げられている駆け引きを見て、艦長は唾を飲んだ。

あまりの緊張感に、艦長だけでなく、兵士も…そして、下級魔物達も動けなくなっていた。

動いて、少しでも空気を震わせた瞬間、殺させるような気がしたか

らである。

それは、騎士団長達も同じだった。

赤星浩一以外、異様な緊張感が続く甲板に、静寂を切り裂くように、再び上空から…誰かが下りてきた。

それは、天使の翼と…ブロンドの髪を靡かせた女神。

その姿を見た瞬間、甲板にいた魔物達は一斉に、跪いた。

「ビーナス！光臨！」

その姿は、アルテミアに似ていたが違った。

「ご機嫌よう。お父様」

女神は、赤星浩一にだけに微笑んだ。

第６４話　荒ぶる女神

「まさか、こんなところで、お会いするなんて思いませんでしたわ。お父様」

微笑む女神を見ても、赤星浩一は微動だにしない。

ただ…ゆっくりと目を細めた。

「お父様は、人間の味方と聞いておりますが…だからと言って、見過ごす訳にはいきません！王の娘として」

白い翼をしまうと、女神の姿が変わった。

筋肉が、明らかに増した。

「いきます！」

甲板を蹴るのではなく、圧縮した空気を蹴ると、女神は音速をこえた速さで、拳を突きだした。

空気の壁を破る音がしたと同時に、女神の拳を、赤星浩一が掴んでいた。

「な！」

その動きを見たアクアメイトが、驚きの声を聞いた。

「く！」

至近距離で、破裂音を聞いた艦長達は耳を押さえた。

「流石、お父様」

女神だけは驚きを顔に出さずに、笑って見せた。

「…」

赤星は何も答えず、片手で掴んでいる女神の拳を握り締めると、そのまま上空へとほうり投げた。

「え！」

まるでロケットのように、空気の壁を突き破りながら、一瞬で雲の上まで来た女神は、翼を広げて、勢いを止めた。

「え！え！あ、あり得ない」

ここで初めて、女神は本音を口にした。

流れた冷や汗が、凍りついた。

「め、女神である…あ、あたしが！まるで、雑魚のように！」

今度は怒りを露にし、女神は両手を下に向けた。

「空！雷！牙！」

そして、星の鉄槌の体勢に入った。

その様子を、甲板から見上げた魔神達は、焦りの声を上げた。

「ば、馬鹿な！この海域を破壊なさるおつもりか！」

「騎士団！退避！」

雲が金色に輝き、雷鳴が空を覆っていく。

魔王ライの技であり、この星のすべての雷鳴を集めた一撃であった。

「な、何だ…この魔力は」

空を見上げていた兵士達が、膝から崩れ落ちた。

技の威力からいって、退避することは不可能だった。

「テレポートできるものは、近くの島へ退避しろ！」

指示を飛ばしながらも、艦長はどこか安心していた。

無表情でそばに立つ…赤星浩一が、そばにいたからであった。

「は！」

気合いとともに雲の上から放れた雷撃は、あらゆるものを破壊する

はずだった。

しかし――。

「な！」

上空から撃った女神も、甲板から離脱した魔神達も、凍りついた。

上空に、人差し指を突き上げた赤星浩一の指先で、空雷牙は止まっていた。

それだけではない。

一瞬で吸収されると、甲板上…いや、この海域に静けさが戻った。

「い、今の攻撃を、指先だけで」

甲板からジャンプして、海に潜る寸前のアクアメイトは、今起こったことが信じられなかった。

「こ、これが…赤の王」

空中に浮かぶライカと業火。

その二人に向けて、赤星浩一はただ、指先を向けた。

「ライカ！業火！」

赤星浩一の行動に気付いたアクアメイトが、叫んだ。

しかし、遅い。

空雷牙を圧縮した光線が指先から放れ、ライカの体を貫いた。

「ぐわっ！」

完全に炎化する間もなく、胸に穴が空いたライカを見ることもなく、赤星浩一が指先を横に動かすと、光は横凪ぎの斬撃になった。

そばにいた業火も、斬り裂かれるはずだった。

突然、ライカと業火の間に、水飛沫が上がり、硬化すると壁となった。

光線は、その壁をも簡単に切り裂いたが、コンマ数秒の余裕を、業火に与えた。

一瞬で、テレポートすると、光線の斬撃から逃れることができた。

「ライカ！」

雲の上から、急降下で下りてきた女神が、赤星浩一に襲いかかった為、光線の追撃は魔神達に放たれなかった。

「よくも！ライカを！」

女神の蹴りやパンチを、赤星浩一はほとんど動くことなく、上半身の動きだけでかわす。

「そ、そんなはずが！」

スピードを増した女神の攻撃は、人の目ではとらえることもできない。

それなのに、当たらない。

「くそ！」

女神の攻撃のスピードが、落ちた。

それは、力を込めた一撃を放つ為であったが、一瞬の隙を見逃す赤星浩一ではなかった。

前に突きだすように、ノーモーションで真っ直ぐに出された蹴りが、女神の腹に叩き込まれた。

その蹴りは、カウンターのようになり、女神を吹っ飛ばした。

甲板上から、海中へと落ちた女神。

凄まじい水飛沫が上がった。

「やったか…」

あまりの迫力に、赤星浩一から距離を取った艦長が、少し気を抜きかけた瞬間、後ろから、新たな水飛沫が上がった。

「な、なめるな！」

青い髪を靡かせた女神が、水飛沫の中から飛び出して来た。

そして、両手から、氷柱を放つ。

それを、赤星浩一が炎で蒸発させると、今度は女神の髪が、赤色になった。

炎を纏うと、一瞬で間合いをつめ、鞭のように足をしならせ、蹴りを放つ。

赤星浩一は、その蹴りを人差し指で止めた。

「ば、化け物か！」

あらゆる攻撃が通用しない赤星浩一に、思わず女神の本音が出た。

そんな女神の蹴りを受け止めながら、赤星浩一は初めて言葉を呟いた。

「茶番だな…」

虚しそうに顔を伏せたこととは、裏腹に…赤星浩一の魔力が一気に上がっていく。

「！」

膨大な魔力を感じ、女神は目を見開いた。

「させん！」

誰も近付くことができない二人の間合いに、赤星浩一でさえ気付かずに、入ることができたものがいた。

「カイオウ！」

女神が、驚きの声を上げた。

「フン！」

カイオウは、手に持っていた日本刀に似た剣を赤星浩一と女神の間に振るった。

「！」

反射的に、後ろに下がった赤星浩一が、身構えた時には、甲板からカイオウと女神の姿は消えていた。

「…」

気を探ってみると、海中を猛スピードで泳ぐカイオウと女神を発見したが、追いかける気にはならなかった。

ただしばらく、海面の白い波を、赤星浩一は見つめ続けた。

「な、何だ！今の気は！」

アルテミアと融合している俺は、沖縄地区にいた。

赤星浩一と女神達とは、結構離れていたが、それでも力を感じることはできた。

「空雷牙…。この威力は、赤星じゃないな。エミナの攻撃か」

四国の方を見つめながら、海岸線に立つアルテミアは、気を探っていた。

「エミナ？」

その名を、聞いたことがなかった。

しかし、アルテミアはしゅれっと言い放った。

「あたし達の娘だよ」

しばらくの間の後、俺は言った。

「はあ？」

寝耳に水だった。

「昔、言っただろ！い、いろいろあってできたって…」

アルテミアは、口を尖らせた。

「いろいろ…あったことがないぞ！」

俺の反論に、アルテミアはキレた。

「いろいろあったら、恥ずかしいわ！！」

その迫力に、俺はこれ以上訊けなくなった。

「エ、エミナは～三人の女神の力を使える、最強の女神」

アルテミアは、胸を張った。

しかし、次の瞬間、そのまま凍りついた。

「な、何だ！今の魔力は！」

「お、俺か…」

そのレベルは、分身である俺にとっても、予想外であった。

「つ、強くなっている！」

別れている間に、本体のレベルが上がっていた。

「あ、赤星！」

アルテミアは、唇を噛み締めた。

今まで、滅多に出したことのない全力の力…いや、恐らくは、これまでにない力を感じ、アルテミアは赤星浩一の本気を知った。

そして、その意味を、分身である俺は、わかっていた。

（本気で、殺せ！そして、人質になっている人々を救って欲しい）

俺は、自分自身の思いに、顔をしかめた。

「どうなることかと、思いましたよ」

艦長は、甲板上で立ち尽くす赤星浩一に近付きながら、言った。

「この艦が破壊されていたら…中にいる人々が亡くなっていましたから」

空母の下には、人質である民衆の一部が、クルーの名目で捕らわれていた。

「まぁ～あなたがいれば、問題はありませんけど」

と言った後、笑う艦長を見ることなく、赤星浩一は足下を見下ろした。

その下にある沢山の守るべき、命を見守るように。

第６５話　悔い

「クッ！」

実世界における隠岐の島にある孤島に、１人の男が逃げ込んでいた。

ジャンスティン・ゲイを代表者にした新生防衛軍で、副司令を勤めていた男であった。

しかし、今はただの逃亡者であった。

事の次第は、職員の命を救うために、実際的には、クーデターであることを隠し、本部のトップの首のすり替えただけという形になっていた。

ただしジャスティン・ゲイの名前は、民衆に絶大なる人気がある為に、幽閉してもなお、象徴として残っていた。

副司令官であったドレイク・スチュワートは失脚し、軍の一兵として残ることを迫られたが、それを拒否した。

その為に、命を狙われたが、部下の安全を考え、敢えて捕まり…処刑される前に、逃亡したのであった。

クーデターはあくまでも、防衛軍本部内だけで終わり、指揮系統はそのまま残ることになった。

末端で働く兵士や科学者の生活が、すぐに変わることはなかった。

だが、ドレイクは見抜いていた。

民衆を人質にして、ジャスティンを幽閉したやつらが、人々の生活を守れるはずがないと。

さらに、新副司令官となったディーン・ノアのバックには、ある人物がいると言われていた。

彼の名は、マーティン・ガレイ。

民族至上主義者として有名であった。

マーティンが思う人間は、ブルーアイズだけである。

（そんな人間が、人々を導ける訳があるまい）

ドレイクは、まず人質にされている人々を助け出した後、ジャスティンを救い出そうとしていた。

いや、人々が助かれば、自力で脱出するであろうと思っていた。

ジャスティン・ゲイは、素手で騎士団長に勝つことのできる唯一の人間であったからだ。

「うん？」

島の岩壁から、本部の方を睨んでいたドレイクの胸ポケットの中から、電子音が鳴った。

カードに情報が、飛び込んできたのである。

自らのカードは、捕まる時に、差し出していたが…一般兵に配布するカードを一枚、くすねていたのであった。

魔力の充電と、通信ができ、軍から世界の情勢が定期的に送られてくるカードは、何十万と一般兵に配られており、ただ部隊に配属されていない新人のカードが一枚、誰かが持っていてもわからなかった。

もし、気付いたとしても、破壊すればいいと、ドレイクは思っていた。

「赤星将軍により、新しい騎士団長を追い払うことに成功」

将軍とは、新しい階級であった。

ドレイクは、ディスプレイに走る文字を読みながら、顔をしかめた。

赤星浩一とは面識がなかったが、彼もまた…ジャスティンと同じ理由で、防衛軍にいることは明白であった。

「…」

ドレイクはカードを胸ポケットにいれると、海に背を向け、ゆっくりと歩き出した。

（ここから、離れよう。まず向かう場所は）

実世界で、イギリスと呼ばれる場所であった。

なぜ、そこにいくのかといえば、マーティンの生まれ故郷であったからだ。

そして、そこに防衛軍本部の移転が、話にでたことがあったからであった。

その時は、いずれは…だったであるが…。

（人質は、どこにいる？）

手掛かりを求めて、ドレイクは旅立つことにした。

去るものがいれば、来るものがいた。

防衛軍本部内にある第十一兵舎。そこは、特殊部隊の為に作られた場所だった。

「来てくれると思ったよ」

灰色の廊下を歩くヤーンは、隣にいる幾多に笑いかけた。

「…」

幾多は、前を向いて歩きながら、口をまったく動かさなかった。

「ここから始まるのさ。人類の新しい未来がね」

ヤーンは幾多の態度を気にすることなく、嬉しそうに話を続けた。

「紹介しょう！」

ある部屋のドアが見えると、ヤーンは足を速めた。幾多を追い越すと、ゆっくりとドアを開いた。

「防衛軍の新特殊部隊…ブラックリストへようこそ！」

「！」

開いたドアから、部屋の前を見た幾多は驚いた。

まったく、電気のついていない真っ暗な部屋に、人の輪郭だけが浮かび上がっていた。

暗闇よりも、黒い存在として。

「暗いね」

そう言って微笑んだヤーンは、部屋の電気をつけた。

その瞬間、幾多はもっと驚いた。

特殊部隊というからには、兵士だと思っていたが、まったく違った。

一般人であった。

ただし…三角座りで、目を充血させ、ぶつぶつと文句を言う者、涎を足らしている者…。男の写真に、釘を打ち込んでいる女など、数１０人がいた。

「彼らは、戦士ではない。僕の闇に力を補充する為に、ここにいるのさ」

ヤーンは両手を広げ、部屋に入った。

すると、ヤーンの指先から伸びた気のような闇の糸が、部屋中の人間に絡みついた。

「嫉妬、妬み…恨みなど、ここにいるもの達は、ある一線を越えた人々だ」

糸が一瞬で、太くなった。

「な、何が進化だ！何が未来だ！」

部屋に入った幾多は、隠し持っていたナイフで、糸を切り裂いた。

「わからないのかい？」

ヤーンは笑うと、幾多の方に顔を向けた。

「多くの人間は糧となり、一部の人間が進化する。人は多過ぎるよ」

「く」

幾多は、顔をしかめた。

「未来とはね。すべての人にないんだよ」

ヤーンは、満面の笑みを浮かべた。

「く！」

幾多はヤーンよりも、2人に無関心な周りの人間にも嫌悪感を覚えていた。

「うう…」

とある牢の中で、全身を繋がれたジャスティン・ゲイが呻いていた。

傷だらけの体であるが、修行だと思えば我慢できた。

しかしー。

「人々を助けなければ…」

ジャスティンは、それだけを考えていた。

しかし、脱獄した瞬間、人質は殺される。

その葛藤だけが、ジャスティンを苦しめていた。

「すまない」

ジャスティンは、頭を垂れた。

そして、いつまで続くかわからない静寂と痛みの中に身を沈めた。

第６６話　追憶

「くそ！」

最強の女神と自負していたエミナは、赤星浩一にまったく敵わなかった事実に、唇を噛み締め、玉座の間の壁を叩いた。

それだけで、城は揺れた。

「…」

そのそばで控えながら、頭を垂れるアクアメイト達…３人の騎士団長。

その様子を見ていたカイオウは、深々と頭を下げると、玉座の間から出た。

「御免」

もう一度エミナの背中に頭を下げてから、回廊を歩き出した。

すると、すぐそばの壁にもたれているギラとサラを発見した。

カイオウと２人は頷き合ったが、会話をすることはなかった。

２人の前を通り過ぎ、カイオウの背中が見えなくなってから、ギラが口を開いた。

「それにしても…エミナ様には困ったものだ。あの気性は、やはり」

「それよりも、赤星浩一のことだ」

サラはギラの言葉を遮ると、目の前の空間を睨み、

「やつは元々人間。と考えると、今回のやつらの行動を理解できる部分もある。しかし！それでもだ」

唇を噛み締めた。

「フン」

サラの言葉を聞いて、ギラは鼻を鳴らした。

そして、珍しく不機嫌な顔を浮かべ答えた。

「あやつは、甘い。大方…人質でもとられているのだろうよ」

「そうなのか？」

サラは、目を見開いた。

「恐らくな」

ギラはそう言うと、壁から離れた。

「下らんな。そのようなことで、縛られることはあるまいて。あやつが、本気になれば、人間どもなど皆殺しにできるだろう？」

サラの疑問に、ギラは肩をすくめた後、廊下を歩き出した。

「俺は、人間のことなど知らん。ただ強いやつには、興味があるがな」

ゆっくりと歩くギラの背中を見つめながら、サラはあることを思い出していた。

向日葵畑の中で、ライの分身であるバイラが、サラに言った言葉を…。

（悲しい程…人を愛している）

その言葉の奥を、サラは読むことができなかった。

なぜならば、サラは魔神で…魔王であるライは、人間の母親から生まれたからだ。

（ライ様…）

人から産まれた者は、こんなにも苦しむのか。

サラはライの死後、赤星浩一の境遇をライと重ねていた。

しかし、同じ太陽のバンパイアであり、人間から産まれたという接点だけで、後は似ていない2人であるが…人のいう種への悲しみは、いっしょであると思っていた。

「ふぅ」

サラは軽く息を吐くと、これ以上考えるのを止めた。

ライは死に、赤星浩一は敵である。

今、自分ができることは…ライの娘であるアルテミアに仕えることだけだ。

（邪魔するならば）

サラは、ギラとは反対方向に歩き出した。

そして、玉座の間に入ると、3人の騎士団長を睨みつけた後、エミナに告げた。

「エミナ様！赤星浩一のことは、私にお任せ下さい。やつとは、何度も戦っております故に」

「駄目だ！あたしが、倒す！例えお父様と言えども、我が軍に逆らうならば！」

エミナは翼を広げると、赤星浩一を探す為に、玉座の間から飛び出そうとした。

「無駄です。今のエミナ様では、勝てません」

「な、何を！」

サラの言葉に、エミナはキレた。

「教えて差し上げましょう」

サラが頭を下げた瞬間、エミナの翼が粉々になった。

「な」

唖然としている間に、サラはエミナの前まで移動していた。

「本気でやってください」

「なめるな！」

エミナの両目が赤く輝き、一気に魔力が上がった。

「エミナ様！」

3人の魔神が、立ち上がった時には、決着はついていた。

床に倒れ、動けなくなったエミナを見下ろしながら、サラは言った。

「鍛えて差し上げます。アルテミア様のように」

「く！」

エミナは倒れながら、悔し涙を流していた。

その様子を見つめながら、3人の魔神達は衝撃から動けなくなっていた。

魔力は圧倒的に、エミナが上だった。

しかし、結果は一瞬で、惨敗。

その事実を目にした魔神達は、強さとは何かを己に問うことになった。

「あ、あたしは…」

ふらつきながらも、エミナは立ち上がった。

「最強の女神だ！」

すると、髪の毛の色が赤に変わった。

「無駄です」

サラは、炎の女神になったエミナを見つめた。

「Ａ　Ｂｌｏｗ　Ｏｆ　Ｇｏｄｄｅｓｓ！」

玉座の間で、女神の一撃を放つ体勢に入るエミナ。

「遅い」

しかし、女神の一撃が放たれることはなかった。

サラの拳が、エミナの鳩尾に突き刺さっていた。

「う」

エミナは膝から崩れ落ち、気を失った。

「…」

しばらく倒れたエミナを見下ろしてから、サラは目線を3人の魔神に向けた。

「お前達も鍛えてやる」

サラの気迫に、3人の魔神は無意識に構えていた。

「ははははは！」

部屋の中にいる人々の闇を吸い上げながら笑うヤーンを見て、幾多は殺すべき相手と本能が判断した。

しかし、理性がストップをかけた。

（まだだ）

そう自分に言い聞かせると、幾多はヤーンに背を向けた。

「うん？」

部屋から出ていく幾多の後ろ姿を見て、ヤーンは首を傾げた。

「――まあ、いい」

頷くと、ヤーンは軍服の胸元に手を入れ、あるものを取り出した。
光り輝く球体。
それは、美しさと反比例して、悲しみと恨みで溢れていた。
「数万人の命の塊。そこに、闇を注ぎ込めば…」
ヤーンは、にやりと笑った。
球体に触れている部分から、黒くよどんでいく。
「もっと闇も！人間の魂も必要だ」
ヤーンは、球体を握り締めた。
「この球体が育ち、破裂した時こそ！人類が避けて来た！魔物との最終決戦が始まる！そして、それが終わった後！」
ヤーンは、にやりと笑った。
「今とは違う歴史を！人類は、歩むことになる」
球体が完全に、黒と混ざると、ヤーンは満足げに頷き、自らの胸元に球体を押し込んだ。

第67話　誘致

「恐らく…」

海をぐるっと北上して、足摺岬から上陸したアルテミアは、すぐさま…俺へと変わった。

赤星浩一の分身である俺だが、見た目は違った。

実世界で名乗ったように、綾瀬太陽というでいこうと決めていた。

岬に立つ灯台を尻目に、俺は…防衛軍本部を目指すことにした。

「ふう～」

息を吐いてから、俺は全身の体を抜き、ほんの少し…魔力を発動させた。

さすがは、ブルーワールドである。実世界とは違い、空間の崩壊を気にすることはない。

「赤星」

アルテミアのたしなめる声がした。

崩壊はしないが、強力な魔力は、防衛軍や魔神達に気づかれる可能性があったからである。

「わかっている」

俺は、ブラックカードを取り出すと、すぐにその場からテレポートした。

そして、防衛軍本部まで一瞬で移動した俺は、建物の造りを見て、顔をしかめた。

何故ならば、原発施設のように見たからである。

（人がいるようには、見えないな）

俺はカードを取りだし、四国における本部の位置関係を確認した俺は、目を丸くした。

（実世界の高知空港辺りか？）

ブルーワールドと実世界は、リンクしていることといえ、実際は大きく違う。

テレポートや、個人での移動手段が多いブルーワールドには、空港はない。

戦闘機は存在するが、民間人を乗せる旅客機はない。

基本的に、ドラゴンなどの魔物が飛び回っているからである。

その為、民間人が移動する時は、大量のポイントを消費し、テレポートアウト後のトラブル心配のあるテレポートよりも、車や防衛軍が確保した海路を船で行くことが多かった。

空間認知能力があれば、個人でも安全にテレポートができるが、そこまでの能力がある人間は少なかった。

民間人は使えないが、各地域にある防衛軍の施設内を繋げたテレポート専用の空間があった。そこを使えば、世界中を行き来できるが、数十人しかテレポートできないことから、優秀な戦士や司令官クラスしか使用を許されてはいなかった。

（魔力を使うことなく、カードシステムだけに頼るか…）

この世界に来たばかりのことを思い出し、懐かしくなっていた。

それだけではない。

この辺りの風景が、思い出の景色と似ていたからである。

（地形はいっしょか）

俺は、ゆっくりと歩き出した。

実世界の高知県には、親戚がいたのだ。

だから、何度か遊びに来たことがあった。

いなかのように思われるが、空港辺りから高知市内は、開けていた。

想像するよりも緑が少ない。

（うん？）

周囲への見晴らしがいいから、俺は誰もいないことを確認していたはずだった。

なのに、真後ろから、何かが飛んで来たのだ。

空気の震えで、軌道を読んだ俺は、軽く横に飛んで、攻撃をよけた。

（針？）

俺がいた空間を切り裂いて、地面に突き刺さったものを見て、眉を寄せた俺が、地面に着地する数秒。

そのコンマ零秒の間、俺の周りに、４人の黒装束の人間がテレポートしてきたのだ。

姿を見せたと同時に、４本の刃が、俺に襲いかかってきた。

「は！」

気合いとともに放たれた斬撃は、俺の体を斬り裂いたはずであった。

しかし、４本の刀は、互いにぶつかりあっていた。

「ば、馬鹿な…」

一番年上だと思う中年の男が唖然と一瞬した後、唇を噛み締めた。

「テレポート斬りを、かわすなど！」

交差する刃が、男の怒りで震えていた。

「人間か！」

再び４人の姿が消えた。

テレポートしたのだ。

「は！」

俺のそばを移動する度に、剣を振るう４人。

（！？）

その攻撃をかわしながら、俺は絶句していた。

「フォースアタックを仕掛けるぞ！」

中年の男の言葉で、俺の前に縦で並ぶ４人。

「は！」

一番前になった大柄な男が、突きの体勢で向かってきた。

横幅がある為に、後ろの三人が見えない。

「ちっ」

俺が突きを避けると、男の後ろにいた細長い体をした男が、死角から横凪の斬撃で、目を狙ってきた。

咄嗟に、後ろにジャンプした俺に、２人を踏み台にして空中から、上段の構えで襲いかかってくる中年の男。

「な」

その攻撃をかわそうと、顔を上げた俺は、中年の男が笑っていることに気付いた。

（もう一人は！？）

男達の後ろには、いない。

「貰った！」

俺が、前に気をとらえる間に、真後ろにテレポートした女の居合い抜きが、背中を襲った。

「あのなあ～」

俺は、頭をかいた。

「馬鹿な」

中年の男は、空中で目を見開いた。

女の攻撃は当たらず、攻撃目標が目の前から消えたからである。

「テレポートを使えるのが、お前らだけと思うなよ」

４人の俺が、４人の剣士達の横にした。

そして、次々に拳を叩き込むと、４人はその場で崩れ落ちた。

「やれやれ」

ため息が出た。

あまりのスピードの為、残像が残ったのだ。

本当に、気を失っていることを確認すると、再び俺は本部に向かって歩き出した。

（それにしても…似ていた）

４人の顔は、実世界にいる親戚達にそっくりだったのであった。

「何を遊んでいた？」

ピアスから、溜め息混じりのアルテミアの声がした。

「普通の人間を、殺すのは…」

と言いかけて、俺は振り返ると、倒れている４人を見た。

（やつらは、容赦なく殺そうとした）

一般人に見える俺に、警告を発することなく、命を狙う。

（今の状況がわかるな）

俺はフッと笑うと、歩く速度を速めた。

「侵入者が、警戒地区を突破しました！」

本部内の司令室内で、オペレーターの言葉を聞いたヤーンは、にやりと笑った。

「彼らを倒したんだね。興味深い」

一番中央の椅子に座り、ヤーンは髪を人差し指で巻きながら、隣に立つ幾多を見た。

「…」

幾多は、口を閉ざしていた。

ヤーンは軽く肩をすくめてから、オペレーターに告げた。

「彼を通して上げて！試してみたくなったよ」

ヤーンは口許を緩め、

「特別かどうかね」

目の前の巨大モニターが写し出された…接近してくる俺を見つめた。

第６８話　光球

予想していたよりも、あっさりと俺は、本部内に入ることができた。

（人がつくる建物は、どこか似ているな）

ブルーワルードに来てから、困惑する程の変わった建造物を見たことがない。

それに、凝った建造物もなかった。

基本的には質素で、シンプル。

それは、この世界での人間の地位を示しているように思えた。

外壁を潜り抜けると、円形の建物まで百メートルは離れていた。

（うん？）

円形の建物の扉が、ゆっくりと開いていく。

その瞬間、扉までの地面に、黒い靄のようなものが、煙のように立ち上るのが、見えた。

恐らく、普通の人間には見えないであろう。

俺の脳裏に、妹…綾子との戦いがよみがえった。

（悪霊…自縛霊！？）

そんなことを思いだしていると、扉の中から靄の塊が出てきた。

「な」

思わず口から、声が漏れた。

黒い靄の塊は、両手を広げた。

「君も特別な人間かい？」

黒い靄は、人の形に変わった。

しかし、体から立ち上る黒い煙のようなものは、消えなかった。

（取り憑かれている！？）

それが、俺の印象だった。

「怖がることはないよ。真生防衛軍は、君のような人間をつねに募集している」

黒い靄の正体は、ヤーンであった。

「チッ」

俺は舌打ちすると、走り出した。

（まだ間に合う！）

どこからか、回転する2つの物体が飛んで来た。
それを掴むと、十字にクロスさせた。
（シャイニングソードで、斬り裂けば！）
俺が剣を振り上げた瞬間、耳元で声がした。
（無駄だよ）
（な！）
その声は、アルテミアではなかった。
「赤星！」
今度は、アルテミアの声がした。
「え」
音速をこえた俺の動きを、ヤーンは見切ることができなかった。
視界から消えたと思った瞬間、全身に激痛が走った。
「ば、馬鹿な」
シャイニングソードは、悪霊だけを斬ることができるはずだった。
なのに…ヤーンの体から、鮮血が噴き出していた。

「な、何が起こったあああ！あ」

ヤーンは絶叫しながら、崩れ落ち、自らの手でから噴き出す血を止めようとした。

「わ、私は新しい人類！特別な人類！」

「く、くそ！」

俺は、ヤーンの傷を治す為に、治癒魔法を発動しょうと手を伸ばし、走り出した。

「え」

その目の前で、ヤーンは絶句していた。

血は止まることはなかったが、別のものに変わっていた。

黒い煙に。

「そ、そんなは、ずは…」

ヤーンの体自体も、煙に分解され、消えていく。

すると、その中から、光る球体が飛び出してきた。

球体は、地上数メートルのところで止まると回転し、ヤーンだった煙を吸収し、黒に変色した。

しかし、回転を重ねる毎に黒は薄れていき…やがて、光に変わると、

今度は白に変わった。

白は皺をつくり、物体のようなボリュームが出来き、大きくなっていく。

そして、羽毛で包まれたような巨大な玉になると、キャベツの皮をめくるように、外に広がっていった。

「あ、あれは！」

今度は、俺が絶句した。

皮は、二枚の翼に変わり、その中から全裸の男が、姿を見せた。

「て、天使！」

アルテミアの忌々しそうな声がした。

「アルテミア？」

「赤星！攻撃しろ！今なら！」

アルテミアが叫んだ。

「うん！」

姿こそ神々しいが、俺は天使から邪悪なものを感じていた。

邪悪というよりも、純粋な悪。

「フン！」

気合いを入れた横凪の斬撃は、天使を斬り裂いたはずだった。

「無駄だよ」

生まればかりの天使は、俺に向かって微笑んだ。

「光は、光を斬れない」

「な！」

シャイニングソードは、天使の体に触れると、物凄い力で跳ね返され、２つの物体に戻った。

「く」

俺は跳ね返された勢いを利用して、天使から離れた。

「天使だと！？どうして、こんなところに！」

俺からするアルテミアの声に、天使は驚くことなく答えた。

「救いの為さ。我々が現れるのは、人間が救いを求めた時さ」

天使は笑い、

「苦しみ、痛み、妬み…恨み。それらが限界を越えた時、人間は神を求める」

天を仰いだ。

「数万人の祈りが、届いた時…神は降臨する」

「神だと!?」

俺は、チェンジ・ザ・ハートを掴むと、バスターモードに変えた。

「そう!」

天使は一回転すると、

「愚かで卑しく、弱い人間の魂が、救いを求めた時、我々は降臨します。人間を救う為に!」

深々と頭を下げた。

「赤星!騙されるな!」

アルテミアの声に、天使は一応キョロキョロして見せた後、

「その声は、天空の女神!あの忌々しい雷帝と!あの女の娘!!」

眉を寄せた。

「!?」

天使からいきなり、殺気のようなものを感じ、俺は引き金に手をかけた。

しかし、天使は気にせずに、自らの親指を噛み締めた。

「我々神の降臨を邪魔する為に、人間達を滅ぼそうした雷帝！そして、事実を知り、天空の女神を産んだあの女！」

天使の翼が開いた。

「雷帝だけでは、我らに勝てぬと思い！光と闇の子を産んだ！あの女！」

そして、空中に浮かび上がった。

「何の話だ？」

俺は、銃口を上に向けた。

「しかし、雷帝は死んだ！天空の女神一人で、我々の邪魔はできない！」

天使は空中で、両手を広げると、円形の建物内から、黒い煙が発生し、天使の方へ集まっていく。

「赤星！撃て！」

アルテミアの叫びに、俺は引き金を弾いた。

「な、何！？」

雷鳴と炎を混ぜた光が、天使を直撃した。

「あたしは、1人ではない！もう1人いるんだよ」

アルテミアは、嬉しそうに叫んだ。

「チェックメイト」

白い髭の男の前で椅子に座り、チェスの駒を動かしたディーンは、フッと笑った。

「終わりですよ。カトリーク卿」

そう話しかけても、白髪の男は答えない。

なぜならば、死んでいるからだ。

「弟が死にました。予定通り、たくさんの命を向こうから、持って帰ってきてくれて」

ディーンは立ち上がった。

「最近は昔のように、一気に人が死ぬことがなかったですから…。この世界ではね」

笑ったディーンの背中にも、二枚の翼が生えていた。

「我々の使命をやっと果たせます。この世界を無にするという神の

願いを」

そう言うと、白髪の男に黙祷を捧げた。

「赤星！もう一発！」

アルテミアが命じたが、俺は銃口を下ろした。

「消えた」

天使は、バスターモードの直撃を受けたが、その時の光に紛れて、テレポートしていた。

「間に合ったか」

ブラックリストと言われた親衛隊がいた部屋中に、硝煙が立ち込めていた。

幾多は、銃をしまうと、部屋から出た。

そして、廊下中に転がる職員達と軍人達の死体を見た。

建物の前で、天使が生まれた瞬間、一部の人間が狂いだしたのだ。

それを目撃した幾多は、ブラックリスト達がいる部屋を目指した。

何故か…部屋の中にいる者達を、殺さないといけないと思ったからだ。

（ヤーンが吸収した黒い気…。暴れ出したやつの体からも、発生しているように見えた）

幾多は空になった銃を捨て、廊下で死んでいる軍人の手にある銃を奪った。

（外傷はない）

相討ちではなかった。狂った人間には、傷がない。

しかし、死んでいた。

（生き残りは、いるはずだ。だけど）

幾多はいくつか銃を拾い、自分のカードにポイントを移動させると、本部から出ることにした。

（長居は無用だ）

「やはりな…」

幾多以外に、脱出者はいた。

ジャスティン・ゲイである。

彼はすぐに、異変に気づくと、自力で牢から出てた。

そして、本部内の窓から、綾瀬太陽と天使を発見した。

そして、太陽の背中を見ただけで、彼の正体に気付くと、本部内を走り回り、生存者を探した。

しかし、見つけることができなかった為に、すぐにテレポートしたのだ。

ブラックリストの部屋は、特殊な空間になっていた為に、ジャスティンは見つけることができなかった。

テレポート後、ジャスティンが向かったのは、魔界と世界を分ける巨大な結界。

その側にある…遺跡だった。

「やはり…これは」

ジャスティンは、天まで覆う結界を見上げた。

「魔物の侵入を防いでいるのではなく…人間を中にいれないようにしているのか」

そう言うと、下唇を噛み締めた。

第69話　神々との戦い

憂鬱な顔をしながら、夜の甲板に立つ赤星浩一の耳に、微かな歌声が聞こえてきた。

「レダ…」

赤星浩一は、呟くように名を口にすると、静かに目を閉じた。

「天使達が目覚めただと!?」

魔界の最深部にある城で、ギラは驚きの声を上げた。

「あの波動は、間違いない」

アルテミア不在の玉座の間で、カイオウは顔をしかめた。

「しかし!ここ数百年は、天使の降臨は聞いたことがない」

ギラの隣に立つサラが、眉を寄せた。

「天使が降臨する為には、人の穢れが必要。それも、同族殺しという汚名が…。その為、天使は実体化しにくかったはず」

カイオウは、玉座の間から外に目をやった。

人が魔物に襲われ、命の落とすことが多い…この世界では、人間を殺すことは、最大の罪としていた。

弱い人間は、団結し、数で勝負するしかない。

それなのに、人を殺した者を…ブルーワールドでは、咎人と忌み嫌った。

勿論、妬み、嫉妬はあるが、殺すことはない。

集団で襲われて、生きる為に他者を犠牲にして逃げることはあっても、決して人間同士では殺し合わない。

それが、本能の壊れた…実世界の人間と違うところであった。

魔物に殺され、喰われたとしても…食物連鎖の頂点にいないこの世界の人間には、仕方がないことであった。

魔物と人間の争いで、天使が現れることはない。

人間が人間を殺した時に、天使は清浄化する為に降臨する。

救う為ではない。

清浄化する為である。

そして、彼らの清浄化とは、無である。

だからこそ、人間から発生した天使と、魔物達は常に激突した。

地球上をリセットしたい天使にとって、魔物達はもっとも邪魔な存在であった。

歴代の魔王達は、天使達の戦いを経験することで、魔物よりも強力な魔神を生み出した。

さらに、女神をつくったのである。

人間だけを相手にするならば、魔神が数人いれば、ことは足りたであろう。

ならば、その天使の媒介である人間を、歴代の魔王達はなぜ絶滅させなかったのであろうか。

その理由は、魔物達にとっても、人間が糧になっていたからである。

魔王ライは、人間もどきなる代用をつくり、人を滅ぼそうとしたが、それは…できなかった。

一方、人間側も馬鹿ではなかった。

救いの為の神の降臨が、人間を滅ぼすことに気付いた権利者達は、人を殺すことを最大の罪とし、天使の発生を防ぐことにした。

魔神達を神レベルと呼ぶことで、神という言葉に畏怖を与えた。

そして、人神なるものをつくり、信仰をそちらに向けたりもした。

しかし、天使は再び降臨した。

世界を無にする為に。

「レクイエムか…」

僕の言葉に、風に乗るメロディが笑った。

「そう」

突然、瞼の向こうに眩しい光を感じて、僕はゆっくりと目を開けた。

甲板から広がる海面の上に、八枚の翼を広げ、佇む…天使がいた。

「レダ」

僕は瞼を開けると、光に目を細めた。

「赤星浩一…いや、赤の王よ。すべての魔物を倒しなさい。それが、人間の為になるのよ」

光輝く後光を背にして、天使は微笑んだ。

「く！」

僕は、両拳を握り締めた。

すると逆に、天使が目を瞑ると、再び歌い出した。

鎮魂歌を。

その歌声に、導かれるように、空母の周囲の海面から、無数の天使達が姿を見せた。

まるで、光のイリュージョンのように明るくなる海。

「く、くそ…」

僕は、言葉を吐き出した。

赤星浩一が、防衛軍に入ったのは、人間を人質にとられているからではなかった。

いや、とられてはいるだろう。

防衛軍ではなく、天使に。

しかし、その事実を知る者は少ない。

「レダ…。君は…」

天使の群れの中で、歌い続けるレダだけを、僕はじっと見つめた。

「――――あたしは、堕天使だった」

僕の視線に気付き、レダは歌うことをやめた。

「しかし、あなたに出会い…歌うことを覚えた。そして、歌い続けることで、あたしは思い出した！自分自身のことを！」

世界を救う為に、歌っていたレダは…どうして、歌うのか…理由を知った。

自分が恐怖と不安を感じるのは…自分の使命が、人間を清浄化する為であったとわかったからだ。

「き、君は！」

炎の翼を広げ、飛び立とうとする僕の周りに、天使達が海面から甲板へと一瞬で移動した。

「チッ」

戦闘体勢に入ろうとすると、レダが海面から、僕の真後ろにテレポートしてきた。

「心配することはないわ。もし、すべての人間が死に絶えたとしても、あなたは残る」

レダは後ろから手を伸ばし、僕の首筋に触れた。

「何なら…あたしも残ってもいい。２人で、無になった世界から、

新しい世界をつくりましょう」

「ふざけるな！」

僕は振り返りざま、レダの手を振り払った。

「無になどさせない！」

僕の睨む横顔を見て、レダは再び翼を広げた。

「無駄よ。世界は無となり、次につくられる世界は…優しさと音楽に包まれた世界になるわ」

「今の世界も！優しさと音楽に溢れている」

「考えの違いね」

レダは笑った。

そして突然、その場で崩れ落ちた。

「朝か…」

俺は、状況を知った。

周囲にいた天使達は、地平線から顔を出した太陽と融合するように、消えた。

太陽を背にして、俺は崩れ落ちたレダを見た。

「堕天使か」

甲板に横になるレダに、翼はない。

普通の人間に変わったレダを、僕は担ぐと、甲板から消えた。

空母内にある居住空間に、テレポートする為に。

第７０話　兄弟

「兄様が、死んだか…」

大月学園の理事長室で椅子に座りながら、密かに送り込んだ密偵の報告を聞くと、レーンはカードの通信を切った。

念のため、自分のカードを使ってはいなかった。

「レーン様」

「フッ」

軽く笑うと、レーンはそばに立つ女に、指先で摘まんだカードを返した。

それから、椅子を回し、後ろにある窓に目をやった。

しばし無言になるレーンの横顔を、女は見つめていた。

「雪菜」

突然のレーンの声に、女はびっくと身を震わせた後、姿勢を正した。

「はい」

そして、凛とした声で返事をした。

「…」

また数秒、黙った後、レーンは口を開いた。

「俺は…ヤーン兄様が好きだったよ。向こうは、そんなに好いてはいなかっただろうけども…」

悲しげに、再び笑うレーンに、雪菜は慌てて言葉をかけた。

「そ、そんなことはありません。ヤーン様もきっと！」

「いいんだよ。雪菜」

レーンは、椅子から立ち上がると、雪菜の肩に手を置き、微笑んだ。

「レーン様…」

「すべては、俺のせいだ。兄の結末も…君達の運命も」

レーンは顔をふせ、雪菜の肩を握り締めた。

しかし、その手は小刻みに震えていた。

「レーン様」

雪菜は、そんなレーンの腕を掴むと、レーンの目を覗き込んで真っ直ぐに見つめ、

「あなたが悪くはないのです。だから、罪を認めないでください。でないと…」

すぐに顔を背けた。

その瞬間、雪菜の背中から翼が飛び出してきた。

「わ、わたしは！」

雪菜に翼が生えると同時に、三体の土偶に似た鎧が、レーンのもとに集まってくる。

「俺は…罪を認めるよ。だけど」

レーンが顔を上げた瞬間、雪菜の背中に生えた翼が斬りとられた。

「やつらの糧になるつもりはない」

レーンの目に、殺気が宿る。

「それに、君を失うこともできない」

そう言うと、レーンの目から殺気が消え、寂しさに染まった。

「レーン様！？」

その瞳の色を見られないかのように、レーンは雪菜を抱き締めた。

「これは、俺の罪だ！だけど…」

レーンはさらに、抱き締めた。

「失いたくない」

「レーン様」

雪菜は、レーンの腕の中で、目を閉じた。

「雪菜」

雪菜の名は、口にしたが、もう1人の名は口にしなかった。

（レダ…）

その名だけは、雪菜の前では出せなかった。

「ご苦労だったね」

兵士からの報告書を受け取ったディーンは、直ぐ様…目を閉じた。

「しかし…ヤーン様亡き後…計画は」

兵士はため息とともに、悔しそうに顔をしかめた。

ディーンはゆっくりと目を開けると、微笑を浮かべ、

「計画に問題は、ない。最終調整まで来ていたからな。ヤーンがいなくても、計画は遂行できる」

兵士を見つめた。

「そ、そうでありますか！」

ディーンの言葉に、兵士は顔を上げると、笑顔になった。

「心配することはないよ」

「は！」

敬礼し出ていく兵士を、笑顔で見送ったディーンは、すぐに眉を潜めた。

「まったく…面白い兄弟だね。一番上の兄は、天使。真ん中は、闇を抱えた人間。そして、最後の1人は…天使を抱いた咎人…ククク…」

嬉しそうな含み笑いが、背中からした。

ディーンは振り返ることなく、虚空を睨みながら、笑い主の名を呼んだ。

「悪趣味だな。ジャスティス」

「そうかな？」

いつのまにか、ディーンの前に、太陽と交戦した天使が立っていた。

「単純に、面白い！だから、興味を持っただけなのにさ」

へらへら笑うジャスティスを見て、ディーンは椅子から立ち上がった。

そして、ジャスティスを見ることなく、机の向こうから、扉の方に歩き出した。

「？」

ジャスティスは首を傾げ、自分を追い越したディーンの背中を見た。

「…」

ディーンは、扉の上にある絵を見上げた。

そこには、天使と悪魔の戦いが描かれていた。

「向こうの世界の絵画だね」

ジャスティスも絵を見た。

そして、にやりと笑った。

「終末を描いているらしいが、興味深いよ。なぜかって？なぜだが、わかるだろ？」

「…」

「この絵に、人間はいない！最後の戦いは、天使と悪魔でつけられる！人間は、いらないのさ」

楽しそうなジャスティスと違い、ディーンの顔に表情はない。
そんなディーンを見て、ジャスティスは手を叩いた。
「そうだったね！君は、僕達とは違ったんだよね。あはははは！」
馬鹿笑いした後、ジャスティスはディーンに近付き、耳打ちをした。
「君は…もと悪魔側の存在だったね」
その言葉に、ディーンは鼻を少し鳴らした。
「フン…」
「その為、君は我々と違い、人間の赤子に憑依し、そのまま腹の中から生まれることが可能！故に…我々天使の尖兵として働き、仲間を増やす…はずだが？」
ここで初めて、ジャスティスの目付きが変わった。
それを察したのか…ディーンは口を開いた。
「魔王ライがいた為に、容易には動けなかった…。彼が一時期、動けなかった時に…闇の女神の動きに合わせて、最初の天使を召喚させ、計画を遂行するはずだった…。しかし！」
ここで、ディーンの殺気が増した。
「天使達は、使命を忘れてしまった」

逆に、ジャスティスは笑っていた。

「ああ…。彼女達は、人に興味を持ってしまった」

ディーンは、唇を噛み締めた。

「興味とは、ニュアンスが違いますね」

ジャスティスは再び、ディーンの耳元に口を近付けた。

そして――。

「愛してしまった」

笑いながら、ジャスティスは呟くように言った。

「!?」

目を見開くディーンから、ジャスティスは離れた。

「愛！いいですね！天使的には、最高です！あははは！」

「ジャスティス！」

ディーンは、怒りの形相で振り返った。

「しかし、計画は計画です！人間を滅ぼし、悪魔を絶滅させる！それが、我々の使命！」

それだけ言うと、ジャスティスの体が消えていく。

「同士は、私が増やしましょう」

「！」

ディーンは顔をしかめた。

「人間は、簡単には殺しますよ。同じ人間をね」

ジャスティスは、笑った。

「ジャスティス！」

「天使の軍団をつくり、魔界に攻め込む！その時、この世界は、無に戻る！」

「チッ」

完全にいなくなったことを確認してから、ディーンは舌打ちした。

しばらく、考えた後、やめることにした。

「まあ…よい」

ディーンは扉を開けると、部屋から出ていった。

第71話　レダ

「レダ…」

空母内にある居住空間に、テレポートした僕は膝を折ると、毛布の上にレダをそっと寝かせた。

段ボール等で仕切られたプライベート空間に、安らぎはない。

「僕は馬鹿だから、このやり方しかできないんだ」

レダの寝顔を見てから、僕はゆっくりと立ち上がった。

何も教えられずに無理矢理、空母に連れてこられた何百人もの人々は、すし詰めにされた空間で、何とか自分の居場所をつくり、耐えていた。

普通ならば、パニックになってもおかしくない状態で、何とか人々が正気を保っていられるのは、そばに勇者がいたからである。

「赤星様」

薄い空間に、老婆のか細い声が響いた。

「赤星様」

その声が合図となり、次々に人々がプライベート空間から立ち上がった。

「皆さん」

僕は少し圧し殺した声で、人々を見回しながら言った。

「心配しないで下さい。ちゃんと帰れます。僕が保証します」

僕の言葉に、人々は少し笑顔になると再び、四角プライベート空間に横になった。

僕と人々のやり取りは、いつも変わらなかった。

毎日同じ質問の繰り返しであるが…それで安心するならば、何度でも言おう。

僕は、人々が横になったのを確認すると、再びテレポートをして、甲板へと出た。

やつらの目的は、わかっていた。

空母内に囚われた人々を狂わせ、殺し合いをさせたいのだ。

そして、咎人の中から、天使を召喚させる。

空母で働く軍人達には、僕を魔王軍と戦わせる為に、民間人を仕方なく監禁しているとでも言っているのであろう。

（くそ！）

心の中で叫ぶと、僕は拳を握り締めた。

（力はある！ここから、人々を救いだすことはできる！しかし！）

囚われた人々は、ここだけではなかった。

僕が反乱を起こした瞬間、他の場所で無理矢理、殺し合いを起こさせる手筈になっていた。

（テレポートで、すぐに移動すれば、何ヵ所かは助けることはできる。だけど、何ヵ所では駄目だ！）

苦悩する僕の頭に突然、声が響いた。

（誰もが、１人では何もできないわ）

その声を聞いた瞬間、僕ははっとして振り返った。

「だからこそ、人は助け合う」

甲板の真ん中に佇む…ブロンドの女の人。

「テ、ティアナさん！？」

僕は、驚きの声を上げた。

「下らないことで、悩むくらいならば、人を守る道など、最初から選ぶな」

今度は、前から声がした。

「ライ！？」

再び驚きながら、前を向いた。

海面上で、腕を組むライが浮かんでいた。

「あなたは、1人ではないわ。アルテミアがいる」

ティアナの言葉に、僕はゆっくりと振り返った。

「アルテミア…」

ティアナは頷き、

「それだけではないわ。人間を守りたいと思う者は、沢山いる」

僕に微笑んだ。

「ティアナさん！」

「大丈夫」

ティアナの笑顔のまま、消えていった。

「フン！下らん」

ライも消えていく。

「ライ！」

僕が叫んだ時、脳裏に次々に動き出した人々の姿が、浮かんだ。

遺跡の前から、歩き出したジャスティン。
2人で走り続けるカレンと九鬼。
それ以外にも、おかしな空気を察して、調べ始める軍人や、一般のギルドの人々。
その行動を映しながら、バックにかかる音楽は、レダのレクイエムだった。
（彼女の歌が、人々を動かしている）
そして、雲の上で旋回するアルテミアの姿が映る。
（アルテミア！）
僕は、目を見開いた。
（そうだ！悩むことはなかった！アルテミアに話し、騎士団長達に動いて貰えれば、人々を助けることができる！）
僕は強く頷くと、アルテミアに思念を送ろうとした。
その瞬間、いきなり足を掴まれ、バランスを崩した。
「言ったはずよ。あなたは、魔物を滅ぼせばいい。そして、あたし達は…人間を滅ぼす」
「レダ！目覚めたのか！」

甲板の下から、物質を通り抜けるように、レダが頭から姿を見せた。
僕は慌てて、レダの手を振り払うと、後方にジャンプした。

「赤の王よ。私は、感謝している。まだ人間と思っていた時、魔物に蹂躙させていた私を、助けてくれたこと！そして、歌を教えてくれたことを」

レダは突然、歌い出した。
曲は、Ｙａｓａｓｈｉｓａ。
実世界の歌で、作曲は河野和美。作詞は、速水明日香。

「その歌は！？」

絶句する僕に、レダは悲しく微笑んだ。

「あなたが教えてくれた曲よ。私を励ます為に、歌ってくれた曲」

魔物に襲われ、精神的にもボロボロになっていたレダに、僕が歌ってあげたのだ。

「この曲は好きよ。人間は、いろんな人の優しさで繋がっている。人は、独りでは生きれない。だから、自分も他人に優しさを送ろう」

レダは天使の翼を広げ、朝日の中、飛び上がった。

「だったら、なぜ！人間を滅ぼす！」

僕も炎の翼を広げ、空中に飛び上がった。

「簡単なこと…。私は、人間ではなく！天使よ！」

空中で、僕とレダはぶつかり合った。

「く！」

何度も激しくぶつかり合う度に、僕の体にダメージが蓄積されていく。

「赤の王よ。あなたが、どれだけ強力な力を持とうと、光に照らされない闇はないのよ」

「チッ」

炎の翼が消え、海面に向けて落下していく僕を、レダは見下ろしながら、手のひらを向けた。

「人間がつくったものの中で、歌は価値がある。だから、歌だけは残してあげる。私の中で」

レダの手のひらから、凄まじい光が放たれ、海面に落下した僕に直撃した。

すり鉢状に抉れた海面は、近くに浮かぶ空母を大きく揺らせた。

「そんなに数がいなくても、私達だけで、人間を滅ぼせる」

レダは、手のひらを空母に向けた。

「だから…」

レダは、歌を歌い出した。

レクイエムを。

「させるかあ！」

抉れた海面から、僕が飛び出してきた。

「無駄よ」

レダから放たれた光の量は、先程の数十倍だった。

「さようなら」

光は、辺り一面を覆い尽くす…はずだった。

「え」

レダは、目を見開いた。

光は一瞬で、消え去ったからだ。

その代わり…さらに眩しい別の光が、レダの前に存在していた。

「あ、あなたは…」

レダの声が、震えていた。

「闇ではないの？」

「さあな」

光輝く翼を持った僕を見て、レダは取り乱す。

「上位の存在であるバンパイアも、人や魔物から命を搾取するもの！そんな汚れた存在が、光の訳がないわ！」

「だったら！」

僕は、手のひらをレダに向け、

「人を滅ぼそうとするお前達は！光だというのか！」

睨み付けた。

「それは、神の裁き！粛清！聖なる行いよ！」

「言葉だけ飾り付けても、やることは殺戮だ！」

「！？」

僕の叫びに、魔物に蹂躙された過去が、レダの脳裏に浮かぶ。

「僕は、光でも闇でもない！ただみんなが期待してくれる！」

僕の瞳から、涙が流れた。

「勇者だ！」

そして、拳を握り締めると、レダの鳩尾に叩き込んだ。

「勇者…」

レダは笑った。

「…」

僕の拳は、レダの体を貫いていた。

「だったら…その勇者様は、どうして泣いているのかしら？」

レダは、震える手で、僕の涙を拭った。

「き、君を…殺したくなかったからだ…。誰も殺したくなかった」

僕の言葉を聞き、レダは笑った。

「懺悔？」

「ああ」

頷く僕に、レダはさらに笑った。

「神は、懺悔はしないわ。常に聞く側よ」

「レダ…。僕は、光ではないよ。闇だ。いや…闇よりも深い闇だ」

僕は、嗚咽した。

「…勇者赤星…」

レダは、自らの指についた僕の涙を見つめながら、こう言った。

「最後に、歌ってくれないかしら…。あの歌を…」

「え」

「私へのレクイエムとして」

レダは、自ら僕の腕を取ると、ゆっくりと体から抜き取っていく。

「お願い」

そして、微笑みながら、海に落下していく。

「レダ！」

「歌って」

落下しながら、レダの体が消滅していく。

「うわあああああっ！」

僕は絶叫した後、Ｙａｓａｓｈｉｓａを歌った。

レダは、光に分解されていきながら、目を閉じた。

（歌は…いい）

瞼の裏に浮かぶのは、赤星浩一が自分に歌ってくれている姿。

歌手になる日を夢見ていた…人間だった日々。

そして、堕天使だと思い出してからの自分。

（もっと…歌いたかった…。レクイエムではなく…）

レダは、目を開いた。

歌いながらも、泣きじゃくる赤星浩一の姿が映った。

（フッ）

そして、微笑みながら、レダは消滅した。

「ま、また…僕は…救えなかった」

消滅したレダを見て、空中で崩れ落ちそうになる僕の耳に、楽しそ

うな高笑いが飛び込んできた。

「！？」

驚き、慌てて振り返ると、空母に穴が空き、海へ沈んでいくのが見えた。

「な！」

絶句しながらも、助けに行こうとする僕の前に、新たな天使が立ちふさがった。

「お初にお目にかかります。赤の王よ。我が名は、ジャスティス！」

深々と頭を下げるジャスティスの横をすり抜けると、僕は空母に向かって降下した。

「おやおや」

ジャスティスは頭を上げると、肩をすくめた。

「もう誰もいないのに」

そして、にやりと笑った。

「！？」

僕が降下した瞬間、空母は爆発し…その中から、光の球が飛び出してきた。

「天使の降臨です」

ジャスティスは腕を組み、楽しそうに見下ろした。

「な！」

僕の目の前で、皮を剥くかのように光球の表面が裂け、白い翼になった。

そして、その中から、裸の天使が現れた。

その姿を見た瞬間、僕はキレた。

先程、僕を頼ってきた人々の顔が浮かんだ。

「うおおおっ！」

咆哮を上げると、瞳が真っ赤になり、僕の手に炎の剣がつくられた。

「…」

降臨したばかりの天使は、僕の接近に気付き、顔を上げた。

「哀れな子羊よ。神に背く罪を知りなさい」

天使は手のひらを、僕に向けた。

そこから感じられる力は、レダを凌駕していた。

「やれやれ～折角、お会いできたのに…お別れとは」

ジャスティスは上空で、十字を切った。

「残念です」

しかし、十字を切った手が止まった。

「何!?」

突然、顔を強張らせると、生まれたばかりの天使に叫んだ。

「に、逃げろ!」

「?」

ジャスティスの声は、天使に聞こえることはなかった。

一瞬で、燃え尽きたからだ。

「あ、あり得ない!」

「うおおおっ!」

僕は天使を切り裂くと同時に、翼を広げると、上空に向かって飛び上がった。

「神の使いである天使が!」

ジャスティスは逃げようとしたが、間に合わなかった。

だから、仕方なく…片腕を犠牲にした。

咄嗟の判断で、腕を伸ばし、それが斬られる寸前にテレポートしたのだ。

「うわあああああっ！」

僕は、ジャスティスを逃がしたことよりも、救えなかった人々のことを思い、叫んでいた。

（僕は！）

怒りから発生する魔力は、海を荒れさせ、空母の沈むスピードが速くなった。

（救えないなら、破壊する！貴様ら天使を！）

涙は、いつのまにか枯れていた。

その代わり、怒りだけは、治まることはなかった。

「赤星…」

その波動を、遠くの空で感じたアルテミアは、空中で止まると、心配そうに遥か彼方を見つめた。

ぎゅっと胸を押さえながら。

第72話　覚悟

「！」

厳重に警備された大月学園の敷地内を、悠々と歩くディーン。

来校の予定がなかったが、現トップの登場に、兵士は直ぐ様、道を開け、敬礼をした。

「くっ」

ディーンは校舎に入ると突然、頭を押さえた。

「こ、この痛みは！？」

一瞬、崩れ落ちそうになったが、何とか体勢を保ち、前を見たディーンの目に、深々と頭を下げる雪菜の姿が映った。

「君は？」

痛みはすぐに治まった為、ディーンは姿勢を正した。

「ディーン様のご到着に気付き、お迎えに参りました」

雪菜の言葉に、ディーンは苦笑した。

「君の方が、階級は上だ。気を使わないでくれ」

「しかし、あなた様は、レーン様のお兄様」

雪菜はまだ、顔を上げない。

「君も変わった天使だな」

「はい。その通りでございます」

ゆっくりと顔を上げた雪菜は、そのまま回れ右をして、ディーンを導く為に、廊下を歩き出した。

「…」

大人しく、後ろに続くディーンは、雪菜の後ろ姿を見つめた。

堕ちる前は、上級の天使であったはずの彼女は、レーンの前以外は、ほとんど無表情であった。

（この女が、大天使。我々の切り札であった…女。しかし、今は…）

そこまで考えた後、続きを雪菜が口にした。

「人間と交わった…堕天使」

前方を見つめる雪菜の虚ろな瞳に気づかなかったが、ディーンは愛想笑いを浮かべ、言葉を続けた。

「最初に生まれる天使は、人間から産まれる。だから、仕方ありませんよ」

「…」

しばし無言で歩いてから、雪菜は口を開いた。

「天使は、完全な存在である為に、自分に無いものに惹かれるのかもしれません。私はあの人…。あの子は」

「!?」

いつのまにか、理事長室の前にいた。

雪菜は、理事長室の扉に微笑み、

「歌…。だけど、消滅したようですわ」

ノブを掴むと、ゆっくりと開けた。

「死んだ!?」

ディーンは絶句したが、先程の痛みの理由を知った。

「やあ〜。兄さん」

扉の向こうで、満面の笑みを浮かべたレーンが、出迎えた。

「フン」

少し嬉しさが込み上げた自分に鼻を鳴らすと、ディーンは理事長室に入った。

「急だね。どうなさいました？」

レーンの言葉に、雪菜が扉を閉めるのを確認してから、ディーンはこたえた。

「惚けるな。雪菜を出迎えに出した…。もうわかっているのだろうが」

ディーンは、レーンを見つめ、

「私も、死んだヤーンも手段は違うが、人類の滅亡を望んでいた。それは、知っているな」

「いえ」

しかし、レーンは首を横に振ると、ディーンを促しながら、隣の部屋にある応接間に歩き出した。

「ヤーン兄さんは、新たな人類をつくろうとしていた」

奥のソファに座ったレーンの前に、ディーンが座った。

「同じことだ」

「同じじゃないよ。兄さん」

レーンは自らの両膝に肘を乗せ、腕を組むと、ディーンの目を見た。

「――どうした、レーン？」

ディーンは笑った。

「目に殺気が、こもっているぞ」

「兄さん」

異様な空気が漂いだした応接間に、お茶を持ってきた雪菜が入ってきた。

「彼女は、人を殺したくはないんだ」

「無理だ。レーンよ。宿めは変わらない」

「だったら！」

レーンの目付きが変わる。

「俺も変わらない」

「成る程」

レーンの強い口調に、ディーンは頷いた。

「お父様が、お前に継がせた意味がわかったよ」

応接間に現れた三体の土偶。

自然の鎧ディオネ。水の鎧タイタン。火の鎧エンケラドゥス。

「人類を守るか」

ディーンは目を瞑ると、ゆっくりと腰を上げた。

「それは、違う。守りたいものは、人類ではない」

レーンは、ソファの下に隠していた刀を取ると同時に、抜刀した。

その神速の速さに、ディーンは思わず後ろに飛んだ。

「守りたいものは、雪菜だ！」

レーンの剣は、ディーンを狙ったものではなかった。

お茶を置こうとした雪菜を斬り裂いた。

「レーン様」

それは、雪菜もレーンも覚悟していたことだった。

天使になり、人類を滅ぼすならば、そうなる前に、雪菜を殺し、自分も死ぬと。

「雪菜！」

横凪の斬撃で斬り裂いた後、とどめとして胸に剣を突き刺した。

「俺もすぐいく」

「はい」

雪菜は刺されながら、頷いた。

「馬鹿が！」

その一連の動きを見て、ディーンは吐き捨てるように言った。

「余計なことをしなければ、長引いたものを」

「雪菜！」

レーンが剣を、雪菜から抜くと同時に、彼の首が飛んだ。

その動きは、神速を超えていた。

あまりの速さに、三体の鎧は、反応さえできなかった。　ゆっくりと砂に戻っていく。

「お前が殺したのは、人間としての彼女だ」

レーンの首から、噴き出す血を浴びながら、にやりと笑う雪菜はもう、彼女ではなかった。

ディーンは、血塗れの雪菜に跪いた。

「アテネ様。お迎えに参りました。戦いが始まります。」

「わかっています」

雪菜はそれだけ言うと、血塗れのまま応接間から出ていった。

ディーンも立ち上がると、鎧であった砂を踏み締め、応接間を後にした。

「雪菜…」

首だけになりながらも、レーンは意識を保っていた。

そして、最後の力を振り絞り、命じた。

「お前達との絆をとく！新たな持ち主を探し…に、人間を守れ…」

それが、最後の言葉になった。

目を開きながら、絶命したレーンの命を受け、崩れ落ちていた砂が集まり、三体の鎧になると、どこかに消えた。

「まったく、馬鹿師匠は！無事なのはわかったけども！今度は、捕らわれている人々を救えって！理由くらい説明しやがれ！」

毒づくカレンと九鬼は、日本地区の東北を目指していた。

当初はジャスティンを救う為に、四国を目指していたが、突然連絡が入り、まったく別の方向に向かうことになったのだ。

「…」

カレンの愚痴に、苦笑する九鬼は走りながら、突然違和感を感じた。

（砂？）

足元に、砂が巻き付いているような感覚を感じたからであった。

第73話　ハレルヤ

「魔王軍だ！」

防衛軍によって、安全の為という名目で荷物一つない倉庫に隔離されていた人々の前に、天空の騎士団が下り立った。

核にも耐えられるはずの壁や天井を突き破って現れた魔物達を見て、人々はパニック状態に一瞬で陥った。

「くっ！」

一番最初に下り立ったギラは、逃げ惑う人々を見て、顔をしかめた後、次々に下りてくる魔物達に命じた。

「人間を殺すな！やつらの退路をつくり、逃がしてやれ！」

そう叫びながら、ギラは左手を突き出すと、電撃を放ち、壁に穴を空けた。

「ひぃぃ！」

それを見て、悲鳴を上げた女は…座り込み、失禁した。

魔物達はギラを恐れ、舐め回すように、人間達を見るが、襲い掛かることはなかった。

しかし、そんなギラ達の行動の意味を、人々が知るはずがなかった。

「終わりだ…」

一瞬で壁を破壊するギラの力に、魔物の大群。

ある者は、その場で崩れ落ち、ある者は気が狂ったように出口を探し、ある者は…気が狂った。

「ひしゃははは…」

呆けたように笑った後、ふらふらと歩き出した。

「こ、こいつら！」

折角、逃げ道を開けても、別の場所を探して走る人間達を見て、ギラは苛立ちを露にした。

その時、ギラが空けた穴の向こうから、駆けつけて来た防衛軍の兵士達が銃を向け、一斉に発砲した。

その銃弾が当たった魔物の一匹が、巨大な鎌の手を振り回し、穴に飛び込むと、兵士達を斬殺した。

「チッ」

ギラは、舌打ちした。人々に気を取られて、襲い掛かった魔物の対応に遅れてしまったからだ。

「うわああ！」

鎌の魔物によって、斬られた兵士の腕が、隔離していた倉庫に転がった瞬間、人々の恐怖はマックスをこえた。

「心配するな！お前達は」

ギラがそう言っても、もう遅かった。

誰よりも早く逃げる達に、争い出したのだ。

「と、止めろ！」

ギラが魔物達に命じようとしたその時、鎌の魔物に腕を斬られながらも、倉庫に入ってきた兵士の1人が、ギラに向けて銃を構えた。

「貴様ら！」

パニック状態になった人々達に渇を入れようとするギラの前に、1人の中年のおっさんが姿を見せた。

「イヒヒヒ」

怪しい笑い声を発しながら、手を揉んでいる男を見て、ギラは顔をしかめた。

「あんた…騎士団長ギラさんだよね」

「？」

「俺と取引をしないかい？俺を逃がしてくれれば、もっと人が沢山して、襲いやすいところを紹介するからさ」

その言葉を聞いた瞬間、ギラは男の横を通り過ぎた。

「フン。クズが」

鼻を鳴らし、歩き出したギラの耳に、銃声が響いた。

「！」

振り返ると、鎌の魔物に後ろから首を跳ねられた兵士の手から、銃が落ちるのが見えた。

「うわああっ！」

兵士とギラの間にいた男の胸から血が噴き出していた。

どうやら、背中から銃弾が貫通したようであった。

痛みに絶叫していた男の体に、変化が見えた。

風船のように膨らんだと思った瞬間、破裂したのだ。

「ウフフ…」

破裂した男の肉片が、床に落ちる中、含み笑いがこだました。

「貴様は！」

ギラは絶句した。

「クズだなんて…。でも、だからこそ、救えるのさ。人間を」

「ば、馬鹿な！」

ギラの目の前に、生まれたばかりの天使が立っていた。

「救いの時間です！」

深々と頭を下げた後、天使は翼を広げた。

次の瞬間、翼から羽毛が放たれ、倉庫内にいた人々に突き刺さった。

「させるか！」

ギラは左手を突き出すと、電撃を放った。

「遅いです」

ギラの攻撃が当たる前に、羽毛は人々の命を吸い取ると、天使の元に戻ってきた。

「それに、この程度の攻撃で、私を」

天使は指先で弾くと、電撃をギラに跳ね返した。

しかし、もうギラはいなかった。

「？」

驚く天使の左頬に、ギラの拳が突き刺さった。

吹っ飛んだ天使は床を転がりながら、何が起こったのか、理解できなかった。

「わ、わたしの顔に！生まれたはがりのスベスベの肌に！」

すぐに立ち上がった天使の周りに、魔物達が集まってくる。

「お前達！手を出すな！」

ギラは、魔物達に一喝した。

「こいつは、俺の獲物だ！」

その言葉に、魔物達は震えながら、後退った。

「ま、魔物一匹のくせに」

天使は翼を広げると、一斉に羽毛を放った。

「舐めるな！」

ギラの角が放電し、そこから放たれた雷鳴が、すべての羽毛を焼きつくした。

「え」

唖然とする天使に、ギラはゆっくりと近付いていった。

「リンネ様」

とある高台に佇むリンネ。その後ろで、控えている刈谷を見ることなく、リンネは遥か彼方を見つめていた。

「天使達の復活が、始まったようです」

「そのようね」

リンネは、フッと笑い、

「ギラやサラ…騎士団長は、勝てるでしょうけど…人間側は、ジャスティン・ゲイくらいね」

目を細めた。

「あんたは…勝てるんだろう」

その時、リンネの足下から声がした。

「刈谷」

「は」

リンネの声に頷くと、刈谷は消えた。

「…と思っているから、あたしの元に来たんでしょ？幾多くん」

リンネは足下に、微笑んだ。

「フッ」

幾多も笑い、リンネを見上げた。

仰向けになったまま動けない幾多の全身は、血管がみみず腫のように盛り上がっていた。

「どうやら…防衛軍の本部で、天使が復活した時…俺は助かったと思っていたけど…違った。供物にされただけだった」

「…」

リンネは、無言で幾多の言葉を聞いていた。

「俺は、人間に生きる価値があるとは思っていない。しかし、生きる価値がある人間もいる。その違いは、そいつらの生き方だ。しかし、人間の社会は正しく生きるようにできていない！だ、だから、俺は！」

幾多の口から、血が流れた。

「だから！多くの人を殺した。価値ある…やさしい人間を守る為に…。だけど…」

幾多は、視線をリンネから、空に変えた。

「一番守りたいものは、守れなかった…。理解もされなかった」

殺された妹。そして、幾多のやり方を真っ向から否定する弟。

「でも…後悔はしていない。俺は…俺だからな」

幾多は一度目を瞑った後、リンネに顔を向けた。

「先生には感謝をしている。この世界を知り、人間のいろんな面が見れた。ありがとう」

「どういたしまして」

「最後に、弟に会ったら伝えて欲しい…。お前は、間違っていない。だけど…俺も間違ってはいないと」

「わかったわ」

リンネは頷いた。

「俺は…誰かに殺されたり、裁かれたりはしない」

幾多の右手には、銃が握られていた。

「俺は…俺が決める」

最後の力を振り絞り、幾多は銃口を頭に押し付けると、引き金を弾いた。

「…」

数秒後、頭がふっ飛んだ幾多を見ずに、リンネは前を見つめ、呟くように言った。

「…でてきなさい」

「ククク…」

リンネの声にこたえて、幾多の亡骸の中から天使が飛び出して来た。

「やっとですよ。人間の癖に、死ぬまで体を渡さないとは」

「…」

肩をすくめる天使に、リンネはゆっくりと手を伸ばした。

「周りに人間がいない！どこかで、せいをつけないと」

ため息をついた天使の口を、リンネは手でふさいだ。

「あなたに価値はなさそうね」

リンネは冷笑を浮かべ、

「死になさい」

一瞬で、灰も残さずに、燃やし尽くした。

「リンネ様」

すると、後ろに刈谷が再び姿を見せた。

「価値がない者達に、あたしの暇潰しを滅ぼされる訳にはいかないわ」

そう言うと、リンネは消えた。

「は！」

刈谷は深々と頭を下げた後、周囲にテレパシーを送った。

（炎の騎士団よ！リンネ達が戻られた！リンネ様のもとへ集え！そして、やつらを焼きつくすのだ！）

刈谷はかっと前を睨んだ後、リンネの後を追ってテレポートした。

第７４話　大切な心

「歌？」

雲の上を飛んでいたアテネは突然、停止した。

「歌？ですと」

前を飛んでいたディーンも止まり、耳を澄ました。

しかし、歌など聴こえない。

「悲しい…歌。いえ…わからないわ」

完全なる天使――いや、神であるアテネに、感情はない。

ただあるのは、神としての裁きを実行することだけだった。

「うおおっ！」

その時、足下の雲を裂いて　、１人の戦士が飛び出して来た。

「お、お前は！」

驚くディーンを無視して、戦士の拳がアテネに突き刺さる。

「赤星浩一！」

ディーンは、魔力を左手に込めると、アテネのもとに飛ぼうとした。

しかし、途中で、ディーンは手を止めた。

奇襲であった赤星浩一の拳は、アテネの人差し指に止められていた。

「…」

アテネは無言で見下ろすと、人差し指で拳を弾いた。

「な」

僕は落下しながら、目を見張った。

人差し指で弾かれてから数秒で、僕は地表近くまで落ちていたからだ。

「あり得ない」

何とか体勢を立て直し、地上に着地した僕は…深呼吸をしてから、再び空を目指そうと炎の翼を発生させた。

「待て！赤星！今のお前では、勝てない」

その声に、僕ははっとして振り返った。

数メートル先に、アルテミアが立っていた。

ブロンドを靡かせて。

「アルテミア…」

「赤星！やつは強い。なぜならば、すべてを無にする為に存在する神だからな。この世界で、やつに勝てるものはいない。お父様だって…」

アルテミアは少し目をふせ、唇を噛み締めてから、顔を上げた。

「だけど！」

アルテミアは、何かを伝えようとしていた。

しかし、その前に、僕は空に飛び上がった。

「赤星！」

それに気付き、アルテミアも翼を広げた。

「話をきけ！」

僕の前に、全速力で立ち塞がったアルテミアは、両手を広げた。

「どけ！」

しかし、僕は苛立ちから、アルテミアに平手を喰らわせた。

（あっ）

心の片隅で、後悔したが…僕は目を瞑り、そのまま飛び去ろうとした。

だが、行くことはできなかった。

「おい」

アルテミアを殴った腕を、男が握り締めていた。

「俺の女に手を出したな」

男は、僕の腕を握り締めると、力任せに地上に向けて叩き落とした。

「例え、自分でも！許せるか！」

予想以上の力がかかり、僕は地上に着地したが、片手を地面につけてしまった。

「！」

驚く僕の目の前に、分身である綾瀬太陽が立っていた。

「俺は、お前の一部だから、苛立つ気持ちも分かる！しかしな！」

太陽は、拳を握り締めると、僕に襲いかかってきた。

「アルテミアを殴ったことを、許せるか！」

立ち上がった僕は、避けようとしたが、なぜかパンチはヒットした。

「！？」

「当たり前だろうが！俺は、お前だ！避ける癖もわかる」

太陽のいう通り、避けてもパンチはヒットした。

しかし、ヒットする事実よりも、拳の重さに絶句していた。

僕の3分の1しかないはずのパワーなのに、頭の芯に響くのだ。

「それに！わかっているだろうが！すぐにかっとする悪い癖も！」

太陽は、僕を殴り続けた。

「勝手に決めて、1人で戦い！アルテミアを置いて、肉体を失ったことも忘れたか！今のお前の肉体は、アルテミアと！」

「うるさい！」

僕は、逆ギレした。

分身である太陽の言葉がもっともであるが、感情が昂っている僕には、怒りが増すだけだった。

手から炎を出そうとした瞬間、太陽の背中から蜻蛉の羽が飛び出し

た。

「こ、この羽は！？」

驚く僕に、羽から放たれた炎の玉が当たった。

「フレア！」

肉体にダメージはなかったが、心が痛んだ。だから、無意識に…僕は両膝を地面につけていた。

「あの天使は、強大だ。だけど、勝てないはずはない。俺達とアルテミアがいたらな」

太陽はゆっくりと近づくと、僕の肩に手を乗せた

「さあ、行こう！やつらを止めにな。それが、赤星浩一がこの世界に生きる意味なんだ」

太陽の体が消えていく。

「一つに戻るぞ」

「！」

僕は、太陽の顔を見上げた。

「自分をじろじろ見るな」

太陽は笑い、

「アルテミアを頼んだ」

そのまま消滅した。

「いくぞ！赤星！」

太陽が消えると、僕の肩に手を乗せているのは、アルテミアに変わった。

「やつを倒すぞ」

「し、しかし…」

微笑むアルテミアに、僕は訊いた。

「他にも天使はいる。２人でいくより、アルテミアは」

「心配するな。あたしの部下も、人間も使えないやつばかりじゃない」

アルテミアは、僕を立たし、

「あたし達は、さっきの天使を叩く！それができるのは、あたし達だけだ！」

真っ直ぐ目を見た後、大きく頷いた。

「わかったよ」

僕も頷いた。

「いくぞ！赤星！」

2人は同時に、空へと飛び上がった。

「ギラブレイク！」

ギラの必殺技が、天使を黒焦げにした。

「む、無駄だ！」

天使は灰になりながら、ギラの後ろを指差した。

「人間から罪は消えない。今の状況ならば、次の天使も召喚できる。ハハハ！」

天使は笑いながら、消滅した。

「チッ」

ギラは舌打ちすると、振り返った。

「心配いりません。皆さん、早く避難を」

倉庫に、凛とした声が響いた。
先程までいなかった人物が、真ん中にいた。

「あ、あやつ～」

ギラは、忌々しそうに真ん中に立つ男を睨んだ。

「ジャスティン・ゲイだ！」
「ホワイトナイツの！」
「助かった！」

パニックになっていた人々に、希望がよみがえった。

「あちらから逃げて下さい」

ジャスティンの指示に従い、人々は、ギラが空けた穴から逃げていく。

「フン」

ギラは鼻を鳴らすと、ジャスティンの方に歩き出した。

「相変わらず、大した人気だな？今まで、何をしていたんだ」

ギラの言葉に、ジャスティンは肩をすくめ、

「人々を救う為に、幽閉され…人々を救う為に、天使を数人始末してきた」

フッと笑った。

「フン！」

ギラは、ジャスティンを見下ろし、

「まさか、すべての場所にいくつもりか？」

訊いた。

「冗談を」

ジャスティンは、ギラを見上げ、

「人間は、俺だけじゃない」

軽く睨んだ。

「フン！わかっている！」

ギラは、ジャスティンの横を通り過ぎると、魔物達に撤退の命令を出した。

「こちらこそ、人間の為に…ありがとうございます」

ジャスティンは、ギラの背中に頭を下げた。

「誤解するなよ！ジャスティン！」

ギラは振り返らずに、言葉を続けた。

「人間など、どうでもよい！しかし、やつらは人間を滅ぼした後、この世界のすべてを無にするつもりだ！」

ギラの体が、空中に浮かぶ。

「我々は、人間以外のあらゆる生物の営みを守る！それが、我を創ったライ様の意志だ！」

そこまで言うと、ギラは一瞬で、倉庫から空へと移動した。

「ライの意志か」

ジャスティンは呟くように言うと、カードの通信モードをオンにした。

「全部隊に命じる。敵は、天使！やつらは、我々を滅ぼすつもりだ。民間人を守り、速やかに殲滅しろ！あと、回線を全世界に繋げ！音声だけでいい」

そう命じた後、ジャスティンは一呼吸をおいてから、話し出した。

「市民の皆さん。私は、ジャスティン・ゲイです。今、世界に恐ろしいことが起こっていますが、心配はいりません。私と防衛軍！それに！」

ジャスティンは敢えて、言葉を切り、

「勇者！赤星浩一くんが、やつらを倒します！天使達を！」

人々に伝えた。

ジャスティンが幽閉された頃から、本部以外の防衛軍は不信に思い、何かあると表面は従いながらも、備えていたのだ。

「行くか」

ジャスティンは通信を切ると、次の場所へテレポートした。

第７５話　負けない心

「何！？」

蹴りを放ったと思った瞬間、九鬼はこうを描くように、空に舞い…背中から、地面に激突した。

その衝撃で眼鏡が取れ、乙女シルバーから、学生服姿に戻った。

「ムーンエナジーが通用しない」

空を見上げながら、唖然として呟いた九鬼を、天使はせせら笑った。

「月の光が、我々にきくものか！」

女の姿をした天使は、バストを上に突き上げながら、ゆっくりと近付いていく。

「真弓！」

駆けつけようとするカレンの前に、もう１人の天使が舞い降りた。

「どこにいくつもり？」

「チッ」

笑顔を向ける天使を見て、カレンは舌打ちした。

２人の天使は、絶世の美女ではあったが…あらゆるパーツが同じな

為に、分身にしか見えなかった。

「お前は、普通の人間のようだが…どうして、我々に魂を吸収されなかった？」

天使の言葉に、カレンはちらっと一瞬だけ、周りを確認した。

眠っているかのように、地面に倒れている数百人の人々。

外傷はないが、みんな…死んでいた。

「咎人から召喚され、人の魂を奪うことで、我々は使命を実行する」

天使の言葉に、カレンは眉を寄せ、胸にかけているペンダントに手をかけた。

「使命とはなんだ！」

ペンダントにはめ込まれている赤い碑石から、針のように細い剣が飛び出して来た。

「ほお～」

天使は、ピュアハートを見て、目を細め感心したように頷いた。

「お前達の目的を言え！」

カレンはピュアハートを突きだした体勢で、ジャンプした。

「そんなもので、我々を」

天使はかわすことなく、ピュアハートの突きを受け止めた。
ピュアハートは、天使の胸から背中などを貫いたが、それだけであった。
カレンはピュアハートを抜くと、後方に飛び、距離を取った。
「フッ」
天使は笑うと、傷口に指を触れ、カレンを見た。
「斬るや刺すだけの武器に、我々は倒せない」
「そうか？」
今度は、カレンが笑った。
ピュアハートを上に、突き上げると、こう叫んだ。
「モード・チェンジ！」
次の瞬間、天使がもう1人増えていた。
「な！」
驚きの声を上げた天使。
ピュアハートは、突き刺した相手の肉を食らい、能力をコピーする

ことができるのだ。

「いくぞ！」

天使の姿になったカレンは、状況が掴めていない天使の翼を斬り裂いた。

「お前は、人間ではないようだが…邪魔をするならば、死になさい」

地面に倒れている九鬼を、踏み潰そうと素足を上げた天使。

「ううう…」

九鬼は、背中を強く打ったせいで、体が痺れて動けない。

そんな九鬼の耳に、子供のすすり泣くと声が聞こえた。

「うん？」

天使も、その声に気付いた。

「まだ人間が残っていたなんて！それも、子供！純粋な魂は、我々の力になる」

「に、逃げろ！」

九鬼は首をだけを動かし、声がするほうに叫んだ。

両親だと思われる死体が、まるで盾になるかのように覆い被さり、小さな男の子を守っていた。

「先に、子供をいただくか」

天使は、九鬼を踏みつけるのを止めると、子供の方に向かった。

「に、逃げろ！」

九鬼が絶叫した瞬間、彼女の足元にある砂が盛り上がり、三体の土偶になった。

「な！」

驚く九鬼の目の前で、土偶達は一斉に、天使を攻撃を加えた。

後ろからの奇襲に、天使はバランスを失い、ふらついた。

「だ、誰だ！」

すぐにバランスを取り戻した天使は、振り向き様に、手刀からの光を放った。

「何をしてる？」

もう1人の天使の翼を切り裂いたカレンは、九鬼のもとに駆け寄り、手を貸そうとした。

しかし、九鬼は自力で立ち上がると、三体の鎧を見た。
天使に破壊されても、砂に戻り、再生を繰り返す鎧達。

「あの鎧は！？」

カレンは、眉を寄せた。

「お前達は、子供を！生き残っている人々を探し、守れ！」

そんなことを言っても、言うことをきくはずがないと、カレンは思った。

しかし、鎧の一体は、二体が攻撃をしている間に、子供を包み、全速力で飛び去っていった。

あとの二体も、天使から離れ、飛び去っていく。

「あいつは、あたしが倒す！」

九鬼は、転がっている眼鏡を拾った。

「待て！」

歩き出した九鬼の背中に、カレンは叫んだ。

そして、ペンダントの中からあるもの達を取り出し、九鬼に投げた。

「餞別だ！受け取れ！」

「こ、これは!?」

自分の足下に落ちたものを見て、九鬼は目を見開いた。

それは、左足と胴体…左腕のオウパーツであった。

「防衛軍が、回収していたものだ。やつらに使われるのは危険だから、盗んで、碑石の中に封印してた。ピュアハートも封印できるから…何とかなるかなって、入れてみたら入った」

小さな碑石であるが、中に亜空間でも広がっているのかもしれなかった。

「お前なら、使えるだろ?」

カレンは、口許を緩めた。

「!?」

次の瞬間、オウパーツ達は勝手に九鬼の体にくっ付いた。

「いけ!」

カレンの叫びに応えるように、九鬼は眼鏡をかけた。

すると、乙女シルバーに変わったが、姿が少し違っていた。

もともとついていた右足のオウパーツも反応し、乙女スーツと融合し、合体したのであった。

乙女シルバー王バージョン。

進化した乙女スーツを身に纏い、九鬼は天使に向かって、ジャンプした。

「よし！」

頷いたカレンの耳に、怒りが混ざった声が飛び込んで来た。

「よそ見をするな！」

「チッ」

カレンは舌打ちすると、横凪ぎにピュアハートを振るった。

ピュアハートは天使の腕にめり込み、抜けなくなった。

「ははは！」

高笑いをすると、天使は蹴りを放ち、カレンをふっ飛ばした。

「この剣がなければ、何もできまいて！」

天使はピュアハートを腕から抜くと、深々と地面に先まで突き刺した。

「我の糧になれ！人間！」

そして、カレンに向かって、襲いかかる。

「やれやれ～」

カレンは、蹴りを防いだ腕のダメージを確かめながら、ため息をついた。

「仕方がないな」

カレンは、ゆっくりと全身の力を抜くと、軽く拳を握った。

「あはははは！」

嬉しそうに笑いながら襲いかかってくる天使にタイミングを合わせ、カレンは拳を突きだした。

「え」

天使の顔が驚きから、一瞬で苦痛に変わった。

「チッ」

カレンは舌打ちした。

「まだまだ…バカ師匠の域には達していないな」

と言うと、天使の鳩尾に拳を突き刺した状態で、拳に力を込めた。

「フン！」

「うぎゃあ！」

悲鳴を上げて、天使はふっ飛んだ。

「そ、そんな馬鹿な！」

地面を転がりながら、天使は絶句した。

「人間如きに！」

そして、周りに転がる死体に気付き、

「そ、そうか！食った魂の数が少ないのだ！我々は、魂の数で強さが決まる」

喰らう人間を探そうと、その場から逃げようとした。

「させるか」

カレンは一瞬で、間合いを詰め、蹴りで天使の足を破壊した。

「ぎゃあ！」

悲鳴を上げて、倒れる天使は、化け物を見るかのようにカレンを見た。

「お、お前は…何者だ？」

「ただの人間だ」

カレンは再び拳を握ると、天使の顔面に突き刺した。
天使の後頭部から、血が噴き出した。
「たった1人の人間に…」
「人間を舐めるな！」
カレンが拳を抜くと、天使の体が消滅していった。

「カレン」
向こうで戦いを終えた九鬼が、眼鏡を外して、変身を解いていた。
ずっとついていた右足のオウパーツも、消えていた。
どうやら、乙女スーツと完全に融合したようであった。
「いくぞ。恐らく、やつらの仲間は大勢いる。あたし達のような、戦う力を持った者達が守らないと」

「ええ」
カレンの言葉に頷くと、九鬼は走り出した。
「人が死んでいく気配がする！急ぐぞ！」
カレンはピュアハートを回収すると、九鬼と並んで走り出した。

人々を救う為に。

第７６話　成長

「天使の数が、増えて…いない！？」

ディーンは、アテネとともに移動しながら、気を配っていた。

当初は、赤の王の追撃を警戒していたが、今のところは反応がなかった。

「どこまでいくのですか？」

キョロキョロと目で周囲を観察していたディーンに、アテネがきいた。

「は！」

ディーンは素早く、空中で姿勢を正すと、

「異世界から落ちてきた人間達の魂を、防衛軍の南アメリカ支部に保管していたのですが…それをジャスティスが、取りに行き、この先の空域で合流するはずなのですが…」

ディーンは、ジャスティスの気も感じないことに気付き、南アメリカの方に顔を向けた。

「別に、魂を補充しなくても、使命を果たすのに十分な力がありますが…」

アテネは、自らの拳の感覚を確かめた。

握り締めるだけで、空間が震えた。

「!?」

その力を間近で感じ、ディーンは息を飲んだ。

（やはり、俺の選択は間違っていない！天使こそが、この世界の覇者！）

そして、フッと笑おうとした時、南アメリカの方からジャスティスが飛んできた。

「申し訳ございません。少し遅れましたが、この通りです」

翼を広げると、ジャスティスは一瞬でスピードを零にし、ディーンとアテネの前に止まった。アテネに深々と頭を下げた後、ジャスティスは光の球体を片手で、差し出した。

「これで、あなた様の強さはさらに！強大になります！素晴らしい！ははははは！」

大笑いを始めたジャスティス。

しかし、その笑いは、すぐに凍りつくことになった。

「え…」

「…」

「アテネ様！？」

ディーンは、アテネの行動に目を疑った。

「ど、どうしてです…か」

ジャスティスも信じられなかった。

アテネの右腕が、ジャスティスの胸を貫いていたからだ。

「天使は、美しくなればいけません。片腕の醜い天使など、存在してはいけないのです。恥を知りなさい。死をもって」

アテネは、ジャスティスの背中から突き出た手を握り締めた。

すると、ジャスティスは消滅した。

その代わりに、ジャスティスが持ってきた光よりも強大な光の球が、アテネの目の前にいた。

「こ、これは！？」

ディーンは、目を見開いた。

ジャスティスの体の中にあったのは、ヤーンが隠し持っていた魂達だった。

「哀れな魂達よ。せめて私の糧になり、人々の滅びに役立てよう」

アテネは、２つの球体を一つにすると、まるで抱き締めるように両

手で包み込んだ。

「こ、これで…完璧だ。人が、世界が…魔が滅ぶ」

「させるか！」

突然、後方から声がした為、ディーンははっとなり、慌てて振り返った。

「ア、アルテミア！そ、それに赤の王！」

「赤星！」

アルテミアは、ディーンの向こうで光の球を吸収するアテネを見て、唇を噛み締め、

「間に合わなかったか！」

さらにスピードを上げようとした。

「いや、間に合ったよ」

僕は、アテネを睨み付け、

「ここで倒せば、いい！」

アルテミアを追い越そうとした。

「させるか！」

ディーンは、僕達に向かってきた。

「どけ！」

僕がディーンに襲いかかろとするのを、アルテミアが邪魔した。

「赤星！お前は、あの女をやれ！」

身を捻り、空間で回し蹴りをディーンに叩き込んだ。

「アルテミアか！」

ディーンは、腕で蹴りをガードした。

その間に、僕はアテネに向かった。

「行かせんと言ったはずだ！」

ディーンは手を伸ばし、僕の肩を掴もうとした。

その瞬間、雷鳴がディーンの体に落ちた。

「何！？」

絶句するディーンの腹に、アルテミアのパンチが決まった。

「お前の相手は、あたしだ！」

身を捩らすディーンに、アルテミアはエルボを叩き込もうとした。

しかし、ディーンは後方に逃げた。

空振りをなった肘に、アルテミアは舌打ちした。

「流石は、魔王ライとティアナ・アートウッドの娘」

ディーンは距離を取ると、不敵に笑った。

「何がおかしい？」

眉を寄せたアルテミアに、ディーンは言った。

「嬉しいのさ。あの2人こそが、最大の壁だったからな。しかし、彼らがいなくなり、我々の使命を邪魔するものはいなくなったと思っていた！しかし、お前がいた！天空の女神がな」

「き、貴様は一体？」

アルテミアは、構えた。

「アルテミアよ。お前が魔と人間の子供ならば…。俺は」

ディーンの姿が、変わった。

「魔と天使のハイブリッドだ」

「黒い天使？」

黒髪と褐色の肌を持つ天使が、アルテミアの前にいた。

「いくぞ」

ディーンは、ゆっくりと両手を広げた。

「は！」

その頃、僕は…アテネに翻弄されていた。

パンチや蹴りが、通用しないのだ。

「愚かね…」

アテネは瞼を伏せると、指先を僕に向けた。

すると、指先から光線が放たれた。

「さようなら」

アテネはたった数分の接触で、僕の力では何もできないと分析した。

「することはないよ」

しかし、アテネはすぐに考えを改めることになった。

放った光線は、2人に斬られ…それだけではなく、アテネの肩に傷が走った。

「力がすべてじゃないよ」

「な！」

目を見張るアテネの前に、ライトニングソードを振るった僕の姿が映った。

「私の体に、傷！？」

信じられないアテネの頭上から、光の牙が落ちてきた。

「あれは！？」

凄まじい魔力を感じ、ディーンはアテネの方を見た。

「星の鉄槌！？」

「よそ見をするな！」

アルテミアは口許に笑みを浮かべながら、ディーンに攻撃を加えた。

「い、今のは！？」

雲の上から、地上まで落下したアテネ。ダメージはほとんどなかったが、着ていた衣服が消滅していた。

「まさか…ほとんど、ダメージを受けないとはね」

僕も、アテネの前で着地した。

「だけど…」

（諦めている場合ではない）

ライトニングソードを握り締めると、アテネに向かって飛んだ。

「無駄なことを」

アテネの服が再生すると、剣を指先で掴もうとした。

「無駄なことなどない！」

（前にさえでればな）

僕は空中で、軌道を変えると、剣先をアテネの影に突き刺した。

「え」

驚くアテネの手の甲から、血が噴き出した。

「人は、愚かではない」

（魔物もだろメロ）

（そうよ）

僕の背中から、蜻蛉の羽が生え、そこから火の玉を放った。

「無駄なことを」

アテネの手の甲の傷はもう、治っていた。軽く手で払うだけで、火の玉は消えた。

「無駄なことなどない！僕は、この世界に来て、いろんな人々や魔物に会い、成長した。ここは、僕の第二の故郷だ。その故郷を！お前達の好きにはさせない」

睨み付ける僕を見て、アテネの目に哀しげな色が浮かんだ。それから、ゆっくりと彼女は力を抜いた。

「あなたの攻撃も、私に傷をつけただけよ。その程度なら…私を止められない」

と言うと、アテネは一気に力を解放した。

その凄まじさは、光の速さの如く…一瞬で、地球全体を覆い尽くした。

その結果、地球の大気が息苦しくなった。

「そ、そうだ！あの力だ！」

アルテミアの両手からつくられた氷と炎の剣に、胸を突き刺されながら、ディーンは嬉しそうに笑った。

「魔王よりも、凄まじい力！俺は、あの力に魅せられた」

「…」

無言で、アルテミアが剣を抜くと、ディーンはゆっくりと地面に落ちていく。

「俺がいなくても！彼女一人で世界は滅ぶ！」

それが、ディーンの最後の言葉だった。

「そうか？」

アルテミアは、ディーンの最後を見ることなく、赤星浩一の背中を見た。

「終わりにしましょう」

力を解放したアテネは、僕を見つめ、感情のない笑みをつくった。

「終わらないよ」

僕は、優しく笑った。

そして、ライトニングソードを地面に突き刺すと、深呼吸をしてから、魔力を一気に解放した。

その瞬間、地球の大気は正常に戻った。

「！？」

アテネは初めて、目を見開いた。

「終わるのは、世界ではないよ」

僕はゆっくりと、アテネに向かって歩き出した。

「う、うわあああっ！」

アテネは叫び声をあげると、僕に襲いかかってきた。

「滅びるのは、君だ」

僕は、拳を握り締めた。

２つの拳が、交差する時…空はいきなり、曇り出した。

そして、激しい雨を地上に向けて、落とし始めた。

第77話　終幕

「終わったか…」

大気の変化を感じ、ジャスティンは空を見上げた。

「しかし、これで終わったのでしょうか?」

ジャスティンのそばに、ドレイク・スチュワートがいた。

「天使は、人間が人間を殺した時、召喚されます。確かに一定の量が、あるようですが…」

2人がいるのは、イギリスの北西部…マーティン・ガレイの故郷であった。

「マーティン…彼は、ブルーアイズ至上主義者でした。彼には、天使こそがブルーアイズの象徴に思えたのでしょう。魂を集め、天使を召喚させ、ブルーアイズ以外の人間を滅ぼそうとした」

「…」

ジャスティンは、目を瞑った。

「しかし…天使は、すべての人間を滅ぼすもの。彼は、その思想を利用されたのでしょう。ディーン北西司令官に」

「だが…」

ジャスティンは、防衛軍の制服の胸ポケットから、カードを取り出し、

「今回の件で、警告を我々に最初に教えてくれたのは、弟のレーン大佐だった」

そこに送られてきたメッセージを見た。

「レーン…」

僕の拳を顔面に受けて、アテネはふっ飛んだ。

天から落ちてくる雨を感じながら、アテネは背中から倒れていく。

「かわいそうだが…君を助ける訳にはいかない」

人間の姿をしているが、彼女は人間ではない。

「だから、最後は…僕が思う最高の技で終わらせる」

どこからか回転する2つの物体が飛んできて、僕はそれを掴んだ。

そして、2つを合体させ、槍へと変えた。

僕は槍を脇に挟むと、腰を落とした。

「いくぞ！Ａ　Ｂｌｏｗ　Ｏｆ　Ｇｏｄｄｅｓｓ！」

「フン」

アルテミアは空中で、腕を組み、鼻を鳴らした。

「馬鹿赤星が」

「うおおおっ！」

僕は、下から槍で地面を抉り、アテネの体を空中に投げた。

そして、すべての魔力を込めると、もう一度槍を振るった。

雷鳴と風、炎が混ざり、アテネの体を包んだ。

巨大な光の柱ができ、地上から宇宙までを貫いた。

その様子は、地球の裏側でなければ、どこからでも見えたらしい。

光の柱が消えた瞬間、人々は改めて、戦いの終幕を知った。

そして、いつのまにか…雨も止んでいた。

「フン」

いつまにか、僕の後ろに移動したアルテミアが、背中を睨んでいた。

少し微笑みながら。

「最後は、あたしの技か…。でも、炎が混じっていたけどな。それに、地上にダメージを与えない為に、空に放ったとは、余裕だったな」

「…」

少し嫌味のように言うアルテミアの言葉にも、僕はしばらく答えられなかった。

その様子に気付き、アルテミアは笑みをやめ、空を見上げた。

「さっきの天使が、人間の姿をしていたからか？お前は、本当に」

「違うよ」

僕はやっと、口を開いた。

「最後のレーンって言葉が、気になっただけだよ」

僕は振り返り、アルテミアに笑いかけた。

「そうか…」

アルテミアは頷き、

「お前は…そのままでいいよ」

小声で呟くように言った。

「え？」

最後の言葉が聞こえなかった為に、聞き返した僕。

アルテミアは顔を真っ赤にして、

「帰るぞ！」

それだけ言うと、翼を広げ、空に飛び上がった。

「え！？どこに？」

戸惑う僕の手から、槍は2つの物体に戻った。そして、チェンジ・ザ・ハートはどこかに飛んでいった。

「ア、アルテミア！」

仕方なく、僕はアルテミアを追って、空に飛び上がった。

「ジャスティン総司令官。またいずれ、天使は再び…」

ドレイクの心配に、ジャスティンは肩をすくめ、

「現れることはない…と信じよう。そこまで、愚かではないと。それに」

カードを胸ポケットにしまった。

そして、ゆっくりと歩き出した。

「我々防衛軍も、気を付けないといけない。本当は、今回のことは、我々の不祥事でもある。いつまでも、彼に頼るのではなく、我々が民衆を守らないといけない」

「そ、その通りであります」

ドレイクは、ジャスティンの背中に敬礼した。

「いこう。やることは多い。天使達の動きは、最小限に終わったが、それでも民衆に説明責任はあるからな」

ジャスティンとドレイクは、休む間もなく、防衛軍に戻り、奔走することになった。

「結局～何もできませんでしたね」

輝は、両手を首の後ろで組みながら、欠伸をした。

「仕方がないでしょ。別に、暴れていないし」

緑は部室の壁にもたれながら、ため息をついた。

情報倶楽部の部室に、ブルーワールドから来た全員が集まっていた。

「ブルーワールドに戻ることもできないし」

輝の言葉を聞いて、緑は黙り込んだ。

舞だけが、いつも通りパソコンのキーボードを叩いていた。

高坂はずっと部室の真ん中で、考え込んでいた。

「…でも、生徒会長がいなくなったのは、間違いなくブルーワールドに戻ったからだと思うわ」

舞のそばにいた…さやかは場の空気を感じ、希望を口にした。

「だけど、あの人は特別ですよ」

そんなさやかの気遣いに気付かず、輝は口を尖らせた。

その時突然、部室の扉を軽く叩く音がした。

「…」

まるで、その音を待っていたかのように、高坂は扉に向かって歩き出した。

そして、ノブを掴むと一気に開けた。

「ご機嫌よう」

扉の向こうに、リンネが立っていた。

「ほ、炎の騎士団長!?」

リンネを見て、輝は慌てて部屋の奥に逃げた。

「何か用ですか?」

高坂は逃げずに、リンネの目を見て訊いた。

「フッ」

リンネは軽く微笑を浮かべてから、言葉を発した。

「あなたのお兄さんが死んだわ。それだけを伝えに来たの。彼は、彼の思うように生きたわ。例え、弟であるあなたと考え方が、違っても」

「そうですか」

リンネの言葉を訊いても、高坂は頷くだけで落ち込みはしなかった。

どこか、幾多の死が近いと感じていたからだ。

「それだけよ。あたしは、彼の最後を伝えに来ただけ」

あっさりと去ろうとするリンネに、高坂は叫んだ。

「魔神であるあなたに、頼みがある！俺達を、ブルーワールドに連れていってくれ！あなたなら、できるはずだ！」

「…」

高坂の叫びに、リンネは冷笑を浮かべ、

「あなた以外は、向こうの世界の人間よ。帰りたいでしょうね。だけど、あなたは違うわ。この世界に残った方が、人間として幸せではないのかしら？」

首を傾げた。

しかし、高坂は力を込めて、拳を握り締めると、

「人間として、向こうの世界で戦いたい！俺は、ブルーワールドを知ってしまった。もうこの世界に残れない！」

リンネの目を見つめた。

その瞳の強さに、リンネは妖しく微笑み、

「わかったわ」

高坂を見つめ返した。

そして、

「自ら地獄に行く…そんな男は好きよ」

静かに、魔力を発動させた。

最終話　永遠のラストバトル

天使達の事件から、数週間が経った。

襲われた町は少なかったが、防衛軍によって幽閉された人々の犠牲者の数は、決して少ないとは言えなかった。

総司令官に戻ったジャスティンは、犠牲者の家族に心からの謝罪と保証を約束した。

いろんな事実が、明らかになっていく中…改めて、流行っているものがあった。

レダの歌である。

今回の騒動に警鐘を鳴らし、天使に殺されたと噂されたレダの名声は、一気に広がった。

（結局…彼女が歌った人類への鎮魂歌は、自分へのレクイエムになってしまったな）

太平洋の無人島に下り立った僕は、レダの歌を思い出しながら、感傷に浸っていた。

（結局…歌は、世間に出れば、作者の意図を離れてしまうものなのかもしれない）

そんなことを考えていると、僕を島に呼び出したお方が、到着した。

「待たせたな」

何故か、怒りが混じった声を発したのは、天空の女神ことアルテミアであった。

アルテミアとは、アテネとの戦いから会ってはいなかった。

あの後、魔王の城に住むことを無理矢理強制させられそうになったが、何とか断り、逃げて来たのであった。

それに、騒動の後片付けもあり、世界中を飛び回っていたので、アルテミアと会う暇がなかったのだ。

「それにしても忙しい中、わざわざ来て貰って、すいませんね。勇者、赤星浩一殿」

後ろから聞こえるアルテミアの言葉を聞いた瞬間、僕の額から冷や汗が流れた。

何故ならば、アルテミアの口から勇者と呼ばれる時は、すこぶる機嫌が悪いことを示していたからだ。

「ア、アルテミアさん…。勇者っていっても」

恐ろしくて振り返れない僕の後ろからコウを描き、頭を越えて、何かが落ちてきた。

それは、週刊誌であった。

「勇者、赤星浩一！また世界を救う！そんな特集を組まれて、嬉しいだろ？」

怒気がこもったアルテミアの声に、慌てて僕は首を横に振った。

しかし、アルテミアの愚痴は止まらない。

「なのに、あたしは！相変わらず、嫌な女ランキング一位だ！さらに、娘ができたから～おばさんになっただの！母親失格だとか！書きたい放題書きやがって！」

アルテミアの怒りが増していく。

その時、頭上から巨大な魔力を持った者が数人、島に下りてきた。

女神エミナと、新しい騎士団長達であった。

「お母様！お父様とやり合うとお聞きしまして、助太刀に参上致しました」

エミナは、僕の背中を指差し、

「特訓によって、数倍強くなったあたし達を相手に、流石のお父様も勝つことはできませんわ！覚悟なさってね」

不敵に笑った。

「…」

僕はそのままの体勢で、何も言えなかった。

何故ならば、明らかに、アルテミアの苛立ちが増していたからだ。

「いきましょう！お母様！」

エミナと騎士団長達が一斉に襲いかかろうとした瞬間、

「あたしに、娘はいない！」

アルテミアの怒りの鉄拳が、エミナ達に炸裂した。

「え！」

防御する間もなく、エミナ達は遥か彼方に飛んで行った。

「あはははは」

力なく笑う僕は、エミナ達を不憫と思ったが、同情している暇はなかった。

「一番むかつくのは、その週刊誌に！あたしが、お前よりも弱いと書かれていることだ！」

「そ、そんなことで」

思わず本音が出てしまった。小声であったが、それを聞き逃すアルテミアではなかった。

「ほおー。余裕だな」

一気に、アルテミアの魔力が最大に上がった。

「ひぃ」

僕は軽く悲鳴を上げると、両手を上げながら、振り返った。

いつのまにか、アルテミアの脇には、槍が挟まれていた。

「この技が好きなんだろ？」

女神の一撃の体勢を見て、僕は息を飲んだ。

今のアルテミアの威力ならば、軽く世界が滅びる。

「まったく！」

慌てて、僕はアルテミアに向かって走り出した。

このように世界は、天使達がいなくなっても、何度も崩壊の危機に陥っていた。

週刊誌に、アルテミアが悪く書かれる度にである。

「アルテミア様…」

その週刊誌を偶然目にしたギラによって、数日後…発行元の会社が潰された。

しかし、そのことが、アルテミアの悪口に拍車をかけることになる。

たかが、週刊誌に書かれた位で、会社を壊す…小さな魔王として。

「アルテミア！」

「死ね！赤星！」

痴話喧嘩。

ジャスティンはそう言ったが、世界が滅びかもしれない喧嘩である。

（いっそ…僕が魔王になろうかな）

そんなことを考えてしまうが…アルテミアに、勇者ができるはずもなく…。

仕方がなく、僕は今の立場にいることにした。

魔王と勇者。

境遇も生まれた世界も違うけど、一番近い距離にいる2人。

世界中がアルテミアの敵になったら、僕は唯一の味方になるだろう。

矛盾しているが、これでいいと思った。

愛するひとがいない世界など、守る気がしないだろうから。

（僕は…永遠にアルテミアに勝てないよ）

そう思いながら、僕は生きていく。

これからも、アルテミアのいる世界で。

ブルーワールドで。

天空のエトランゼ～レクイエム編。

完。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4480o/

天空のエトランゼ～レクイエム編～

2011年8月18日23時42分発行